岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第171集

鼻館跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

鼻館跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、7,600ヵ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に残して行くことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置を取ってまいりました。

本報告書の鼻館跡は、久慈市夏井町鳥谷川沿いの河岸段丘に立地し、平成2年の発掘調査によって縄文時代・奈良時代の遺跡であることが明らかになりました。縄文時代の狩り場、奈良・平安時代の集落跡が確認されたことは、当地方の歴史を解明するうえに貴重な資料であります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一取になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に御協力、御援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所をはじめとする関係各位に衷心より感謝申しあげます。

平成3年6月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　工藤　巖

例　言

1．本報告書は、岩手県久慈市夏井町字鳥谷第８地割51－８ほかに所在する鼻館跡の調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、国道45号久慈バイパス建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡台帳に登載されている遺跡番号はＪＧ10―2182、調査略号はＨＤ―90である。

4．調査期間・調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

平成２年６月８日～11月28日・4,500㎡・藤村敏男、佐瀬　隆、神　敏明、金子昭彦、濱田　宏

5．整理期間は平成２年11月１日～３年３月31日、整理担当者は佐瀬　隆、濱田　宏である。

6．本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ　調査に至る経過　　鈴木恵治

Ⅱ　遺跡の立地と環境のうち地形・地質は佐瀬　隆、位置・周辺の遺跡は濱田　宏

Ⅲ　調査方法と室内整理　　濱田　宏

Ⅳ　検出された遺構と遺物のうち陥し穴状遺構・土坑・溝・焼土遺構は佐瀬　隆、竪穴住居跡・住居跡状遺構は濱田　宏

Ⅴ　遺構外出土遺物　　濱田　宏

Ⅵ　まとめのうち陥し穴状遺構については佐瀬　隆、その他は濱田　宏

7．下記の分析・鑑定は、次の方々・機関に依頼した。（敬称略）

(1)　火山灰分析・粘土と須恵器の胎土分析　　三辻利一（奈良教育大学）

(2)　火山灰分析・種子同定　　パリノ・サーヴェイ株式会社

(3)　放射性炭素による年代測定　　木越邦彦（学習院大学）

(4)　鉄滓分析　　赤沼英男（岩手県立博物館）

(5)　貝類同定　　佐藤正彦（陸前高田市立博物館）

熊谷　賢（岩手考古学会会員）

(6)　石質鑑定　　佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）

(7)　樹種同定　　早坂松次郎（社団法人岩手県木炭協会）

8．野外調査・室内整理に際しては、次の方々から御教示・御協力をいただいた。

千葉啓蔵（久慈市教育委員会）　遠藤公男（財団法人日本野鳥の会）

田村栄一郎（たたら資料館）　建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所

9．野外調査では、中田徳太郎氏をはじめとする久慈市の方々に御協力いただいた。

10．調査にかかわる記録、遺物等の資料は、岩手県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序
例　言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と地形・地質 …… 3
　1．位置 …… 3
　2．地形・地質 …… 3
　3．周辺の遺跡 …… 7
Ⅲ．調査方法と室内整理 …… 13
　1．野外調査の方法 …… 13
　2．室内整理 …… 14
Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 19
　1．陥し穴状遺構 …… 19
　2．土坑 …… 19
　3．溝 …… 19
　4．焼土遺構 …… 19
　5．竪穴住居跡 …… 69
　6．住居跡状遺構 ……138
Ⅴ．遺構外の出土遺物 ……173
　1．縄文時代 ……173
　2．古代 ……173
　3．近世以降 ……173
Ⅵ．まとめ ……178
　1．陥し穴状遺構 ……178
　2．竪穴住居跡 ……182
　3．出土遺物 ……185
　4．鼻館跡の集落の変遷 ……192
付編1　鼻館跡出土火山灰の蛍光X線分析 ……200
　2　鼻館跡出土粘土・須恵器の蛍光X線分析 ……202
　3　鼻館跡出土火山灰分析報告 ……204
　4　鼻館跡出土試料種子同定報告 ……207
　5　鼻館跡G3－u住居跡出土の動物遺存体について ……209
　6　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告 ……212
　7　鼻館跡出土鉄滓の金属学的解析について ……213
　8　鼻館跡D4－c土坑・E4－a土坑出土の灰層の植物珪酸体・灰像分析 ……222

図版目次

図１　遺跡の位置図 …… 2
図２　九戸地方の地質図、地形図 …… 3
図３　鼻館跡付近の段丘分布 …… 5
図４　表層地質断面図 …… 6
図５　遺跡付近の地形・地質断面模式図 …… 7
図６　周辺の遺跡位置図 …… 9
図７　実測図凡例 …… 14
図８　地形図 …… 15
図９　遺構配置図 …… 17
図10　陥し穴状遺構実測図(1) …… 37
図11　陥し穴状遺構実測図(2) …… 38
図12　陥し穴状遺構実測図(3) …… 39
図13　陥し穴状遺構実測図(4) …… 40
図14　陥し穴状遺構実測図(5) …… 41
図15　陥し穴状遺構実測図(6) …… 42
図16　陥し穴状遺構実測図(7) …… 43
図17　陥し穴状遺構実測図(8) …… 44
図18　陥し穴状遺構実測図(9) …… 45
図19　陥し穴状遺構実測図(10) …… 46
図20　陥し穴状遺構実測図(11) …… 47
図21　陥し穴状遺構実測図(12) …… 48
図22　陥し穴状遺構実測図(13) …… 49
図23　陥し穴状遺構実測図(14) …… 50
図24　陥し穴状遺構実測図(15) …… 51
図25　陥し穴状遺構実測図(16) …… 52
図26　土坑(1)・焼土 …… 53
図27　土坑(2)・溝 …… 54
図28　Ｂ４－ｄ住居跡〈遺構〉 …… 70
図29　Ｃ３－ｙ住居跡〈遺構〉 …… 72
図30　Ｄ３－ｖ住居跡〈遺構〉 …… 74
図31　Ｄ４－ｃ住居跡〈遺構〉 …… 75
図32　Ｄ４－ｔ住居跡〈遺構〉 …… 77
図33　Ｅ３－ｕ住居跡(1)〈遺構〉 …… 80
図34　Ｅ３－ｕ住居跡(2)〈遺構〉 …… 81
図35　Ｅ３－ｖ住居跡〈遺構〉 …… 83
図36　Ｅ３－ｙ－１住居跡〈遺構〉 …… 86
図37　Ｅ３－ｙ－２住居跡〈遺構〉 …… 88
図38　Ｅ４－ｄ住居跡〈遺構〉 …… 90
図39　Ｅ４－ｇ住居跡〈遺構〉 …… 92
図40　Ｅ４－ｈ住居跡〈遺構〉 …… 93
図41　Ｅ４－ｌ住居跡(1)〈遺構〉 …… 96
図42　Ｅ４－ｌ住居跡(2)〈遺構〉 …… 97
図43　Ｆ３－ｕ住居跡(1)〈遺構〉 …… 99
図44　Ｆ３－ｕ住居跡(2)〈遺構〉 ……100
図45　Ｇ３－ｍ住居跡(1)〈遺構〉 ……102
図46　Ｇ３－ｍ住居跡(2)〈遺構〉 ……104
図47　Ｇ３－ｕ住居跡〈遺構〉 ……106
図48　Ｈ２－ｍ住居跡(1)〈遺構〉 ……108
図49　Ｈ２－ｍ住居跡(2)〈遺構〉 ……109
図50　Ｈ３－ｉ住居跡〈遺構〉 ……110
図51　Ｈ３－ｌ住居跡〈遺構〉 ……112
図52　Ｈ３－ｖ住居跡〈遺構〉 ……115
図53　Ｉ３－ｔ住居跡(1)〈遺構〉 ……117
図54　Ｉ３－ｔ住居跡(2)〈遺構〉 ……118
図55　Ｊ３－ｙ住居跡〈遺構〉 ……119
図56　Ｆ４－ａ住居跡状遺構 ……138
図57　Ｂ４－ｄ住居跡ほか〈遺物〉 ……139
図58　Ｅ３－ｕ住居跡(1)〈遺物〉 ……140
図59　Ｅ３－ｕ住居跡(2)〈遺物〉 ……141
図60　Ｅ３－ｕ住居跡(3)ほか〈遺物〉 ……142
図61　Ｅ３－ｖ住居跡(2)〈遺物〉 ……143
図62　Ｅ３－ｖ住居跡(3)〈遺物〉 ……144
図63　Ｅ４－ｄ住居跡(1)〈遺物〉 ……145
図64　Ｅ４－ｄ住居跡(2)〈遺物〉 ……146

図65　E 4 — g 住居跡〈遺物〉 ……147
図66　E 4 — h 住居跡(1)〈遺物〉 ……148
図67　E 4 — h 住居跡(2)〈遺物〉 ……149
図68　E 4 — h 住居跡(3)〈遺物〉 ……150
図69　E 4 — h 住居跡(4)〈遺物〉 ……151
図70　E 4 — h 住居跡(5)〈遺物〉 ……152
図71　E 4 — h 住居跡(6)〈遺物〉 ……153
図72　E 4 — l 住居跡(1)〈遺物〉 ……154
図73　E 4 — l 住居跡(2)〈遺物〉 ……155
図74　F 3 — u 住居跡(1)〈遺物〉 ……156
図75　F 3 — u 住居跡(2)〈遺物〉 ……157
図76　F 3 — u 住居跡(3)〈遺物〉 ……158
図77　G 3 — m 住居跡(1)〈遺物〉 ……159
図78　G 3 — m 住居跡(2)〈遺物〉 ……160
図79　G 3 — m 住居跡(3)〈遺物〉 ……161
図80　G 3 — m 住居跡(4)ほか〈遺物〉 ……162
図81　H 2 — m 住居跡(1)〈遺物〉 ……163
図82　H 2 — m 住居跡(2)ほか〈遺物〉 ……164
図83　H 3 — i 住居跡(2)ほか〈遺物〉 ……165
図84　H 3 — l 住居跡(2)〈遺物〉 ……166
図85　H 3 — l 住居跡(3)〈遺物〉 ……167
図86　H 3 — l 住居跡(4)〈遺物〉 ……168
図87　I 3 — t 住居跡〈遺物〉 ……169
図88　J 3 — y 住居跡(1)〈遺物〉 ……170
図89　J 3 — y 住居跡(2)〈遺物〉 ……171
図90　D 3 — w 土坑ほか〈遺物〉 ……172
図91　遺構外出土遺物(1)〈遺物〉 ……175
図92　遺構外出土遺物(2)〈遺物〉 ……176
図93　遺構外出土遺物(3)ほか〈遺物〉 ……177
図94　陥し穴状遺構分類図 ……178
図95　陥し穴の属性値 ……180
図96　カマド方位分布図 ……184
図97　坏分類図 ……186
図98　甕分類図 ……187
図99　鼻館跡の集落の変遷 ……192

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景ほか ……230
写真図版２　基本土層 ……231
写真図版３　陥し穴状遺構(1) ……232
写真図版４　陥し穴状遺構(2) ……233
写真図版５　陥し穴状遺構(3) ……234
写真図版６　陥し穴状遺構(4) ……235
写真図版７　陥し穴状遺構(5) ……236
写真図版８　陥し穴状遺構(6) ……237
写真図版９　陥し穴状遺構(7) ……238
写真図版10　陥し穴状遺構(8) ……239
写真図版11　陥し穴状遺構(9) ……240
写真図版12　陥し穴状遺構(10) ……241
写真図版13　陥し穴状遺構(11) ……242
写真図版14　陥し穴状遺構(12) ……243
写真図版15　陥し穴状遺構(13) ……244
写真図版16　陥し穴状遺構(14) ……245
写真図版17　陥し穴状遺構(15) ……246
写真図版18　陥し穴状遺構(16) ……247
写真図版19　陥し穴状遺構(17) ……248
写真図版20　陥し穴状遺構(18) ……249
写真図版21　陥し穴状遺構(19) ……250
写真図版22　陥し穴状遺構(20) ……251
写真図版23　土坑(1) ……252
写真図版24　土坑(2) ……253
写真図版25　土坑(3) ……254
写真図版26　土坑(4)・焼土 ……255
写真図版27　Ｂ４－ｄ住居跡 ……256
写真図版28　Ｃ３－ｙ住居跡 ……257
写真図版29　Ｄ３－ｖ住居跡 ……258
写真図版30　Ｄ４－ｃ住居跡 ……259
写真図版31　Ｄ４－ｔ住居跡 ……260
写真図版32　Ｅ３－ｕ住居跡 ……261
写真図版33　Ｅ３－ｖ住居跡 ……262
写真図版34　Ｅ３－ｙ－１住居跡 ……263
写真図版35　Ｅ３－ｙ－２住居跡 ……264
写真図版36　Ｅ４－ｄ住居跡 ……265
写真図版37　Ｅ４－ｇ住居跡 ……266
写真図版38　Ｅ４－ｈ住居跡 ……267
写真図版39　Ｅ４－ｌ住居跡 ……268
写真図版40　Ｆ３－ｕ住居跡 ……269
写真図版41　Ｇ３－ｍ住居跡 ……270
写真図版42　Ｇ３－ｕ住居跡 ……271
写真図版43　Ｈ２－ｍ住居跡 ……272
写真図版44　Ｈ３－ｉ住居跡 ……273
写真図版45　Ｈ３－ｌ住居跡 ……274
写真図版46　Ｈ３－ｖ住居跡 ……275
写真図版47　Ｉ３－ｔ住居跡 ……276
写真図版48　Ｊ３－ｙ住居跡 ……277
写真図版49　Ｆ４－ａ住居跡状遺構ほか ……278
写真図版50　Ｂ４－ｄ住居跡出土遺物ほか …279
写真図版51　Ｅ３－ｕ住居跡出土遺物ほか …280
写真図版52　Ｅ３－ｙ－１住居跡出土遺物ほか ……281
写真図版53　Ｅ４－ｇ住居跡出土遺物ほか …282
写真図版54　Ｅ４－ｈ住居跡出土遺物(2) ……283
写真図版55　Ｅ４－ｈ住居跡出土遺物(3) ……284
写真図版56　Ｅ４－ｌ住居跡出土遺物 ……285
写真図版57　Ｆ３－ｕ住居跡出土遺物 ……286
写真図版58　Ｇ３－ｍ住居跡出土遺物(1) ……287
写真図版59　Ｇ３－ｍ住居跡出土遺物ほか …288
写真図版60　Ｈ２－ｍ住居跡出土遺物(2)ほか 289
写真図版61　Ｈ３－ｌ住居跡出土遺物(1) ……290
写真図版62　Ｈ３－ｌ住居跡出土遺物(2) ……291
写真図版63　Ｈ３－ｖ住居跡出土遺物ほか …292

写真図版64　Ｊ３－ｙ住居跡出土遺物 ……293
写真図版65　Ｄ３－ｗ土坑出土遺物ほか ……294
写真図版66　遺構外出土遺物(1) ……295
写真図版67　遺構外出土遺物(2) ……296
写真図版68　遺構外出土遺物(3)ほか ……297

表目次

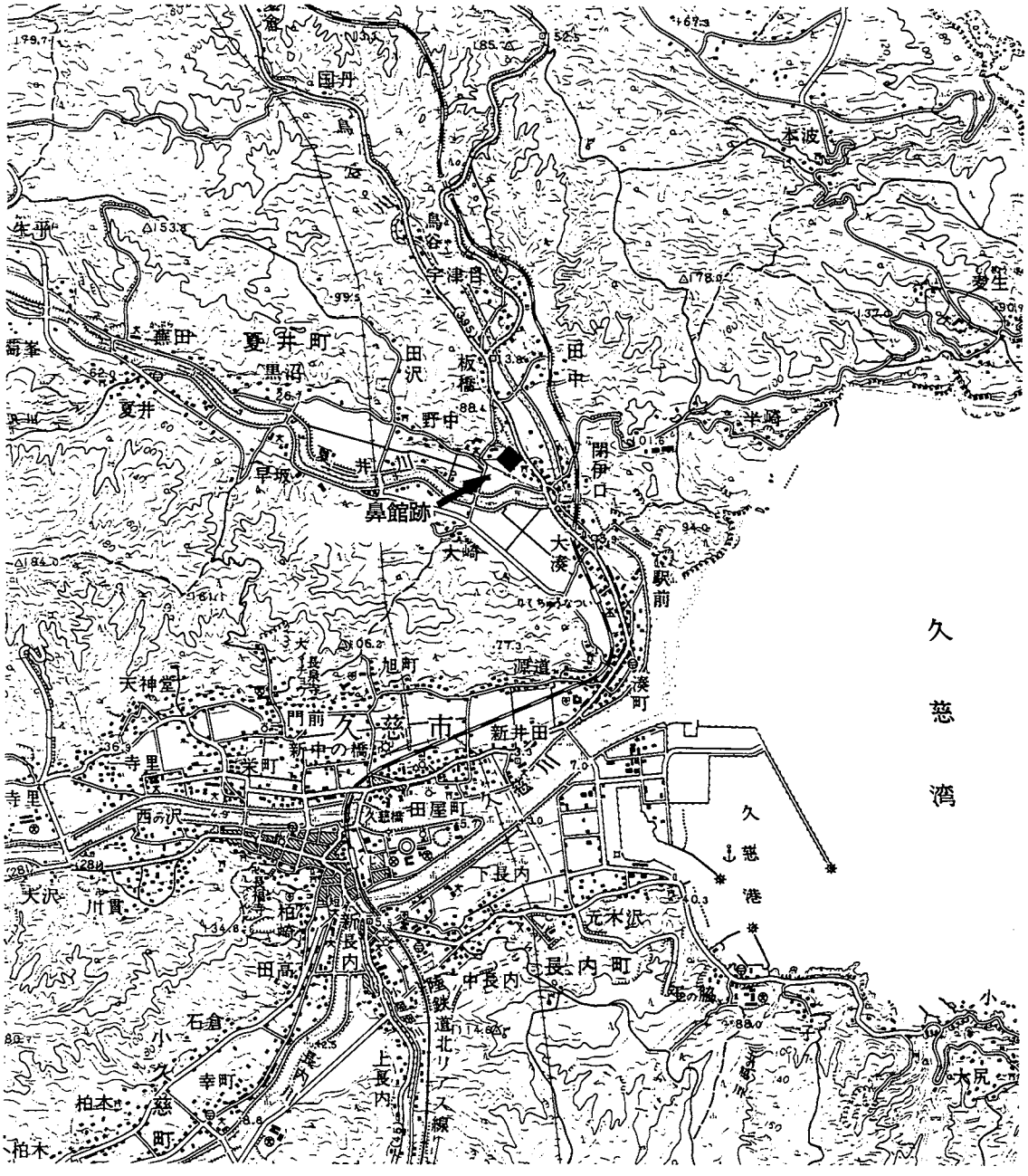
表１　九戸地域段丘層序表 …… 4
表２　発掘調査遺跡一覧表 …… 11
表３　陥し穴状遺構・土坑一覧表……20～36
表４　陥し穴状遺構分類集計表 ……178
表５　住居跡一覧表 ……183
表６　出土土器一覧表……189・190
表７　掲載遺物一覧表(1)～(6)……194～199

Ⅰ．調査にいたる経過

一般国道45号は、仙台市から陸中海岸沿いを北上して青森市に至る総延長513.2キロメートル（岩手県内239.9キロメートル）の幹線道路である。その中で久慈道路（延長3.2キロメートル）は、久慈市内の交通混雑の解消および交通安全の確保を図るため昭和49年度に事業化し、昭和62年度に工事着手したものであるが、八戸・久慈自動車道の一部に指定されたことにより、高規格幹線道路として整備を図っているものである。

この事業に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会との間で協議されたが、協議の経過については以下のとおりである。

平成元年５月25日付け「建東陸調第46号」により分布調査の依頼を受け、岩手県教育委員会は平成元年８月８日から10日まで分布調査を実施した。その結果を平成元年８月29日付け「教文第397号」で回答し、同年９月５日付け「教文第415号」で平成２年度発掘調査事業の照会を行った。その後、岩手県教育委員会は、平成元年９月25日付け「建東陸調第111号」で三陸国道工事事務所から平成２年度発掘調査事業の回答を受け、調整のうえ、4,500㎡の調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成２年度委託事業とすることとした。三陸国道工事事務所と岩手県文化振興事業団との委託契約は平成２年５月18日であり、同年６月８日に発掘調査に着手したものである。



1:50,000 久 慈

1000 m 0 1000 2000 3000

図1　遺跡の位置図

II．遺跡の位置と地形・地質

1．位置

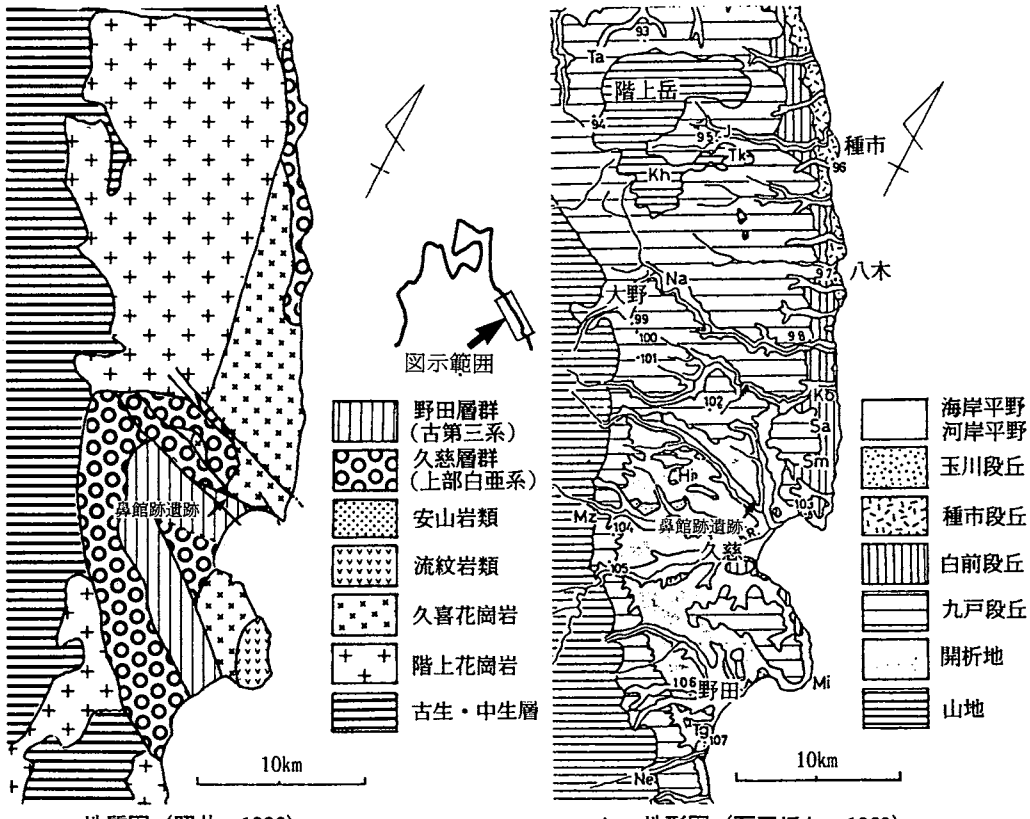
鼻館跡は、岩手県久慈市夏井町字鳥谷第８地割51－８ほかに所在し、東日本旅客鉄道八戸線陸中夏井駅の北北西約2.2km付近に位置する。国土地理院発行の５万分の１地形図「久慈」の図幅内にあり、北緯40度13分、東経141度47分付近にあたる。

久慈市は、北は種市町・大野村、西は山形村、南は岩泉町・普代村と隣接する沿岸北部の中心都市である。産業の中心は漁業であり、水揚げは県内一を誇る。総面積は325.66㎢である。

遺跡は、東流する夏井川にかかる夏井橋付近にあり、若宮八幡宮の所在する低位段丘と同じ段丘面に位置する。調査区域の東端は急崖となって国道45号線に面している。遺跡までの経路は国道から夏井橋付近で西進し、若宮八幡宮へ向かう経路が最も近い。

2．地形・地質

鼻館跡の位置する九戸地方は北上山地北東縁にあり、後期白亜系花崗岩類、後期白亜系堆積



a．地質図（照井、1986）　　b．地形図（石田ほか、1969）

図２　九戸地方の地質図、地形図

岩類（久慈層群）、古第三系堆積岩類（野田層群）などを基盤として（図２ａ）段丘地形がよく発進するところとして知られる。これらの段丘は、石田ほか（1969）により高位のものから順に九戸段丘、白前段丘、種市段丘、玉川段丘に区分された（図２ｂ）。なお、米倉（1963）、照井（1983）は、九戸段丘、白前段丘をそれぞれ複数の段丘に細分している。

各段丘面は、累積テフラ層に被覆される。このテフラ層は、古期から九戸火山灰層、種市火山灰層、八戸火山灰層、南部浮石層（完新世火山灰層）に分けられる（石田ほか、1969）。九戸段丘は九戸火山灰層以上、白前段丘は九戸火山灰層上部以上、種市段丘は種市火山灰層以上、玉川段丘は八戸火山灰層以上をのせる（表１）。

この累積テフラ層は、九戸地方の西方に位置する十和田・八甲田の両火山を給源とするものであるが、遠来のテフラ層が狭在することも確認されている。たとえば、種市火山灰層部に認められる白タフ（wt）と呼ばれていたシルト質ロームのテフラ（大池・中川、1979）は、洞爺火山起源の広域テフラ（Toya（町田ほか、1984））、完新地火山灰の最上部にしばしば認められる黄白色のシルト質ロームのテフラは、朝鮮と中国の国境にある白頭山（長白山）起源の広域テフラ（白頭山・苫小物火山灰（町田・新井、1970））である。Toyaの噴出年代は約10万年前で、最終間氷期(約13万年前をピークとする顕著な温暖期)層準の設定に有効である。種市火山灰層をその構成層上にのせる種市段丘は最終間氷期段丘と推定され、本邦の段丘模式となっている南関東の下来吉段丘に対比される。また、白頭山・苫小牧火山灰の年代は約1000年前で、十和田火山起源の十和田ａ火山灰とともに、古代の遺構の埋土構成層としてしばしば認められる。

表１　九戸地域段丘層序表（石田ほか、1969）

*	段丘	段丘構成層	被覆テフラ
I	海岸平野	砂・礫層	南部浮石
II	玉川段丘	玉川礫層	八戸火山灰
III	種市段丘	種市砂層	種市火山灰
IV	白前段丘	砂礫層	九戸火山灰
V	九戸段丘	久慈砂礫層	

* Standard sequence of the terraces along the Pacificcoastal region (Nakagawa. 1961)

図３は鼻館跡周辺の平坦面の分布を示したものである。標高160m 前後の高位の平坦面が九戸段丘、100m 前後の平坦面が白前段丘である。白前段丘より新規の段丘の発達は極めて悪い。この地域では北部地域に比べて平坦面の発達が悪く、特に夏井川、久慈川、長内川流域では、開析丘陵が広がり頂面付近に小規模に平坦面が残されているにすぎない。これは、この流域の基盤地質が半固結～未固結の堆積岩類を主とし、夏井川以北の花崗岩類に比べ差別的侵食を受けたためと推定される(米倉、1966)。また、基盤地質の影響は海岸線の形態にも表れ、北部の花崗岩地帯では直線的な海岸線がみられるのに対し、堆積岩地帯では海岸が顕著に湾入して、久慈湾、野田湾を形成している（照井、1983)。

鼻館跡は夏井川左岸の開析丘陵の東端部に小規模に形成された段丘面に立地する。当段丘面の標高は約30m で、下位の沖積低地との比高は約20m である。後背の解析丘陵との境界線は夏井川の流路にほぼ平行していることから、夏井川の営力による河成段丘と思われる。段丘構成層は粗砂と円礫からなる砂礫層を主体とし、下位の凝灰岩、砂礫岩から構成される野田層群を不整合に覆う。当構成層は約３ m の累積テフラ層により覆われる(図４)。したがって、当段丘と沖積低地との実際の比高はテフラ層厚を差し引いて約17m となる。

当段丘を被覆する累積テフラ層は、種市火山灰層、八戸火山灰層、完新世火山灰層に３分される（図４)。種市火山灰層は、最下部の軽石（X層）とその上位に累積する褐色風化火山灰層から構成される。軽石層は径３㎜前後の明褐色の軽石と青灰色の火山砂の互層からなり、その厚さは約30㎝である。この軽石層の層相は、種市火山と同時異相の関係にある上北地方の高館

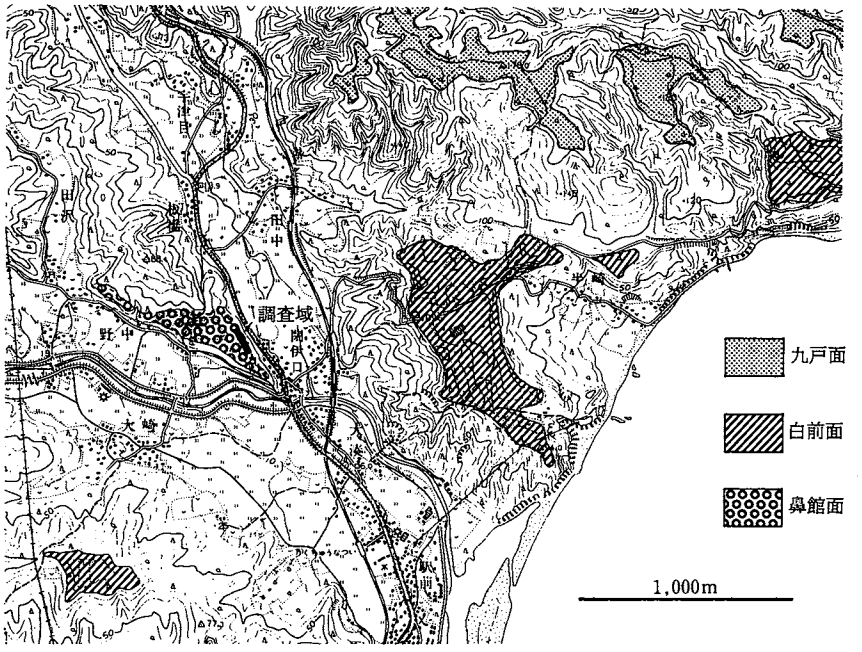


図３　鼻館跡付近の段丘分布

火山灰中位の「青スジ」テフラに似ておることからこれに対比可能であろう。種市火山層と高館火山層の最下部は、洞爺火山起源の広域テフラ「Toya」が狭在するが、鼻館跡の立地する段丘を被覆する種市火山灰には「Toya」がないことから下部を欠いており、「青スジ」テフラ以上のテフラである。したがって、当段丘は種市火山灰層に覆れてはいても種市段丘に対比できず、それより低位の段丘と認定される。種市段丘より低位とされる玉川段丘(石田ほか、1967)、平内段丘（照井、1983）は、いずれも八戸火山灰層以上のテフラに被覆されるもので、鼻館跡をのせる段丘より新規のものである。これまでのところ、この段丘に対比できる地形面の報告はないので、当報告では、この種市火山灰の中位以上のテフラをのせる段丘に対して鼻館段丘の名称を与えることにする。図５には、鼻館跡周辺の段丘と被覆テクラ層との関係を模式的に示した。

種市火山灰の主体をなす褐色風化火山灰は、層相により５層に区分される(図４)。IX層、Ⅷ層にはスポット状に火山灰や軽石が含まれる。Ⅶ層、Ⅷ層は7.5ＹＲの色調で、10ＹＲの色調をもつ上下位層に比べ赤味を帯びている。Ⅵ層、Ｖ層は下位層に比べ粘性に富み、このうちＶ層は種市火山灰層の最上部層でにぶい黄橙色（10Ｙ R5.5/4）の重粘な土層でインボリューションが発達する。上北地域や三戸地域など高館火山灰層が厚層は八戸浮石層を下部層とする八戸火山灰層に被れるところでは、高館火山灰層の最上部にミルクチョコレート色の重粘な埋没古土

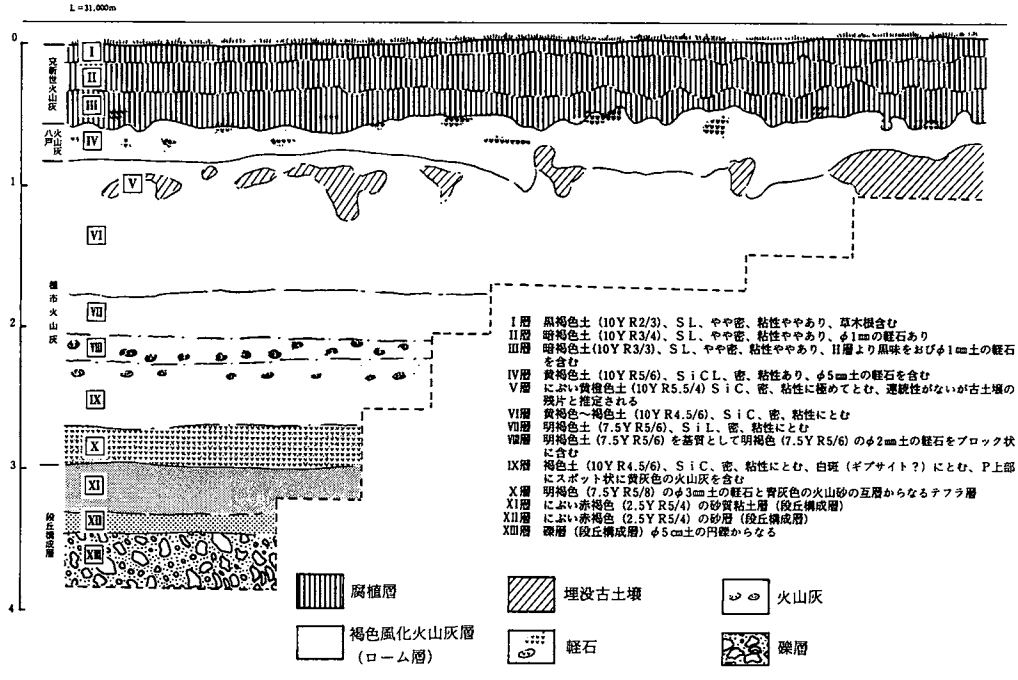


図４　表層地質断面図

壌の発達がみられる。層相、層準からいってこの古土壌と上記の「黄橙色の重粘な土層」は対比可能と思われる。なお、当層に発達するインボリューションは、最終氷期の寒冷気候下における土壌の凍結じょう乱作用によるものである。

種市火山灰を覆うⅣ層は八戸火山灰層で、黄白色の軽石粒子が散在する風化火山灰層である。風化は下位層ほど進んでいない。黄白色の軽石粒子は八戸浮石層あるいは八戸浮石流起源のものと推定され、その年代は約14000年前である。

Ⅰ層～Ⅲ層は、完新世火山灰層で黒色土化している。示標テフラは通常検出されず遺構埋土で十和田ａ火山灰層、白頭山火山灰層が検出されることがあるにすぎない。

3．周辺の遺跡

久慈市内で発掘調査された遺跡について、本遺跡を含めて周辺の遺跡として概観する。資料は明神遺跡報告書（高橋義介、1990）から抜粋し、一部加筆したものである。遺跡の位置については図６に示し、その内容を一覧表（表２）にして掲載した。遺跡番号は図と表が照合している。

(1)縄文時代

早期(8000～6000年前)：源道遺跡から貝殻文系土器片が２点、平沢Ⅰ遺跡から早稲田４類と推定される破片が１点出土している。二子貝塚からの出土もある。(※現地説明会資料)

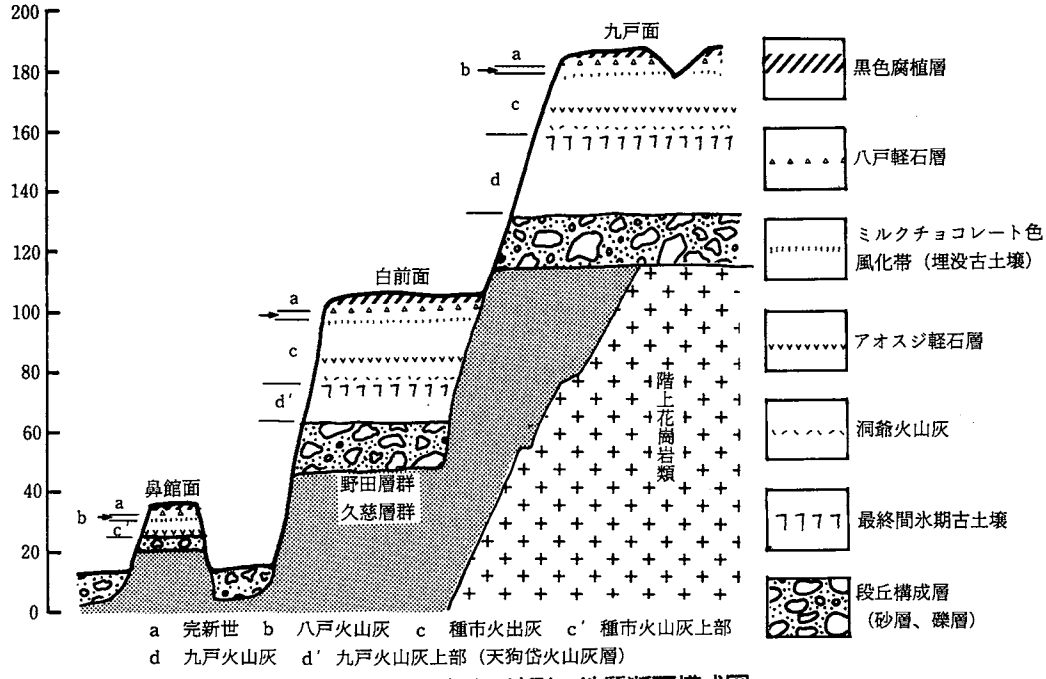


図５　遺跡付近の地形・地質断面模式図

前期(6000～5000年前)：平沢Ⅰ遺跡で前葉の住居跡6棟が検出されている。土器は、上野山Ⅱ遺跡の胎土に繊維を含むと報告されているものを含め8遺跡から出土している。大尻遺跡の遺物包含層からは、円筒下層b式～d式のものが多く出土している。また、同遺跡ではその土器に伴い琥珀が出土している。上明内遺跡では円筒下層a式が、広内遺跡では円筒下層b式の土器が出土している。

中期(5000～4000年前)：遺構が検出されておらず、分布は希薄である。大尻遺跡では円筒上層a式とb式が、三崎Ⅲ遺跡からは円筒上層b式～e式、大木7・8式の土器が出土している。

後期(4000～3000年前)：前葉の住居跡は上野山で3棟、平沢Ⅰ遺跡で2棟検出されている。土器は8遺跡から出土している。初頭～前葉の土器は平沢Ⅰ・中長内・小屋畑・上野山・上野山Ⅱ・三崎Ⅲの各遺跡、中葉の土器は中長内・三崎Ⅲの各遺跡、末葉の土器は大芦遺跡から出土している。二子貝塚からも後期の土器が出土しているが、詳細は不明である。(※)本遺跡からは数片であるが初頭～前葉と思われる土器が出土している。

晩期(3000～2300年前)：上野山Ⅱ遺跡から中葉～後期の住居跡が1棟検出されている。土器は6遺跡から出土をみている。大芦遺跡では大洞B－C式とC_1式が主体となっており、小屋畑遺跡では大洞C_1式、上野山Ⅱ遺跡では大洞C_2式とA式、源道遺跡では大洞A式、上野山遺跡では大洞A′式のものが出土している。二子貝塚からも出土しているという。(※)

その他に、縄文時代に属すると思われる遺構に陥し穴状遺構がある。10遺跡から177基検出されている。形態は溝状のものがほとんどであるが、円筒形のものは田中Ⅳ遺跡から1基、中長内遺跡から4基、兼田農場遺跡から16基検出されている。

本遺跡からはこれまでの総数の約半分にあたる85基が検出された。すべて溝状を呈し、中には2～3基がかりあう例がみられる。

(2)弥生時代

遺構は検出されていないが、土器は8遺跡から出土している。中長内遺跡から前半期の土器が出土しているほかは、末葉の天王山式や赤穴式とされているものである。また、北海道系の土器である後北式土器が2遺跡から出土している。中長内遺跡の土器は後北C式、古舘山遺跡では後北C_2式・D式である。

(3)古代

遺構の所属時期が一部不明なため、古墳～平安時代を一括し、古代として扱うこととする。

古代の遺構・遺物が発見されているのは15遺跡である。田中Ⅳ・小袖Ⅱの2遺跡は土師器の破片が若干出土しているだけである。住居跡は12遺跡から183棟(推定を含む)検出されている。

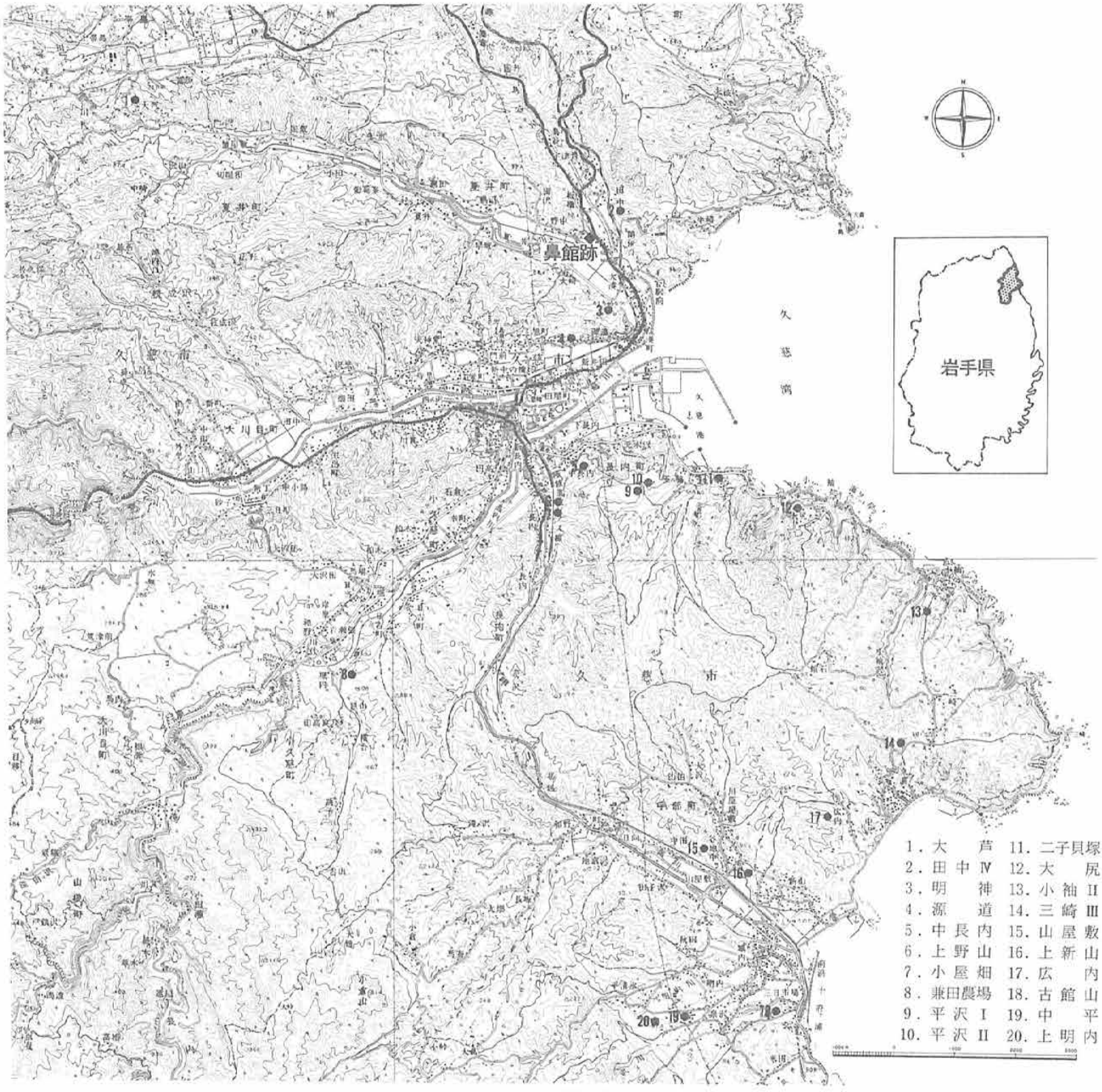

鼻館跡
岩手県
久慈湾
1．大　芦
2．田中Ⅳ
3．明　神
4．源　道
5．中長内
6．上野山
7．小屋畑
8．兼田農場
9．平沢Ⅰ
10．平沢Ⅱ
11．二子貝塚
12．大　尻
13．小袖Ⅱ
14．三崎Ⅲ
15．山屋敷
16．上新山
17．広　内
18．古館山
19．中　平
20．上明内

図6　周辺の遺跡位置図

表2　発掘調査遺跡一覧表

（番号は遺跡位置図と同じ）

No	遺跡名		縄文時代								弥生	古墳	奈良		平安			中・近世		周構	備考
			住居跡						ピット	陥し穴	住居	住居	住居	ピット	住居	ピット	掘立	住居	掘立		
			早期	前期	中期	後期	晩期	不明													
1	大芦	遺構																			三崎段丘？
		遺物				○	○														標高160m
2	田中Ⅳ	遺構								14											山麓地及び他の緩斜面
		遺物						○				土師器甕破片6点									標高35～50m
3	明神	遺構								1					10	不明住居4					稲市段丘
		遺物				○									琥珀・鉄製品						標高17～33m
4	源道	遺構								17			22	○	21	○				1	稲市段丘
		遺物	○				○						琥珀・鉄製品		琥珀・鉄製品						標高21～40m
5	中長内	遺構						8	29	37			23	(33)	29	不明住居4		1		2	稲市段丘
		遺物		○		○					○				琥珀						標高31～42m
6	上野山	遺構				3		1	5			4									稲市段丘　標高21～28m
		遺物				○	○					琥珀						○			
6	上野山（Ⅱ）	遺構					1						2								同一遺跡尾根
		遺物		○		○	○				○		鉄製品								標高15～40m
7	小屋畑	遺構							○				2		(推9)						稲市段丘
		遺物		○		○	○				○				鉄製品						標高30～38m
8	菰田農場	遺構							7	51					8	5土					稲市（二子）段丘及び有家段丘
		遺物				○	○				○										標高50～70m前後か
9	平沢Ⅰ	遺構		6		2			25	38			2	1	14	8					麦生段丘
		遺物	○	○							○		琥珀		琥珀・鉄製品						標高98～108m
10	平沢Ⅱ	遺構								5											平沢Ⅰに隣接
		遺物																			二
11	二子貝塚	遺構							3												二子段丘　埋葬人骨
		遺物	○			○	○														標高約30m
12	大尻	遺構																			有家段丘及び麦生段丘
		遺物		○琥珀	○																標高60～110m内
13	小袖Ⅱ	遺構							6	6											三崎段丘
		遺物		○									土師器片1点								標高157～163m内
14	三崎Ⅲ	遺構							4	7											三崎段丘
		遺物			○	○					○										標高175～182m
15	山屋敷	遺構											1								河岸段丘
		遺物											○								標高42m
16	上新山	遺構								1	1		2								河岸段丘
		遺物						○					鉄製品		○						標高42m
17	広内	遺構																			
		遺物		○																	
18	古館山	遺構											8								稲市段丘
		遺物									○		○								標高26～38m
19	中平	遺構											17		14						海岸段丘
		遺物									○				琥珀・鉄製品						標高40～70m
20	上明内	遺構											1		1						
		遺物		○									○		○						
遺構合計				6		5	1	9	79	177		古墳～奈良6奈良63平安106不明8						1		3	
	鼻館跡	遺構							4			1	7		14	5					※鼻館段丘　古墳1
		遺物				○				85			琥珀・鉄製品		琥珀・鉄製品						標高29～31m

※2地形・地質参照

時期的な内訳は、古墳～奈良時代に属するものが、上野山遺跡４棟、平沢Ⅰ遺跡が１棟である。奈良時代は、中長内遺跡23棟、源道遺跡が22棟、古舘山遺跡が８棟、小屋畑・土野山Ⅱ・上新山の３遺跡が各２棟、平沢Ⅰ・山屋敷・上明内・中平の４遺跡が各１棟で、合計10遺跡で63棟である。平安時代に属するものは、中長内遺跡29棟、源道遺跡21棟、明神遺跡10棟、平沢Ⅰ・中平の２遺跡が14棟ずつ、小屋畑遺跡が９棟(推定を含む)、兼田農場遺跡が８棟、上明内遺跡が１棟であり、合計８遺跡で106棟である。また、時期不明の住居跡が、中長内・明神の２遺跡で４棟ずつある。

この時代に特徴的な遺物として琥珀があるが、明神・源道・平沢Ⅰ・中平・中長内などの遺跡の住居跡から出土している。

本遺跡では、古墳～奈良時代に属する住居跡１棟、奈良時代の住居跡７棟、平安時代の住居跡14棟が検出された。この中で琥珀を出土した住居跡は、奈良時代のもの１棟、平安時代のものが７棟の計８棟である。

引用・参考文献

岩手県（1975）：北上山系開発地域土地分類基本調査「久慈」．国地調査．

照井一明（1982）：陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系．岩手県高等学校教育研究会地理部会誌．

東北地方第四紀研究グループ（1967）：東北地方における第四紀海水準変化．『日本の第四系』．地団研．

米倉信之（1966）：陸中北部沿岸地域の地形発達史．『地理学評論39巻』．

Ⅲ．調査方法と室内整理

１．野外調査の方法

⑴調査区の地区割

調査対象区域内にある三陸国道工事事務所の設定した中心杭№364と№365を結んだ線と直角に、南西方向へ20m の地点に仮の基準点を決め、中心杭どうしを結んだ線と平行になるようにその点から基軸線を設定した。仮の基準点から北西方向に40m の地点に基準点１を、南東方向に40m の地点に基準点２を設置した。各基準点の平面直角座標は、

基準点１　Ｘ＝24253.07、Ｙ＝81272.43、Ｈ＝31,280m

基準点２　Ｘ＝24196.06，Ｙ＝81322.70、Ｈ＝30,660m である。基準点１から南東方向160m の地点を座標原点とし、その原点から20×20m の大グリッドを設定した。南東から北西へはＡ、Ｂ、Ｃ……の大文字のアルファベットを、南西から北東へは１、２、３……のアラビア数字をつけ、大グリッドをＡ１、Ａ２のように呼称した。それぞれの大グリッドは４×４ｍの小グリッドに分割し、南隅からａ、ｂ、ｃ……の小文字のアルファベッドをつけ、大グリッドと組み合わせて、Ａ１－ａ、Ａ２－ｂのように呼ぶことにした。

遺構の名称は、その遺構が含まれているグリッド名を付したが、多数のグリッドにまたがる場合は、原則として最も多くその遺構に占められるグリッド名を使用した。

（例　Ｂ４－ｄ住居跡、Ｂ４－ｅ陥し穴状遺構、Ｋ４－ａ土坑）

また同じ小グリッド内に２つ以上の遺構がある場合は、Ｂ４－ｄ－１、Ｂ４－ｄ－２のように番号を付している。

⑵粗堀・遺構検出・精査

調査開始当初に、調査区を縦横断する２ｍ巾の試掘トレンチを入れ、そのトレンチを拡げる形で遺構検出を進めた。大きな木根が多く、重機が思うように使えなかったため、粗堀は人力で行い、重機は土山の移動に使った。

検出された遺構は、遺構名を付し、住居跡は原則として４分法、土坑・陥し穴状遺構などは２分法で精査した。遺構内の出土遺物は埋土中のものは４分割して層位（埋土上部・下部）を記して取り上げた。床面の遺物については、写真撮影、実測図に記入後、番号を付して取り上げた。

⑶実測・写真撮影

実測は簡易遣り方測量で行った。実測図はすべて縮尺20分の１とした。遺構のレベルは１ｍ間隔を原則とし、必要に応じて計測している。

写真は、埋土断面、全景、遺物出土状況、カマド全景・截ち割りなど状況に応じて撮影した。

6×7㎝版1台（白黒）と35㎜版2台（白黒、カラーリバーサル）の3台を1組として使用しているが、6×7㎝版については省略している場合もある。

2．室内整理

⑴作業内容

室内整理は、遺物の水洗・注記後、接合・復元し、補強が必要なものについて石膏入れを行い、着色するという順で進めた。これらの作業終了後に遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後に、遺物実測、計測拓本、トレース（遺構・遺物）の順に作業を進め、最後に実測図版と写真図版を作成した。これらの作業と併行して鑑定依頼、原稿作成し、報告書に掲載した。

⑵図版・写真図版

遺構図面の縮尺は、住居跡60分の1、カマド断面は40分の1、土坑・陥し穴状遺構・焼土遺構・溝跡は総て60分の1である。

遺物の実測図版の縮尺は、土師器の坏・甕類は3分の1、その他、須恵器・鉄製品・石器等は任意縮尺なので、個々にスケールを付している。なお、写真図版の縮尺は不定である。

図版中のスクリーントーンは下記の凡例のとおりである。また、土器はP、礫はS、柱穴はPP1、PP2……、住居内の土坑はP1、P2……のように表している。

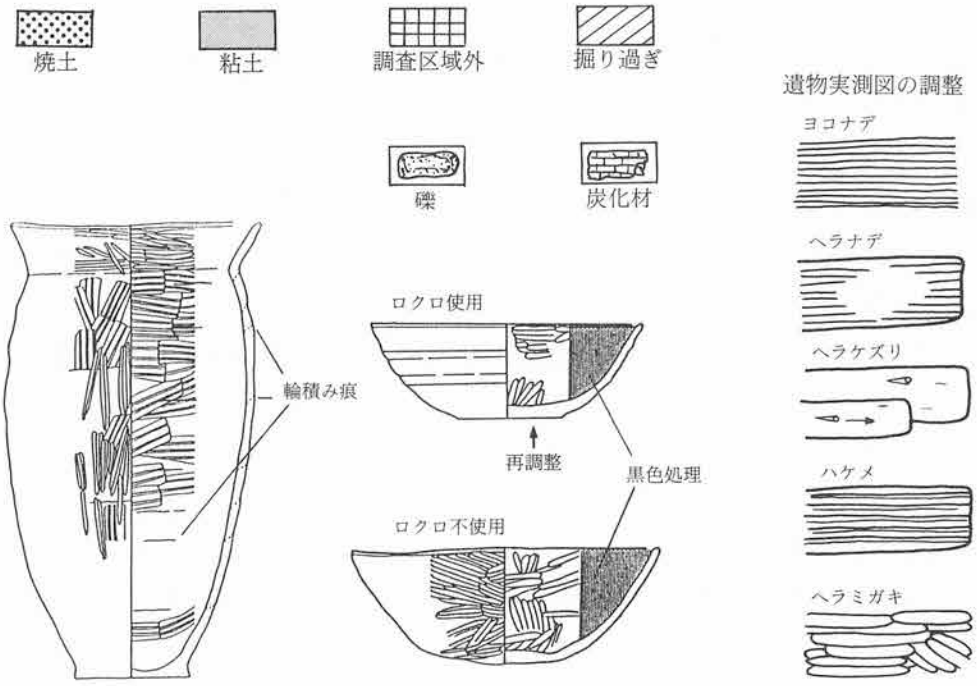


図7　実測図凡例

図8　地形図

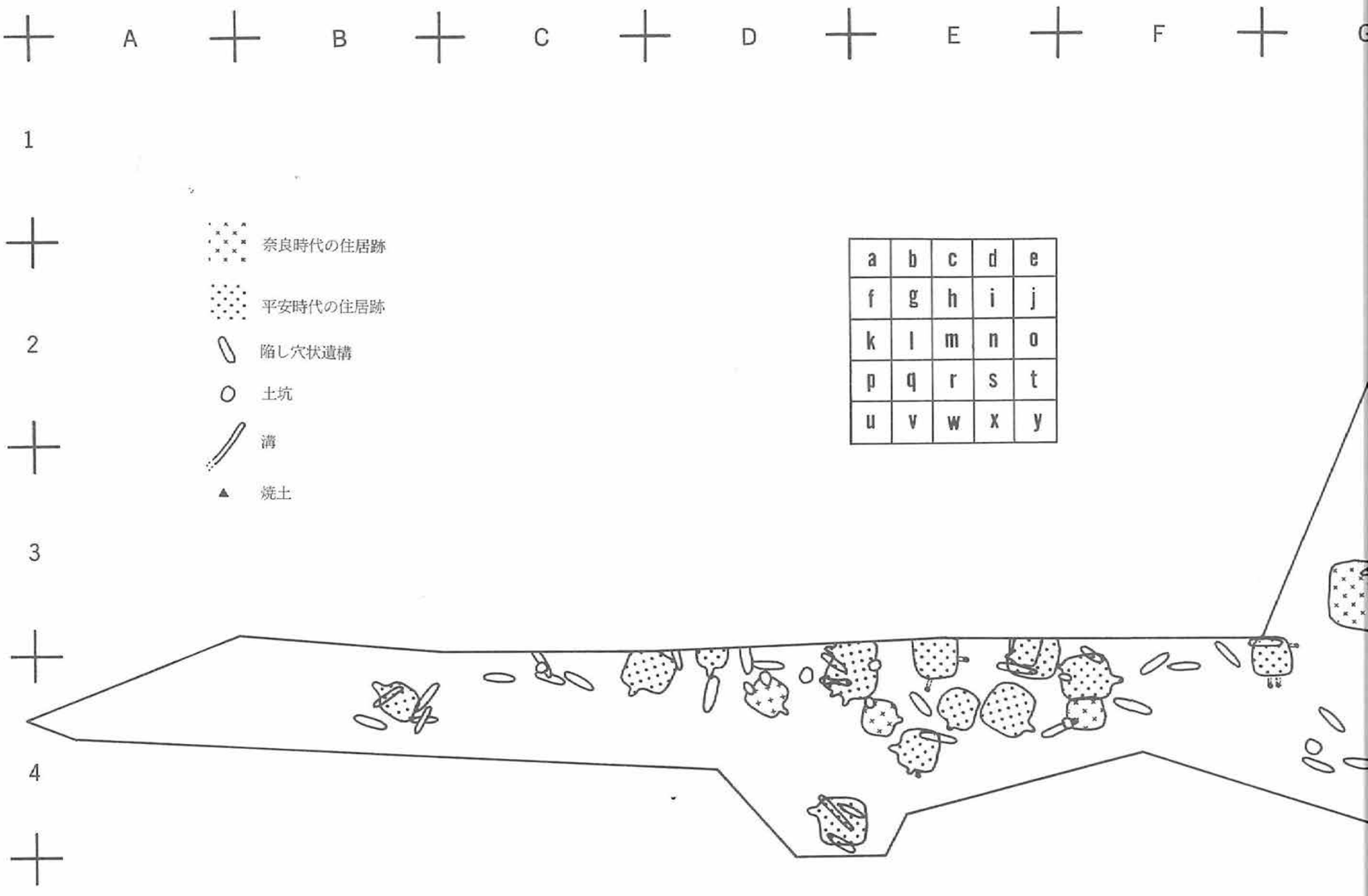

A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
奈良時代の住居跡
平安時代の住居跡
陥し穴状遺構
土坑
溝
焼土
a b c d e
f g h i j
k l m n o
p q r s t
u v w x y

図9　遺構配置図

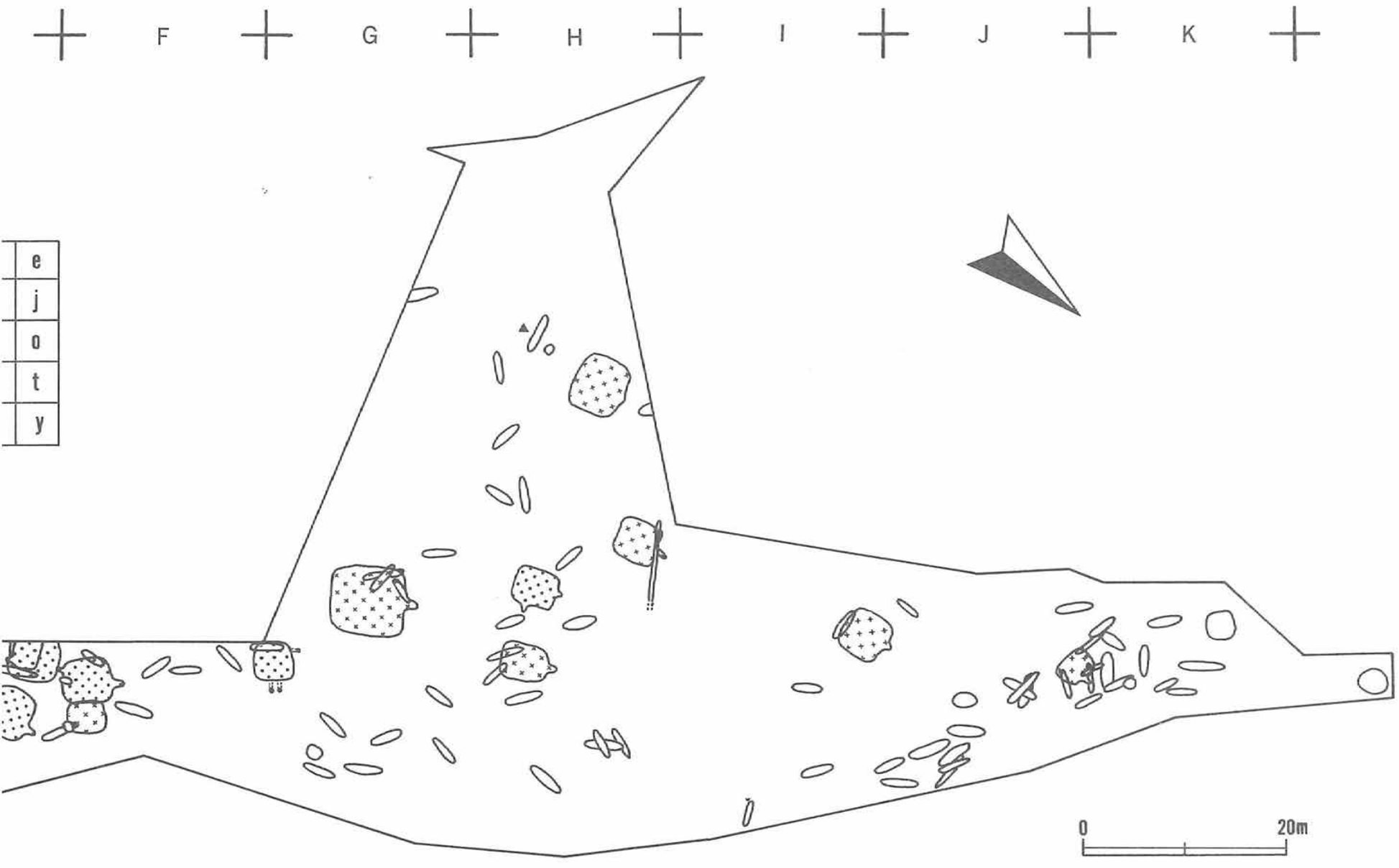


図9　遺構配置図

Ⅳ．検出された遺構と遺物

調査の結果、検出された遺構と遺物について記述するが、１．陥し穴状遺構と、２．土坑は結果を表にまとめて掲載している。５．竪穴住居跡と６．住居跡状遺構については、遺構ごとに解説し、その各遺構内の出土遺物は遺物編として一括して載せている。

１．陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は85基検出された。それらの属性は一括して表３にまとめて示した。いずれも溝状の形状を呈するものであるが、その開口部平面形、横断面形を便宜的に区分し、それらの組み合わせで分類を試みた。分類基準、各分類群の帰属数および各属性の分布特性については「まとめ」で記述している。

２．土坑

検出された土坑は14基ある。それらの属性は一括して表３にまとめて示した。Ｄ３－ｗ土坑は、奈良時代の竪穴住居跡(Ｄ４－ｃ住)を切り、その埋土には平安時代の土師器片が含まれ、イネ灰を主体とした植物灰層（付篇参照）や焼成土層を埋土の構成層の一部とする。また、Ｅ４－ａ土坑も奈良時代の竪穴住居跡（Ｅ４－ａ住）を切り、その埋土層はイネ灰を主体とする植物灰の薄層（付篇参照）を構成層の一部とする。Ｊ４－ｂ土坑は多量の鉄滓を埋土に含む特徴を有する。Ｋ３－ｓ土坑は一辺３ｍ程深さ60cmで隅丸方形、Ｌ３－ｖで土坑は300×250cmの楕円形の平面形と110cmの深さを有する比較的大形の土坑である。

３．溝

検出された溝は１条のみである。これは、Ｈ３－ｏ区、Ｈ３－ｊ区をＮ－45°－Ｅの向きにのびる溝で、Ｈ３－ｊ区ではＨ３－ｉ住を切っている。その長さは780cm、南東端で最大幅80cmを示し北西端へ向かって徐々に幅を減じて220cmとなる。深さは25cm程でＵ字形の横断面を呈する。埋土は比較的しまりのよい黒褐色土を主体とする。遺物は伴わない。

４．焼土

検出された焼土遺構は１カ所である。厚さが２～３cmと小規模である。付近からは若干の土師器片が出土したが、カマドや焼失住居に伴う焼土とは考えられない。

表3　陥し穴状遺構・土坑一覧表

遺構名		B4－d－1陥し穴	B4－d－2陥し穴	B4－e陥し穴
図		図10－a	図10－b	図10－c
図版		図版3	図版3	図版3
検出状況 重複関係		B4－d住居跡より古い		
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ II ヨコ 1	タテ II ヨコ 2	タテ I ヨコ 1
模(cm)	開口部径	50×430	80×316	70×360
	底部径	32×370	20×260	25×340
	深さ	140	130	130
長軸方向		N75°W	N25°W	N85°E
埋土		下部埋土はしまりのない褐色土あるいは黒色土と褐色土の混土	上部は黒褐色、下部はしまりのないにぶい黄褐色土、灰黄褐色土	上部は黒色土と黒褐色土を主体とし下部はしまりのない黒色土と褐色土の混土
底面		ほぼ平坦	南端へ微傾斜で下がる	波状を呈し、東端へ傾斜し下がる
分類		AII1	AII3	AI1
出土遺物				
時期				

遺構名		B4－j－1陥し穴	B4－j－2陥し穴	C3－u陥し穴
図		図10－d	図10－d	図11－a
図版		図版14	図版16	図版3
検出状況 重複関係		B4－j－2陥し穴を切る	B4－j－1陥し穴に切られる	
形状	平面形	A		A
	断面形	タテ I ヨコ 1	タテ ヨコ 1	タテ III ヨコ 2
模(cm)	開口部径	60×308	60×(310?)	80×340
	底部径	22×310	20×(320?)	20×380
	深さ	130	110	150
長軸方向		N50°W	N70E	N40°W
埋土		上部は黒色土、下部はしまりのない黒色土と暗褐色土の混土	上部は黒色土、中部と下部は黒色土と褐色土の混土で下部はしまりがない。	上部は黒色土、中部と下部は褐色土で下部はしまりがない。
底面		南東端部でせり上がる		波状、段丘礫層が露出
分類		AI1		AIII2
出土遺物				
時期				

遺構名		C3－w－1陥し穴	C3－w－2陥し穴	C3－x陥し穴
図		図11－C	図11－C	図11－b
図版		図版16	図版16	図版3
検出状況 重複関係		C3－W－2陥し穴を切る	C3－W－1陥し穴に切られる	
形状	平面形		A	A
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ I 2	タテ ヨコ I 2
模(cm)	開口部径	50×(340？)	70×320	80×370
	底部径	8×270	15×320	10×360
	深さ	13°	14°	135
長軸方向		N15E	N22°W	N10°W
埋土		上部は黒色土、下部は黒色土と暗褐色土の混土	上部は黒色土、黒褐色土、下部はしまりのない褐色土で黒褐色土をレンズ状にはさむ	上中部はしまりのある黒色土、褐色土で、下部はしまりのない褐色土
底面		北端へ傾斜し下がる	平坦	北端へ軽微に傾斜し下がる
分類			AI2	AI2
出土遺物				
時期				

遺構名		D3－u陥し穴	D3－w陥し穴	D3－x陥し穴
図		図11－d	図11－e	図12－a
図版		図版4	図版4	図版4
検出状況 重複関係		C3－y住居に切られる	D3－x陥し穴に切られる(？)	
形状	平面形			A
	断面形	ヨコ 2	タテ ヨコ 1	タテ ヨコ II 2
模(cm)	開口部径	120×(200？)	90×(100？)	90×454
	底部径	22×(180？)	8×(100？)	18×410
	深さ	120	130	110
長軸方向		N33°E	N35°E	N30°W
埋土		上部は黒色土、中下部は褐色土、黒褐色土	黒褐色土と暗褐色土を主体とする。下部はしまりがない。	上部は黒褐色土、下部は暗褐色土で最下部はしまりがない。
底面		平坦	平坦	南東端へ傾斜し下がる
分類				AII2
出土遺物				
時期				

遺構名		D3－y陥し穴	D4－b陥し穴	D4－e陥し穴
図		図12－y	図13－a	図12－f
図版		図版4	図版4	図版5
検出状況 重複関係		E3－u住居に切られる	D3－u住居に切られる	E3－u住居に切られる
形状	平面形		A	
	断面形	タテ　ヨコ 2	タテ　・　ヨコ I　1	タテ　ヨコ I　1
模(cm)	開口部径	80×(380？)	114×400	25×350
	底部径	20×390	24×380	14×345
	深さ	120	150	110
長軸方向		N12°W	N50°E	N40°W
埋土		黄褐色土を主体とする。 下部は極めてしまりがない。	上部は黒色土、黒褐色土で下部はしまりのない黒褐色土、褐色土	上部は、暗褐色土、褐色土、下部はしまりのない黒褐色土
底面		ほぼ平坦	ほぼ平坦	平坦
分類			AI1	
出土遺物				
時期				

遺構名		D4－t－1陥し穴	D4－t－2陥し穴	D4－t－3陥し穴
図		図12－e	図12－y	図12－b
図版		図版5	図版5	図版5
検出状況 重複関係		D4－t住居に切られる	D4－t住居に切られる	D4 t住居に切られる
形状	平面形			
	断面形	タテ　ヨコ I　2	タテ　ヨコ 2	タテ　ヨコ 2
模(cm)	開口部径	(50？)×390	30×(460？)	70×(294？)
	底部径	15×390	14×472	16×310
	深さ	130	140	165
長軸方向		N15°W	N9°E	N37°W
埋土		上部は不明、下部は壁面に露出する軽石層の崩落土、最下部はしまりのない黒褐土	褐灰色土、黄褐色土を主体とする。最下部は極めてしまりがない。	上部は不明、中部は黄褐色土を主体とし、下部はしまりのない黒褐色土
底面		両端で軽微にせり上がる	両端へせり上がる	両端へせり上がる
分類				
出土遺物				
時期				

遺構名		E3－y陥し穴	E4－b陥し穴	E4－1陥し穴
図		図13－c	図13－b	図13－e
図版		図版6	図版5	図版6
検出状況 重複関係		E3－y住居に切られる		E4－e住居に切られる
形状	平面形		A	
	断面形	タテ I ヨコ 2	タテ II ヨコ 2	タテ II ヨコ 1
模(cm)	開口部径	64×(430?)	100×360	100×?
	底部径	20×425	26×270	15×380
	深さ	140	170	160
長軸方向		N30°	NS	N35°W
埋土		黒褐色土を主体とする	上部は黒色土、暗褐色土、下部はしまりのない褐色土で黒褐色土の小塊を含んでいる	下部はしまりのない褐色土
底面		南端へ傾斜し下がる	平坦	ほぼ平坦
分類			AII2	
出土遺物				
時期				

遺構名		F3－u陥し穴	F3－w陥し穴	F3－w陥し穴
図		図14－c	図13－f	図13－d
図版		図版6	図版6	図版6
検出状況 重複関係		F3－u住居に切られる		
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ I ヨコ 2	タテ I ヨコ 1	タテ II ヨコ 2
模(cm)	開口部径	50×350	90×360	80×330
	底部径	10×360	14×350	20×290
	深さ	160	150	120
長軸方向		N20°W	N79°W	N48°W
埋土		しまりのない褐色土を主体とする	上部は黒色土、下部は褐色土、最下部はしまりのない黒色土	上部は黒褐色土、中部は暗褐色土、下部はしまりのない暗褐色土と黒褐色土のしもふりロース状の混土
底面		平坦	両端が下がり凸面状	
分類		AI2	AII2	
出土遺物				
時期				

遺構名		F3－y陥し穴	F4－b陥し穴	F4－f陥し穴
図		図14－a	図14－b	図14－e
図版		図版7	図版7	図版7
検出状況 重複関係				F4－a住居、F4－f土坑に切られる
形状	平面形	A	A	
	断面形	ヨコ I 2	タテ II ヨコ 2	タテ ヨコ 1
模式(cm)	開口部径	100×380	128×400	100×(460?)
	底部径	34×360	24×330	16×440
	深さ	128	140	170
長軸方向		NS	N28°W	N80°W
埋土		暗褐色土、黒褐色土を主体とする。最下部は黒褐色土。下部はしまりがない。	上部は黒色土、黒褐色土、中部は褐色土、暗褐色土、下部はしまりのない暗褐色土	上部は黒色土、中部は暗褐色土、下部はしまりのない褐色土で、ごま塩状に黒色土を含む。
底面		軽微に凹面状	北西端へせり上がる	東端へ軽微に傾斜し下がる
分類		AI2	AII2	
出土遺物				
時期				

遺構名		G2－d陥し穴	G3－j陥し穴	G3－m－1陥し穴
図		図14－d	図15－a	図15－C
図版		図版7	図版7	図版9
検出状況 重複関係				G3－m－2陥し穴、G3－m住居に切られる
形状	平面形		A	
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ I 2	タテ ヨコ 2
模式(cm)	開口部径	74×(310?)	82×374	(60?)×(440?)
	底部径	10×(260?)	24×374	20×415
	深さ	124	120	150
長軸方向		N50°W	N47°W	N13°E
埋土		黒褐色土を主体とする	黒褐色土、暗褐色土を主体にする	上部は暗褐色土、黒褐色土、下部はしまりのない褐色土、黄褐色土
底面		ほぼ平坦	ほぼ平坦	両端へ軽微にせり上がる
分類			AI2	
出土遺物				
時期				

遺構名		G3－m－2陥し穴	G3－n陥し穴	G3－u陥し穴
図		図15－b	図16－a	図16－a
図版		図版19	図版8	図版8
検出状況 重複関係		G3－m－1陥し穴を切り、G3－m住居に切られる	G3－m住居に切られる	G3－u住居に切られる
形状	平面形			
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ 1	タテ ヨコ I 2
模(cm)	開口部径	(60？)×(325？)	50×(358？)	(76？)×406
	底部径	14×320	20×368	34×396
	深さ	130	140	140
長軸方向		N78° E	N12° E	N40° N
埋土		上部は黒褐色土、暗褐色土、下部はしまりのない褐色土	上部は黒褐色土、暗褐色土、下部はしまりのない黄褐色土、褐色土	黄褐色土、にぶい黄褐色土を主体にする。下部はしまりがない。
底部		両端へ軽微にせり上がる	両端へ軽微にせり上がる	両端がせり上がる
分類				
出土遺物				
時期				

遺構名		G4－b陥し穴	G4－e陥し穴	G4－h陥し穴
図		図16－c	図15－d	図16－b
図版		図版8	図版8	図版8
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ ヨコ II 2	タテ ヨコ II 1	タテ ヨコ I 2
模(cm)	開口部径	105×460	84×350	110×350
	底部径	34×370	10×264	38×346
	深さ	170	90	150
N 12° W		N12° W	N68° W	
埋土		上位から黒色土褐色土、黒色土が層状に埋積。最下部の黒色土はしまりがない。	黒褐色土を主体とする最下部はしまりがない。	上・中部は黒色土、下部は褐色土を主体とし黒色土が塊状に含まれしまりがない。
底面		北端へ傾斜し下がる	両端へせり上がる	平坦
分類		AII 2	AII 1	AI 2
出土遺物				
時期				

遺構名		G4－j陥し穴	G4－e陥し穴	G4－m陥し穴
図		図15－e	図16－d	図16－e
図版		図版9	図版9	図版9
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ I ヨコ 2	タテ II ヨコ 1	タテ II ヨコ 1
模(cm)	開口部径	74×360	68×374	90×410
	底部径	24×346	16×340	20×380
	深さ	130	100	160
長軸方向		N10°E	N32°W	N33°W
埋土		上部は黒色土、黒褐色土、下部はしまりのない褐色土。	黒褐色土、暗褐色土を主体とする。最下部はしまりのないにぶい黄褐色土。	上部は黒褐色土、下部は暗褐色土、黄褐色土、最下部はしまりのない黒色土。
底面		両端へせり上がる	北西端へ傾斜に下がる	南東端へ傾斜し下がる
分類		AI2	AII1	AII1
出土遺物				
時期				

遺構名		H2－g陥し穴	H2－k陥し穴	H2－t陥し穴
図		図17－a	図17－c	図17－b
図版		図版9	図版9	図版19
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	A	
	断面形	タテ II ヨコ 1	タテ III ヨコ 2	タテ ヨコ 1
模(cm)	開口部径	90×490	80×320	170×(250?)
	底部径	14×420	20×370	16×(200?)
	深さ	160	140	130
長軸方向		N77°E	N52°E	N28°W
埋土		上部は黒褐色土、下部は黄褐色土、最下部はしまりのない黒褐色土	黒色土、褐色土、黒褐色土、黒色土が層状に埋積、最下部はしまりのない黒色土	上部は黒色土、下部は褐色土、最下部には黒色土が混じる。
底面		ほぼ平坦	ほぼ平坦	ほぼ平坦
分類		AII1	AIII2	
出土遺物		石器剝片		
時期				

遺構名		H2－u陥し穴	H3－a陥し穴	H3－b陥し穴
図		図17－d	図17－e	図18－a
図版		図版10	図版10	図版10
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ II ヨコ 2	タテ I ヨコ 2	タテ II ヨコ 1
模(cm)	開口部径	90×300	100×330	100×420
	底部径	18×264	24×350	20×360
	深さ	110	150	160
長軸方向		N82° E	N20° W	N40E
埋土		上部は黒色土、下部は褐色土、暗褐色土	黒褐色土を主体とする	上部は黒褐色土、下部はしまりのない暗褐色土
底面		平坦	平坦	平坦
分類		AII2	AI2	AII1
出土遺物			縄文土器片1点	
時期				

遺構名		H3－m陥し穴	H3－p陥し穴	H3－r陥し穴
図		図18－c	図18－e	図18－b
図版		図版10	図版11	図版11
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	B	A
	断面形	タテ I ヨコ 1	タテ I ヨコ 2	タテ I ヨコ 1
模(cm)	開口部径	90×330	110×316	110×364
	底部径	15×308	28×342	24×360
	深さ	130	160	150
長軸方向		N87° W	N52° W	N57° W
埋土		上部は黒褐色土、下部は暗褐色土を主体とする。最下部はしまりがなく黒褐色土をゴマ塩状に含む。	上部は黒色土、下部は褐色土。最下部はしまりがない。	上部は黒褐色土、下部はしまりのない褐色土
底面		東端へ傾斜し下がる		南東端へ傾斜し下がる
分類		AI1	BI2	AI1
出土遺物			石器剝片2点	
時期				

遺構名		H3－u－1陥し穴	H3－u－2陥し穴	H4－b陥し穴
図		図18—d	図18—f	図19—a
図版		図版11	図版11	図版17
検出状況 重複関係		H3－u住居に切られる。	H3－u住居に切られる。	
形状	平面形			A
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ I 3	タテ ヨコ II 2
模	開口部径	74×(374？)	50×390	114×390
	底部径	20×330	16×380	10×350
模(cm)	深さ	120	142	140
長軸方向		EW	N50°W	N50°W
埋土		上部は黒褐色土、下部は暗褐色土、褐色土、最下部の褐色土には黒褐色土が薄層状にはさまる。	上部は黒褐色土、下部は暗褐色土、最下部はしまりがない。	上部は黒褐色土、下部は褐色土で最下部は黒色土粒を含みしまりがない。
底面		両端へせり上がる	平坦	北西端へせり上がる
分類				AII 2
出土遺物				
時期				

遺構名		H4－h陥し穴	H4－j－1陥し穴	H4－j－2陥し穴
図		図19—c	図19—c	図19—c
図版		図版17	図版17	図版17
検出状況 重複関係		H4－j－1陥し穴に切られる。 H4－j－2陥し穴を切る(？)	H4－h陥し穴を切る。	H4－h陥し穴に切られる(？)
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ ヨコ II 2	タテ ヨコ II 1	タテ ヨコ II 1
模	開口部径	110×410	50×350	60×350
	底部径	20×320	20×320	10×320
模(cm)	深さ	130	150	130
長軸方向		N62°W	N20°E	N18°E
埋土		上部は黒褐色土を主体とし、黒色土のブロックを含む。下部はしまりのない黄褐色土	上部は黒色土、最下部はしまりのない黒褐色土	上部は黒褐色土、黒色土、下部はしまりのない黒色土と褐色土の混土
底面		ほぼ平坦	両端へせり上がる	両端へせり上がる
分類		AII 2	AII 1	AII 1
出土遺物				
時期				

遺構名		H4－l陥し穴	I3－s陥し穴	I4－d陥し穴
図		図19—b	図20—a	図20—c
図版		図版12	図版12	図版12
検出状況 重複関係			I3－t住居に切られる	
形状	平面形	A		A
	断面形	タテ II ヨコ 2	タテ I ヨコ 1	タテ II ヨコ 2
模(cm)	開口部径	110×390	(140？)×340	100×320
	底部径	20×290	25×340	16×250
	深さ	130	160	170
長軸方向		NS	N88°W	N40°W
埋土		上部は黒褐色土、中部は暗褐色土、下部は極めてしまりのない褐色土。	上部は黒褐色土、黒色土、中下部はしまりのない褐色土、暗褐色土、最下部はしまりのない黒色土。	褐色土、暗褐色土を主体とする。下部はしまりがない。
底面		ほぼ平坦	平坦	ほぼ平坦
分類		AII2		AII2
出土遺物				
時期				

遺構名		I4－n陥し穴	I4－g陥し穴	J3－p陥し穴
図		図20—b	図20—d	図20—e
図版		図版12	図版12	図版13
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A	B	A
	断面形	タテ I ヨコ 1	タテ II ヨコ 1	タテ II ヨコ 1
模(cm)	開口部径	110×340	100×306	90×326
	底部径	25×335	10×250	10×250
	深さ	140	165	125
長軸方向		N58°W	N75°W	N5°W
埋土			黒褐色土が主体をなす。下部はしまりがない。	黒褐色土、暗褐色土を主体とする。下部はしまりがない。
底面		南東端でせり上がる	凸面状	凸面状
分類		AI1	BII1	AII1
出土遺物				
時期				

遺構名		Ｊ３－ｔ陥し穴	Ｊ３－ｙ陥し穴	Ｊ４－ｄ－１陥し穴
図		図21－ａ	図21－ｂ	図21－ｄ
図版		図版13	図版18	図版20
検出状況 重複関係			Ｋ３－Ｐ陥し穴を切る	Ｊ４－ｄ－２・３陥し穴に切られる
形状	平面形	Ａ		Ｂ
	断面形	タテ II ヨコ 2	タテ ヨコ 2	タテ II ヨコ 2
模様(cm)	開口部径	96×418	90×(430？)	130×380
	底部径	18×342	10×430	40×320
	深さ	(150～120)	98	110
長軸方向		N52W	N77°W	N５°W
埋土		上部は褐色土、暗褐色土、下部は黒色土。	黒褐色土と黄橙色土の混土を主体とする。最下部は極めてしまりのない黒褐色土。	上部は黒色土と褐色土の混土。下部は黒色土、黒色土と黄橙色土の巷土、黄褐色土が層状に重なりしまりがない。
底面			両端へせり上がる	
分類		ＡII２		ＢII２
出土遺物				
時期				

遺構名		Ｊ４－ｄ－２陥し穴	Ｊ４－ｄ－３陥し穴	Ｊ４－ｅ－１陥し穴
図		図21－ｄ	図21－ｄ	図22－ｂ
図版		図版20	図版20	図版20
検出状況 重複関係		Ｊ４－ｄ－１・３を切る	Ｊ４－ｄ－１陥し穴を切り、Ｊ４－ｄ－２陥し穴に切られる。	
形状	平面形	Ａ	Ａ	Ａ
	断面形	タテ II ヨコ 2	タテ II ヨコ 2	タテ I ヨコ 1
模様(cm)	開口部径	100×400	110×400	80×300
	底部径	10×360	20×315	15×280
	深さ	110	130	110
長軸方向		EW	N45°E	N70°W
埋土		上部は黒色土、下部はしまりのない黒色土と褐色土の混土。	上部は黒色土、黒褐色と褐色土の混土、下部はしまりのない黄褐色土、黒色土と黄褐色土の混土。	上部は黒色土、黒褐色土、下部はしまりのない黒色土と黄褐色土の混土。
底面		波状	平坦	ほぼ平坦
分類		ＡII２	ＡII２	ＡＩ１
出土遺物				
時期				

遺構物		J4－e－2陥し穴	J4－e－3陥し穴	J4－f陥し穴
図		図21－d	図22－d	図23－a
図版		図版20	図版20	図版13
検出状況 重複関係		K3－u－2陥し穴に切られる J4－e－1陥し穴を切る(?)	J3－y住居に切られる	J4－yと切り合うが新旧関係は不明
形状	平面形			
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ 2	タテ ヨコ II 1
模(cm)	開口部径	110×(360?)	100×?	150×480
	底部径	20×290	25×330	20×450
	深さ	120	105	160
長軸方向		N42°E	N38°E	N62°W
埋土		上部は黒褐色土、中部は灰層褐色土、黄橙色土、下部はしまりのない黒褐色土、黄橙色土	上部は黒色土、中部は明黄褐色土、下部はしまりのない黒色土、明黄褐色土	上部は黒色土を主体とする。下部は黒色土黄褐色土の混土と黄褐色土が瓦層、全層にしまりがない。
底面		平坦	北東端へ傾斜して下がる	平坦
分類				AII1
出土遺物				
時期				

遺構名		J4－g－1陥し穴	J4－g－2陥し穴	J4－k－1陥し穴
図		図22－e	図23－d	図24－a
図版		図版14	図版13	図版14
検出状況 重複関係		J4－1－b陥し穴を切る		
形状	平面形	B	B	A
	断面形	ヨコ II 2	タテ ヨコ I 2	タテ ヨコ II 1
模(cm)	開口部径	130×350	140×380	(90?)×410
	底部径	20×290	20×380	20×360
	深さ	150	160	170
埋土		上部は堅い黒色土のブロックを含む黒褐色土、中部は褐色土と暗褐色土の混土、下部はしまりのない黒色土と褐色土の混土。	上部は堅い黒色土のブロックを含む暗褐色土、黒褐色土、中部は褐色土、下部は褐色土塊のルーズな埋土で黒色土をレンズ状にはさむ。	最上部は黒色土、埋土の大半は黒色土と褐色土あるいは暗褐色土と褐色土の混土。下半部はしまりがなく最下部は黒色土。
底面		北端へ軽微に傾斜して下がる	平坦	平坦
分類		BII2	BI2	AII1
出土遺物				
時期				

遺構名		J 4－k－2陥し穴	J 4－l－1陥し穴	J 4－l－2陥し穴
図		図24—c	図25—b	図25—b
図版		図版14	図版18	図版18
検出状況 重複関係			J 4－l－2陥し穴を切る	J 4－l－a陥し穴に切られる（？）
形状	平面形	A		
	断面形	タテ II ヨコ 1	タテ ヨコ 1	ヨコ ヨコ 1
模(cm)	開口部径	(90？)×420	？	70×？
	底部径	10×360	10×380	10×490
	深さ150	160	150	
長軸方向		N48°W	N62°W	NS
埋土		上部は黒色土、中下部は黒色土と褐色土の混土で下部はしまりがない。	上部は黒褐色土。下部は極めてしまりのない黄橙色土、明黄橙色土。	上部は灰黄褐色土と黒褐色土の混土。下部はしまりのない褐灰色土。
底面		平坦	平坦	両端へせり上がる
分類		AII1		
出土遺物				
時期				

遺構名		K 3－p－1陥し穴	K 3－p－2陥し穴	K 3－q陥し穴
図		図21—c	図23—e	図23—b
図版		図版18	図版14	図版14
検出状況 重複関係		J 3－y陥し穴に切られる		
形状	平面形		A	A
	断面形	タテ ヨコ 2	タテ I ヨコ1	タテ ヨコ I 1
模(cm)	開口部径	110×(320？)	70×320	85×300
	底部径	20×240	20×312	34×276
	深さ	70	130	100
長軸方向		N22°W	N75°W	N53°W
埋土		黒色土、黒褐色土、黄褐色土からなり全体にしまっている。	上部は黒色土、下部は暗褐色土、黄褐色土。	上部は黒色土。下部は暗褐色土、黒褐色土。
底面		平坦	軽微な凹面状	ほぼ平坦
分類			AI1	AI1
出土遺物				
時期				

遺構名		K3－u－1陥し穴	K3－u－2陥し穴	K3－u陥し穴
図		図24－b	図22－c	図23－c
図版		図版22	図版21	図版15
検出状況 重複関係		K4－a－1陥し穴に切られる。	J4－e－2陥し穴を切る。 J3－y住居に切られる。 K3－u－1陥し穴との新旧は不明。	
形状	平面形	A		A
	断面形	タテ　ヨコ 2	タテ　ヨコ 2	タテ　ヨコ II　2
模(cm)	開口部径	120×(390？)	90×(336？)	110×360
	底部径	25×(370？)	10×336	20×295
	深さ	120	100	115
長軸方向		N45°E	N63°W	N40°W
埋土		上部は堅い黒色土で黄褐色土のブロックを含む。下部は褐色土。最下部は黒色土と褐色土の混土で極めてしまりがない。	上部は黒褐色土。中部は暗灰黄色土。下部はしまりのない黄橙色土、褐灰色土。	上部は黒色土。下部はしまりのない黒色土と褐色土の混土。最下部はしまりのない黒色土。
底面		平坦	両端へせり上がる	平坦
分類				AII2
出土遺物				
時期				

遺構名		K3－w陥し穴	K4－a陥し穴	K4－b陥し穴
図		図25－a	図24－d	図25－c
図版		図版15	図版22	図版15
検出状況 重複関係			K3－u－1陥し穴を切る	
形状	平面形	A	A	A
	断面形	タテ　ヨコ II　2	タテ　ヨコ I　2	タテ　ヨコ III　2
模(cm)	開口部径	80×510	100×350	80×270
	底部径	20×460	20×370	20×300
	深さ	130	150	120
長軸方向		N50°W	N65°W	N60°W
埋土		上部は黒色土と黒褐色土の堅い混土。下部は黒色土と褐色土のしまりのない混土。	上部は黒色土。中部は黒色土と褐色土、黄褐色土との混土。下部はしまりのない黒色土。	上部は堅い黒色土。下部はしまりのない褐色土あるいは黒色土と黄褐色土の混土。
底面		ほぼ平坦	北西端へ軽微に傾斜して	
分類		AII2	AI2	AIII2
出土遺物				
時期				

遺構名		K4－c陥し穴		
図		図24－e		
図版		図版10		
検出状況 重複関係				
形状	平面形	A		
	断面形	タテ II ヨコ 1		
模(cm)	開口部径	60×305		
	底部径	15×270		
	深さ	150		
長軸方向		N40°W		
埋土		上部は黒色土と黒褐色土との混土。下部はしまりのない褐色土、最下部はしまりのない黒色土。		
底面		波状		
分類		AII1		
出土遺物				
時期				

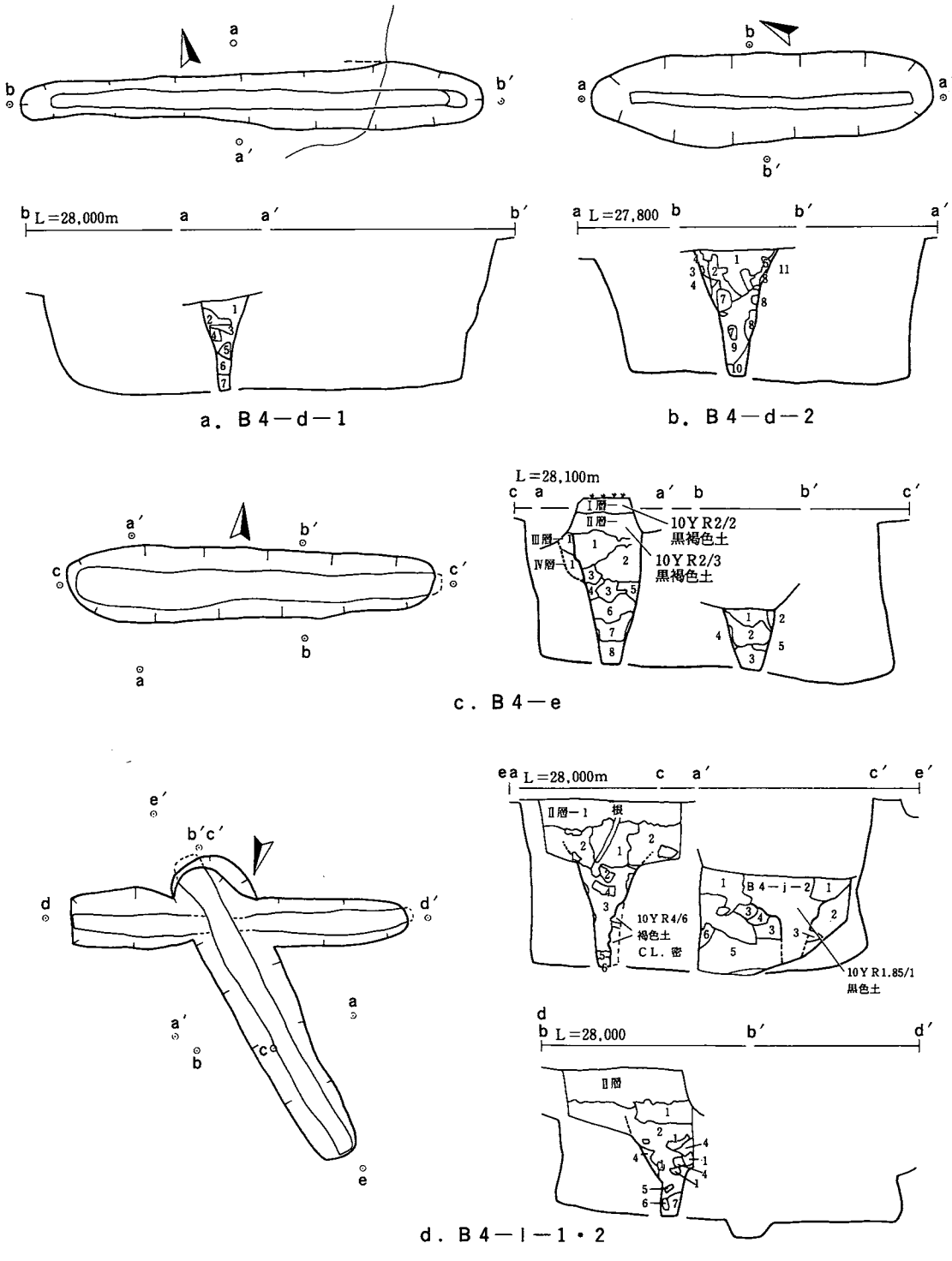
遺構名	C3－w土坑	D3－x土坑	D3－w土坑
図	図26－a	図26－b	図26－1
図版	図版24		図版24
検出状況 重複関係	D3－w－1陥し穴を切る。		D4－c住居を切る。
平面形	楕円形	円形	楕円形
開口部径(cm)	100×150	130	140×165
深さ(cm)	10	25	40
埋土	しまりのない黒褐色土	比較的しまりのある黒褐色土、明黄褐色土	黒褐色土を主体とする。 焼成土、植物灰が薄層状に狭在する。
底面	平坦	ほぼ平坦	平坦
壁状況	外傾	軽微に外傾	外傾
出土遺物			土師器
時期			平安時代

遺構名	G4－g土坑	H2－g土坑	J4－b土坑
図	図26—h	図26—i	図26—j
図版	図版23	図版23	図版23
検出状況 重複関係			
平面形	楕円形	円形	楕円形
開口部径 (cm)	90×160	130	190×250
深さ (cm)	50	70	120×170
埋土	ややしまりのある黒褐色土を主体とする。	上部は黒色土、黒褐色土、下部はしまりのない褐色土、黄褐色土	ややしまりのある黒色土、暗褐色土
底面	平坦	平坦	ほぼ平坦
壁状況	外傾	外傾	外傾
出土遺物			鉄滓
時期			

遺構名	K3－s土坑	K4－a土坑	L3－u土坑
図	図27—a	図27—c	図27—b
図版	図版23	図版25	図版25
検出状況 重複関係		K4－a－1陥し穴に切られる。	
平面形	隅丸正方形	円形	楕円形
開口部径 (cm)	300×300	140	250×300
深さ (cm)	60	90	110
埋土	上部は黒色土、下部は褐色土を主体とし、全体にこまりがある。	全体にしまりのある黒色土、黒色土と褐色土の混土からなる。	上部は黒色土、下部はしまりのない褐色土を基質とし黄褐色土の堅い角塊状ブロックに富む。
底面	平坦	平坦	平坦
壁状況	外傾	外傾	上半部外傾、下半部垂直
出土遺物			
時期			

遺構名	Ｅ４－ａ土坑	Ｆ４－ｆ土坑	Ｅ３－ｕ土坑
図	図26－ｃ	図27－ｄ	図27－ｅ
図版	図版25	図版25	図版26
検出状況 重複関係	Ｅ４－ｇ住居を切る。	Ｆ４－ａ住居を切る。 Ｆ４－ｆ陥し穴に切られる。	Ｅ３－ｕ住居を切る。
平面形	楕円形(？)	円形	円形
開口部径(cm)	×（90？）		140
深さ(cm)	25	20	60
埋土	しまりのない黒褐色土を主体とし植物灰を含む焼成土をレンズ状に伴う。	ややしまりのある黒色土、黒褐色土で火山灰が混入	
底面	平坦	平坦	北東方向へ軽微に傾斜し下がる。
壁状況	外傾	外傾	
出土遺物			
時期			

遺構名	Ｆ３－ｕ土坑	Ｉ３－ｔ土坑
図	図26－ｇ	図26－ｄ
図版	図版26	
検出状況 重複関係	Ｆ３－ｕ住居を切る。	Ｉ３－ｔ住居を切る。
平面形	矩形	円形
開口部径(cm)	100×120	120
深さ(cm)	40	50
埋土	ややしまりのある黒褐色土、暗褐色土	
底面	ほぼ平坦	平坦
壁状況	ほぼ垂直	軽微に外傾
出土遺物		
時期		



a．B4－d－1

b．B4－d－2

c．B4－e

d．B4－Ⅰ－1・2

図10　陥し穴状遺構実測図(1)

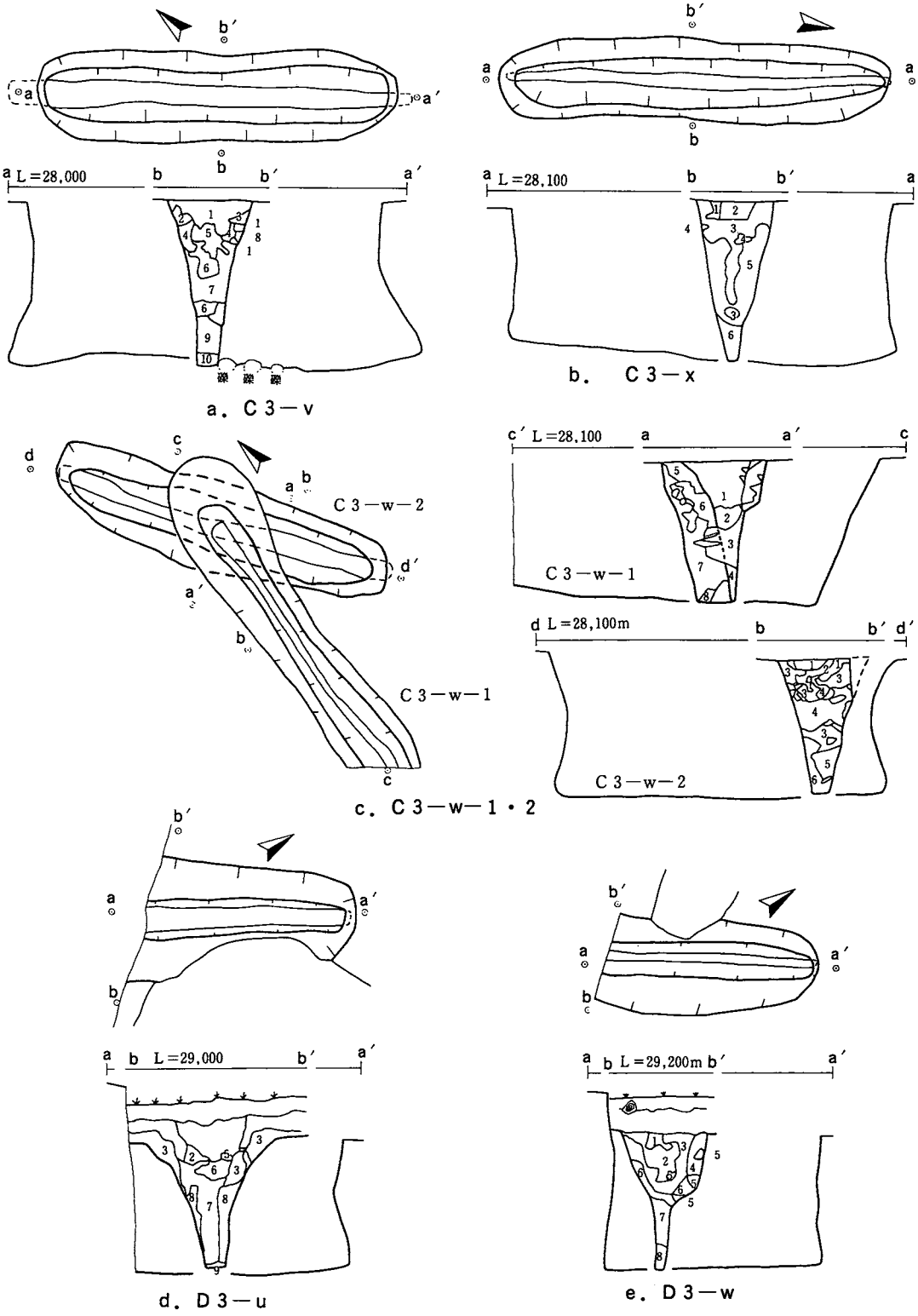
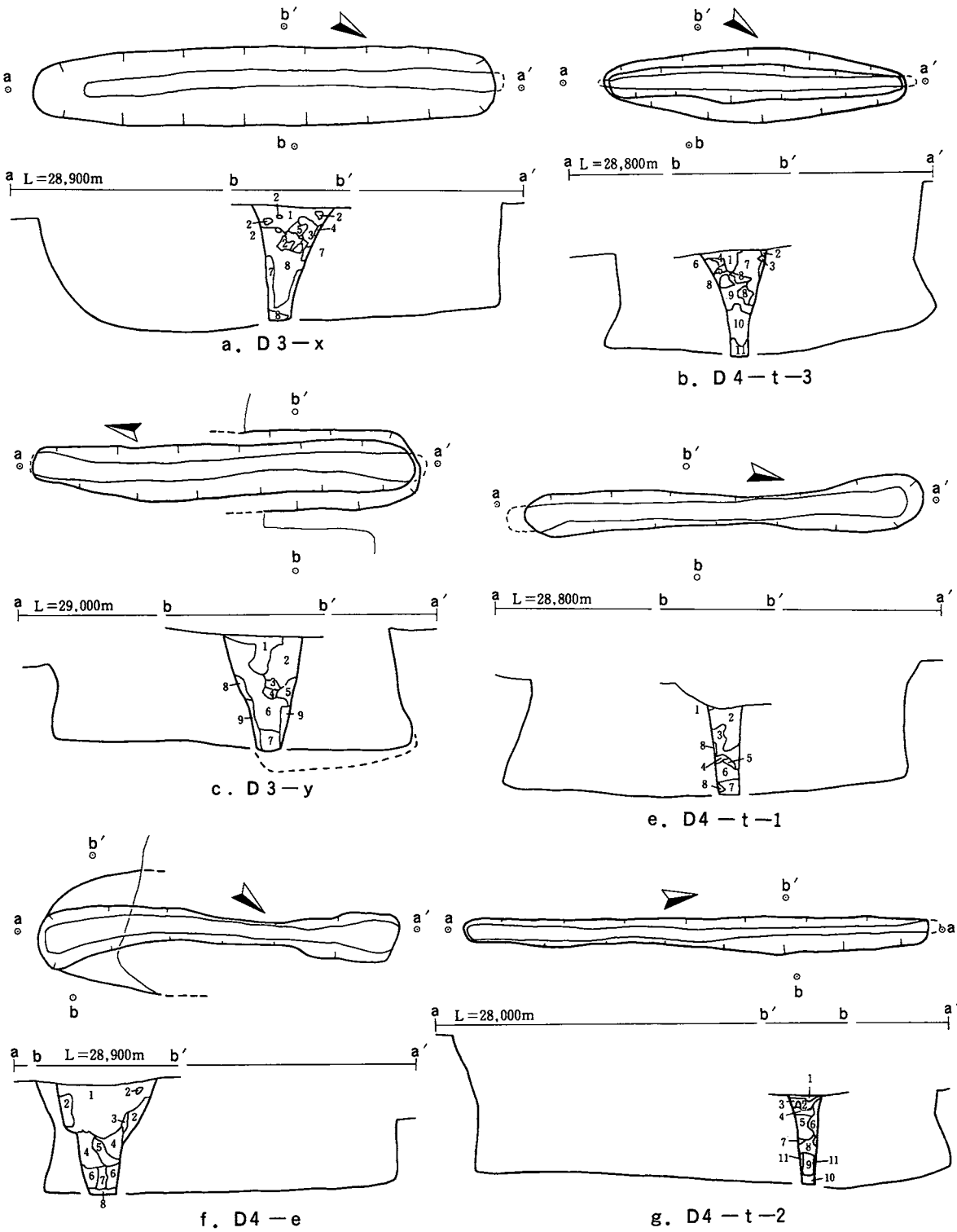


図11　陥し穴状遺構実測図(2)



a．D3－x　b．D4－t－3　c．D3－y　e．D4－t－1　f．D4－e　g．D4－t－2

図12　陥し穴状遺構実測図(3)

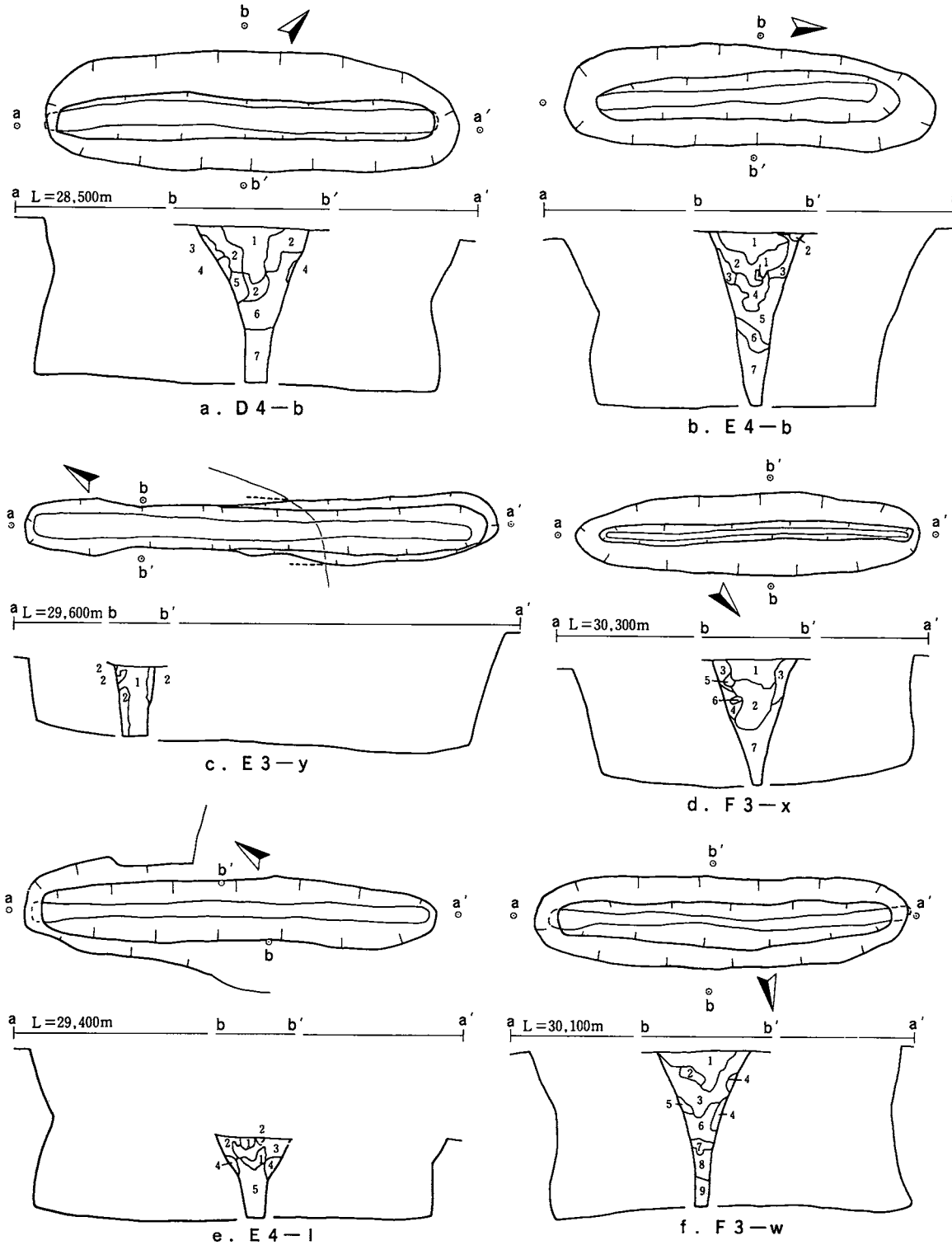


図13　陥し穴状遺構実測図(4)

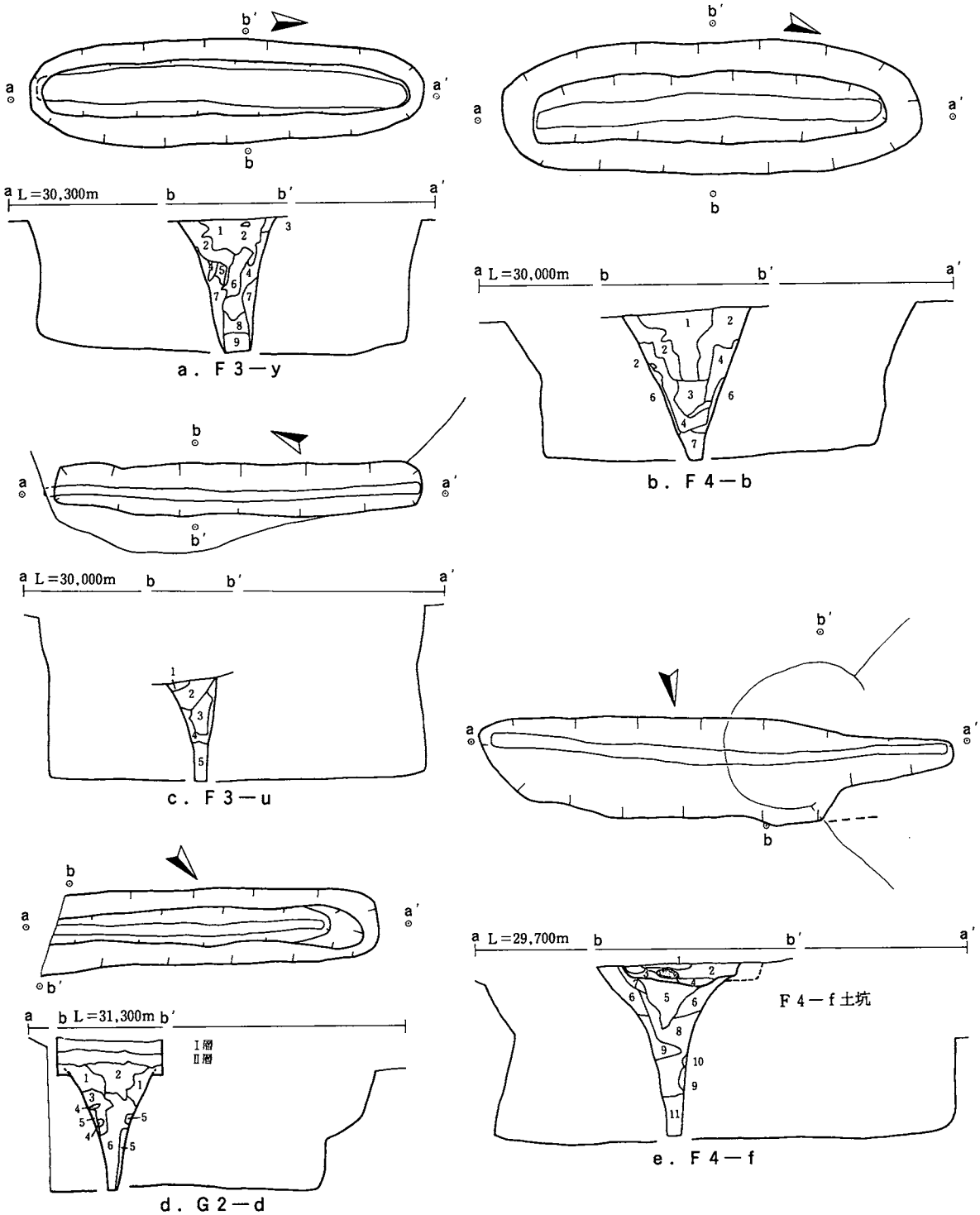


図14　陥し穴状遺構実測図(5)

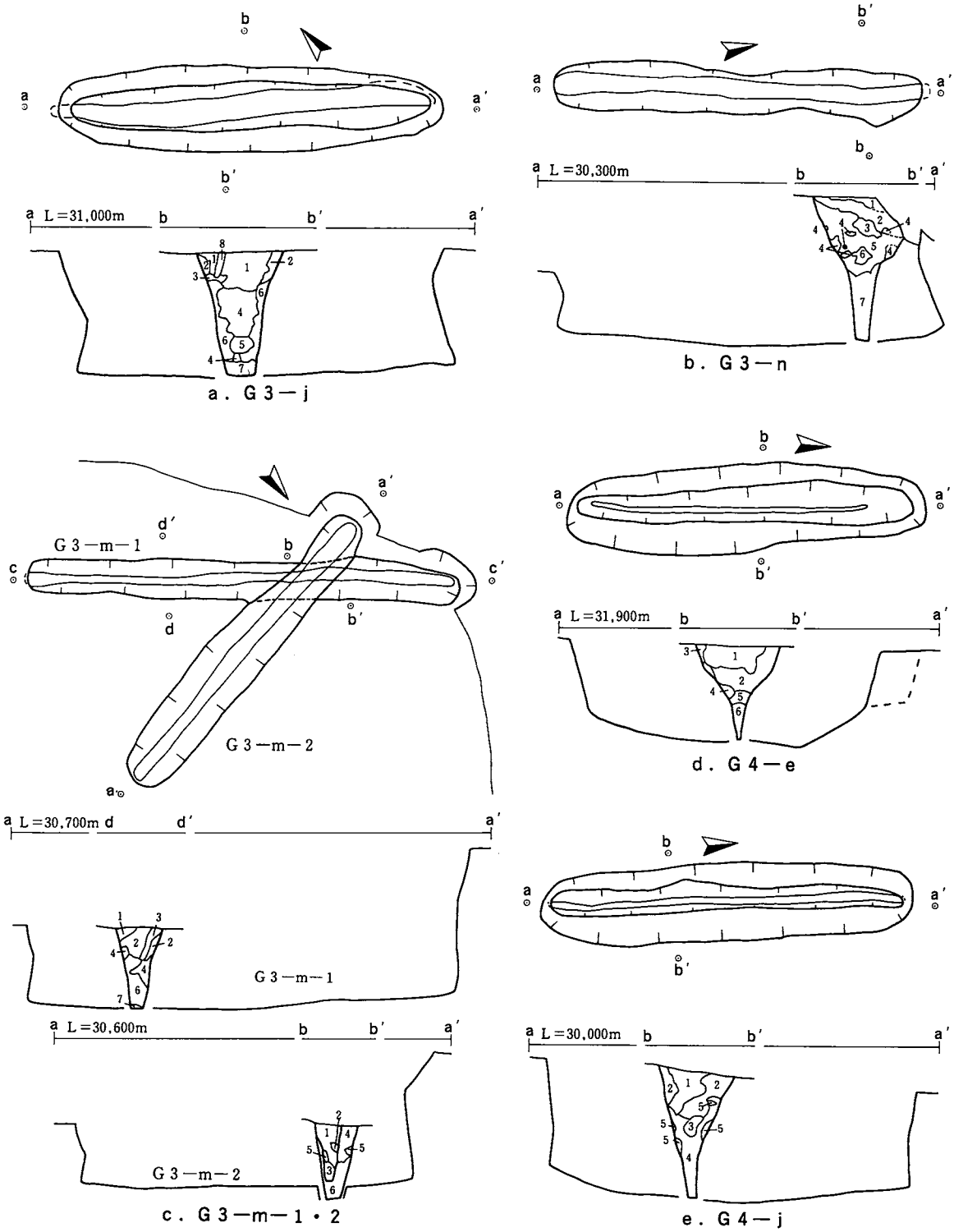


図15　陥し穴状遺構実測図(6)

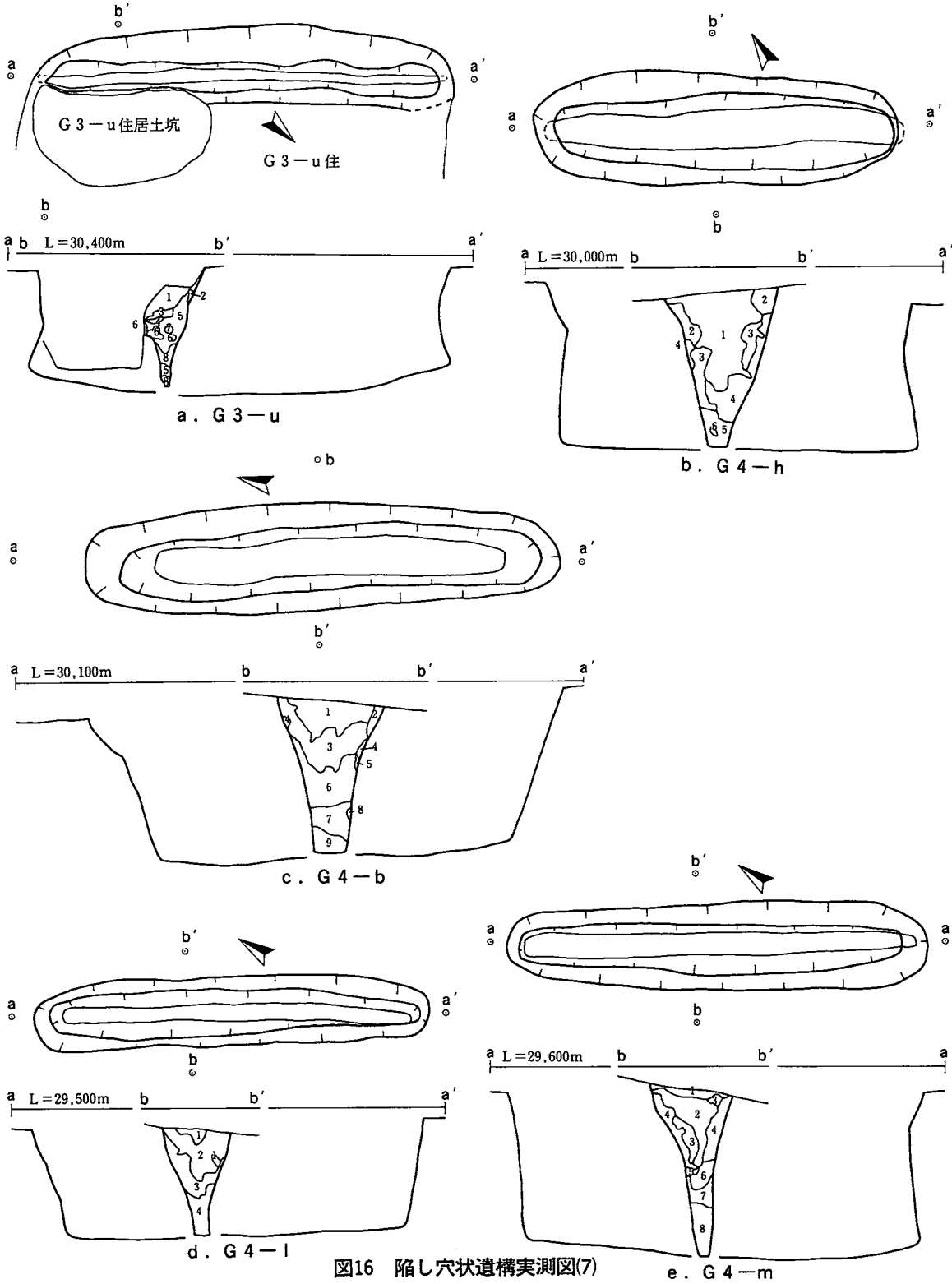


図16　陥し穴状遺構実測図(7)

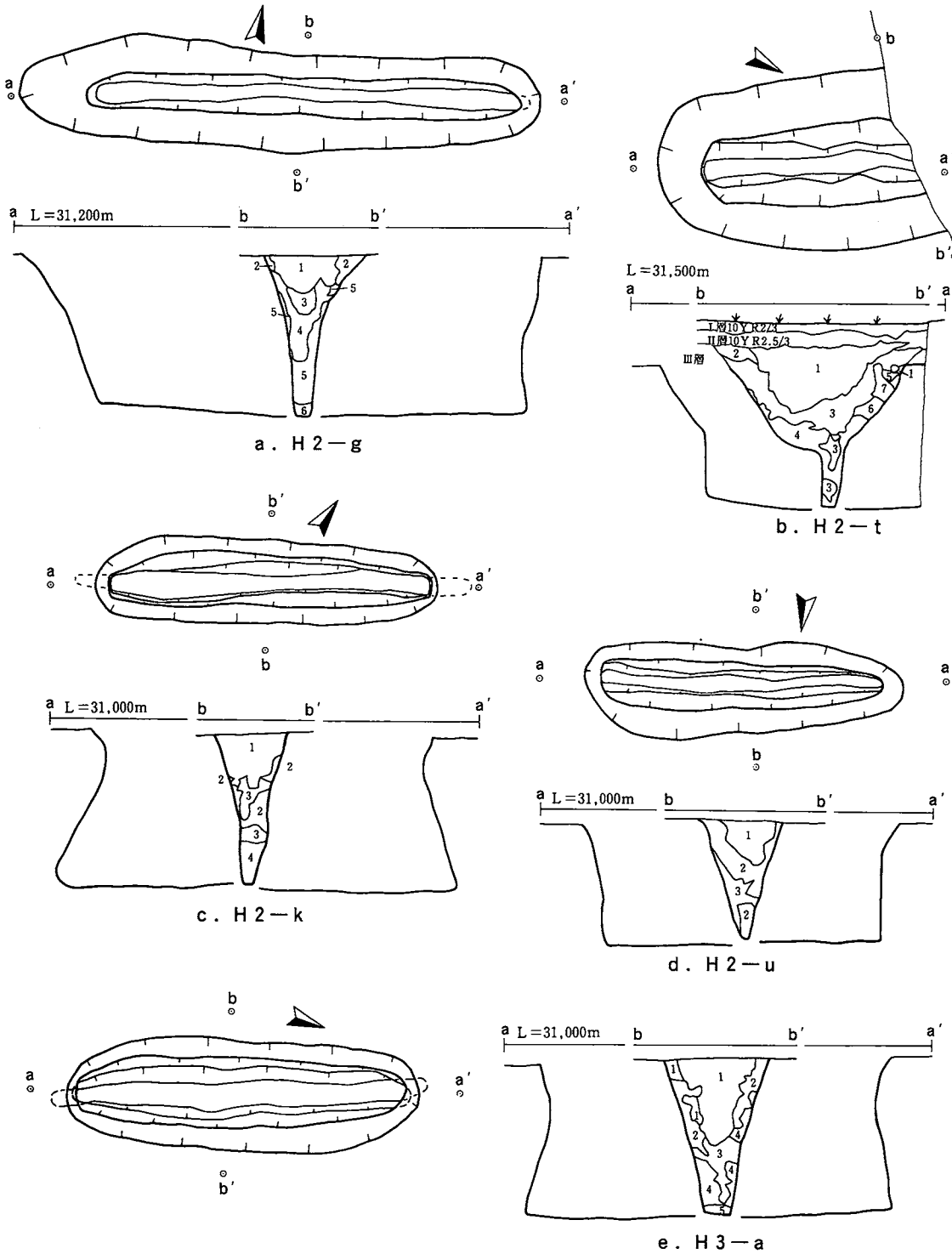
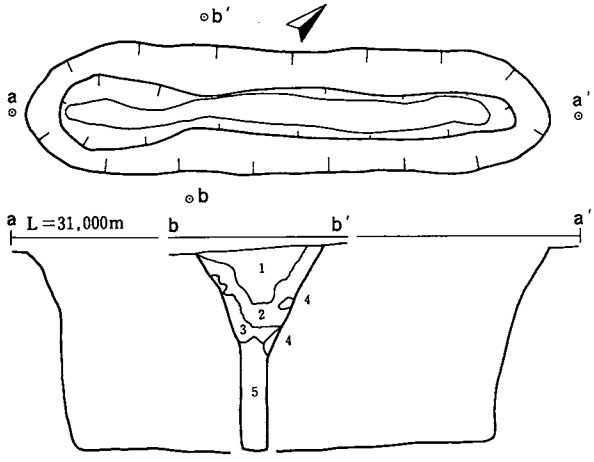
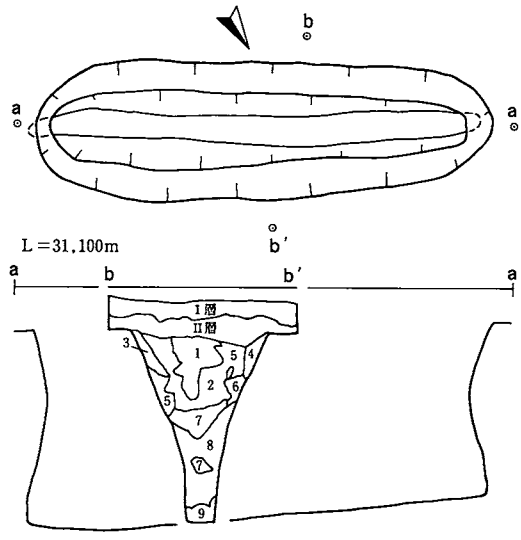


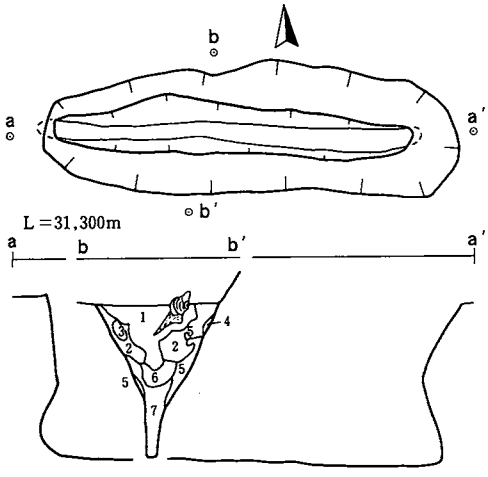
図17　陥し穴状遺構実測図(8)



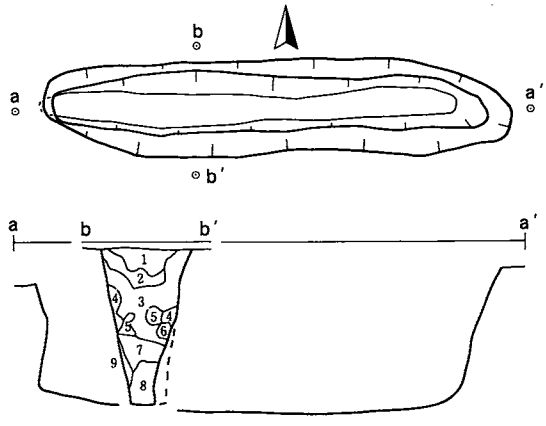
a．H３－b



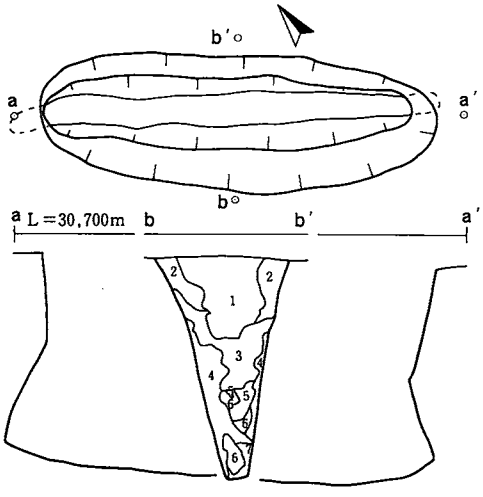
b．H３－r



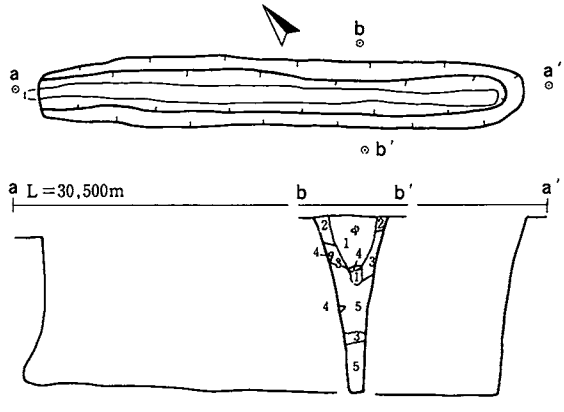
c．H３－m



d．H３－u－1

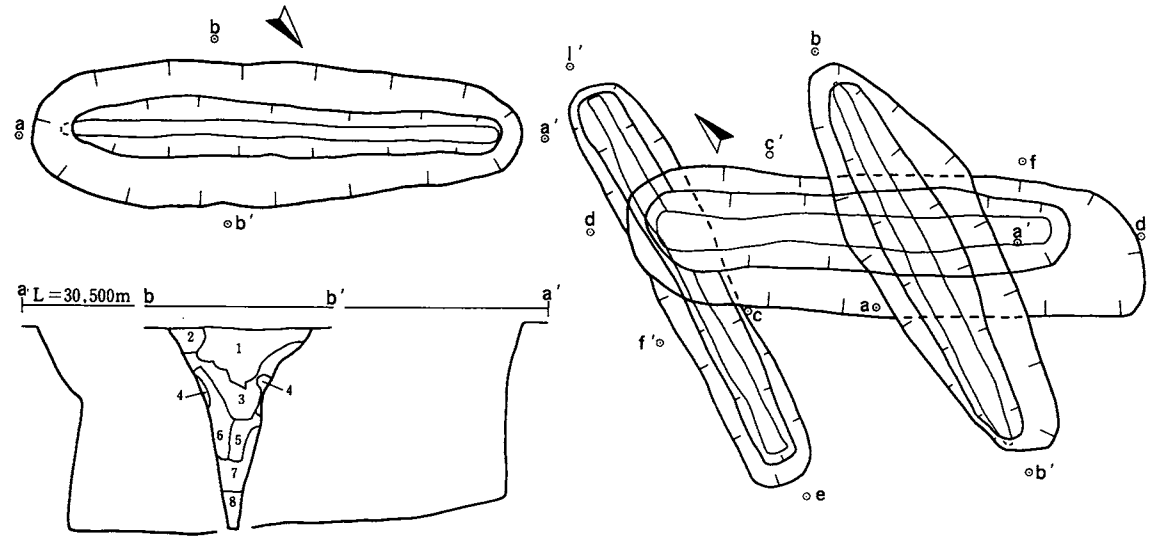


e．H３－p

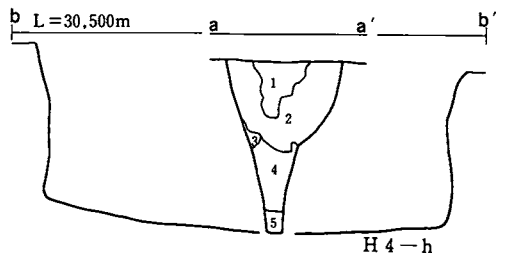


f．H３－u－2

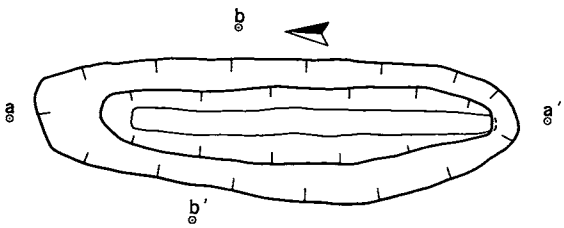
図18　陥し穴状遺構実測図(9)

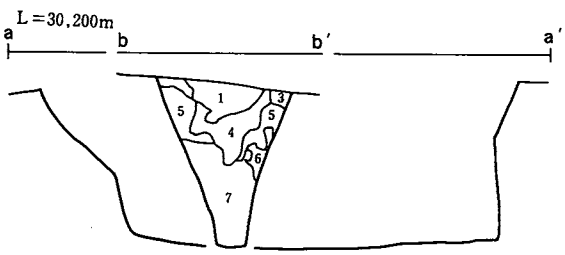


a．H4－b

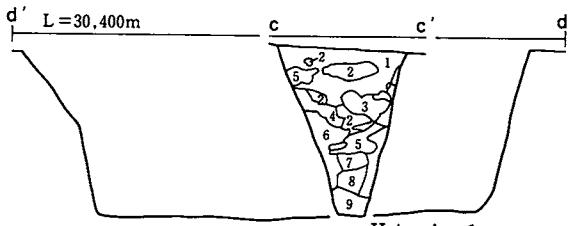


H4－h

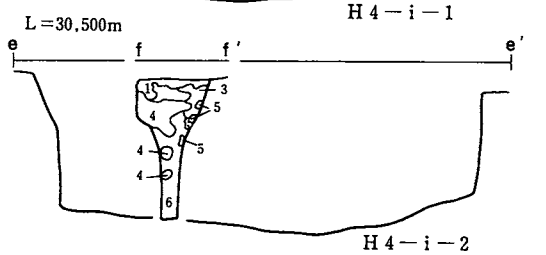




b．H4－l



H4－i－1



H4－i－2

c．H4－h・H4－1＆2

図19　陥し穴状遺構実測図(10)

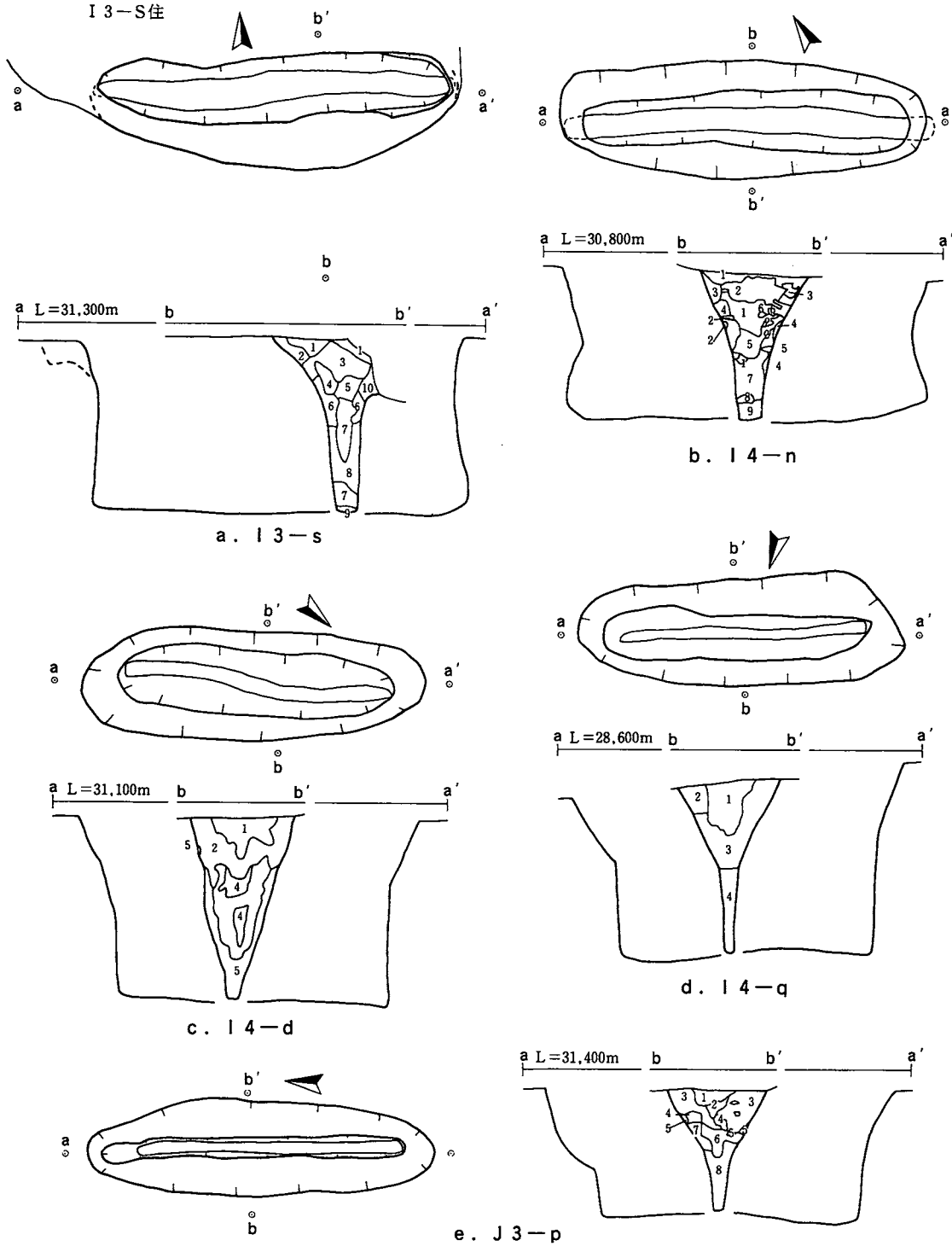


図20　陥し穴状遺構実測図(11)

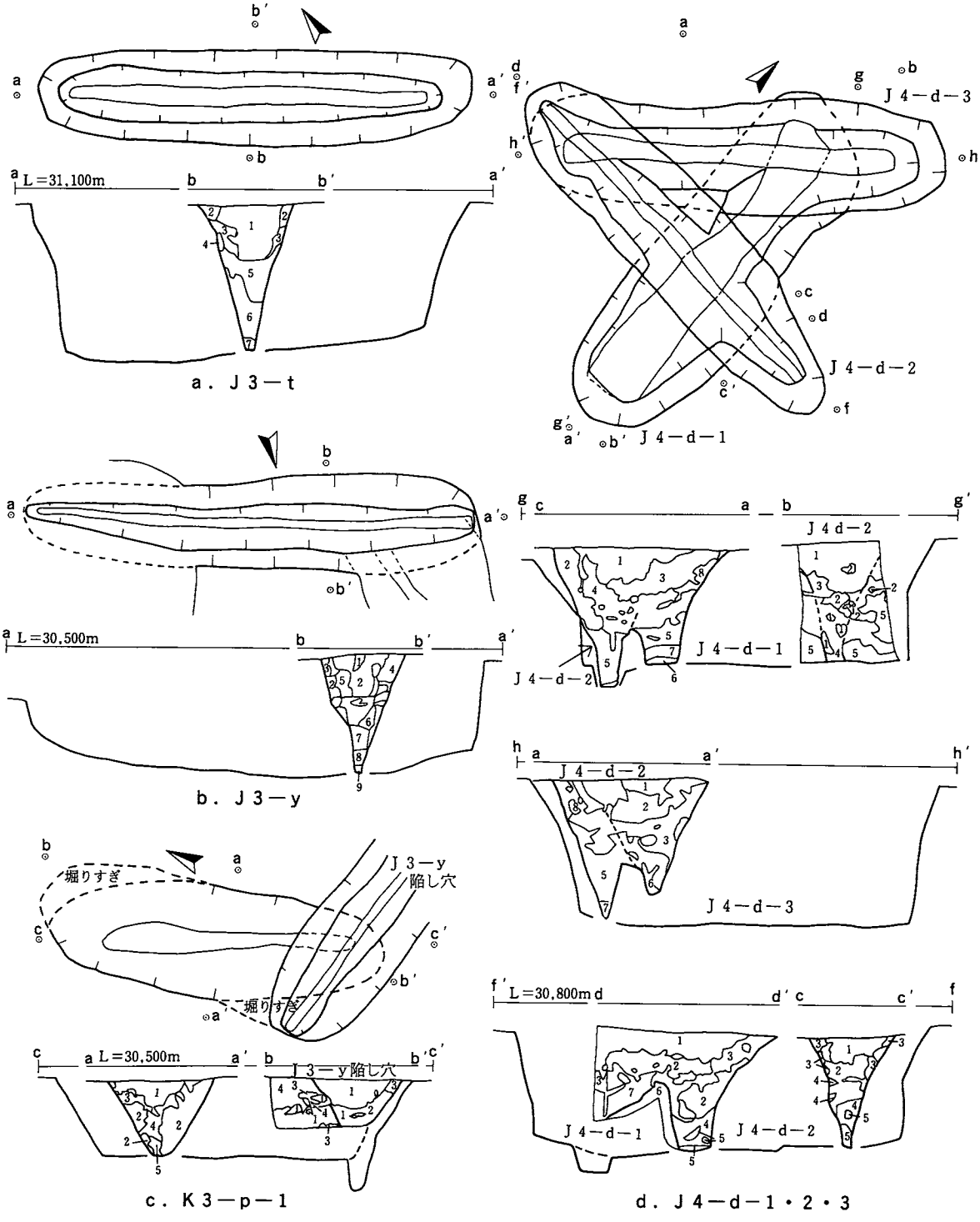
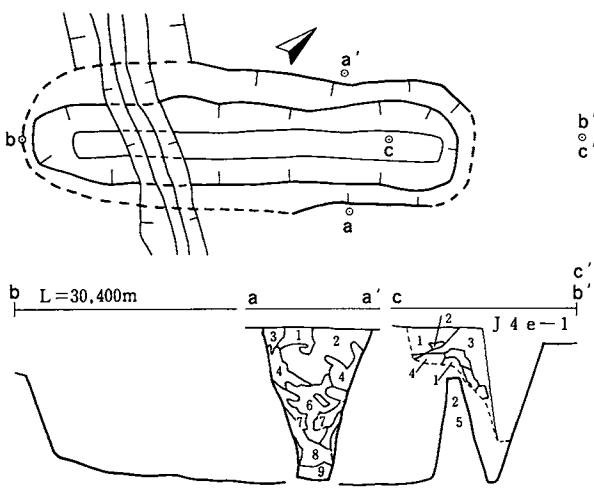
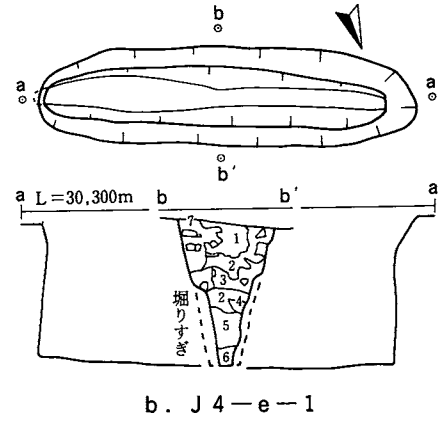


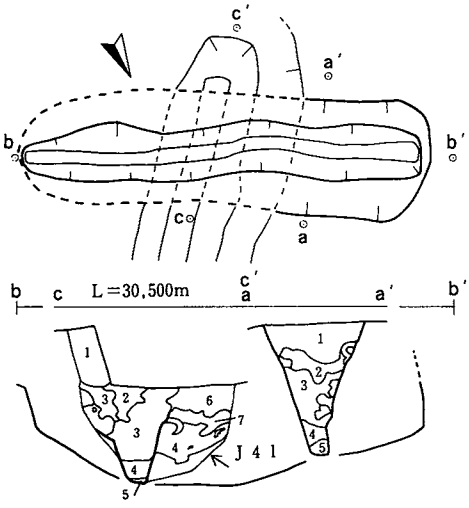
図21　陥し穴状遺構実測図(12)



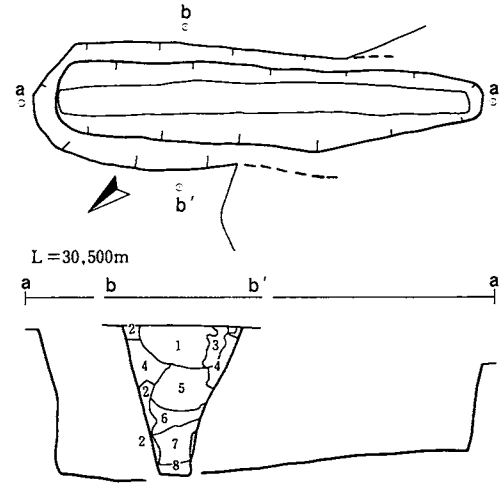
a．J 4－e－2



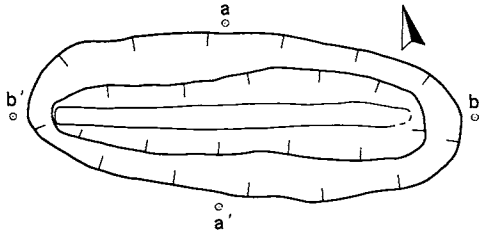
b．J 4－e－1

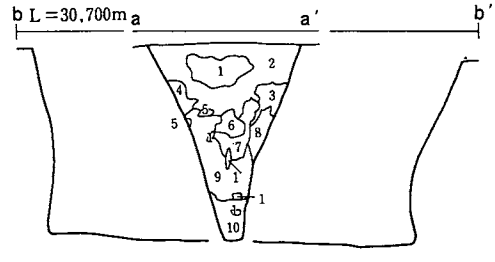


c．K 3－u－2



d．J 4－e－3





e．J 4－g－1

図22　陥し穴状遺構実測図(13)

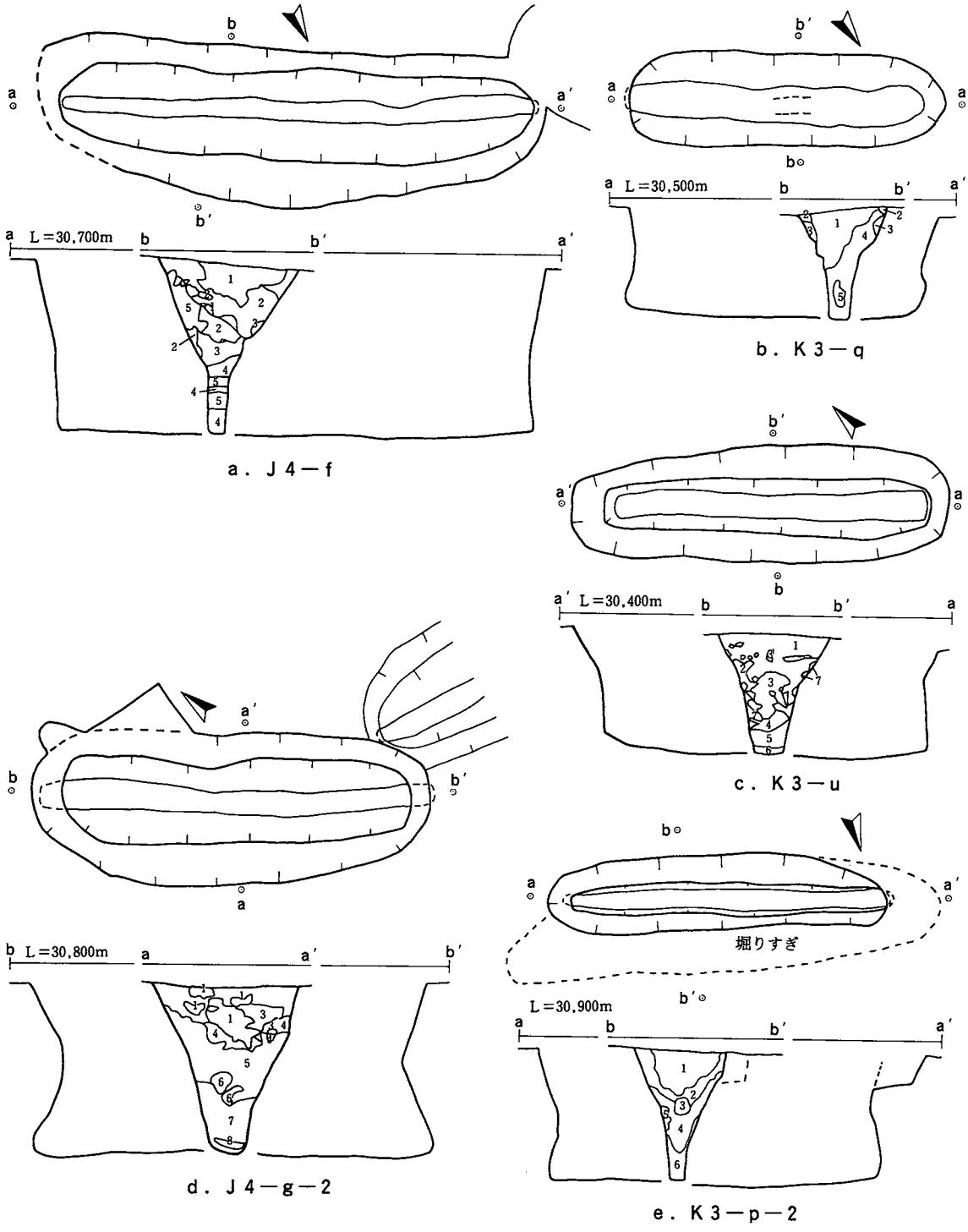


図23　陥し穴状遺構実測図(14)

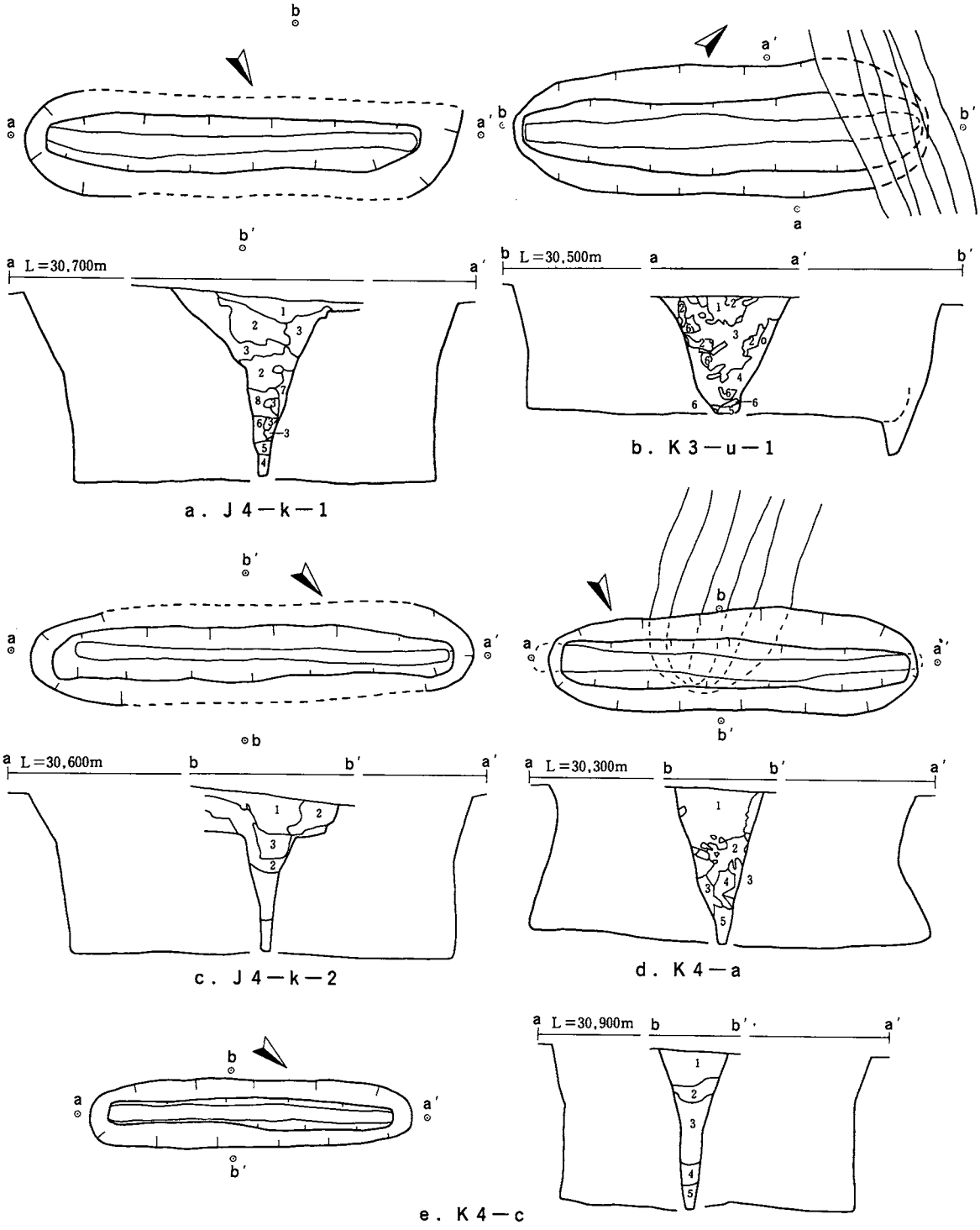


図24　陥し穴状遺構実測図(15)

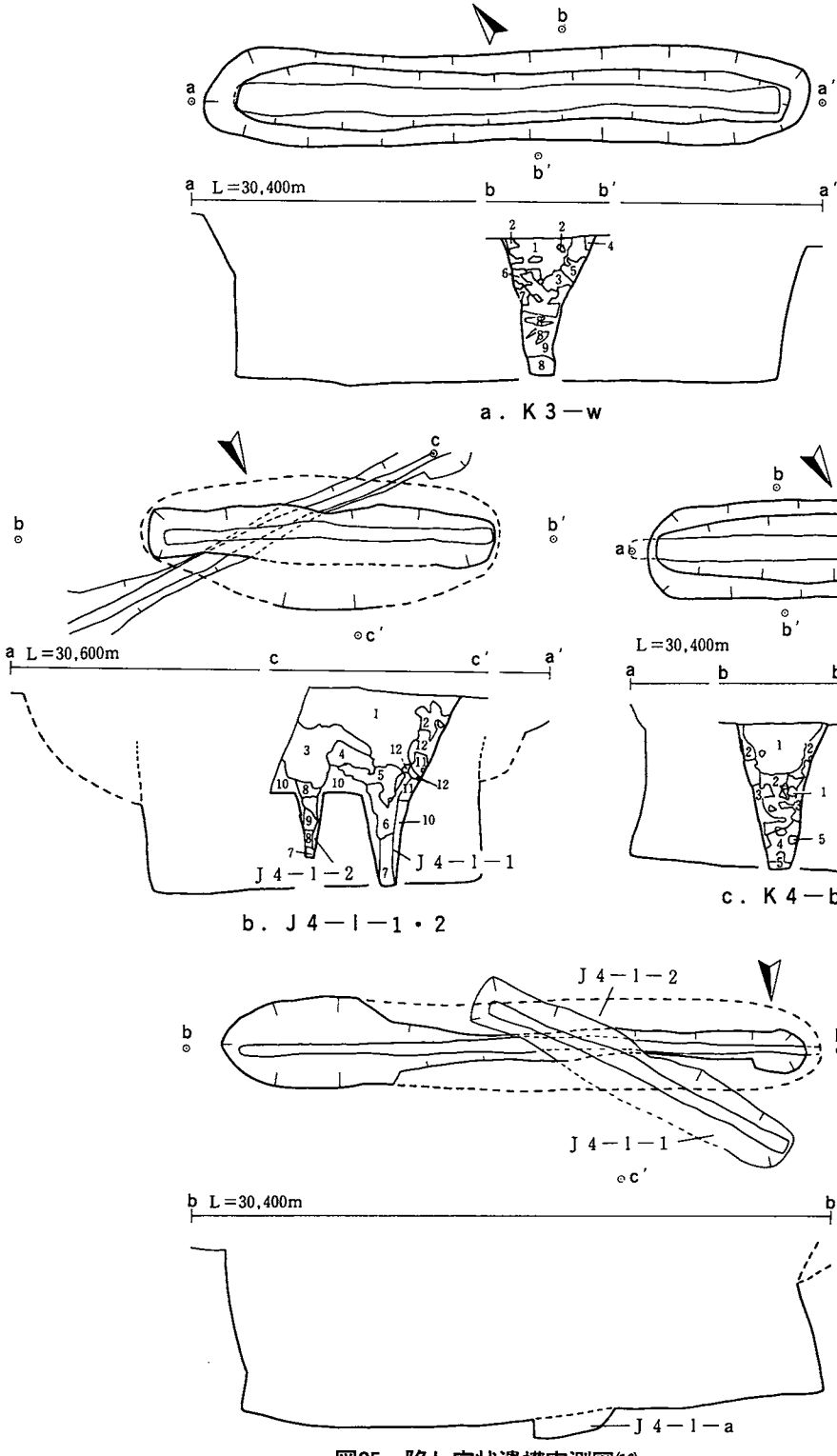
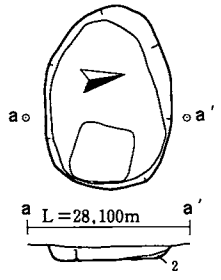
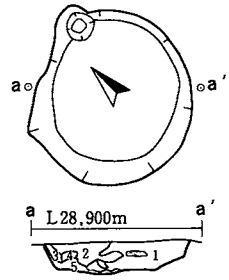


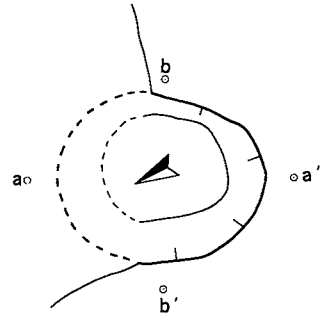
図25　陥し穴状遺構実測図(16)

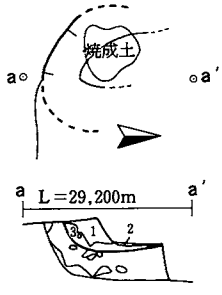


a．C３－w

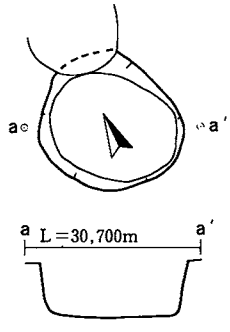


b．D３－x

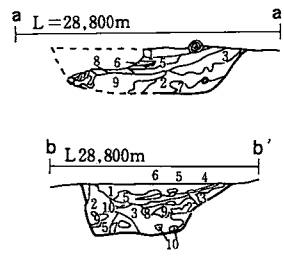




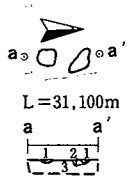
c．E４－a



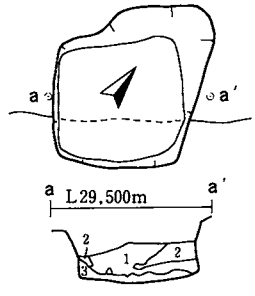
d．I３－t



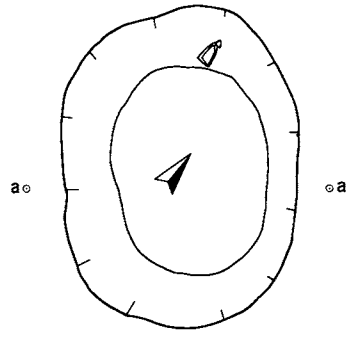
e．D３－w

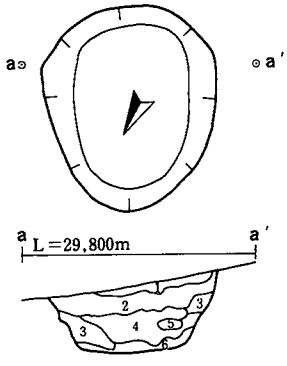


f．H２－g焼土

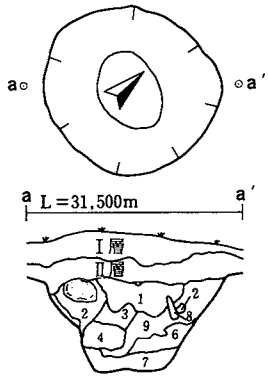


g．F３－u

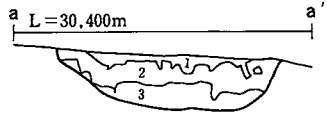




h．G４－g

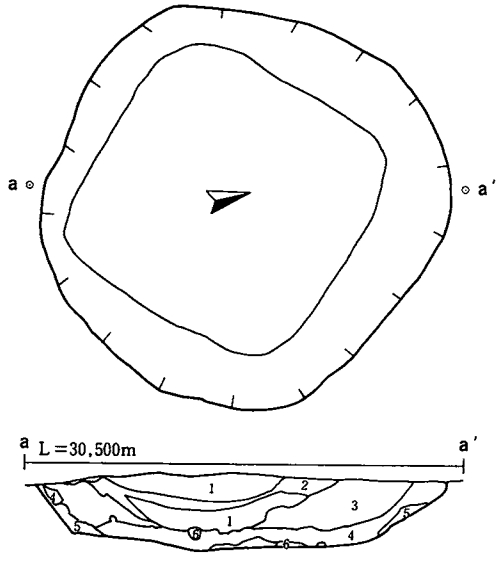


i．H２－g

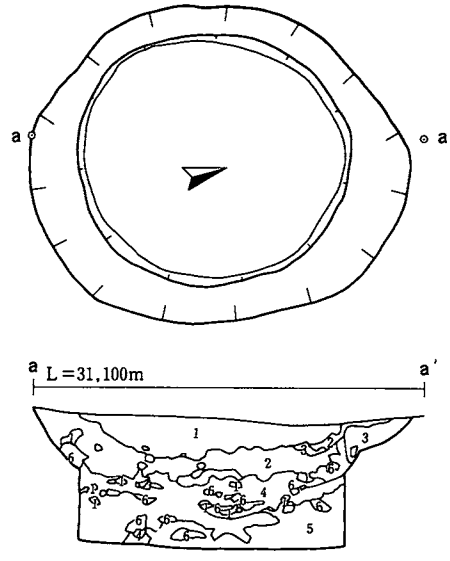


j．J４－b

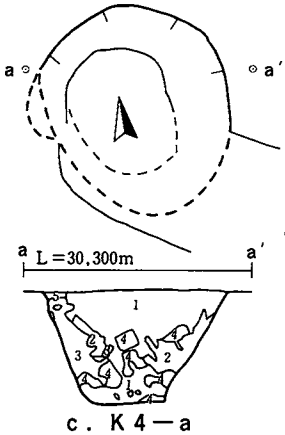
図26　土坑(1)・焼土



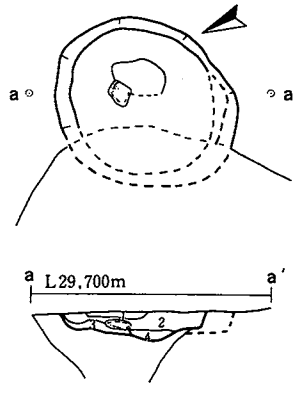
a．K3－s



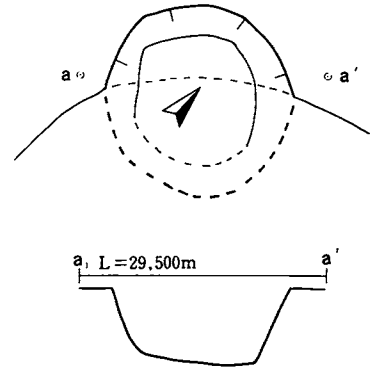
b．L3－u



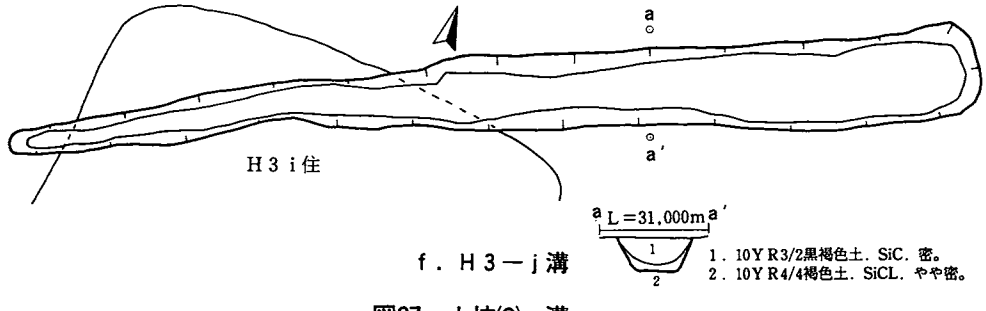
c．K4－a



d．F4－f



e．E3－u



f．H3－j溝

1．10YR3/2黒褐色土．SiC．密。
2．10YR4/4褐色土．SiCL．やや密。

図27　土坑(2)・溝

図 版 注 釈

図10

a．B4－d－1

1．10YR2/1黒色と4/6褐色の混土。
2．10YR4/6褐色土。
3．10YR1.85/1黒色土。
4．10YR1.85/1と4/6の混土．疎．SiL。
5．10YR4/6褐色と2/3黒褐色の混土。
6．10YR4/4褐色．疎。
7．10YR2/1>4/6の混土疎．SiL。

b．B4－d－2

1．10YR3/1黒褐色土．やや疎．粘性中。
2．10YR3/3暗褐色土．やや疎．粘性中。
3．10YR4/1褐灰色土．疎．粘性弱。
4．10YR8/8黄橙色土と10YR6/1褐灰土の混土．密．粘性中。
5．10YR5/3にぶい黄褐色土．疎．粘性中。
6．10YR7/8黄橙色土．密．粘性弱。
7．10YR7/8黄橙色土と10YR6/1褐灰色土の混土．密．粘性弱。
8．10YR7/8黄橙色土と10YR6/1褐灰色土の混土．疎．粘性中。
9．10YR6/2灰黄色土．疎．粘性中。
10．10YR6/3にぶい黄褐色土．極めて疎．粘性弱。
11．10YR8/8黄橙色土．密．粘性中(地山)。

c．B4－e

1．10YR2/1と2/2の混土．SiL．密。
2．10YR1.85/1黒色土．SiL。
3．10YR2/1黒色土。
4．7.5YR4/6褐色土と2/1黒色土の混土。
5．10YR1.85/1>，2/1>，4/6の混土。
6．10YR2/1黒色土と3/3暗褐色土の混土。
7．10YR4/6褐色土と2/2黒褐色土の混土。
8．10YR1.85/1黒色土と4/6褐色土の混土．疎．CL。

1．10YR1.85/1黒色土と3/3暗褐色土の混土。
2．10YR4/6褐色土と1.85/1黒色土の混土。
3．10YR1.85/1と4/6の混土．SiL．疎。
4．7.5YR4/6褐色土．CL。
5．10YR4/6褐色土。

d．B4－L－1＆2

1．7.5YR2/1黒色土。
2．10YR2/1>4/4。
3．10YR3/4暗褐色土と2/1黒色土の混土。
4．10YR2/1黒色土。
5．7.5YR4/6と2/1の混土．疎。
6．7.5YR2/1と3/4の混土．疎。

1．10YR1.85/1黒色と2/3黒褐色の混土。
2．10YR5/6黄褐色と3/3暗褐色の混土。
3．10YR4/6褐色と2/1黒色の混土。
4．10YR4/6褐色土。
5．10YR5/6>3/3．CL。
6．10YR5/6黄褐色土．CL。

1．7.5YR2/1黒色土。
2．7.5YR2/1と4/4の混土。
3．7.5YR4/4褐色土。
4．10YR4/6褐色土。
5．10YR2/1と4/6の混土。
6．10YR4/6．疎。
7．10YR4/4と2/2の混土．疎。

図11

a．C3－v

1．10YR2/1黒色．SC.しまり有．粘性やや有．黄褐色土粒まばら。
2．10YR3/4暗褐色土．SC.しまり有．粘性やや有．ブロック状褐色土含。
3．10YR3/3暗褐色.SCL.しまりなし．粘性やや有．基本2層3層崩壊土
4．10YR4/3にぶい黄褐色．SCL．しまりなし．粘性やや有．褐色土黒色土．黄褐色土の混土。
5．10YR2/3黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．ブロック状褐色土．黒色土含．黄褐色土粒まばら。
6．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．ブロッ状黄褐色土．暗褐色土含。
7．10YR4/6褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．暗褐色土粒．ブロック状黄褐色土含。
8．10YR4/6褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
9．10YR4/6褐色．SiCL.しまりなし.粘性有.黒色土粒全体に含。
10．10YR5/4にぶい黄褐色SC．しまりなし.粘性有.段丘礫層の砂層.粘土質土まじり。

b．C３－x

1．10YR2/1黒色．SCL．しまりやや有．粘性有．混入物なし。
2．10YR2/3黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性やや有．褐色土含。
3．10YR3/4暗褐色．SicL．しまりやや有．粘性有．黄褐色土ブロックを含み．下部ほどしまりなし。
4．10YR5/6黄褐色．Sic L.しまりやや有．粘性有．地山崩壊土．
5．10YR4/6褐色．SiL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
6．10YR4/6褐色．SicL．しまりなし．粘性有．褐色土粒の層パラパラする。

c．C３－w－1

1．10YR1.85/1黒色土．やや密．SiL。
2．10YR3/3暗褐色と2/1黒色土の混土。
3．10YR3/3>2/1．SiCL．
4．10YR2/1>3/3．SiCL．
5．10YR2/1．黒色土。
6．10YR4/6>2/3混土。
7．10YR4/6褐色土．CL．疎
8．10YR4/4．褐色土．CL．疎
9．10YR4/6褐色土．CL．密

c．C３－w－2

1．10YR2/1黒色．SiC．しまりやや有．粘性やや有．木根を含む。部分的に小ブロック状の暗褐色土を含む。
2．10YR2/2黒褐色．SiCL．しまり有．粘性有．基本土層２層に似ている黄褐色土粒含む。
3．10YR3/4暗褐色．SCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土(10YR5/6)をブロック状に含む。
4．10YR2/2黒褐色．SiCL．しまりなし．粘性やや有．木根痕。
5．10YR3/3暗褐色．SCL．しまりなし．粘性有．暗褐色土粒を全体的に含む。
6．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黒褐色土粒と黄褐色土粒をモザイク状に含む。
7．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黒褐色土粒．小ブロック状暗褐色土．小ブロック状黄褐色土をモザイク状に含む。
8．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．地山崩壊土．部分的に暗褐色土含む。
9．10YR4/4褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．黒色土粒をごましお状に含む。

d．D３－u

1．10YR2/2黒褐色．SL．しまり有．粘性やや有．黄褐色土粒．極まばら。
2．10YR3/2黒褐色．SCL．しまり有．粘性有．含暗褐色土粒。
3．10YR3/3暗褐色．SL．しまりやや有．粘性やや有．ブロック状褐色土．黒色土含。
4．10YR3/4暗褐色．SL．しまりやや有．粒性有．地山まじり(φ２～20㎜大)
5．10YR4/6褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩落土。
6．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有含褐色土。
7．10YR2/3黒褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．暗褐色土粒．黒色土粒。を全体に含む。
8．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．粘性に富む。崩落土(?)

e．D３－w

1．10YR2/1黒色。
2．10YR2/2黒褐色。
3．10YR2/2黒褐色と10YR4/6褐色の混土。
4．10YR2/1>2/2．4/6の混土。
5．10YR4/6褐色。
6．10YR4/4褐色．
土性はCL～SiL．疎密は上部やや密で下部疎

図12

a．D3－x

1．10YR2/3黒褐色．SC．しまりやや有．粘性有．黄褐色土粒まばら。
2．10YR2/2黒褐色．SC．しまりやや有．粘性やや有．ブロック状。
3．10YR3/4暗褐色SiC．しまり有．粘性有．黄褐色土粒まばら。
4．10YR4/4褐色．SL．しまりなし．粘性有．サラサラしているが、粘性有。
5．10YR4/6褐色．SiCL．しまり有．粘性有．黒褐色土のブロック含む。
6．10YR5/4にぶい黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．サラサラし、退色した感じ。
7．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
8．10YR3/4暗褐色．SCL．しまりなし．粘性有．黒褐色土．黄褐色土粒まだら。

b．D4－t－3

1．10YR6/1褐灰色．粘性やや有．密。
2．10YR6/2灰黄褐色．粘性有．やや疎。
3．10YR5/1褐灰色．粘性やや有．疎。
4．2.5YR7/6明黄褐色．粘性やや有．やや疎。
5．10YR6/2灰黄褐色．粘性有．疎。
6．10YR5/3にぶい黄褐色．粘性有．密。
7．10YR5/3にぶい黄褐色．粘性やや有．疎。
8．10YR5/3にぶい黄褐色．粘性やや有．密。
9．10YR5/3にぶい黄褐色．粘性やや有．極めて疎。
10．10YR4/1褐灰色．粘性やや有．やや疎。
11．10YR8/1灰白色．粘性やや有．密。

c．D3－y

1．10YR4/1褐灰色土．粘性乏しく．密。
2．10YR4/2灰黄褐色土．粘性乏しく．密。
3．10YR4/1褐灰色土．粘性ややあり．密。
4．10YR4/3．にぶい黄褐色土．粘性乏しく．密。
5．10YR5/4にぶい黄褐色土．粘性ややあり．やや密。
6．10YR5/4にぶい黄色土．粘性ややあり．密。
7．10YR5/4にぶい黄褐色土．粘性乏しく．極めて疎。

e．D4－t－1

1．2.5YR8/4淡黄色．粘性有．密。
2．10YR5/1褐灰色．粘性有．密。
3．10YR5/3にぶい黄褐色．粘性有．やや密。
4．10YR5/1褐灰色．粘性有．やや疎。
5．10YR7/6明黄褐色．粘性極めて有．疎。
6．10YR6/3にぶい黄橙色．粘性やや有．疎。
7．10YR3/1黒褐色．粘性やや有．疎。
8．10YR8/1灰白色．粘性やや有．密。

g．D4－t－2

1．10YR4/1褐灰色．粘性乏しく．密。
2．10YR7/8黄橙色．粘性乏しくやや疎。
3．10YR5/1褐灰色．粘性乏しく．疎。
4．10YR5/2灰黄褐色．粘性ややあり．密。
5．10YR5/2灰黄褐色．粘性ややあり．やや疎。
6．2.5YR8/6黄色．粘性ややあり．密。
7．10YR5/2灰黄褐色．粘性乏しく．密。
8．10YR7/8黄橙色．粘性ややあり．やや疎。
9．2.5YR7/6明黄褐色．粘性に富．疎。
10．2.5YR5/4黄褐色．粘性に富．極めて疎。
11．2.5YR3/1黒褐色．粘性に富．極めて疎。

f．D4－e

1．10YR3/3暗褐色．SCL．しまり有．粘性有．部分的に黒褐色土の小ブロック．黄褐色土の小ブロック．
　全体にφ1～2㎜大のパミスを含む．モザイク状。
2．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩落土．暗褐色土のブロックを含む。
3．10YR4/6褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黒褐色土の小ブロック含む。
4．10YR4/4褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黄褐色土含む。φ10㎜大パミス含む。
5．10YR3/3暗褐色．SiCL．しまり有．粘性有．黄褐色土粒まばら。
6．10YR4/6褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．地山崩壊土？．混入物なし。
7．10YR2/2黒褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．地山まじり．ごましお状。

図13

a．D4－b

1．10YR2/1黒色．SCL．しまりなし．粘性やや有．褐色土まばら。
2．10YR2/2黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性有．ブロック状褐色土含む。
3．10YR3/4暗褐色．SC．しまりやや有．粘性有．粒性有。
4．10YR4/3褐色．SC．しまり有．粘性やや有．地山崩壊土。
5．10YR3/2暗褐色．SCL．しまりやや有．粘性有．褐色土粒まばら。
6．10YR3/2黒褐色．SCL．しまりなし．粘性有．サラサラだが粘性有．褐色土粒含む。
7．10YR3/4暗褐色．SCL．しまりなし．粘性有．褐色土粒と黒褐色土粒（φ 3～5㎜大）のまじり。

b．E4－b

1．10YR2/1黒色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．褐色土粒10YR4/4をまばらに含む。
2．10YR3/3暗褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．黒褐色土と褐色土のブロックをモザイク状に含む。
3．10YR4/6褐色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．暗褐色土粒を全体に含む。
4．10YR3/4暗褐色．SiC．しまりやや有．粘性やや有．褐色土がモザイク状に混じる。
5．10YR4/6褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．わずかに黒褐色土の小ブロックを含む。φ 2～5㎜大のパミスを含む。
6．10YR4/4褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．しもふり状。黒褐色土粒をわずかに含む。
7．10YR4/6褐色．SiL．しまりなし．粘性有．小ブロック状の黒褐色土を層下部に含む。退色した感じ。

c．E3－y

1．10YR3/2黒褐色土．SCL．粘性やや富み．やや密。
　φ 2～3㎜大の軽石粒あり。
2．10YR4/6褐色土．SiCL.粘性やや富み．やや密。

d．F3－x

1．10YR2/2黒褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．粒状の褐色土．10YR4/4．小ブロック状暗褐色土．10YR3/4を含む。
2．10YR3/3暗褐色．Si C．しまり有．粘性有．粒状の褐色土．ブロック状黒褐色土をモザイク状に含む。
3．10YR2/3黒褐色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．ブロック状に黒褐色土を含む。軽石（φ2～5㎜）を含む。
4．10YR4/4褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．暗褐色土のブロックを含む。
5．10YR4/6褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．軽石（φ2～5㎜）をまばらに含む。
6．10YR5/6黄褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．混入物なし。
7．10YR4/4褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．褐色土と暗褐色土がしもふり状に混じる。

e．E4－l

1．10YR3/4暗褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黄褐色土粒．黒褐色土ブロック含む。
2．10YR4/6褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
3．10YR4/4褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．暗褐色土粒ごましお。
4．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
5．10YR4/6褐色．SiCL.しまりなし．粘性有．褐色土のブロック含む。暗褐色土粒ごましお。

f．F3－w

1．10YR2/1黒色．SiC．しまり有．粘性やや有．暗褐色土10YR3/4のブロックを含む。
2．10YR2/2黒褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．全体に褐色土粒を含む。
3．10YR3/3暗褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．粒状の褐色土．小ブロック状の黒褐色土をモザイク状に含む。
　φ 2～5㎜大のパミスをまばらに含む。
4．10YR5/6黄褐色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．地山崩壊土。
5．10YR4/6褐色．SiCL．しまり有．粘性有．褐色土のブロックを含む。
6．10YR4/4褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．褐色土の小ブロックを含む。しもふり状。
7．10YR3/3暗褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．黒褐色土と褐色土がしもふり状に混じる。
8．10YR4/6褐色.SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．地山崩壊土。混入物なし。
9．10YR1.7/1黒色．SiCL．しまりなし．粘性有．水気が多い。褐色土粒(地山崩壊土)を全体的に含む。

図14

a．F３－y

1．10YR2/1黒色．SiCL．しまり有．粘性やや有．褐色土(10YR4/6)を粒状に含む。２層のブロックを含む。
2．10YR3/4暗褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．黒褐色土(10YR3/2)褐色土をモザイク状に含む。
3．10YR2/3黒褐色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．混在物なし。
4．10YR4/6SiCL．しまりやや有．粘性有．暗褐色土(10YR4/4)をしもふり状に含む。
5．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．軽石をまばらに含む。(φ２～５㎜大。)
6．10YR3/3暗褐色SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．２層よりも黒褐色土の割合が高いモザイク状。
7．10YR5/6黄褐色SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
8．10YR3/4暗褐色．SiCL．しまり有．粘性有．かなりしまっているし粘性もある。
9．10YR2/2黒褐色．SiC．しまりなし．粘性やや有．小ブロック状に褐色土を含む。

b．F４－b

1．10YR2/1黒色．SiC．しまり有．粘性なし．暗褐色土(10YR3/3)小ブロック．木根を含む。
2．10YR2/3黒褐色．SiC．しまり有．粘性なし．黒褐色土(10YR3/2)と褐色土(10YR4/4)がモザイク状に混じる。
　φ２㎜大のパミスを全体的に含む。
3．10YR3/4暗褐色．SiC．しまりやや有．粘性有．褐色土と黒褐色土がマーブル状に混じる。
4．10YR4/6褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．ブロック状の黒褐色土を含む。層上部にパミスを含む。しもふり状。
5．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黒褐土がわずかに混じる。
6．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．地山崩壊土．混じりなし。
7．10YR3/3暗褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．全体に褐色土がしもふり状に混じる。

c．F３－u

1．10YR4/6褐色土．SCL．粘性中で．やや密。
2．10YR3/2黒褐色土．SiCL．粘性中で．やや密
3．10YR4/4褐色土．SiCL．粘性中で．極めて疎。
　黒色土粒子を全体に含む。
4．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性中で．極めて疎。
5．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性中で．疎。
　黒色土粒子に富む。

d．G２－d

1．10YR2/3黒褐色土．SiCL．粘性は中で．やや密。
2．10YR2/2黒褐色土．SiCL．粘性は中で．やや密。
3．10YR2/3黒褐色土．SiCL．粘性中で．密。褐色土粒子を含む。
4．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で．疎。
5．10YR5/8黄褐色土．SiCL．粘性は強で．やや密。
6．10YR3/2黒褐色土．SiCL．粘性は中で．やや密。
　黄褐色土粒子をまばらに含む。

e．F４－f

1．10YR2/3黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性やや有．木根含む。
2．10YR2/1黒色．SiCL．しまりやや有．粘性やや有．炭化物を少量含む。わずかに灰が混じる。
3．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性やや有．褐色土粒をまばらに含む。
4．7.5YR3/4暗褐色．SCL．しまりなし．粘性有．橙色焼土粒を全体的に含む。
5．10YR2/1黒色．SiCL．しまりやや有．粘性有．陥し穴埋土１層ブロック状．暗褐色土含む。
6．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．地山の黄褐色土．黒色土の小ブロック含む。
7．10YR2/3黒褐色．しまり有．粘性やや有．パミス（φ２～３㎝大）含む。
8．10YR5/6黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性有．黒色土．黄褐色土の混土．モザイク状。
9．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．地山崩落土。
10．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性なし．地山崩落土。
11．10YR4/6褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．層下部に黒色土粒をごましお状に含む。

図15

a．G3－j

1．10YR2/2黒褐色．SL．しまり有．粘性やや有．部分的に褐色土を含む。
2．10YR3/4暗褐色．L．しまり有．粘性なし．小ブロック状の褐色土を含む。
3．10YR3/3暗褐色．L．しまり有．粘性やや有．褐色土をわずかに含む。
4．10YR3/3暗褐色．L．しまり有．粘性やや有．モザイク状に褐色土・黒褐色土を含む。
5．10YR2/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．まだらに褐色土を含む。
6．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．小ブロック状の黒褐色土をわずかに含む。
7．10YR2/2黒褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．6層が部分的に混じる。
8．10YR2/3黒褐色．SL．しまりなし．粘性なし．木根痕。

b．G3－n

1．10YR2/2黒褐色．SiC．しまり有．粘性ほとんどなし．木草根多。
2．10YR3/3暗褐色．SiL．しまり有．粘性有．極小パミスを全体的に含む。
3．10YR3/2黒褐色．SiL．しまりやや有．粘性有．極小パミスを全体的に含む。
4．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
5．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまり有．粘性有．黄褐色土粒．そのブロックを全体的にモザイク状に含む。
6．10YR2/1黒色．SiC．しまり有．粘性やや有．黄褐色土粒を含む。
7．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまりほとんどなし．粘性有．暗褐色土を全体に含む。
8．10YR4/6褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．黒色土粒をごましお状に含む（半々）。
↓
10YR2/1

c．G3－m－1

1．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は中で極めて疎。黒色土ブロックを含む。
2．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
3．10YR2/2黒褐色土．SiCL．粘性は中で疎。
4．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は中で極めて疎。
5．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
6．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で疎。
7．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で疎。黒色粒子をごましお状に含む。

c．G3－m－2

1．10YR2/3黒褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。黒色土の小ブロック含む。
2．10YR3/2黒褐色土．SCL．粘性は中で疎。
3．10YR4/4褐色土．SiCL．粘性は強でやや密。
4．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
5．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で密。
6．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は強で疎。層状に黒色土をはさむ。

d．G4－e

1．10YR2/2黒褐色．SCL．しまり有．粘性やや有．暗褐色土を含む。
2．10YR3/2黒褐色．SCL．しまり有．粘性やや有．黄褐色土粒をまばらに含む。
3．10YR3/1黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性やや有．暗褐色土を含む。
4．10YR4/4褐色．SiCL．しまり有．粘性有．黒褐色土のブロックを含む。
5．10YR3/3暗褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黄褐色土・黒褐色土をモザイク状に含む。
6．10YR2/3黒褐色．SCL．しまりなし．粘性有．黄褐色土粒を全体に含む。

e．G4－j

1．10YR2/1黒色土．SCL．粘性は中でやや密。黄褐色土粒子を含む。
2．10YR3/1黒褐色土．SCL．粘性は強でやや密。
3．10YR3/2黒褐色土．SCL．粘性は中で疎。
4．10YR4/4褐色土．SiCL．粘性は中で疎。黄褐色土を全体に含む。
5．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で密。

図16

a．G3－u

1．10YR2/3黒褐色．SC．しまりやや有．粘性やや有．黄褐色土粒．ブロック状黒色土含。
2．10YR5/6黄褐色．SiC．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
3．10YR3/4暗褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．黄褐色土粒を含む。
4．10YR5/8黄褐色．SiCL．しまりやや有．粘性有．地山崩落土。
5．10YR4/3にぶい黄褐色．SiC．しまりやや有．粘性有．黄褐色土粒まばら。
6．10YR6/4明黄褐色．HC．しまり有．粘性有．ブロック．セット壁．基本土層5層。
7．10YR4/4褐色．SC．しまりなし．粘性有．黄褐色土粒を含む。ブロック。
8．10YR5/6黄褐色．SiCL．しまりなし．粘性有．暗褐色土粒含。ごましお状。

b．G4－h

1．7.5YR2/1黒色土．SiCL．粘性は中で密。暗褐色土のブロックを含む。
2．10YR2/3黒褐色土．SiCL．粘性は中で密。
3．10YR4/6褐色土．SiC．粘性は中で密。黒褐色土のブロックを含む。
4．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で密。極めて固い暗褐色土のブロックを含む。
5．10YR5/6黄褐～褐色土．CL．粘性は強で密。
6．10YR2/1黒色土．SC．粘性は乏しく疎。

c．G4－b

1．10YR1.7/1黒色土．SiCL．粘性は中で密。
2．10YR2/1黒色土．SiCL．粘性は中で密。褐色土粒子を含む。
3．10YR2/3黒褐色土．SiCL．粘性は中で密。褐色土をモザイク状に含む。
4．10YR3/4暗褐色土．SCL．粘性乏しくやや密。
5．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で密。
6．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中で密。
7．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で密。
8．7.5YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で密。
9．10YR2/1黒色土．SiCL．粘性は中で疎。

d．G4－l

1．10YR2/2黒褐色土．SiC．粘性は中でやや密。
2．10YR2/3黒褐色土．SCL．粘性は中で密。
3．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中で密。黄褐色土粒子を全体に含む。
4．10YR4/3にぶい黄褐色土．SiCL．粘性は強で疎。

e．G4－m

1．10YR2/2黒褐色土．SC．粘性は中でやや密。
2．10YR3/1黒褐色土．SiC．粘性は中で密。褐色土ブロックを含む。
3．10YR2/3黒褐色土．SiC．粘性は中で密。
4．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中で密。
5．10YR3/3暗褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
6．10YR3/3暗褐色土．SiCL．粘性は中で疎。黒褐色土粒を含む。
7．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で疎。
8．10YR2/1黒色土．Si．粘性は中で疎。黄褐色土ブロックを含む

図17

a．H2－g

1．10YR2/2黒褐色土．SiL．粘性に乏しくやや密。
2．10YR3/3暗褐色土．SiL．粘性に乏しく密。
3．10YR2/3黒褐色土．SiL．粘性に乏しくやや密。褐色土のブロックを含む。
4．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。黒褐色土をモザイク状に含む。
5．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強でやや密。
6．10YR2/2黒褐色土．SiCL．粘性は中で疎。ゴマシオ状に褐色土を含む。

b．H2－t

1．10YR1.7/1黒色土．CL．粘性は中でやや密。
2．10YR2/1黒色土．CL．粘性は中で密。
3．10YR2/1黒色土と10YR3/4暗褐色土．L．モザイク状の混合土．粘性に乏しく密。
4．10YR4.5/6褐色土．SiCL．
5．10YR4/6褐色土．SiCL．φ1㎜大の軽石を含む。
6．10YR4/4褐色土と10YR4/6褐色土．SiCL．モザイク状の混合土．やや密。
7．10YR3/4暗褐色土．SiCL．

c．H2－k

1．10YR2/1黒色土．SL．粘性は中でやや密。
2．10YR4/6褐色土．L．粘性に乏しくやや密。
3．10YR2/3黒褐色土．SL．粘性に乏しく疎。
4．10YR1.7/1黒色土．SiCL．粘性は中で疎．褐色土粒を含む。

d．H2－u

1．10YR2/1黒色土．L．粘性は中で密。
2．10YR3/4暗褐色土．L．粘性は中でやや密．褐色土を全体に含む。
3．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で密。

e．H3－a

1．10YR2/2黒褐色土．SiL．やや密．しまりわずかに黒味に乏しい。
2．10YR3/4暗褐色土．SiL．密。φ1㎜大の軽石粒に富む。
3．10YR3/4暗褐色土．CL．密。
4．10YR5/6黄褐色土を基質とし．10YR3/4暗褐色土の粒子を不規則に含む。
5．10YR2/2黒褐色土．SCL．が薄層状に堆積．疎。

図18

a．H3－b

1．10YR2/3黒褐色土．L．粘性に乏しく密。
2．10YR3/4暗褐色土．L．粘性に乏しく密．黒褐色土ブロックを含む。
3．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は中でやや密．褐色土ブロックを含む。
4．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
5．10YR3/4暗褐色土．SiC．粘性は強で疎。

b．H3－r

1．10YR2/2黒褐色土．SiL．粘性は強で密。
2．10YR3/2黒褐色土．SiL．粘性は中でやや密．褐色土を含む。
3．10YR3/4暗褐色土．SL．粘性に乏しく疎。
4．10YR3/3暗褐色土．SiL．粘性は中で疎。
5．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中で密．暗褐色土をモザイク状に含む。
6．10YR5/6黄褐色土．SiC．粘性は強でやや密。
7．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
8．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は中でやや密。
9．10YR3/3暗褐色土．SiCL．粘性は中で疎．ごましお状に褐色土を含む。

c．H３－m

1．10YR2/2黒褐色．SiC．しまり有．粘性やや有．褐色土(10YR4/6)を小ブロック状に含む。
2．10YR3/3暗褐色．SiCしまり有．粘性やや有．黒色土(10YR2/1)．褐色土(10YR4/6)をモザイク状に含む。
3．10YR2/1黒色．SiCL．しまりやや有．粘性有．１層のブロックか？．木根を含む。
4．10YR4/4褐色．しまり有．粘性有．地山崩壊土。
5．10YR4/6褐色．SiCL．地山崩壊．混入物なし。
6．10YR3/4暗褐色．SiCL．しまりやや有．粘性やや有．黒褐色土のブロックと褐色土をそれぞれ少量含む。
7．10YR3/4暗褐色．しまりなし．粘性やや有．褐色土と黒褐色土をごましお状に含む。

d．H３－u－1

1．10YR2/3黒褐色土．SCL．粘性は中でやや密。
2．10YR3/2黒褐色土．CL．粘性は中で密。
3．10YR3/3暗褐色土．SiCL．粘性は中で密．褐色土粒をモザイク状に含む。
4．10YR3/3暗褐色土．SCL．粘性は中でやや密．φ２㎜大軽石含む。
5．10YR3/4暗褐色土．SiCL．粘性は強で密。
6．10YR5/6黄褐色土．SiCL．粘性は強で疎。
7．10YR3/4暗褐色土．SiCL．

e．H３－p

1．10YR2/1黒色土．SiCL．粘性は中で密。
2．10YR3/2黒褐色土．SCL．密．黄褐色土粒を含む。
3．10YR3/3暗褐色土．SiCL．密。
4．10YR4/6褐色土．SiC．粘性は強でやや密。
5．10YR2/2黒褐色土．SCL．やや密．黄褐色土粒を含む。
6．10YR4/6褐色土．SiCL．疎。
7．10YR4/6褐色土．SiCL．疎．ごましお状に黒褐色土を含む。

f．H３－u－2

1．10YR2/3黒褐色土．SCL．密。
2．10YR2/2黒褐色土．SL．粘性に乏しく密。
3．10YR3/2黒褐色土．SCL．やや密．褐色土粒を含む。
4．10YR4/6褐色土．SiCL．疎。
5．10YR3/4暗褐色土．SiCL．疎．黒褐色土をモザイク状に含む。

図19

a．H４－b

1．10YR2/3黒褐色土．SCL．やや密。
2．10YR3/3暗褐色土．SL．やや密．黄褐色土粒子を含む。
3．10YR3/4暗褐色土．SCL．やや密．黒褐色土を含む。
4．7.5YR5/6明褐色土．SiCL．粘性は強で密。
5．10YR4/4褐色土．SCL．疎。
6．7.5YR4/4褐色土．SCL．やや密．暗褐色土をごましお状に含む。
7．10YR4/6褐色土．SiCL．疎。
8．10YR4/3にぶい黄褐色土．SiCL．疎．黒色土粒を含む。

b．H４－l

1．10YR2/3黒褐色土．SiL．密。
2．10YR3/2黒褐色土．SiL．密。
3．10YR3/4暗褐色土．SiL．
4．10YR3/3暗褐色土．SiL．黒褐色土粒を含む。
5．10YR4/3にぶい黄褐色土．SiL．
6．10YR4.5/6褐色～黄褐色土．粘性有。
7．10YR4/4褐色．SiCL．極めて疎。

c．H４－h・H４－１＆２

H４－h
1．10YR2/1黒色土．SCL．密。
2．10YR2/3黒褐色土．SCL．密。
3．10YR4/6褐色土．SiCL．粘性は強で密。
4．10YR4/4褐色土．SCL．密．黒色土をモザイク状に含む。
5．10YR2/2黒褐色土．SiCL．疎．褐色土粒子を全体に含む。

H４－i－1
1．10YR2/3黒褐色土．密。
2．10YR1.85/1黒色土．極めて密。
3．10YR1.85/1黒色土と10YR2/3黒褐色土の混合土。
4．10YR1.85/1黒色土と10YR4/4褐色土の混土。
5．10YR4/4褐色土．密。
6．10YR5/6黄褐色土．疎。
7．10YR4/4褐色土と10YR5/6黄褐色土の混合土。
8．10YR4/4褐色土．疎。
9．10YR1.85/1黒色土と10YR4/4褐色土の混合土．やや密。

H４－i－2
1．10YR2/2黒褐色土．SiL．
2．10YR2/1黒色土．SiL．
3．7.5YR4/6褐色土と7.5YR2/1黒色土の混合土。
4．7.5YR1.85/1と7.5YR4/6褐色土の混合土。
5．7.5YR4/6褐色土．CL．
6．7.5YR2/1黒色土と7.5YR4/6褐色土の混合土．疎。

図20

a．I3－s

1．19YR2/3黒褐色土．SCL．やや密。
2．10YR2/1黒色土．SCL．やや密．暗褐色土塊を含む。
3．10YR2/2黒褐色土．SCL．やや密．
4．10YR3/2 SCL．やや密．黄褐色土粒・暗褐色土粒とのモザイク状。
5．10YR2/3黒褐色土．やや密。
6．10YR4/4褐色土．SiCL．φ2～3㎜大の軽石含む。
7．10YR3/4暗褐色土．SiCL．極めて疎．黄褐色土塊を含む。
8．10YR4/6褐色土．SiCL．疎。
9．10YR2/1黒色土．SiCL．疎．褐色土粒わずかに含む。
10．10YR3/3暗褐色土．SCL．密。

b．I4－n

1．10YR2/2黒褐色土．やや密。
2．10YR1.85/1黒色土．SiL．やや密。
3．10YR2/3黒褐色土。
4．10YR5/6黄褐色土．CL．密。
5．10YR1.85/1黒色土．10YR4/6褐色土の混合土。
6．10YR4/6褐色土。
7．10YR4/6褐色土と10YR2/2黒褐色土の混合土．CL．疎。
8．10YR1.85/1黒色土と10YR4/6褐色土の混土．SiL．疎。
9．10YR1.85/1黒色土．SiL．疎。

c．I4－d

1．10YR2/2黒褐色土．SiC．やや密。
2．10YR3/3暗褐色土．SiC．やや密。
3．10YR4/6褐色土．SiCL．やや密。
4．10YR4/4暗褐色土．SiCL．疎．褐色土をシモフリ状に含む。
5．10YR4/6褐色土．SiCL．疎。

d．I4－q

1．10YR2/1黒色土．SiL．やや密。
2．10YR2/3黒褐色土．SiL．
3．10YR2/1黒色土と10YR2/3黒褐色土の混合土．SiL．やや密。
4．10YR4/6褐色土と19YR2/3黒褐色土の混合土．疎。

e．J3－p

1．10YR2/1黒色土．SiCL．やや密。
2．10YR2/2黒褐色土．SiCL．やや密。
3．10YR2/3黒褐色土．SiCL．やや密．黄褐色土の小塊を含む。
4．10YR3/2黒褐色土．SiCL．疎。
5．10YR5/6黄褐色土．SiCL．密。
6．10YR2/3黒褐色土．SiCL．疎．黄褐色土塊を含む。
7．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密。．
8．10YR3/4暗褐色土．SiCL．疎。

図21

a．J3－t

1．10YR2/1黒色土．SCL．密。
2．10YR2/3黒褐色土．SCL．密。
3．10YR2/2黒褐色土．密．黄褐色土の小塊を全体に含む。
4．10YR4/6褐色土．SiCL．密。
5．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密．黄褐色土．黒褐色土粒をモザイク状に含む。
6．10YR4/6褐色土．SiCL．やや密。
7．10YR5/6黄褐色土．SiCL．やや密。

b．J3－y

1．10YR3/2黒褐色土．疎。
2．10YR3/2黒褐色土．密．黄橙色土をしもふり状に含む。
3．10YR4/1褐灰色土．疎．黄橙色土塊を含む。
4．2.5Y5/1黄灰色土．密．黄橙色土塊を含む。
5．10YR8/8黄橙色土．密。
6．褐灰色土と黄橙色土の混合土。
7．10YR8/8黄橙色土を基質とし黒褐色土10YR3/1が混入。
8．2.5Y5/1黄橙色土．疎。
9．10YR3/2黒褐色土．疎。

c．K3－p－1

1．10YR1.85/1黒色土と10YR3/2黒褐色土の混土．SiL．疎。
2．7.5YR5/6黄褐色土．CL．密。
3．10YR3/4明褐色土。
4．10YR3/2黒褐色土。
5．10YR1.85/1黒色土と10YR5/6黄褐色土の混土．密。

1．10YR2/1黒色土．10YR5/6黄褐色土の小塊を含む。
2．10YR4/6褐色土と10YR2/1黒色土の混土。
3．10YR5/6黄褐色土。
4．10YR2/1黒色土と10YR4/6褐色土の混土。

d．J4－d－1・2＆3

J4－d－1

1．10YR1.7/1黒色土．SiL．密。
2．10YR5/6黄褐色土＞10YR2/1黒色土の混土
3．10YR1.85/1黒色土＞10YR4/6褐色土の混土。
4．10YR2/1黒色土＞10YR5/6黄褐色土の混土。
5．10YR5/6黄褐色土．疎。
6．10YR1.85/1黒色土．疎。

J4－d－2・1

1．10YR1.85/1黒色土．褐色土塊を含む。
2．10YR1.85/1黒色土。
3．10YR5/6黄褐色土。
4．10YR2/1黒色土と10YR5/6黄褐色土の混土。
5．10YR5/6黄褐色土．疎。

J4－d－3

1．10YR2/2黒褐色土。
2．黒褐色土＞褐色土10YR4/6の混土
3．10YR4/6褐色土＞黒色土の混土。
4．10YR1.85/1黒色土．SiL．
5．10YR5/6黄褐色土に黒色土が混入．疎。
6．黄褐色土と黒褐色土の混土．疎。
7．10YR1.85/1黒色土と黄褐色土の混土．疎。
8．10YR5/6黄褐色土．CL．密。

J4－d－1・2

1．10YR1.85/1黒色土
2．10YR1.85/1黒色土＞10YR4/6褐色土の混土。
3．10YR1.85/1黒色土．10YR4/6褐色土塊をわずかに含む。
4．7.5YR4/6褐色土．疎。
5．10YR1.85/1黒色土．疎。
6．7.5YR4/6褐色土．疎。地山。
7．7.5YR4/6褐色土．疎。

1．7.5YR1.85/1黒色土．7.5YR4/6褐色土塊が混じる。
2．黒色土＞褐色土の混土。
3．7.5YR4/6褐色土。
4．褐色土＞黒色土の混土。
5．黒色土．褐色土の混土．疎。

図22

a．J4－e－2

1．(10YR3/1)黒褐色土。
2．黒褐色土に黄橙色土が混入。
3．19YR4/1褐灰色土。
4．2.5Y5/2暗灰黄色土。
6．10YR6/2灰黄褐色土に黄橙色土が混入。
7．10YR8/8黄橙色土。
8．10YR7/8黄橙色土．疎。
9．10YR3/1黒褐色土．疎。

1．10YR2/1黒色土。
2．10YR4/4褐色土。
3．10YR1.85/1黒色土。
4．10YR3/2黒褐色土。
5．10YR5/6黄褐色土。

c．K3－u－2

1．10YR3/2黒褐色土に黄橙色土10YR8/6が混入。
2．10YR3/2黒褐色土。
3．10YR3/1黒褐色土に黄橙色土が混入。
4．19YR8/8黄橙色土．疎。
5．10YR3/1黒褐色土．極めて疎。
6．10YR6/3にぶい黄橙色土。
7．10YR7/6黄橙色土．疎。

1．10YR3/1黒褐色土．密。
2．10YR4/1褐灰色土．密。
3．2.5Y5/2暗灰黄色土．密。
4．10YR8/8黄橙色土．やや疎。
5．10YR5/1褐灰色土．疎。

b．J4－e－1

1．10YR1.85/1黒色土．密。
2．黒色土と褐色土(10YR4/6)の混土。
3．(10YR2/1)黒色土と黄褐色土(10YR5/6)の混土。
4．(10YR5/6)黄褐色土．CL．密。
5．黄褐色土に黒色土塊が混入．疎。
6．黒色土に黄褐色土塊が混入．疎。
7．黒色土に褐色土塊が混入。

d．J4－e－3

1．10YR2/1黒色土．密。
2．10YR6/1褐灰色土．密。
3．褐灰色土に明黄褐色土(10YR6/8)が混入．密。
4．明黄褐色土．密。
5．明黄褐色土に黒色土(10YR2/1)が混入．密
6．明黄褐色土．疎。
7．明黄褐色土に黒色土が混入．疎。
8．10YR1.7/1黒色土．疎。

e．J4－g－1

1．10YR2/1黒色土．密。
2．黒色土と黒褐色土(10YR2/3)の混土．疎。
3．10YR4/6褐色土。
4．19YR4/6褐色土と19YR3/3暗褐色土の混土。
5．暗褐色土。
6．10YR2/1黒色土と10YR褐色土の混土。
7．黒色土と黒褐色土10YR3/2の混土。
8．10YR4/4褐色土。
9．10YR4/6褐色土と10YR3/3暗褐色土の混土。
10．褐色土と黒色土10YR2/1の混土．疎。

図23

a．J4－f

1．10YR5/6黄褐色土．疎。
2．黒色土に黄褐色土10YR5/6が混入。
3．黄褐色土＞黒色土の混合土。
4．黒色土と黄褐色土の混合土．疎。
5．10YR1.85/1黒色土．疎。

b．K3－q

1．10YR2/1黒色土．SC．密。
2．10YR3/2黒褐色土．SC．密。
3．10YR4/6褐色土．SCL．密。
4．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密．φ2～3㎜大の軽石含む。
5．10YR2/2黒褐色土．SCL．疎．暗褐色土塊を含む。

c．K3－u

1．10YR1.85/1黒色土．密。
2．19YR2/2黒褐色土と黒色土10YR1.85/1の混合土．密。
3．10YR1.7/1黒色土．やや密。
4．10YR4/6褐色土と黒色増10YR1.85/1の混合土．疎。
5．10YR4/6褐色土．疎。
6．10YR1.7/1黒色土．疎。
7．10YR4/4褐色土．やや密。

d．J4－g－2

1．10YR2/1黒色土．密。
2．10YR3/3暗褐色土。
3．10YR2/3黒褐色土。
4．暗褐色土と黒色土の混合土。
5．10YR4/6褐色土．密。
6．黒色土と褐色土の混合土。
7．7.5YR4/6褐色土．構造発達．疎。
8．10YR2/1黒色土．疎。

e．K3－p－2

1．10YR2/1黒色土．SCL．密。
2．10YR2/2黒褐色土．SCL．密。
3．10YR2/1黒色土．SCL．密．褐色土塊を含む。
4．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密．モザイク状に黄褐色土塊を含む。
5．10YR4/6褐色土．SiCL．密。
6．10YR5/6黄褐色土．SiCL．やや密．ごましお状に暗褐色土粒を含む。

図24

a．J4－k－1

1．10YR1.85/1黒色土．SiL．やや密。
2．黒色土と暗褐色土10YR3/4の混合土。
3．10YR3/4暗褐色土。
4．10YR1.85/1黒色土．疎。
5．10YR4/4褐色土．疎。
6．10YR2/1黒色土と暗褐色土10YR3/4の混合土．疎。
7．10YR4/6褐色土．CL．
8．10YR4/6褐色土と暗褐色土10YR3/4の混合土．疎。

b．K3－u－1

1．10YR5/6黄褐色土．CL．密。
2．10YR3/4暗褐色土．
3．10YR1.7/1黒色土．密。
4．10YR4/6褐色土．
5．10YR1.7/1黒色土と褐色土10YR4/6の混合土．疎。
6．10YR2/1黒色土と褐色土10YR4/6の混合土．疎。

c．J4－k－2

1．10YR1.85/1黒色土．SiL．
2．10YR3/4暗褐色土．
3．暗褐色土と黒色土10YR2/1の混合土。
4．10YR4/6褐色土．CL．
5．褐色土と暗褐色土の混合土．やや密。
6．10YR2/1黒色土と褐色土10YR4/4の混合土．疎。

d．K4－a－1

1．10YR1.85/1黒色土．SiL．密。
2．黒色土＞褐色土10YR4/6の混合土。
3．10YR5/6黄褐色土．CL．疎。
4．黄褐色土と黒色土の混合土．疎。
5．10YR1.85/1黒色土．疎．黄褐色土が混入。

e．K4－c

1．10YR1.85/1黒色土＞黒褐色土10YR2/3．SiL．の混合土。
2．黒褐色土＞黒色土の混合土。
3．7.5YR4/6褐色土．CL．やや密。
4．7.5YR4/6褐色土．CL．疎。
5．10YR2/1黒色土．疎。

図25

a．K３－w
1．10YR1.7/1黒色土．黒褐色土10YR3/2が混じる。
2．10YR3/3暗褐色土．
3．10YR3/2黒褐色＞黒色土の混合土。
4．10YR4/6褐色土と黒褐色土の混合土。
5．10YR3/3暗褐色土．黒色土10YR2/1．褐色土10YR4/6の混合土。
6．10YR4/6褐色土。
7．褐色土と黒色土10YR2/1の混合土。
8．10YR1.7/1黒色土と褐色土の混合土．疎。
9．10YR4/6褐色土．疎．黒色土を混入。

b．J４－ｌ－a
1．10YR3/1黒褐色土．やや疎。
2．2.5Y5/2暗灰黄色土．密。
3．10YR5/2灰黄褐色土．やや密。
4．10YR5/5にぶい黄褐色土．やや疎。
5．10YR5/1褐灰色と黄橙色土10YR7/8．
6．10YR7/6明黄褐色土．疎。
7．10YR7/8黄橙色土と褐灰色土10YR6/1の混合土．極めて疎。
8．10YR7/8黄橙色土．疎。
9．10YR7/8褐灰色土．密。
10．10YR7/8黄橙色土．密。
11．10YR7/3にぶい黄橙色土．密。
12．2.5YR7/4浅黄色土．密。

c．K４－b
1．10YR1.7/1黒色土．密。
2．黒色土と褐色土10YR4/4の混合土。
3．10YR5/6黄褐色土．
4．10YR4/6褐色土．疎。
5．黒色土と黄褐色土の混合土．疎。

図26

a．C３－w
1．10YR2/2.5黒褐色土．SiC．疎。
2．10YR2/1黒色土．陥し穴場土。

b．D３－x
1．10YR2/2黒褐色土．SC．密。
2．10YR6/6明黄褐色土．HC．密。
3．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密。
4．10YR3/4暗褐色土．SiC．やや密。
5．10YR3/2黒褐色土．SiCL．やや密。

c．E４－a
1．10YR2/2.5黒褐色土．CL．疎。
2．５YR4.5/8焼成土赤褐色．SCL．密．上部植物灰まじり。
3．7.5YR3/3暗褐色土．SCL．やや密。

e．D３－w
1．10YR2/2黒褐色土．CL．
2．10YR3/2黒褐色土．CL．
3．7.5YR3/4暗褐色土．SL．焼成土。
4．５YR5/6明赤褐色土．SL．焼成土。
5．10YR1.7/1黒色土．植物灰を含む。
6．植物灰層．ガラス繊維状の灰．上部赤灰下部白灰。
7．10YR5/8赤褐色土。
8．7.5YR3/3暗褐色土．焼成土。
9．10YR2/3黒褐色土．
10．10YR2/1黒色土．

f．H２－g焼土
1．５YR4/8赤褐色色土．SiL．やや密。
2．7.5YR2/2黒褐色土．SiL．やや密。
3．7.5YR2/1.5黒褐色土．SiCL．疎。

g．F３－u
1．10YR2/3黒褐色土．SCL．やや密。
2．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密。
3．10YR4/6褐色土．SiCL．やや密。

h．G４－g
1．10YR2/1黒色土．SC．やや密。
2．7.5YR2/2黒褐色土．SiC．やや密。
3．19YR3/4暗褐色土．SiCL．やや密。
4．10YR2/2黒褐色土．SiC．やや密。
5．10YR1.7/1黒色土．SiCL．疎。
6．10YR2/3黒褐色土．SiCL．やや密。

i．H２－g
1．10YR2/1黒色土．L．密。
2．10YR3/2黒褐色土．SiL．密。
3．10YR2/2黒褐色土．SiCL．密。
4．10YR2/2黒褐色土．CL．密。
5．10YR3/3暗褐色土．SiCL．やや密。
6．10YR5/6黄褐色土．SiCL．密。
7．10YR4/6褐色土．SiC．疎。
8．10YR3/4暗褐色土．SiC．疎。
9．10YR4/6褐色土．SiC．疎。

j．J４－b
1．10YR2/1黒色土．SiL．やや密。
2．10YR3/3暗褐色土．SiL．やや密。
3．10YR4/6褐色土．CL．密。

図27

a．K3－s

1．10YR1.7/1黒色土．SiL．やや密。
2．10YR2/1黒色土．SiL．
3．10YR1.85/1黒色土．
4．10YR4/6褐色土と黒色土10YR2/1の混合土．SiL．
5．10YR5/6黄色土．CL．密。
6．10YR4/6褐色土．

b．L3－u

1．10YR1.85/1黒色土．SiL．やや密。
2．10YR1.85/1黒色土と暗褐色土10YR3/3の混合土．SiL．やや密。
3．10YR5/6黄褐色土．
4．10YR4/4褐色土を基質として黄褐色土10YR5/6の固い亞角塊状構造有．疎。
5．10YR4/6褐色土を基質として黄褐色土の固い亞角塊状構造有．疎。
6．10YR5/6黄褐色土．CL．密。

c．K4－a

1．10YR2/1黒色土と黒褐色土10YR2/3の混合土．密。
2．10YR2/3黒褐色土．密。
3．10YR4/6褐色土．密。
4．10YR2/1黒色土と褐色土10YR4/6の混合土．密。
5．10YR2/3黒褐色土．密。

d．F4－f

1．10YR2/3黒褐色．SCL．しまりやや有．粘性やや有．木根含む。
2．10YR2/1黒色．SiCL．しまりやや有．粘性やや有．炭化物を少量含む．わずかに灰が混じる。
3．10YR3/2黒褐色．SiCL．しまりやや有．粘性やや有．褐色土粒をまばらに含む。
4．7.5YR3/4暗褐色．SCL．しまりなし．粘性有．褐色焼土粒を全体的に含む。

5．竪穴住居跡

(1)遺構

古代の竪穴住居跡は22棟検出された。時期は古墳～奈良時代１棟、奈良時代７棟、平安時代14棟である。このうち全体を調査できたものは16棟で、残り６棟は一部が調査区域外に含まれている。

Ｂ４－ｄ住居跡（図28、図版27）

調査区の最も東側に位置するもので、この１棟だけ孤立する形で存在する。Ｃ３－ｙ住居跡が最も近い住居跡であるが、北西方向に20mほどの距離がある。この付近は谷頭部にあたり、堆積が進んでいるため黒色土が深く、検出は雨天の後乾きが遅かったことを頼りに行った。基本土層Ⅲ層上部の暗褐色土まで掘り下げた段階で煙出口の礫が現われ、平面プランがつかめたが、４基の陥し穴状遺構を切り合っていたため、一部掘り過ぎてしまっている。

平面形　隅丸長方形（推定）　**規模**　3.9～4.1×3.4～3.8m（推定）

主軸方向　Ｓ－14°－Ｅ　**埋土**　全体に黒褐色土が卓越する。壁際や埋土下部に褐色土の小ブロックが混入する。火山灰の堆積は認められない。角礫や円礫が数個混じり込んでいる。

壁　東壁が緩やかに外傾するほかは直立ぎみに外傾する。南壁は掘り過ぎのため推定である。壁高は34～56cm。

床面　細かな凹凸がある。中央部から東壁寄りの部分には、貼り床が認められる。規模は190×154cmで、掘り方埋土の厚さは４～16cmである。形は浅皿のピット状を呈する。また、床面から10cm以内の高さには、角・円礫が20個余り散乱している。

炭化材・焼土　ともに認められない。

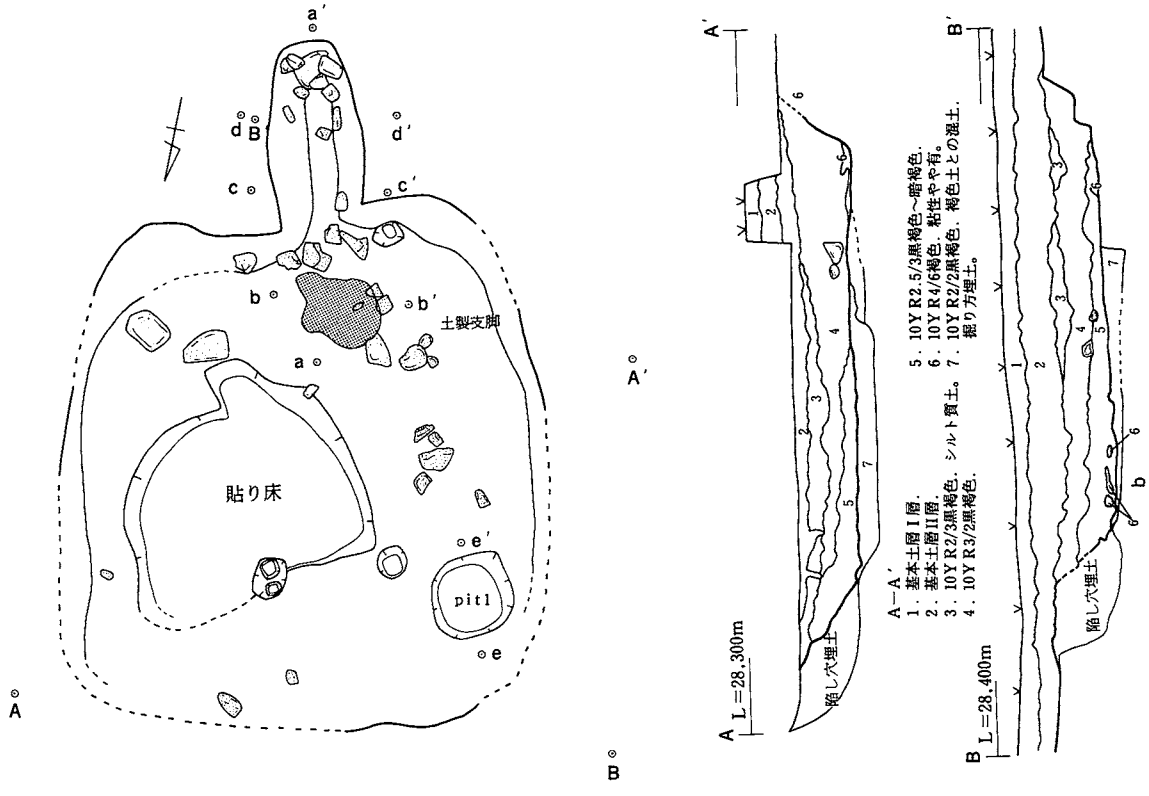
柱穴　柱穴状ピットが２個検出されたが、位置的に柱穴にはならないと思われる。

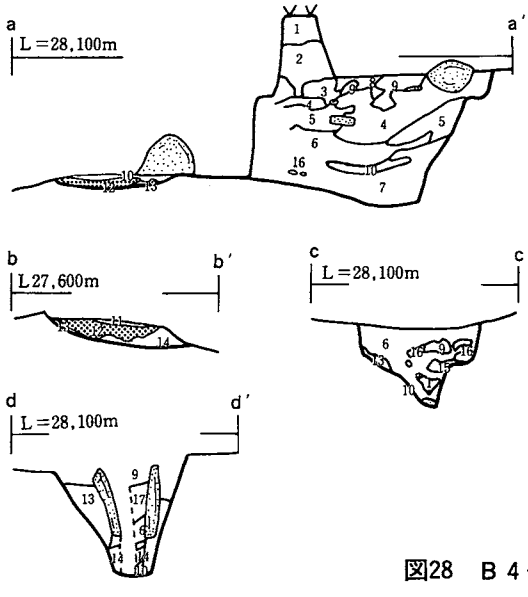
土坑　Ｐ１の１基検出された。南西隅付近に位置する隅丸方形状のものである。深さ16cmと浅いが、貯蔵穴と考えられる。

カマド　〈位置〉　南壁からわずかに南西隅寄り　〈主軸方向〉　Ｓ－14°－Ｅ

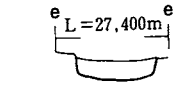
〈本体〉　袖部の構成礫と燃焼部焼土が残存する。袖自体は破壊されている。袖の構成礫（芯材）と思われるものは６個あり、粒径は12～20cmのものである。前述の床面上の礫もその形状などから、カマドの構成礫の可能性がある。燃焼部焼土は、56×60cmの不整形を呈し、厚さは最大で10cmを測る。焼成は比較的良好である。また、土製の支脚が南西端近くの床面直上から出土している。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道部は掘り込み式の煙道の両壁に偏平な角・円礫が埋め込まれていた形跡を残している。壁際に16×９cmの円礫、煙出し口付近に19×６cmの円礫が原位置から下にずり落ちた形で検出された。その他の煙道壁にも礫が埋め込まれていたと考えられるが、





a－a′
1．基本土層Ⅰ層．
2．基本土層Ⅱ層．
3．10YR3/3暗褐色．
4．7.5YR3/2黒褐色．
5．7.5YR3/2黒褐色．褐色土との混土。
6．10YR2/3黒褐色．シルト質土。
7．5YR2/2黒褐色．焼土粒を含む。
8．7.5YR3/4暗褐色．
9．10YR4/4褐色．
10．2.5YR3/4暗赤褐色．焼土バンド。
11．2.5YR3/6暗赤褐色．焼土。
12．2.5YR4/6赤褐色．燃焼部焼土。
13．7.5YR4/6褐色．
14．7.5YR2/2黒褐色．
15．10YR3/2黒褐色．
16．10YR2/3黒褐色．粘性やや有。
17．10YR3/4暗褐色．



e－e′
1．10YR2/3黒褐色．
褐色土のブロックを含む。

ピット

No	P1
開口部径	65×64
底部径	54×48
深さ	16

カマド　　cm

煙道部	長さ	144	煙出し部	径	54
	幅	78		深さ	102

図28　B４－ｄ住居跡

ぬきとられて住居内に廃棄されたとも考えられる。煙道の底面は壁際から約10°の角度で緩やかに下がり煙出し部に至る。煙出し口には30×24cmの円礫を最大として、粒径6～18cmの円礫が8個検出されているが、当初は煙出し口の壁に積み上げられていたものと考えられる。各部の埋土中には多数の焼土粒がブロック状に含まれている。

重複する遺構　南壁と平行してB4－d－1、北壁付近でB4－e、B4－j－1、B4－j－2陥し穴状遺構と切り合う。

時期　住居形態、出土遺物から、本遺跡の時期区分（VI．まとめ、2．竪穴住居跡参照）の第IV期に属する。

C3－y住居跡（図29、図版28）

調査区南東部の住居跡が集中する地域の最も南側に位置する。隣接する住居跡はD3－v住居跡で、北西に2mほどの距離である。II層下部まで掘り下げた段階で、黒褐色の方形の輪郭が黒色の輪郭を持つ陥し穴遺構と切り合う形で検出された。検出時には火山灰は確認していない。　**平面形**　隅丸長方形（一部胴張り）　**規模**　4.2～4.5×4.0m

主軸方向　N－80°－E　**埋土**　全体に黒褐色土と褐色土のモザイク状の混土が主体をなす。その中に褐色土や黒色土のブロックが点在している。また、火山灰は十和田a降下火山灰、白頭山降下火山灰がともにスポット状に混入するが、一部に前者と後者が逆転しているところがあり、人為的に埋め戻された可能性がある。

壁　直立ぎみ。壁高は40～50cm。

床面　住居跡中央部の2m四方ほど（カマド付近を除く）が踏みしめられて硬い。比高差は3cm程度で全体に平坦である。

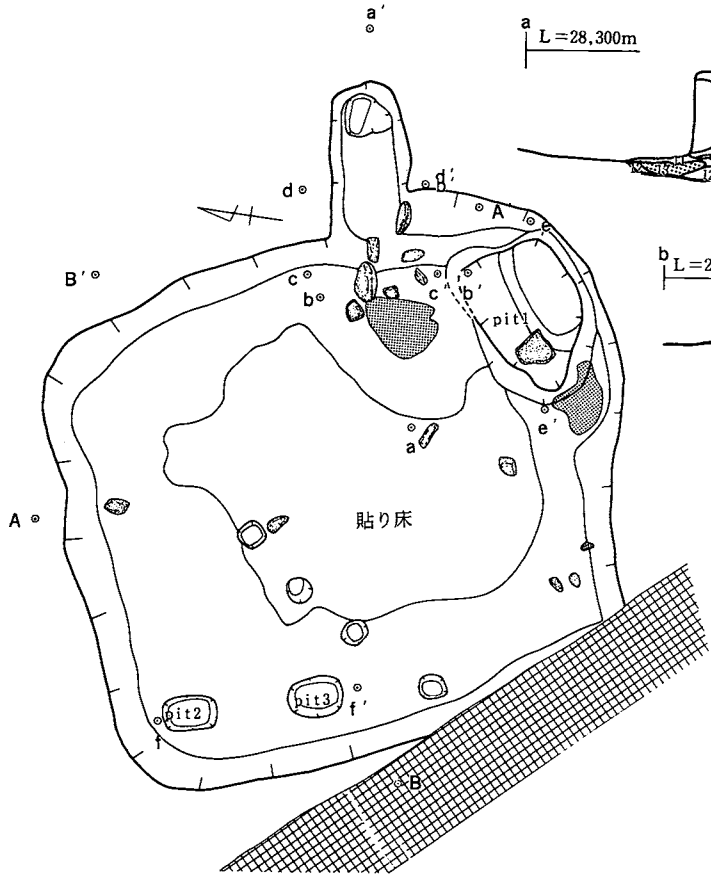
炭化材・焼土　焼土が1カ所認められるだけである。焼失に伴うものかは判定できない。

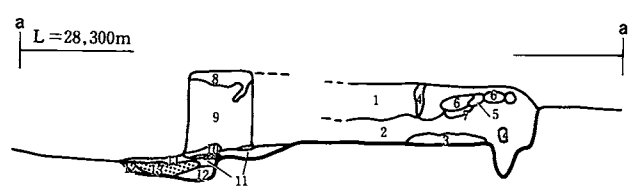
柱穴　柱穴状ピットは4個検出されているが、いずれも位置から柱穴とは認められない。

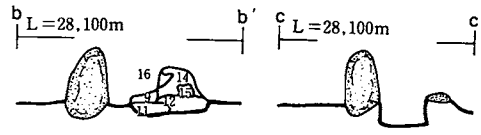
土坑　カマド右側にP1、北西隅にP2、その南側約60cmにP3の合計3基が確認された。P1の平面形は楕円形に近く、一部掘り過ぎて壁を欠く。底面は中央部が盛り上がり段がつく。位置的に貯蔵穴と考えられるが、底面の凹凸が多く疑問が残る。P2、P3はともに深さ12cmほどの小ピットで平面形はP2が隅丸長方形、P3が楕円形を呈する。機能は不明である。

カマド　〈位置〉　東壁やや南東隅寄り　〈主軸方向〉　N－80°－E

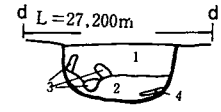
〈本体〉　残存状態はあまり良くない。左側袖部の芯材と思われる円礫3個が本体中央部に崩れ落ちている。右側の袖は粒径15～20cmの角礫2個を芯材とし、シルト質土を貼り付けたものであるが一部壊れている。支脚として使用したと思われる角礫は粒径10cmほどのものである。燃焼部の焼土は44×46cmの不整円形で、厚さは最大8cmである。



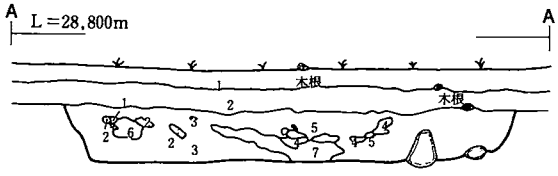


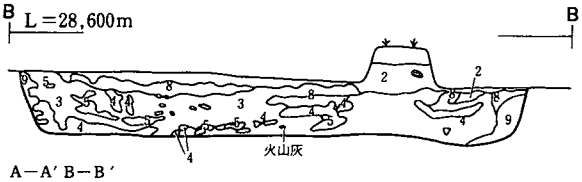


a－a′ b－b′ c－c′
1．10Y R3/3暗褐色．褐色土粒を含む。
2．10Y R3/2黒褐色．焼土粒．黄褐色土粒を含む。
3．10Y R2/2黒褐色．しまり粘性なし。
4．10Y R2/3黒褐色．木根による攪乱。
5．10Y R5/6黄褐色．
6．10Y R3/4暗褐色．黄褐色土粒を全体を含む。
7．10Y R3/3暗褐色．焼土粒を少量含む。
8．7.5Y R2/3極暗褐色．シルト質土。
9．10Y R4/6褐色．暗褐色土を含む。
10．10Y R4/6褐色．シルト質土。
11．5 Y R3/4暗赤褐色．焼成の弱い焼土。
12．7.5Y R4/6褐色．ローム粒を含む。
13．2.5Y R4/8赤褐色．燃焼部焼土．焼成良。
14．10Y R3/3暗褐色．
15．10Y R6/2灰褐色．褐色土との混土。
16．10Y R4/6褐色．暗褐色土との混土。

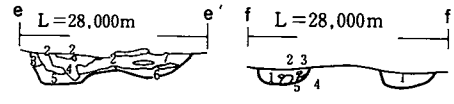


d－d′
1．7.5Y R3/4暗褐色．シルト質土。
2．7.5Y R3/3暗褐色．
3．7.5Y R4.5/6褐色．ブロック状。
4．5 Y R3/4暗赤褐色．焼土塊。





A－A′ B－B′
1．基本土層Ⅰ層．
2．基本土層Ⅱ層．
3．10Y R3/2黒褐色．褐色土をモザイク状に含む。含火山灰。
4．10Y R4/6褐色．黒褐色土を含む（不規則混土）
5．10Y R2/1黒色．シルト質土。
6．10Y R2/1黒色．褐色土のブロックを含む。
7．10Y R2/2黒褐色．
8．10Y R2/2黒褐色．シルト質土．火山灰を含む。
9．10Y R4/5褐色～暗褐色．粘土質土。



e－e′
1．5 Y R6/3にぶい橙色．粘土。
2．7.5Y R4/6褐色．暗褐色土との混土。
3．7.5Y R4/6褐色．
4．10Y R3/3暗褐色．
5．7.5Y R3/4暗褐色．
6．10Y R3／3暗褐色．褐色土のブロックを含む
7．10Y R3/3暗褐色．バンド状。

f－f′
1．10Y R2/1黒色．褐色土との混土。
2．10Y R2/1黒色．ブロック状。
3．10Y R5/6黄褐色．ブロック状。
4．10Y R4/4褐色．
5．10Y R4/6褐色．

ピット　　cm

No.	P_1	P_2	P_3
開口部径	94×132	42×28	44×33
底部径	84×120	33×22	34×11
深さ	10～24	12	12

カマド　　cm

本体	長さ	—	煙道部	長さ	120	煙出し部	径	39
	幅	70		幅	66		深さ	45

図29　C３－ｙ住居跡

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、住居跡の壁際に最大粒径25cmの細長い円礫が1個埋め込まれている。煙道の底面は、ほぼ平坦面で続き、煙出し部のピットに至る。ピットはその平坦面より30cmほど掘り下げられている。各埋土には焼土粒がわずかに含まれている。

重複する遺構　北西隅がD3－U陥し穴状遺構と切り合う。

時期　出土遺物・住居形態から第III期に属する。

D3－V住居跡（図30、図版29）

調査区南東部に位置し、南側のC3－y住居跡、北側のD4－c住居跡の間にある。住居跡南西側3分の2余りが調査区外にあり、調査できたのはカマドを含む北西側の3分の1である。III層上面まで掘り下げたところ、火山灰を含む黒褐色の輪郭が現われた。その輪郭は不鮮明だったため、調査区端の南西壁にトレンチを入れ、住居跡の壁を手掛かりにして平面形を確定した。

平面形　北隅と東隅は隅丸状を呈するが全体形は不明。　**規模**　南北方向3.66m。

主軸方向　N－58°－E

埋土　黒色～黒褐色土が卓越する。埋土中位～下位にかけて十和田a降下火山灰、白頭山降下火山灰の極小ブロックが散在するが、入り方に規則性は認められない。

壁　外傾する。壁高は35～45cm。

床面　硬く締まっている。全体に平坦だが細かい凹凸がある。比高差は大きいところで8cm程度である。　**炭化材・焼土**　ともになし。　**柱穴**　検出されなかった。

土坑　カマド両脇に2基確認された。カマド右側にあるP1の平面形は円形に近い隅丸方形状の浅い土坑である。左側のP2は長方形状を呈する小型の土坑で深さ13cmと浅い。ともに住居跡に付属するもので貯蔵穴に類するものであろう。

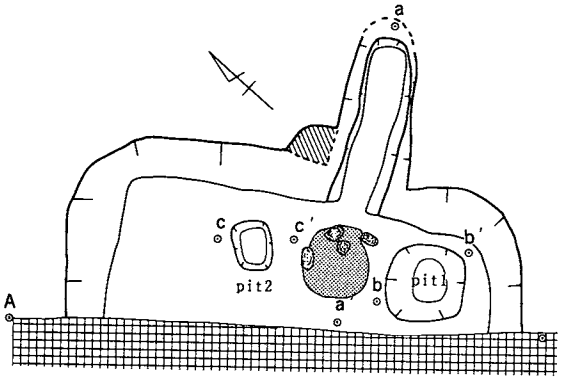
カマド　〈位置〉　北東壁やや南東隅寄り。〈主軸方向〉　N－58°－E

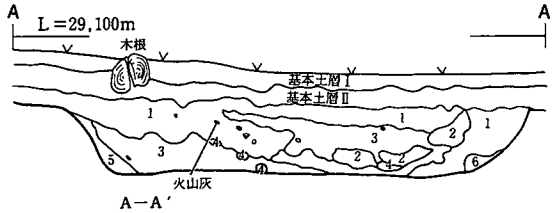
〈本体〉　比較的焼成の良好な燃焼部焼土と支脚に使用されたと思われる粒径10cmの円礫が2個あり、その他に本体の構成礫と思われる粒径14cmの角礫が2個ある。袖部は確認できなかった。燃焼部の焼土は直径58cmの円形で厚さは最大で9cmを測る。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は壁際から約20°の角度で傾斜して下がる。煙出し部は先に掘り上げてしまったD4－b陥し穴状遺構の埋土中につくられていたため、正確な平面形が把握できなかった。煙道部の埋土中位～下位にかけて硬く締まった赤褐色の焼土ブロックが多数含まれている。

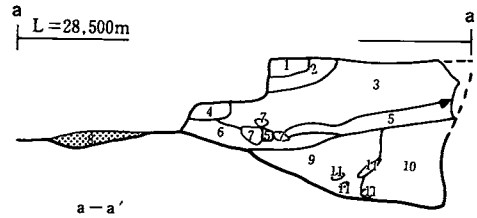
重複する遺構　煙出し部とD4－b陥し穴状遺構が切り合っている。

時期　出土遺特はほとんどないが、住居形態から第III期に属するものと考えられる。

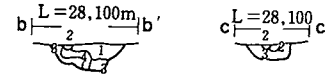




A－A'
1．10YR2/3黒褐色．黒色土を不規則に含む。
2．10YR4/6褐色．暗褐色土を含む。
3．10YR2/1黒色．黒褐色土との混土。
4．10YR2/1黒色．ブロック状。
5．10YR2/3黒褐色．褐色土のブロックを含む。
6．10YR4/5褐色．地山崩壊土。



a－a'
1．10YR2/3黒褐色．焼土粒をわずかに含む。
2．10YR2/2黒褐色．
3．10YR2/3黒褐色．焼土粒．灰を含む。
4．7.5YR3/3暗褐色．焼土混じり。
5．10YR3/2黒褐色．粘土の小ブロックを含む。
6．5YR4/6赤褐色．焼土。
7．5YR4/8赤褐色．焼土のブロック。
8．5YR3/6暗赤褐色．燃焼部焼土が硬く締まる。
9．7.5YR3/4暗褐色．
10．10YR2/1黒色．
11．5YR3/6暗赤褐色．しまりあり。



b－b'
1．10YR2/3黒褐色．褐色土のブロックを含む。
2．10YR6/8明黄褐色．
3．10YR4/6褐色．シルト質土
4．10YR3/4暗褐色．しまりなし

c－c'
1．10YR2/1黒色．
2．10YR2/2黒褐色．しまりなし。
3．10YR4/6褐色．黒褐色土を含む。

ピット

No	P_1	P_2
開口部径	60×62	30×38
底部径	26×34	20×28
深さ	27	13

カマド　　cm

煙道部	長さ	138	煙出し部	径	42
	幅	54		深さ	78

図30　D３－ｖ住居跡

D４－ｃ住居跡（図31、図版30）

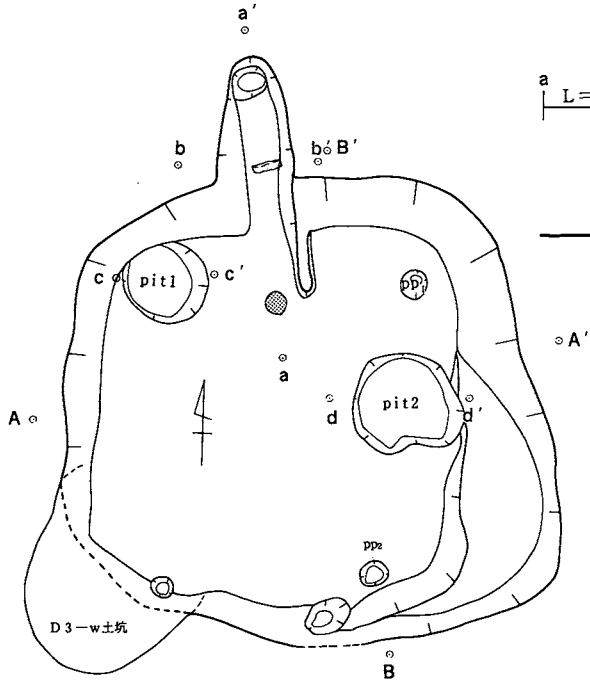
調査区南東部の住居跡群の中の１棟で、付近には南にD３－ｖ住居跡、北西にE３－ｕ住居跡がある。II層まで掘り下げた段階で十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰が多量に検出されたため住居跡と考えたが、平面形は当初のプランとは違った形で掘り上がった。

平面形　隅丸台形状　**規模**　3.5×3.4～4.0m　**主軸方向**　N－8°－W

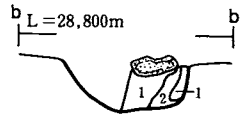
埋土　黒色～黒褐色土を基調とする。最上位層の黒褐色土中に十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰が細長くブロック状に混じる。全体的に微量の焼土粒を含むが、炭化物粒は混入していない。

壁　総て外傾するが、東壁の南側は張り出して緩やかに傾斜し、立ち上がりははっきりしない。壁高は46～52cm。

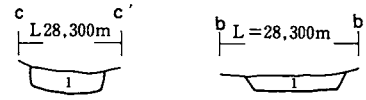
床面　軟らかめで全体的に平坦である。貼り床はなく、床面の比高差は大きいところで５cm弱である。



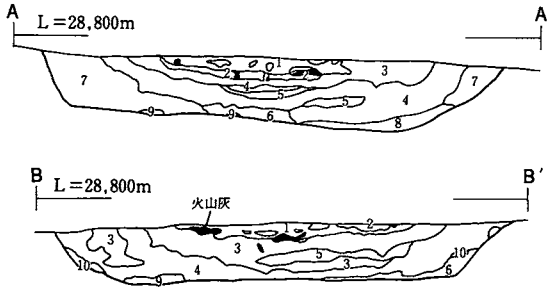
a－a′
1．10YR3/4暗褐色．粘性やや有



b－b′
1．10YR3/4暗褐色．粘性やや有
2．10YR4/4褐色．



c－c′　d－d′
1．10YR4/6褐．黄褐色土粒（ローム粒）を含む。



A－A′　B－B′
1．10YR2/2黒褐色．十和田a・白頭山火山灰を含む。
2．5YR4/6赤褐色．焼土。流れ込みか？
3．10YR2/1黒色．焼土粒をわずかに含む。
4．7.5YR2/1黒色．小ブロック状の焼土粒を含む。
5．10YR1.7/1黒色．粘性大。微量の焼土粒を含む。
6．10YR3/3暗褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
7．10YR3/4暗褐色．黄褐色土粒．黒褐色土粒を含む。
8．10YR4/6褐色．黄褐色土粒を含む。pit2埋土の一部。
9．10YR4/6褐色．しまりなし。
10．10YR4/6褐色．地山崩壊土。

ピット

No	P1	P2
開口径部	62×66	76×84
底部径	56×50	64×66
深さ	26	14

柱穴

No	PP1	PP2
直径	23×21	21×23
深さ	42	33

カマド　　cm

本体	長さ	—	煙道部	長さ	138	煙出し部	径	30
	幅	(78)		幅	54		深さ	56

図31　D4－c住居跡

炭化材・焼土　床面近くに焼土・炭化材はともに認められない。埋土中に焼土粒が認められるが、焼失に伴うものであるかは不明である。

柱穴　柱穴は東壁側に2個検出されている。PP_1、PP_2ともに平面形はほぼ円形で、柱痕跡は確認できなかった。深さは33～42cmである。その他に柱穴状ピットが南西隅に1個あるが、深さが5cm弱と小さいため柱穴からは除外した。

土坑　カマドの左脇にＰ１、東壁中央部にＰ２の２基が確認された。Ｐ１の平面形は円形で深さ26cmの浅い土坑である。埋土は褐色土の単層でローム粒を含む。位置関係などから貯蔵穴に類するものである。Ｐ２は円形に近い不整形で深さは14cmの浅皿状の土坑である。Ｐ１・Ｐ２ともに遺物の出土はないが、住居跡に付属する。

カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉Ｎ－８°－Ｗ

〈本体〉　焼成の悪い燃焼部焼土と東側の軸が残るだけである。袖は地山削り出しのもので、芯材の礫はない。燃焼部焼土は、直径19cmの円形で厚さは３～４cm程度のものである。支脚等はない。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は緩やかに傾斜して上がり煙出し口につながるが、煙出し部は深く掘り込まれている。煙出し部の埋土は暗褐色土の単層で、焼土粒、炭化物粒とも含まれていない。

重複する遺構　南西隅の埋土に焼土や灰を含むＤ４－ｃ土坑が重複しているが、住居跡の壁を切っている。

時期　出土遺物は全くないが、住居形態や埋土の状況から第II期に属すると考えられる。

Ｄ４－ｔ住居跡（図32、図版31）

調査区南東部の住居跡群の東側に位置する。全住居跡の中で最も東側（国道45号線側）にあり、段丘のへりの張り出した部分を占地する。隣接する住居跡はＥ４－１住居跡で西方向に５ｍほど離れている。III層上面で黒色土の広がりとして検出されたが、煙出し部と思われる部分に偏平な円礫が露出していた。住居跡東側の地形が緩斜面となっており、一部検出面を下げ過ぎている。

平面形　凸辺不整台形状　**規模**　5.3×4.9m　**主軸方向**　Ｓ－32°－Ｗ

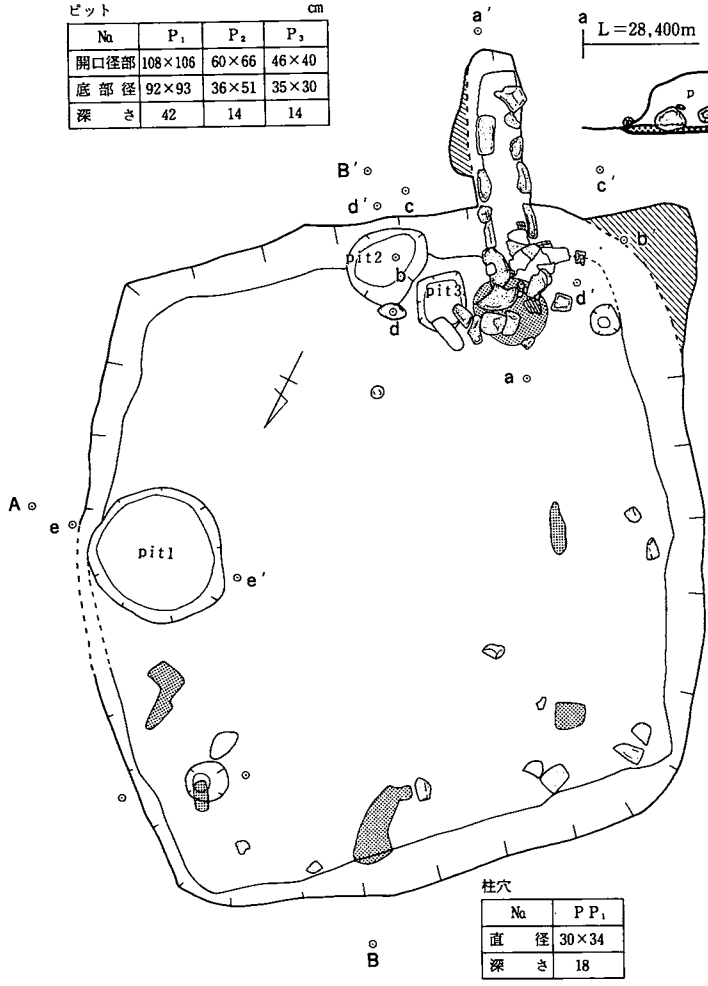
埋土　上位～下位にかけて黒色～黒褐色土を主体とするが、住居跡の壁際は一部暗褐色～褐色土が占める。火山灰の混入は全く認められない。北壁付近の褐色土中に焼土のブロックが混入するが焼失に伴うものと考えられる。

壁　総て外傾するが、東壁が最も緩やかである。壁高24～50cm。

床面　全体に締まりがなく軟らかい。細かい凹凸はないが全体的に微妙に波打っている。比

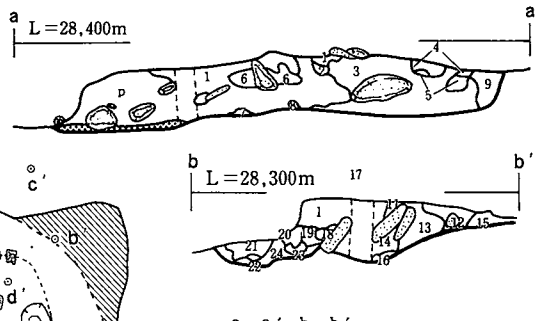
ピット　　cm

No	P1	P2	P3
開口径部	108×106	60×66	46×40
底部径	92×93	36×51	35×30
深さ	42	14	14

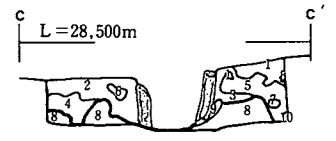


柱穴

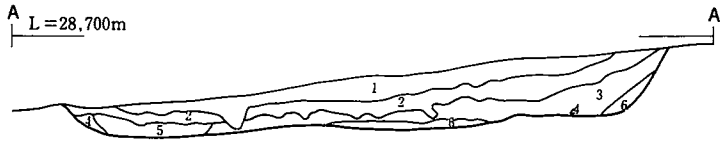
No	P P1
直径	30×34
深さ	18

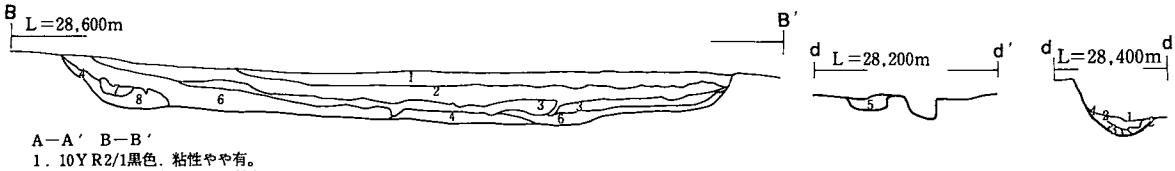


a－a′・b－b′
1．10Y R4/1褐灰色．灰を多量に含む。
2．10Y R6/1褐灰色．ローム粒を含む。
3．10Y R5/2灰黄褐色．炭化物粒を含む。
4．10Y R7/1灰白色．粘土塊を含む。
5．10Y R8/1灰白色．ローム粒を含む。
6．7.5Y R5/2灰褐色．
7．7.5Y R7/2明褐灰色．
8．10Y R4/1褐灰色．ローム粒を含む。
9．10Y R6/6明黄褐色．
10．10Y R8/8黄橙色．
11．10Y R6/4にぶい黄褐色．ローム粒を多量に含む。
12．10Y R5/1褐灰色．
13．10Y R6/1褐灰色．粘土塊を含む。
14．10Y R4/1褐灰色．
15．10Y R7/8黄橙色．
16．10Y R8/8黄橙色．砂質土。
17．10Y R6/2灰黄褐色．灰を多量に含む。
18．10Y R4/1褐灰色．
19．10Y R6/2灰黄褐色．炭化物粒を含む。
20．10BG2/1青黒色．ローム粒を含む。
21．10Y R7/6明黄褐色．
22．10Y R8/8黄橙色．地山？
23．7.5Y R5/2灰褐色．焼土粒を含む。

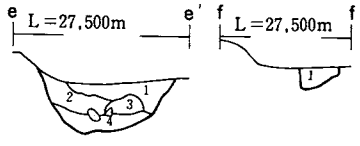


c－c′
1．10Y R4/1褐灰色．ローム粒を含む。
2．10Y R5/3にぶい黄褐色．1層が混じる。
3．10Y R5/3にぶい黄褐色．1～3層は攪乱を受けている。
4．10Y R6/4にぶい黄褐色．
5．10Y R5/4にぶい黄褐色．
6．10Y R2/1黒色．根による攪乱。
7．10Y R7/6明黄褐色．ブロック。
8．10Y R8/8黄橙色．地山。
9．10Y R5/4にぶい黄褐色．ローム粒を多量に含む。
10．10Y R7/6明黄褐色．





A－A′　B－B′
1．10Y R2/1黒色．粘性やや有。
2．10Y R2/2黒褐色．シルト質土。
3．10Y R2/3黒褐色．
4．10Y R4/6褐色．
5．10Y R2/2黒褐色．
6．10Y R3/3暗褐色．粘性やや有。
7．5Y R4/8赤褐色．焼失時焼土。
8．7.5Y R2/1黒色．



d－d′・d－d″
1．10Y R5/1褐灰色．ローム粒を含む。
2．10Y R4/1褐灰色．
3．10Y R8/8黄橙色．攪乱。
4．10Y R8/8黄橙色．
5．10Y R6/2灰黄褐色．ローム粒を含む。

e－e′・f－f′
1．10Y R3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
2．10Y R3/3暗褐色．黄褐色土粒を含む。
3．10Y R3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
4．10Y R3/3暗褐色．

カマド　　cm

本体	長さ	85	煙道部	長さ	156	煙出し部	径	36
	幅	54		幅	39		深さ	36

図32　D４－ｔ住居跡

高差は最大12cmである。また多数の角礫が各壁際の床面に散在している。

炭化材・焼土　床面付近の層位に焼土塊が５カ所に渡って分布している。細長い長方形状のものと正方形状のものがあるが、厚さはいずれも２～５cm程度のものである。炭化材はカマド付近に少量認められるが、ともに焼失に伴う焼土と考えられる。

柱穴　北東隅に１個検出された。円形で深さは18cmである。柱痕跡は確認されなかった。

土坑　Ｐ１～Ｐ３の３基検出された。Ｐ１は東壁の壁際の中央に位置する円形のもので、直径106cm、深さ40cmを測る。このＰ１のため住居跡の東壁は凸辺状を呈している。貯蔵穴に類するものと思われる。Ｐ２はカマド左側に位置し、楕円状を呈する。深さ14cmと浅いが貯蔵穴的な機能を持つピットであろう。Ｐ３もカマド左側にあるが、左軸の礫を取り除いた後検出されたもので機能は不明であるが、袖の芯材を埋め込むための掘り方となる可能性がある。

カマド　〈位置〉　南壁中央と南西隅の中間部　〈主軸方向〉　Ｓ－32°－Ｗ

〈本体〉　袖部や天井部を構成していたと思われる角礫や円礫が多く散乱している。その礫は最大粒径10～23cm程度のもので、使用時の位置のまま検出されたものは少なく、袖部の崩壊は著しい。本体部奥壁付近には、比較的多量の灰が見つかっており、ここで焼成されたものと考えられる。燃焼部の焼土は、その礫群の下から検出された。直径58cmの円形を呈し、厚さは最大５cmを測る。全体に焼成は良好で分布範囲も比較的広い。

〈煙道部・煙出し部〉　左袖部内壁の奥に長方形（31×16cm）の板状の礫が埋め込まれている。また、煙道部の両壁に板状の礫や角礫・円礫がその長辺を壁に接する形で据えられている。煙道の左壁には粒径13～32cmのものが計５個、右壁には粒径12～27cm（ともに長辺の長さ）ほどのものが計６個並べられている。煙道の壁の崩れを防ぐため、一度地山まで掘り込んだ後に礫を埋め込み、シルト質土で固定したものと考えられる。その掘り込み式の煙道は、ほぼ水平のまま煙出し部に続いている。煙出し部には小ピットが見られずそのまま立ち上がる。

重複する遺構　Ｄ４－ｔ－１陥し穴状遺構のほか２基の陥し穴状遺構と切り合う。これらはすべて住居跡の床面で検出されたものである。

時期　出土遺物・住居形態から第Ⅳ期に属する。

Ｅ３－ｕ住居跡（図33・34、図版32）

調査区南東部の住居跡群の中心部に位置する。南西隅の一部が調査区域外に延びている。北方向にＥ４－ａ住居跡が隣接し、北西方向５ｍにＥ３－ｖ住居跡、南東方向約５ｍにＤ４－ｃ住居跡がある。Ⅲ層上面で黒色の方形の輪部を確認した。火山灰は検出されなかった。

平面形　隅丸凸辺台形　**規模**　5.2～5.4×5.1m　**主軸方向**　Ｎ－67°－Ｅ

埋土　上位に黒色土、中位に黒褐色土　下位に暗褐色土が卓越する。壁際は暗褐色～黄褐色

土が混じる。火山灰の堆積は認められない。

壁　南壁は陥し穴状遺構の埋土内につくられており、緩やかに外傾した後直立する。北壁は直立した後に外傾しながら立ち上がる。東壁は直立ぎみである。西壁は調査区外のため不明である。壁高は54～74cm。

床面　部分的（南壁側）に貼り床が施されている。細かな凹凸はなく、比較的締まりのある硬い床である。北高差は約10cmである。

炭化材・焼土　ともに検出されなかった。

柱穴　PP_1～PP_3の3個検出されたが、PP_3は、その位置から柱穴状ピットとして処理している。柱穴と思われるPP_1、PP_2は北壁側に検出された。ともに平面形は台形で、深さは43cmを測る。柱穴間の距離は2.3mである。柱痕跡は確認されなかった。

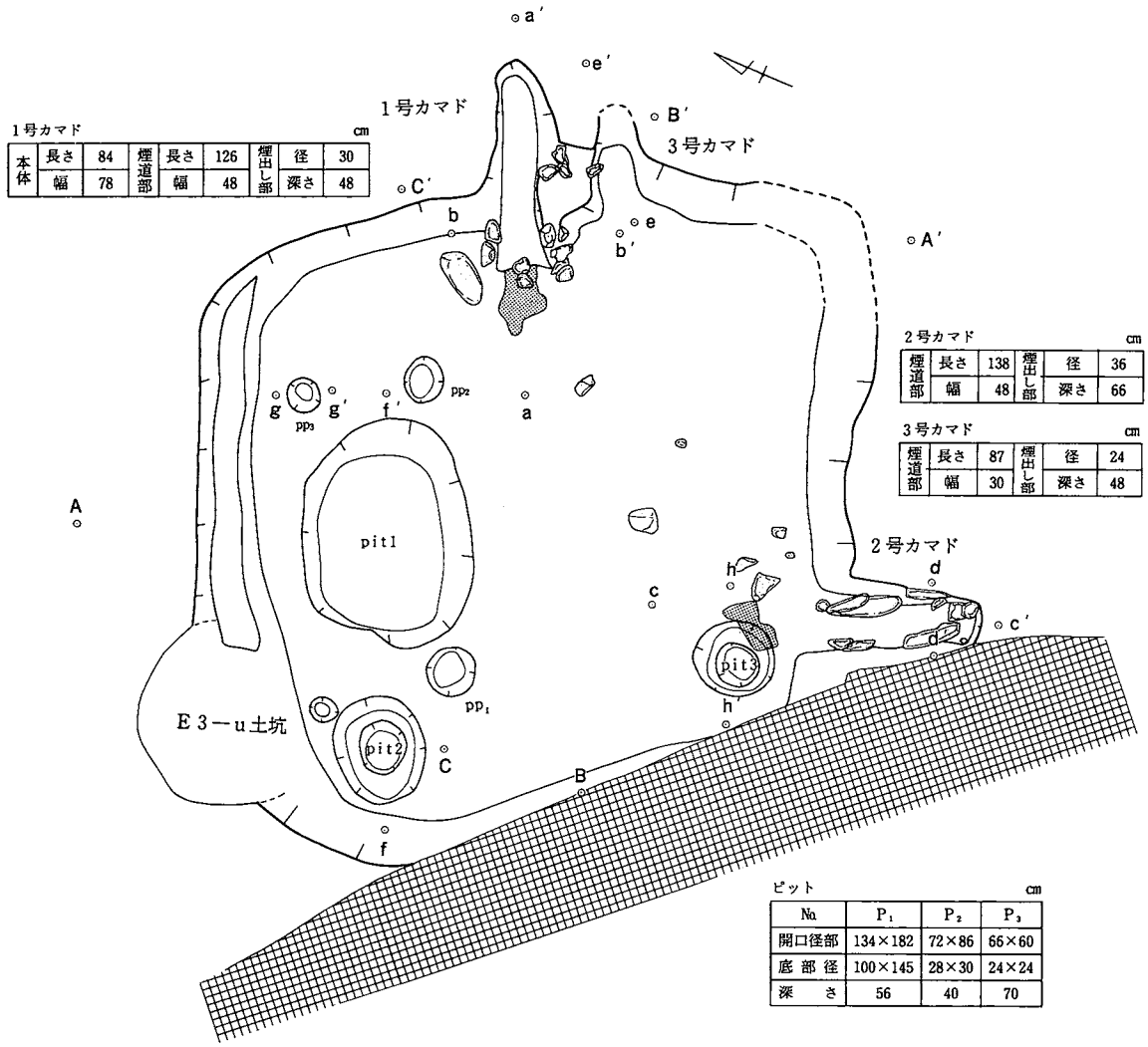
土坑　P1～P3の3基検出された。P1は住居跡中央部と北壁の中間部付近に位置する大型の土坑である。平面形は小判状を呈し、深さは56cmと深い。埋土には鉄製品（刀子）や土器が含まれており、貯蔵穴と考えられる。P2は北西隅に位置する卵形の土坑である。断面は、中位付近に段がある。これも貯蔵穴に類するものであろう。P3は南カマドの燃焼部の焼土を切る形で検出された。西側がすぐ調査区外にあたるため、推測であるが南西隅に位置していると思われる。平面形はほぼ円形を呈し、断面は底部近くで両壁が細くなる。深さ70cmと深く、底面から土製の支脚が出土したことから貯蔵穴であろう。P1～P3の土坑のうち、P3が前述の検出状況（切り合い状態）から東カマドの北東隅寄りのものに伴うことが予想される。他は時期的なものは不明である。

カマド　東壁に2基、南壁に1基検出された。残存状況などから最も新期のものは東カマドの北東隅寄り、次に南カマドより古期のものは東カマドの南東隅寄りと考えられる。新期のカマドから1号、2号、3号として記述する。

○1号カマド　〈位置〉　東壁中央からやや北東隅寄り　〈主軸方向〉　N－67°－E

〈本体〉　袖部の一部、その構成礫、支脚の礫、燃焼部焼土が残存する。右袖は粒径20cmを最大として5個の円礫が据えられているが、下に暗褐色のシルト質土が貼られているようである。左袖には18×12cmと18×11cmの円礫2個が同様のシルト質土の上に埋め込まれている。左袖の左側には、48×22cmの長方形の円礫が天井部から崩落している。支脚の礫は直径12cm大の円礫が2個設置されており、その下に燃焼部焼土がある。焼土の平面形は53×34cmの不定形で、厚さは最大7cm程度である。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、東壁の立ち上がりの部分の煙道右壁に粒径10～15cmの角礫が3個埋め込まれている。底面は燃焼部焼土の奥側から緩く上がり、壁際から約12°の角度で15cmほど下がりきった後、平らな状態のまま煙出し部に至る。煙出し部に小ピット



1号カマド　cm

本体	長さ	84	煙道部	長さ	126	煙出し部	径	30
	幅	78		幅	48		深さ	48

2号カマド　cm

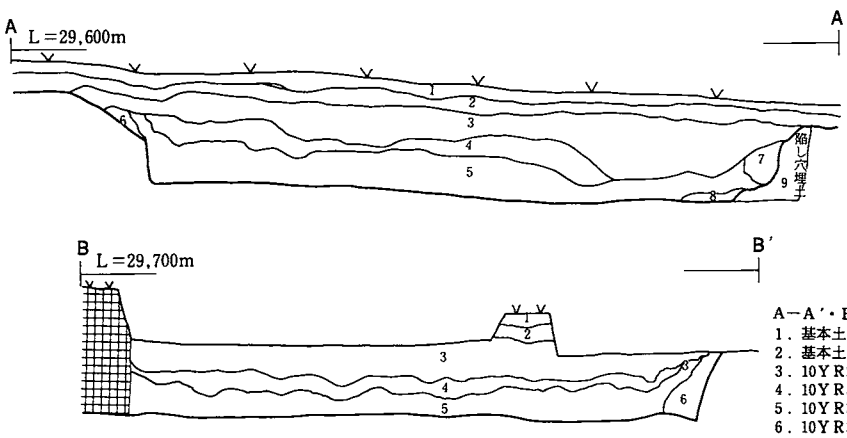
煙道部	長さ	138	煙出し部	径	36
	幅	48		深さ	66

3号カマド　cm

煙道部	長さ	87	煙出し部	径	24
	幅	30		深さ	48

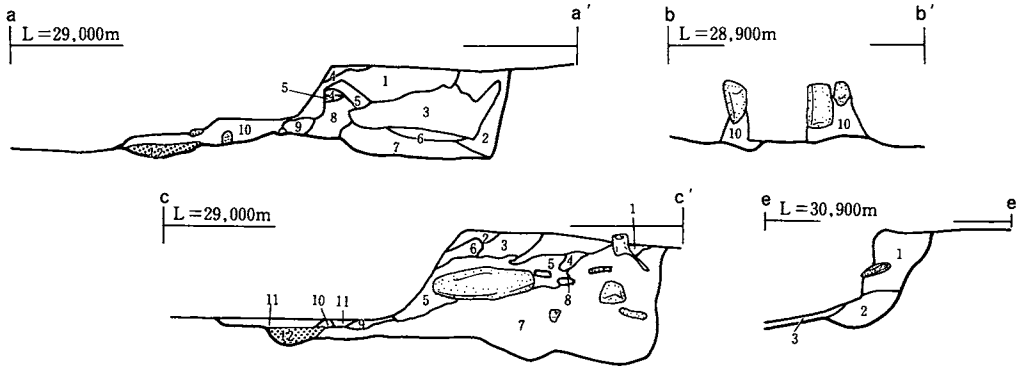
ピット　cm

No.	P1	P2	P3
開口径部	134×182	72×86	66×60
底部径	100×145	28×30	24×24
深さ	56	40	70



A－A′・B－B′
1．基本土層Ⅰ層。
2．基本土層Ⅱ層。
3．10YR2/1黒色．木根を含む。
4．10YR3/2黒褐色．暗褐色土を含む。
5．10YR3/3暗褐色．炭化物粒を含む。
6．10YR3/4暗褐色。
7．10YR2/3黒褐色．黄褐色土粒を含む。
8．10YR5/6黄褐色．貼り床？
9．10YR2/2黒褐色．陥し穴埋土。

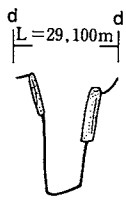
図33　E3－u住居跡(1)

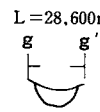


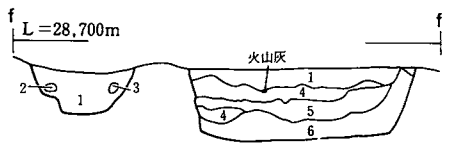
a－a′・b－b′
1．10Y R3/4暗褐色．
2．10Y R4/6褐色．
3．10Y R2/3黒褐色．暗褐色土との混土。
4．10Y R2/3黒褐色．
5．10Y R4/3にぶい黄褐色．
6．10Y R5/6黄褐色．
7．10Y R3/3暗褐色．黒褐色土との混土。
8．10Y R2/3黒褐色。
9．10Y R4/6褐色．シルト質土。
10．10Y R3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
11．5Y R4/8赤褐色．焼土ブロック。
12．5Y R5/8明赤褐色．燃焼部焼土。黒色土を含む。

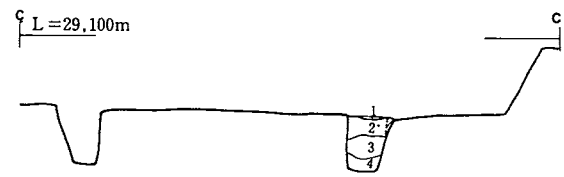
e－e′
1．10Y R2/3黒褐色．焼土粒を含む。
2．10Y R3/3暗褐色．焼成を受けている。
3．10Y R5/6黄褐色．掘り方埋土（貼り床）

c－c′
1．10Y R6/4にぶい黄橙色．ローム粒に富む。
2．10Y R5/1褐灰色．焼土粒を含む。
3．7.5Y R5/2灰褐色．焼土粒に富む。
4．10Y R4/1褐灰色．炭化物粒を含む。
5．10Y R4/1褐灰色．ローム粒に富む。
6．10Y R7/8黄橙色．
7．7.5Y R4/1褐灰色．焼土ブロック．ローム粒を含む。
8．10Y R7/6明黄褐色．ロームブロック。
9．2.5Y R4/2灰赤色．焼土粒灰に富む。
10．10Y R4/1褐灰色．ローム粒を含む。
11．10Y R7/6明黄褐色．掘り方埋土（貼り床）
12．5Y R4/8赤褐色．燃焼部焼土。

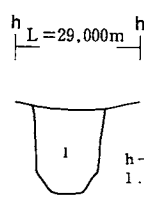








f－f′
1．10Y R3/3暗褐色．炭化物粒を含む。
2．10Y R4/4褐色．黄褐色土粒を含む。
3．10Y R2/3黒褐色．
4．10Y R3/4暗褐色．炭化物粒焼土粒を含む。
5．10Y R5/6黄褐色．暗褐色土を含む。
6．10Y R4/6褐色．黄褐色土粒を含む。



h－h′
1．10Y R4/6褐色．黄褐色土粒を含む。

c－c′・g－g′
1．10Y R2/2黒褐色．
2．10Y R3/4暗褐色．黄褐色土粒を含む。
3．10Y R3/3暗褐色．
4．10Y R4/6褐色．

図34　E３－u住居跡(2)

は見られず、直立ぎみに立ち上がる。

○２号カマド　〈位置〉　南壁中央と南西隅（推定）の中間部　〈主軸方向〉　S－19°－E

〈本体〉　本体部には燃焼部焼土と４個ほどの礫が残存する。袖部は破壊され、右袖の部分には、Ｐ３が作られている。礫は袖部の芯材として使用されたものではなく、煙道の両壁から崩落したものと考えられる。粒径は７～22cmまでのものである。焼土は44×20cmの不整形でＰ３により一部が切られている。厚さは最大10cmである。なお、この焼土はこの付近にある貼り床の下から検出されたものである。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、両壁には多数の円礫が埋め込まれていた様子が観察できる。右壁には偏平な長方形（12×47cm・８×19cm・８×20cm）の円礫３個が原位置のまま検出された。左壁の礫は煙道内にずれ込む形で長方形（16×60cm）の偏平な円礫と12cm大の円礫が検出され、原位置を保っているものは、煙道側に長方形（６×36cm）の円礫や粒径12～18cmの円礫が３個である。煙道底面は壁を20cmほど超えてから約10°の角度で緩やかに下がり、下がりきった部分が煙出し部の小ピットである。煙出し口には前述のように数個の円・角礫が据えられている。

○３号カマド　〈位置〉　東壁中央からやや南東隅寄り　〈主軸方向〉　N－67°－E

〈本体〉　残存していない。

〈煙道部、煙出し部〉　３号カマドはこの部分が残るだけである。底面は壁際から約20°で下がり、その部分が煙出し部となる。煙道の全長が極端に短く、住居跡を切るピットとも考えられたが、埋土に焼土粒が含まれることなどから煙道部とした。

重複する遺構　北壁の北西隅寄りがＥ３－ｕ土坑に切られている。南東隅にＤ４－ｅ陥し穴状遺構、南壁中央にＤ３－ｙ陥し穴状遺構がある。

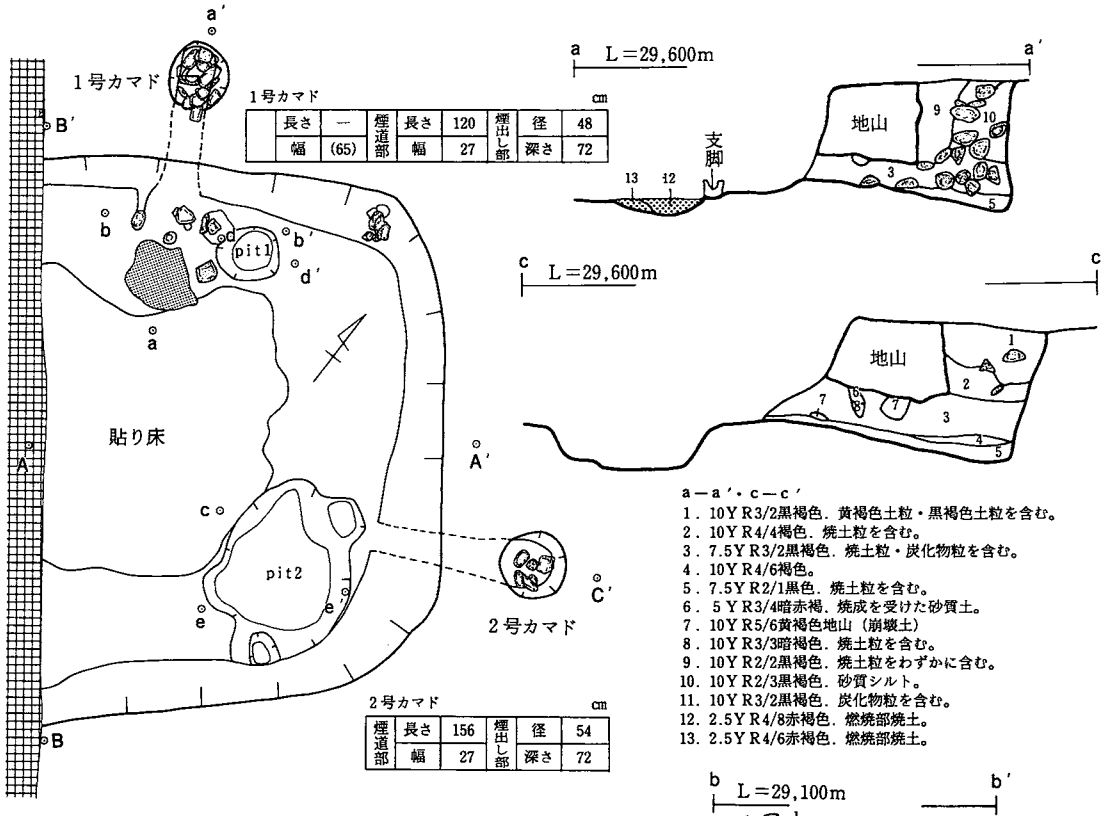
時期　出土遺物・住居形態から第Ⅲ期に属する。

Ｅ３－Ｖ住居跡（図35、図版33）

調査区南東部の住居跡群の西側に位置する。住居跡の南西側約３分の１は調査区域外にあたり、全体は調査できなかった。東側をＥ３－ｕ住居跡、北側をＥ４－ｈ住居跡に囲まれた形で存在する。Ⅱ層まで掘り下げた段階で煙出し部の構成礫が数個検出されたため、住居跡を想定し精査したものである。Ⅲ層上面で暗褐色の不明瞭な輪郭を確認した。

平面形　隅丸不整形（推定）　**規模**　南北方向4.3m　**主軸方向**　N－25°－W

埋土　上位～下位にわたって暗褐色土を基調とし、小ブロック状の黒褐色土、褐色土、黄褐色土を含む。一部には基本土層Ⅴ層の小ブロックも見られ、このような状況から人為的に埋め戻された埋土である可能性が高い。火山灰は十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰が中位に



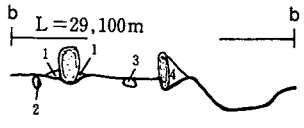
1号カマド　cm

煙道部	長さ	—	煙道部	長さ	120	煙出し部	径	48
	幅	(65)		幅	27		深さ	72

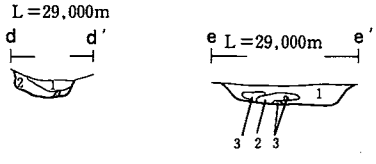
2号カマド　cm

煙道部	長さ	156	煙出し部	径	54
	幅	27		深さ	72

a－a′・c－c′
1．10YR3/2黒褐色．黄褐色土粒・黒褐色土粒を含む。
2．10YR4/4褐色．焼土粒を含む。
3．7.5YR3/2黒褐色．焼土粒・炭化物粒を含む。
4．10YR4/6褐色。
5．7.5YR2/1黒色．焼土粒を含む。
6．5YR3/4暗赤褐．焼成を受けた砂質土。
7．10YR5/6黄褐色地山（崩壊土）
8．10YR3/3暗褐色．焼土粒を含む。
9．10YR2/2黒褐色．焼土粒をわずかに含む。
10．10YR2/3黒褐色．砂質シルト。
11．10YR3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
12．2.5YR4/8赤褐色．燃焼部焼土。
13．2.5YR4/6赤褐色．燃焼部焼土。



b－b′
1．10YR4/4褐色．シルト質の袖構築土。
2．10YR2/3黒褐色．ブロック状。
3．5YR3/3暗赤褐色．焼土粒を含むブロック。
4．10YR4/6褐色．シルト質の袖構築土。

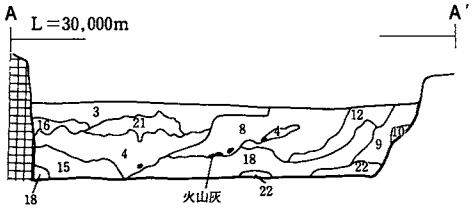


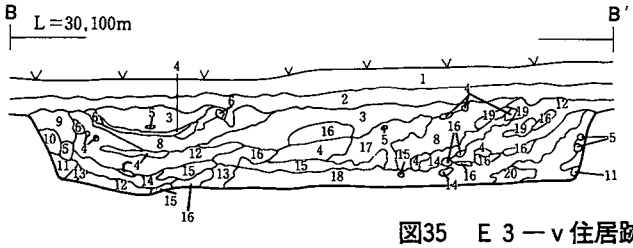
d－d′
1．10YR3/2黒褐色．黄褐。
2．7.5YR4/4褐色．焼土。

e－e′
1．10YR3/3暗褐色．黄褐色土粒を含む。
2．10YR2/3黒褐色．焼土粒をまばらに含む。
3．10YR4/6褐色．

ピット

No	P_1	P_2
開口部径	40×46	140×118
底部径	30×32	100× 92
深さ	12	16





A－A′・B－B′
1．基本Ⅰ層1層。
2．基本Ⅰ層2層。
3．10YR3/3暗褐色．黄褐色土を含む。
4．10YR2/3黒褐色．黄褐色土粒をまばらに含む。
5．10YR5/6黄褐色．
6．10YR3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
7．10YR3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
8．10YR3/3暗褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
9．10YR3/4暗褐色．黄褐色土粒を含む。
10．10YR4/4褐色．黒褐色土を含む。
11．10YR4/6．褐色．地山崩壊土。
12．10YR3/2黒褐色．炭化物粒をまばらに含む。
13．10YR3/2黒褐色．
14．10YR3/3暗褐色．黄褐色土粒を含む。
15．10YR2/3黒褐色．
16．10YR4/6黄褐色．基本土層5層起源（？）
17．10YR3/3暗褐色．炭化物粒を含む。
18．10YR3/2黒褐色．
19．10YR4/3にぶい黄褐色．
20．10YR3/4暗褐色．黄褐色土．黒褐色土との混土。
21．10YR3/4暗褐色．
22．10YR4/6褐色．黒褐色土を含む。

図35　E3－v住居跡

スポット状に含まれるが微量である。

壁　調査区外の西壁を除き、総て直立ぎみに立ち上がる。壁高は56～60cm。

床面　住居跡の中央部約2ｍ四方（推定）が踏み締められたためか固く締まっている。この部分も含め、全体に平坦で、比高差は最も大きいところで5cm程度である。

炭化材・焼土　検出されていない。

土坑　Ｐ1、Ｐ2の2基検出された。Ｐ1は1号（北）カマドの右側に位置する直径44cmの円形のもので貯蔵穴と考えられる。Ｐ2は南東隅に位置する不整形のもので柱穴状のピットを1個伴っているが性格は不明である。深さは最大16cmを測る。

カマド　北壁と東壁で2基検出された。残存状況などから北カマド（1号）は東カマド（2号）から新しく作りかえられたものと考えられる。

○1号カマド　〈位置〉　北壁ほぼ中央（推定）　〈主軸方向〉　N－25°－W

〈本体〉　両袖部の一部とその構成礫・土製の支脚などが残存する。右袖の礫は15×20cmの円礫であり、左袖のものは15×22cmの板状の円礫で、ともに地山を掘り込んだ後に埋め込まれ、シルト質の黒褐色土が貼り付けられている。支脚は中空の土製のもので原位置を保ったままで検出された。燃焼部焼土の規模は50×46cmの方形に近く、中心部は特に焼成が良好である。厚さは最大9cmである。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道部はくり貫き式で底面は壁際までごくわずかに立ち上がり、その後約8°の角度で緩やかに下がり煙出し口に至る。煙出し口の上部には検出時に確認された4個の円礫があり、煙出し口の埋土には最大粒径7～14cmの円礫や角礫が20個余り含まれている。これらの礫が煙出し口を組み上げていたものであるか、人為的な投げ込みによるものかは不明であるが、検出時の状態から前者の可能性が高い。

○2号カマド　〈位置〉　東壁の中央と南東隅の中間部　〈主軸方向〉　N－65°－E

〈本体〉　袖部、燃焼部焼土とも破壊され、その後にＰ2がつくられている。残存するのは煙道部と煙出し部である。

〈煙道部・煙出し部〉　くり貫き式の煙道で底面は壁際から約10°の角度で下がり煙出し部へと続く。煙出し口の埋土には1号カマドと同様に、粒径5～12cmの角礫・円礫が6個含まれている。

重複する遺構　なし

時期　出土遺物・住居形態から第Ⅲ期に属する。

Ｅ３－ｙ－１・Ｅ３－ｙ－２住居跡

調査区南東部の住居跡群の中で北側に位置するものである。北方向に隣接して、Ｆ３－ｕ住居跡とＦ４－ａ住居跡状遺構があり、東方向にはＥ４－ｄ住居跡がある。南西側の調査区域外を除く各方向に５棟の住居跡が並ぶ。表土を除去した段階で４個の円礫を検出したため、住居跡と想定したものである。その後、黒色土の不明瞭な方形の輪郭を確認している。当初南壁にカマドを持つ１棟の住居跡として調査したが、調査の課程で床面が２面あり、２棟の住居跡が切り合うものか、あるいは小さい住居跡が拡張されたものかが予想された。最終的には埋土の状況などから後者のものと判断した。遺構名は拡張前をＥ３－ｙ－１住居跡、拡張後をＥ３－ｙ－２住居跡とした。１、２の順に記述する。

Ｅ３－ｙ－１住居跡（図36、図版34）

平面形　隅丸方形（推定）　**規模**　南北方向3.5m　**垂軸方向**　Ｓ－32°－Ｅ

埋土　埋土は、この住居跡の貼り床と掘り方埋土の２層である。いずれも黒色土や暗褐色土の混土である。

床面　拡張後の貼り床を除去した段階で、黄褐色と暗褐色の混土の貼り床が確認された。細かな凹凸はあるが、全体的に平坦である。締りはあまりなくやわらかめである。比高差は５cm前後である。

炭化材・焼土　拡張後の貼り床の下から検出された焼土が２カ所に散布する。Ｅ３－ｙ－１住居跡のカマドとＥ３－ｙ－２住居跡のカマドの間にあり、１つは40×80cmの楕円状を呈する。厚さが10cmほどあり焼成も良好なため、住居内の炉としての使用に伴った焼土である可能性が高い。

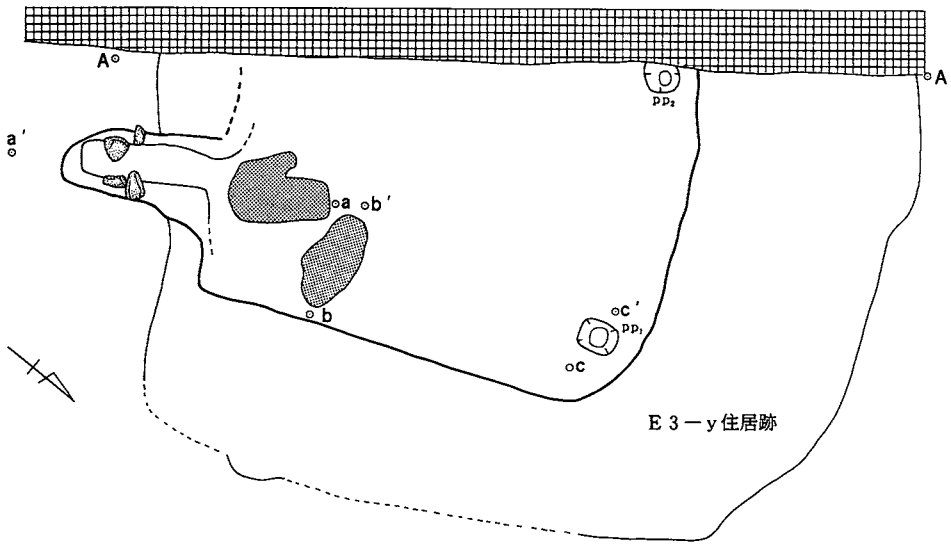
柱穴　PP_1、PP_2の２個検出された。PP_1は平面形が長方形状を呈し、深さは20cmである。PP_2は一部調査区外になるため平面形は不明であるが円形に近いと考えられる。深さは38cmである。

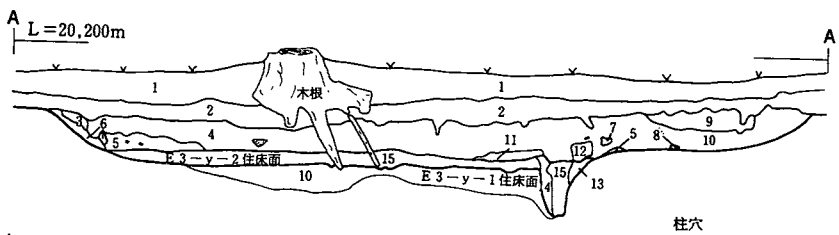
カマド　〈位置〉　南壁南東隅　〈主軸方向〉　Ｓ－32°－Ｅ

〈本体〉　袖部は破壊され残存していない。燃焼部焼土のみが残るが80×50cmの長方形を呈し、厚さは６cmである。

〈煙道・煙出し部〉　遺構検出の際、手がかりとなった煙道部の礫を４個伴う。最大粒径23cmの円礫などである。煙道部底面は、本体の奥壁付近から約15°の角度で下がり煙出し部に至る。煙出しには小ピットはなく直立ぎみに立ち上がる。煙出し部の底と思われる部分は、検出面から約80cmほど掘り込まれている。

重複する遺構　なし





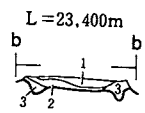
A－A′
1．基本土層Ⅰ層。
2．基本土層Ⅱ層。
3．10Y R3/2黒褐色．焼土粒・炭化物粒を含む。
4．10Y R4/4褐色．埋めもどされた地山。
5．10Y R4/6褐色。
6．10Y R2/3黒褐色．微量の火山灰を含む。
7．7.5Y R5/6明褐色．焼土ブロック。
8．10Y R5/6黄褐色．
9．10Y R3/4暗褐色．黒褐色土との混土。
10．10Y R2/3黒褐色．混土。
11．10Y R4/4褐色．地山崩壊土．パミスを含む。
12．10Y R4/6褐色．黒色土を含む。
13．10Y R3/3．暗褐色。
14．10Y R3/2黒褐色．黄褐色土．暗褐色土との混土。
15．10Y R5/6黄褐色．古い住居跡の掘り方埋土。

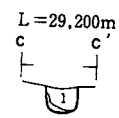
カマド　cm

煙道部	長さ	120	煙出し部	径	36
	幅	57		深さ	78

柱穴

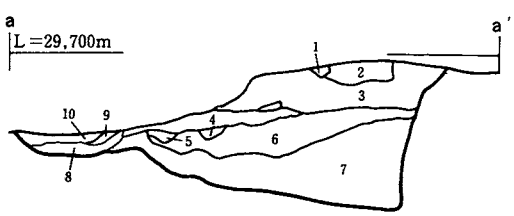
No.	PP₁	PP₂
直　径	30×24	25×—
深　さ	20	38





b－b′
1．5 Y R5/8明赤褐色．黒色土を含む焼土。
2．5 Y R3/6暗赤褐色．
3．10Y R2/3黒褐色．黄褐色土との混土。

c－c′
1．10Y R3/2黒褐色。
2．10Y R4/6褐色。



a－a′
1．10Y R2/2黒褐色．
2．10Y R2/3黒褐色．焼土粒を含む。
3．10Y R3/2黒褐色．焼土粒・炭化物粒を含む。
4．7.5Y R2/3極暗褐色．焼土粒ブロックを含む。
5．5 Y R4/8赤褐色．ローム粒を含む。
6．10Y R3/4暗褐色．焼土粒・炭化物粒を含む。
7．7.5Y R4/4褐色．ローム粒を含む。
8．5 Y R5/8暗赤褐色．燃焼部焼土。
9．7.5Y R5/8明褐色。
10．7.5Y R4/6褐色．焼土粒をまばらに含む。

図36　E３－ｙ－１住居跡

時期　住居形態などから第III期に属する。

Ｅ３－ｙ－２住居跡（図37、図版35）

平面形　隅丸台形状（推定）　**規模**　南北方向4.9～6.0m　**主軸方向**　Ｎ－68°－Ｅ

埋土　全体に黒色～黒褐色土を基調とし、最下部及び各壁際に暗褐色～褐色土を含んでいる。火山灰の堆積は全く見られない。部分的に焼土粒、炭化物粒を含む。

壁　南壁は緩やかに外傾し、その他は直立ぎみに外傾する。壁高は18～28cm。

床面　全体規模の黒色土の貼り床を持つ。床面は全体に硬く締まっている。中央部は、ほぼ平坦で、壁近くになるに従ってわずかに傾斜している。比高差は大きいところでも８cm程度である。

炭化材・焼土　検出されていない。

柱穴　PP_1、PP_2の２個検出された。PP_1の平面形はだ円形に近く、深さは18cmを測る。PP_2は円形で深さ18cmである。配置等は不明である。

土坑　Ｐ１の１基のみ検出され、位置は南壁中央付近である。平面形は39×44cmの円形で、深さは20cmである。機能等については不明である。

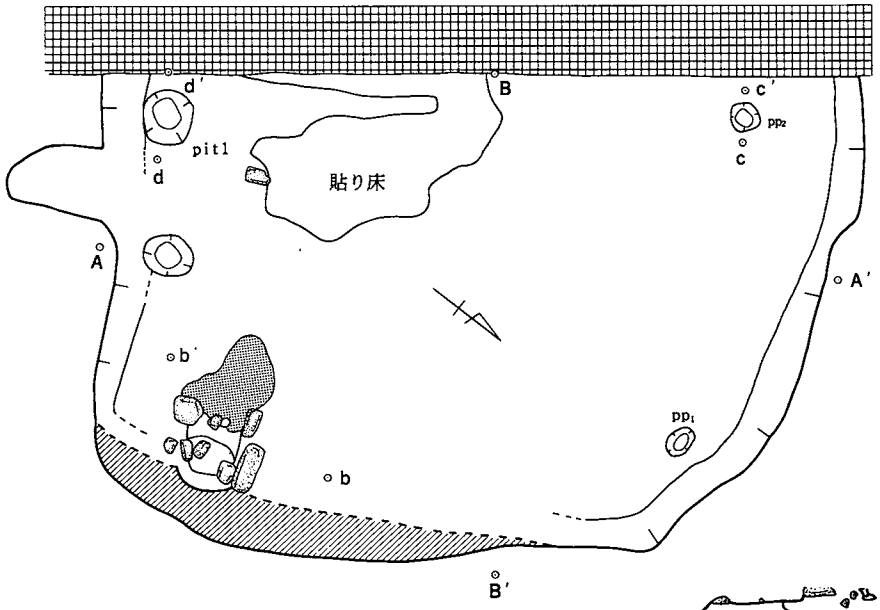
カマド　〈位置〉　東壁南東隅付近　〈主軸方向〉　Ｎ－68°－Ｅ

〈本体〉　袖部の構成礫、土製支脚、燃焼部焼土などから、残存状況は比較的良いが袖部を構成していたと思われる礫が散乱している。右側の袖は18×７cmの円礫と20×23cmの円礫が使用時の原位置を保ったまま検出された。その付近には、３～４個余りの円礫が崩落しており、これらも袖部の構成礫だったものと考えられる。左袖部は、焚口側から23×11cmの円礫、40×16cmの長方形の円礫、17×11cmの円礫が検出され、ともに地山を掘り込んで埋め込まれている。左右袖ともに一部にシルト質の黒色土の貼り付けが見られた。燃焼部焼土は44×72cmの不整形を呈する比較的規模が大きいもので、厚さは最大10cmである。土製支脚は、円筒状のもので、その焼土の最も奥に据えられている。

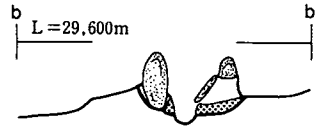
〈煙道部・煙出し部〉　燃焼部焼土の奥側10cmほどのところに煙出し部の小ピットがあり、煙道部は短くほとんどないに等しい。その小ピットは、煙道部の底面から15cm掘り込まれ、外傾しながら立ち上がる。煙道～煙出し部の総長は60cmほどと短いが、何らかの理由により、煙道部を長くできなかったものと考えられる。

重複する遺構　カマドの真下にＥ３－ｙ陥し穴遺構がある。

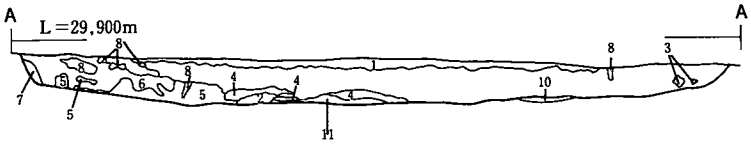
時期　出土遺物・住居形態から第III期に属する。

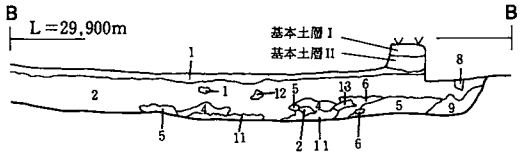


a－a′
1．10Y R2/3黒褐色．暗褐色土粒を含む。
2．5Y R4/4にぶい赤褐色．
3．10Y R3/3暗褐色．
4．7.5Y R3/4暗褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
5．5Y R5/8明赤褐色．燃焼部焼土。
6．7.5Y R4/4褐色．焼土粒を含む。
7．10Y R2/2黒褐色．



b－b′
1．10Y R3/3暗褐色．焼土粒を少量含む。
2．5Y R5/8明赤褐色．燃焼部焼土。
3．10Y R3/4暗褐色．焼土粒を含む。





A－A′・B－B′
1．10Y R2/1黒色．草木根含む。
2．10Y R3/2黒褐色．焼土粒．炭化物粒を含む。
3．10Y R4/4褐色．地山崩壊土
4．7.5Y R2/3極暗褐色。
5．10Y R4/6褐色．
6．10Y R3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
7．10Y R4/3にぶい黄褐色．炭化物粒．黄褐色土粒を含む。
8．10Y R5/6黄褐色．黒褐色土を含む。
9．10Y R3/3暗褐色．混土。
10．2.5Y R4.8赤褐色．貼り床下の焼土。
11．10Y R5/6黄褐色．
12．5Y R4/6赤褐色．ブロック状。
13．10Y R3/3暗褐色．褐色土との混土。

ピット

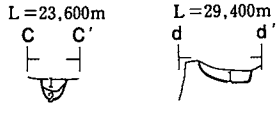
No	P_1
開口径部	39×44
底部径	22×26
深さ	19

柱穴

No	PP_1	PP_2
直径	20×25	24×24
深さ	18	18

カマド

本体	長さ	69
	幅	72



c－c′
1．10Y R3/2黒褐色．
2．10Y R4/6褐色．

d－d′
1．10Y R3/2黒褐色．黄褐色土を含む。

図37　E 3－y－2住居跡

Ｅ４－ｄ住居跡（図38、図版36）

調査区南東部の住居跡が集中する地域の北側に位置し、南東にＥ４－ｈ住居跡、東にＥ３－ｙ住居跡、北西にＦ３－ｕ住居跡、Ｆ４－ａ住居跡状遺構が隣接している。Ⅲ層上面で十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰の混入する黒褐色土が輪郭として検出された。木根がその付近にあり平面プランがおさえにくかった。なお、検出面に焼土が分布していた。

平面形　隅丸方形　**規模**　4.9×4.9m　**主軸方向**　Ｎ－9°－W

埋土　上位に黒～黒褐色土、中位～下位にかけて暗褐色土が卓越する。火山灰は量的に半々で上位～中位に凹レンズ状に堆積している。上位の黒褐色土中には粘土質の焼土が含まれるが、焼失時のものかは不明である。

壁　東壁、西壁は外傾する。南壁、北壁は緩やかに外傾するが、後者は壁余中に段を持つ。壁高は40～48cm。

床面　全体に軟らかく踏みしめられた部分はない。東西方向は平坦であるが南北方向では北側がやや下がる。

炭化材・焼土　炭化材はカマド付近に２片、焼土は小規模なものを含めると６カ所ほど認められることから、焼失住居跡と考えられる。

柱穴　PP_1～PP_6の６個検出されているが、確実に住居跡に伴うと考えられるのはPP_1～PP_4である。その４個の配置は四角形であり、平面形は総て円形である。PP_5・PP_6は北東隅と南東隅にあり、深さはPP_1～PP_4よりも大きい。PP_1～PP_4を主柱穴とし、PP_5・PP_6は副柱穴である可能性も考えられる。深さは48～74cmでPP_2が最も深い。

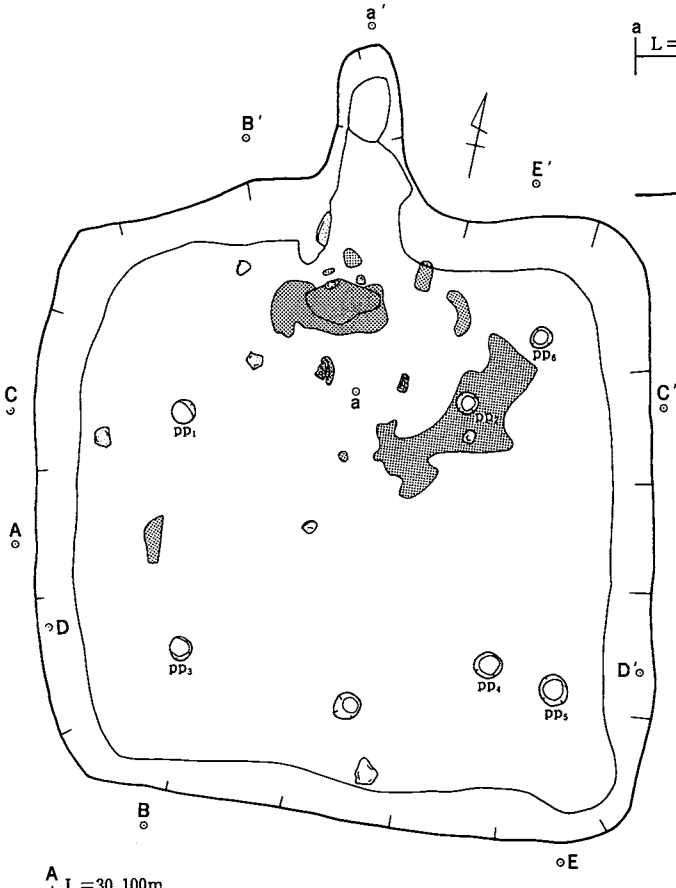
カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉　Ｎ－9°－W

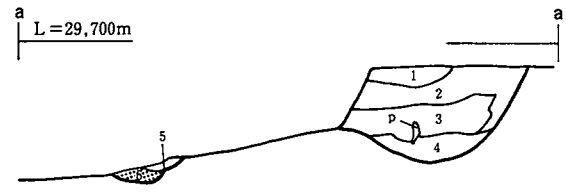
〈本体〉　西側の袖の一部と支脚と思われる粒径10cmほどの円礫２個と燃焼部焼土が残るだけで残存状態はよくない。袖部は地山を削り出した後に内壁に長方形（28×10cm）の角礫を埋め込んでいる。燃焼部の焼土は60×35cmのだ円形で厚さは８～12cmである。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、煙出し部までの長さが比較的短い。底面は約12°の角度で緩やかに上がり、煙出し部のピットに続く。ピットの掘り込みは他の住居跡の煙出し部のピットより浅く大きめである。埋土は黒褐色土が主体で、焼土粒、炭化物粒を含む。

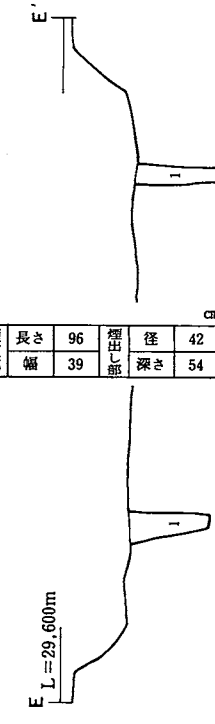
重複する遺構　なし

時期　出土遺物住居形態から第Ⅱ期に属する。



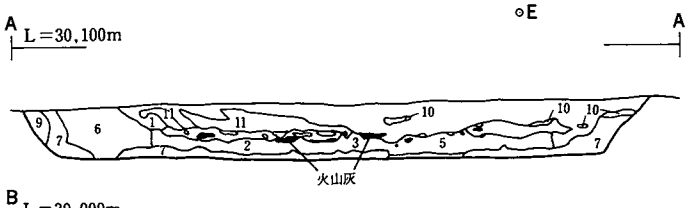


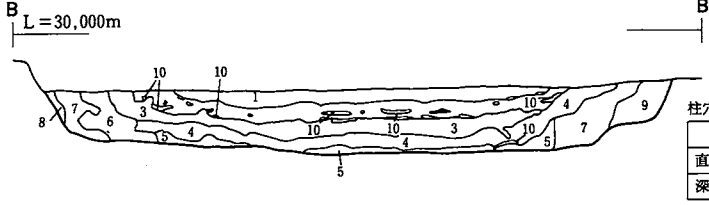
a－a'
1．10YR3/2黒褐色．木根多し。
2．10YR2/2黒褐色．灰を含む。
3．10YR2/1黒色．灰を含む。
4．7.5YR2/2黒褐色．炭化物粒．焼土粒．灰を含む。
5．7.5YR4/4褐色．焼土を全体に含む。
6．5YR4/4赤褐．燃焼部焼土。焼成やや良。



カマド　cm

本体	長さ	—	煙道部	長さ	96	煙出し部	径	42
	幅	102		幅	39		深さ	54

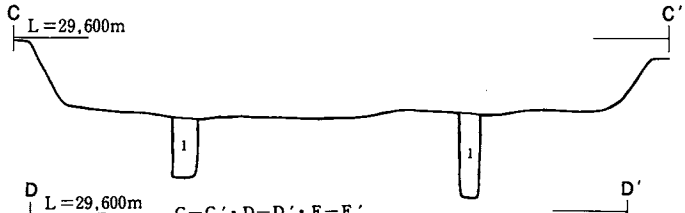


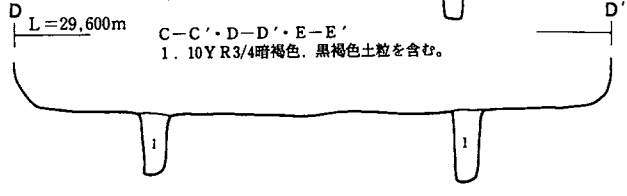


柱穴　cm

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
直　径	18×20	18×18	20×20	22×23	25×23	17×18
深　さ	48	67	50	58	64	74

A－A'・B－B'
1．10YR2/3黒褐色．草木根含む。
2．10YR2/2黒褐色．十和田a．白頭山火山灰を含む。
3．10YR1.7/1黒色．わずかに十和田a火山灰を含む。
4．10YR2/3黒褐色．暗褐色土のブロックを含む。
5．10YR3/4暗褐色．黄褐色土を含む。
6．10YR3/3暗褐色．砂質シルト。
7．10YR3/2黒褐色．砂質シルト。
8．10YR4/4褐色．地山崩壊土。
9．10YR3/3暗褐色．砂質土。
10．5YR4/6赤褐色．焼火時の焼土。
11．7.5TR5/6明褐．粘土質土。黒褐色土を含む。





C－C'・D－D'・E－E'
1．10YR3/4暗褐色．黒褐色土粒を含む。

図38　E4－d住居跡

Ｅ４－ｇ住居跡（図39、図版37）

調査区南東部の住居跡群の中の１棟で、南のＥ３－ｕ住居跡、北のＥ４－１住居跡、北西のＥ４－ｈ住居跡の３棟に囲まれている。II層まで掘り下げた段階で、多量の十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰が検出されたため住居跡とした。火山灰を頼りにプランをとったが、その入り方がまばらであったため、掘り上がりは、当初予想したものとは異なった。

平面形　隅丸方形　**規模**　3.7～3.9×3.9m　主軸方向　N－28°－W

埋土　上位に褐色土があるほかは、黒褐色～暗褐色土を基調とする。壁際は褐色土が占める。火山灰は上位～中位の黒色～黒褐色土中にレンズ状に堆積し、量的には白頭山降下火山灰のほうが多い。

壁　南壁は直立するが東壁・西壁は外傾ぎみである。北壁は更に緩やかに外傾している。壁高は48～59cmである。

床面　全体が軟らかく、締まりもない。小さな凹凸はあるが平坦であり西側にやや傾斜している。

炭化材・焼土　焼土が１カ所認められるが、炭化材はない。

柱穴　土坑　ともに検出されていない。

カマド　〈位置〉　北西壁中央　〈主軸方向〉　N－28°－W

〈本体〉　本体部奥壁から煙道部にかけて、木根による撹乱を受けているが、残存状態は比較的良好である。袖部は地山の黄褐色土を削り出したもので一部は破壊されている。最大粒径22cmと24cmの円礫が２個奥壁に並ぶが、その大きさや位置から袖部の芯材や支脚として使用されたものとは考え難い。燃焼部焼土は28×22cmのだ円形を呈し、厚さは最大５cmである。その上を淡い色調の焼土が被っている。

〈煙道・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は途中２つの段を持ちながら約20°の角度で緩やかに上がり、煙出し部手前で平らになる。煙出し部は、開口部が23×31cmの円形ピットになる。埋土は木根で撹乱されている。

重複する遺構　南東隅が灰と焼土を伴うＥ４－ｆ土坑に切られている。

時期　出土遺物と住居形態・埋土の状況から第Ｉ期に属する。

Ｅ４－ｈ住居跡（図40、図版38）

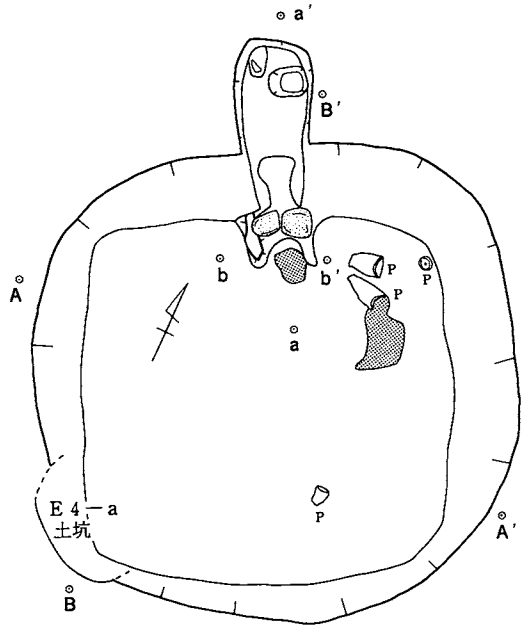
調査区南東部の住居跡群の中央に位置し、北西、北東、南の三方向を他の住居跡で取り囲まれた形で存在する。重複関係はない。II層下部まで掘り下げた段階で十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰をわずかに含む黒褐色土の広がりとして検出された。

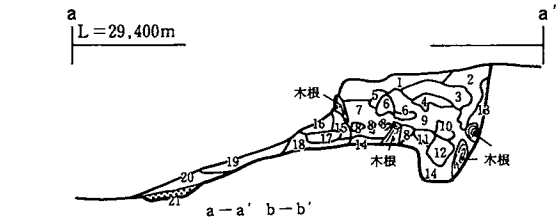
平面形　不整隅丸方形（カマド側壁がやや張り出す）　**規模**　3.6～3.9×3.7～4.1m

主軸方向　N－73°－E　**埋土**　全体に黒褐色土を主体とする。壁寄りは暗褐色～黄褐色土、床面近くの一部は褐色土が構成している。埋土断面図に示されていないが、火山灰が上位の黒褐色土中に微量に含まれている。

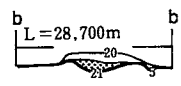
壁　南壁が外傾するほかは直立ぎみである。壁高は42～54cm。

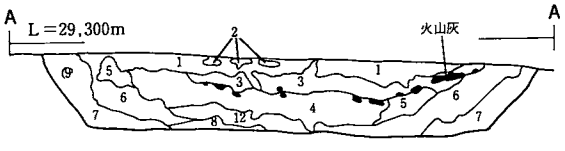
床面　全体によく締まり硬めだが、比較的大きい凹凸が見られる。比高差は大きいところで13cm程度である。住居跡南西隅寄りには、1.6×0.7m ほどの範囲で灰黄褐色の粘土が貼り床として敷き詰められている。暗褐色土と混じる箇所もあるが、純粋な粘土の部分で厚さは２～４cmである。また、床面直上に８～10cm角の粘土塊が２カ所認められるが、貼り床に使用された粘土と同質のものと考えられる。後述のロクロピットとの関連から、土器制作に使用された粘

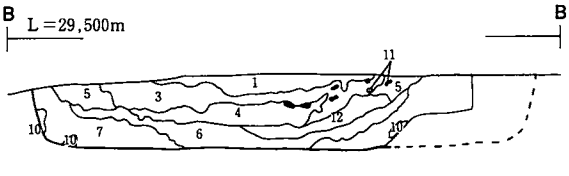




a－a′　b－b′
1．10YR5/1 褐灰色土　ローム粒を含む。
2．10YR4/1 褐灰色土　ロームブロックを含む。
3．7.5YR4/2 灰褐色土　焼土粒を含む。
4．10YR1.7/1 黒色土　焼土粒を少量含む。
5．10YR3/1 黒褐色土　焼土粒、ローム粒をわずかに含む。
6．5YR6/8 橙色土　焼土ブロック。
7．7.5YR4/2 灰褐色土
8．2.5YR2/4 極暗赤褐色土
9．2.5YR2/3 極暗赤褐色土　焼土粒を多量に含む。
10．10YR4/1 褐灰色土　ローム粒を含む。
11．10YR5/4 にぶい黄褐色土　ローム粒を多量に含む。
12．2.5YR2/4 極暗赤褐色　焼土粒を含む。
13．7.5YR4/2 灰褐色土　ロームブロックを含む。
14．10YR7/8 黄橙色土
15．10YR6/6 明黄褐色　ローム粒を多量に含む。
16．2.5YR5/4 にぶい赤褐色土　焼土粒を多量に含む。
17．2.5YR2/4 極暗赤褐色土　灰混じる。
18．10YR5/4 にぶい黄褐色土　ローム粒を含む。
19．7.5YR5/2 灰褐色土
20．5YR4/6 赤褐色土　焼成不良
21．5YR5/8 明赤褐色土　燃焼部焼土。しまり有。





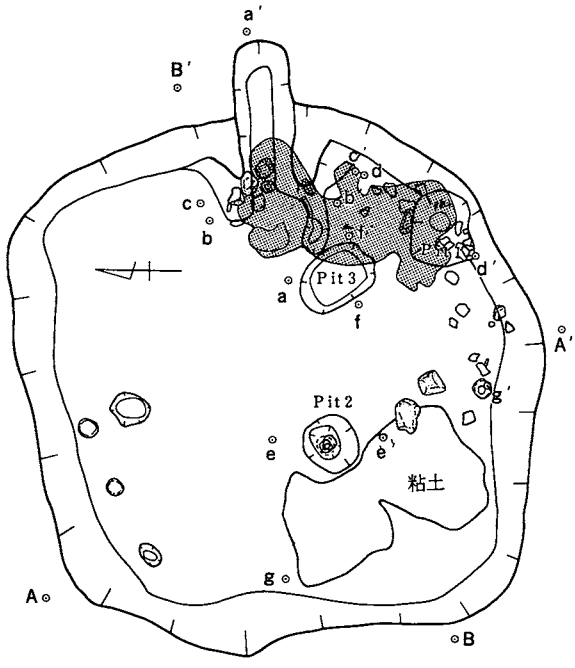


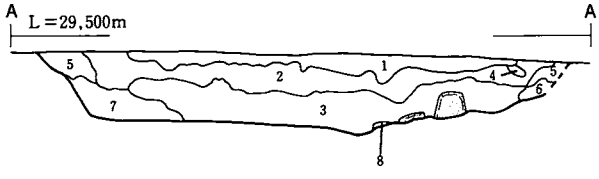
カマド　　cm

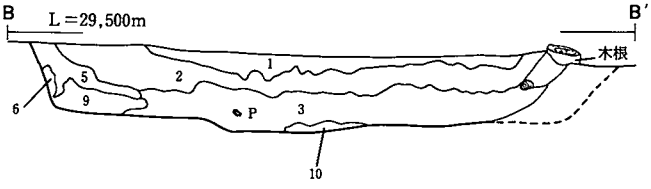
本体	長さ	60	煙道部	長さ	138	煙出し部	径	60
	幅	54		幅	57		深さ	58

A－A′　B－B′
1．10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物粒を少量含む。
2．10YR4/6 褐色土　暗褐色土を含むブロック。
3．10YR2/3 黒褐色土　十和田ａ、白頭山火山灰、焼土粒を含む。
4．10YR2/1 黒色土　十和田ａ火山灰を含む。
5．10YR2/2 黒褐色土　十和田ａ火山灰を含む。
6．10YR3/3 暗褐色土　わずかに十和田ａ火山灰を含む。
7．10YR3/4 暗褐色土　黄褐色土粒を含む。
8．10YR5/6 黄褐色土　黒色土粒を含む。
9．10YR4/4 褐色土
10．10YR4/6 褐色土　地山崩壊土
11．10YR3/3 暗褐色土　焼土粒を含むブロック。
12．10YR2/2 黒褐色土　暗褐色土粒を含む。

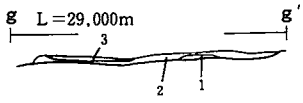
図39　E４－g 住居跡



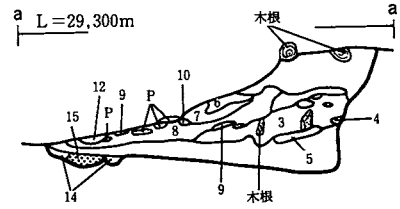


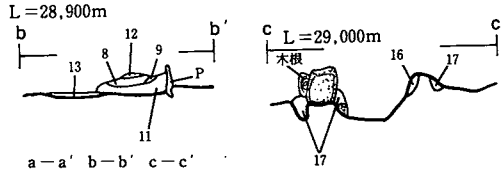


A－A′ B－B′
1．10YR2/2黒褐色．木根を含む。
2．10YR3/2黒褐色．黄褐色土粒を含む。
3．10YR2/3黒褐色．炭化物粒をわずかに含む。
4．10YR2/1黒色
5．10YR3/3暗褐色．地山混じり。
6．10YR5/6黄褐色．地山崩壊土。
7．10YR3/4暗褐色．黄褐色土を粒状に含む。
8．10YR4/3にぶい黄褐色．粘土まじる。
9．10YR4/4褐色．地山混じり。
10．10YR4/6褐色．粘土混じる。

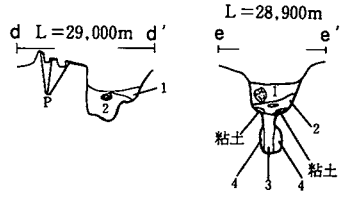


g－g′
1．10YR3/3暗褐色．3層の粘土をまばらに含む。
2．10YR4/6褐色．地山。
3．10YR6/2灰黄褐色．粘土。





a－a′ b－b′ c－c′
1．10YR3/3暗褐色．黄褐色土粒を含む。
2．7.5YR4/4．褐色．白頭山火山灰をわずかに含む。
3．7.5YR2/2．黒褐色．白頭山火山灰．焼土のブロックを含む。
4．10YR4/6褐色．地山崩壊土。
5．10YR5/6黄褐色．
6．10YR3/4暗褐色．焼土粒を含む。
7．10YR2/3黒褐色．モザイク状。
8．10YR4/3にぶい黄褐色．焼土粒．炭化物粒を含む。
9．5YR4/6赤褐色．焼土ブロック。
10．10YR5/8黄褐色．焼土粒を含む。
11．10YR3/4暗褐色．黄褐色土粒を含む。
12．7.5YR3/2黒褐色．炭化材を含む。
13．7.5YR明褐色．焼土粒をまばらに含む。
14．10YR3/3暗褐色．堀り方埋土？
15．5YR4/8赤褐色．燃焼部焼土。
16．10YR3/3暗褐色．焼土粒を含む。
17．10YR4/4褐色．袖構築土。



d－d′
1．10YR4/6褐色．黄褐色土粒を含む。
2．10YR4/4褐色．炭化物粒を含む。

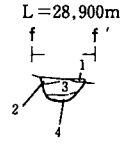
e－e′
1．10YR3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
2．10YR2/3黒褐色．土器片．炭化材を含む。
3．10YR4/6褐色．しまりなし。
4．10YR5/6黄褐色．黄褐色．堀り方埋土。
5．10YR6/2灰黄褐色．粘土。

カマド　　cm

本体	長さ	60	煙道部	長さ	78	煙出し部	径	42
	幅	90		幅	45		深さ	72

ピット　　cm

No.	P_1	P_2	P_3
開口部径	45×62	44×46	64×44
底部径	16×18	(22×26) 8×9	44×32
深さ	40	65	19



f－f′
1．7.5YR3/3暗褐色．焼土粒．炭化物粒を含む。
2．10YR5/6黄褐色．ローム粒を含む。
3．10YR4/4褐色．黒色土．焼土粒を全体に含む。
4．10YR4/6褐色．地山混じり。

図40　E4－h住居跡

土のうち粗悪なものか、土器製作に使用しなかったものを貼り床として用いたと考えられる。

炭化材・焼土　南東隅（カマド右側）に広範囲に渡り焼土が分布する。多数の土器とともにそれを含む形で検出された。くすんだ色調の焼土で炭化物粒を含む。他には炭化材、焼土とも認められず、焼失に伴う焼土であるか、またどのような性格のものかは不明である。

柱穴　柱穴状ピットが2個検出されているが、いずれも位置などから柱穴と認められない。

土坑　P1～P3の3基確認された。P1は南東隅に位置し、焼土を除去した後に検出されたものである。隅丸長方形状を呈し、深さは中心部で40cm弱である。埋土に土器片や円礫を含むが機能は不明である。

P2は、数多くの土器や粘土塊が床面に散在することから、この住居跡を土器工房跡と予想した後に検出されたロクロピットである。ロクロ回転台を据えるためのもので住居跡の中央部からわずかに南西隅寄りにある。開口部径約45cm、底部径22×26cm、深さ35cmのすり鉢状の断面形を呈する。底部には、径約10cm、深さ30cmの小ピットを伴うが、ロクロ回転板の心棒を据えるための小孔であろう。この小孔の埋土は締まりのない褐色土で腐植土でないため、廃棄された時には、ロクロ回転板の心棒は引き抜かれていたと思われる。掘り方を伴うが、地山との区別はほとんどつかない状況である。なお、ピット底部には新鮮な白色粘土が貼り付けられており、心棒のおさえとして用いたものと考えられる。

P3は、カマド右袖付近にあり長楕円形を呈する。埋土には焼土粒、炭化物粒を含んでいる。位置的に貯蔵穴に類するものと思われる。

カマド　〈位置〉　東壁わずかに南東隅寄り　〈主軸方向〉　N—73°—E

〈本体〉　両袖部（芯材の甕の破片や円礫を含む）と燃焼部焼土が残存する。右袖は壁際の地山を削り出した後に口縁部の残る土師器甕の破片を芯材として入れ、褐色の砂質シルトで貼り付けて構築している。甕の破片は、口縁部を下にして埋め込まれている。左袖は、粒径11～15cmほどの円礫と角礫を芯材にして同様の土を貼り付けている。焚口部側の左袖は、一部破壊されている。燃焼部の焼土は33×18cmの長楕円形で厚さは最大8cmである。焼成は比較的良好だが規模は小さめである。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は約7°の角度で緩やかに下がり煙出し部に至る。煙出し部には、特に掘り込みはなく、煙道の下がりきったところからほぼ垂直に壁が立ち上がる。埋土には中位に白頭山降下火山灰の小ブロックが含まれ、上位は木根による攪乱を受けている。

時期　出土遺物と住居形態から土器工房住居跡と考えられる。第IV期に属する。

Ｅ４－Ｉ住居跡（図41・42、図版39）

調査区南東部の住居跡群の中の１棟で、南にＥ４－ａ住居跡、西にＥ４－ｈ住居跡が隣接する。東方向約５cm付近にはＤ４－ｔ住居跡がある。Ⅲ層上面で黒褐色の方形に近い輪郭で検出された。

平面形　隅丸方形　**規模**　3.9～4.2×4.0～4.1m　〈主軸方向〉　Ｎ－60°－Ｅ

埋土　上位～中位にかけては、黒色～黒褐色土を基調とし、下位は人為的な埋め戻しによるものと考えられる黒褐色土～褐色土が卓越する。その黒褐色土中には、十和田ａ降下火山灰、白頭山降下山灰が微量認められる。褐色土は基本土層Ⅳ層起源のものと思われる。

壁　総て直立ぎみに立ち上がる。壁高は43～63cm。

床面　多少の凹凸がある。床面中央部は踏みしめられたためか硬く締まる。比高差は７～８cmである。

炭化材・焼土　焼失に伴う焼土と思われるものが数カ所に散布する。いずれも床面上である。炭化材は１片も認められない。

柱穴　柱穴状のピットが４個ほど検出されたが、いずれも柱穴にはあたらない。

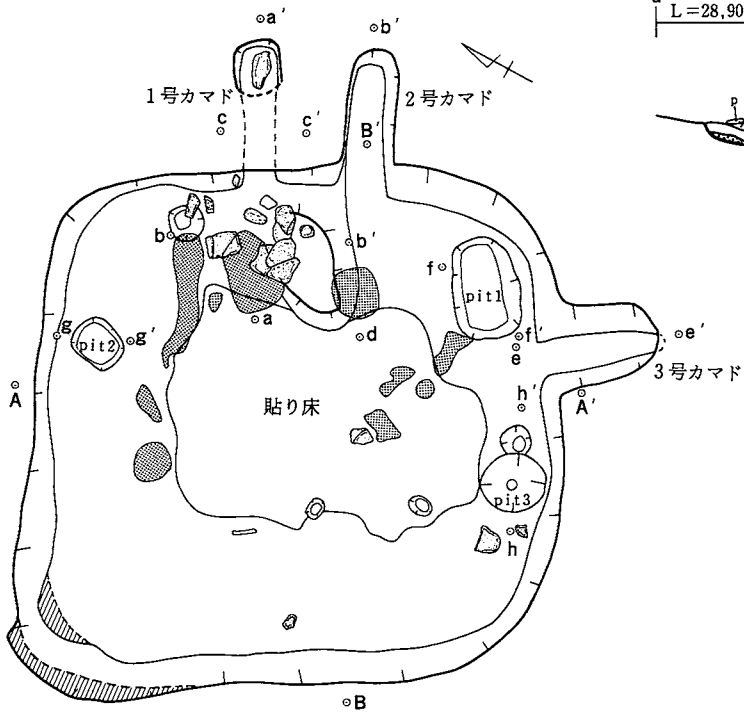
土坑　Ｐ１～Ｐ３の３基検出された。Ｐ１は、東隅付近にあり、平面形は隅丸長方形を呈する。３号（南東）カマドの袖部を壊してつくられており、１号カマドか２号カマド使用時と同時期に存在した貯蔵穴と考えられる。Ｐ２は、北隅から、わずかに西隅に寄った西壁沿いにあり、平面形は円形に近い。深さは21cmを測る。機能は不明である。Ｐ３は、３号カマドの右側にあり、３号カマドと同時期に使用された貯蔵穴であろう。平面形は円形で深さ18cmのものである。そのすぐ左側には柱穴状のピットが認められる。

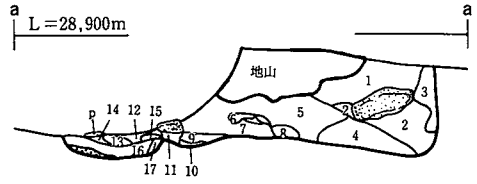
カマド　北東壁に２基、南東壁に１基が検出された。残存状況などから３号（南東）カマドは最も古期のもので、一番新しいカマドは１号（北東壁の北側）カマドである。古い順に挙げれば３号→２号→１号の順番になる。

○１号カマド　〈位置〉　北東壁中央からわずかに北隅寄り　〈主軸方向〉　Ｎ－59°－Ｅ

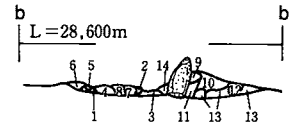
〈本体〉　右袖の一部と構成礫と思われる礫群、燃焼部焼土などが残存する。右袖は広範囲に渡っており、内壁には22×18cmの長方形の凝灰岩などが埋め込まれている。左袖は数個の角礫が散乱するだけで破壊されている。袖の掘り方と思われる小ピットがあるが断定できない。支脚と思われる円礫は18×９cmのもので、燃焼部焼土の奥側に据えられている。焼土は54×50cm、厚さ７～10cmの規模で焼成は良好である。

〈煙道部・煙出し部〉　くり貫き式の煙道で底面は住居跡床面とほぼ同じ高さのまま煙出し部に移行する。煙出し部には小ピットは伴わない。各埋土にはローム粒や焼土粒が比較的多量に含まれている。

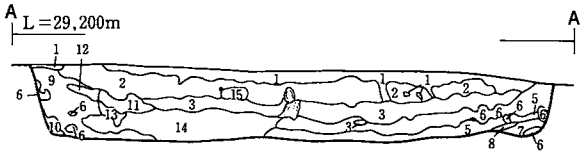


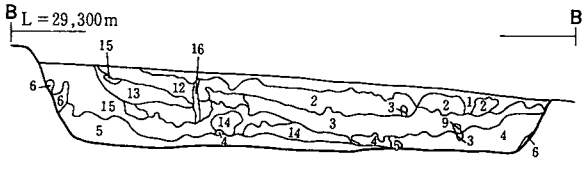


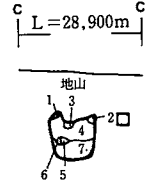
a－a′
1．10YR4/3にぶい黄褐色．ローム粒を含む。
2．10YR4/2灰黄褐色．
3．10YR5/4にぶい黄褐色．
4．10YR6/6明黄褐色．ロームブロックを含む。
5．10YR6/3にぶい黄橙色．ローム粒を含む。
6．5YR6/6橙色．焼土。
7．10YR4/1褐灰色。
8．10YR4/2灰黄褐色．
9．19YR5/2灰黄褐色．ローム粒を含む。
10．2.5Y8/8黄色．
11．5YR6/3にぶい橙色．焼土粒を含む。
12．2.5Y6/3にぶい黄色．焼土粒．ローム粒を含む。
13．2.5Y5/2暗灰黄色．
14．2.5Y7/3浅黄色．ローム粒を多量に含む。
15．10YR6/2浅黄色．焼土粒．ローム粒を含む。
16．2.5YR6/8橙色．燃焼部焼土。
17．2.5YR5/1赤灰色．攪乱を受けた焼土。
18．2.5YR4/4にぶい赤褐色．燃焼部焼土。



b－b′
1．2.5Y8/8黄色．
2．5YR6/3にぶい橙色．焼土粒を含む。
3．5YR6/8橙色．焼土。
4．5YR5/3にぶい赤褐色．
5．10YR5/1褐灰色．
6．10YR6/2灰黄褐色．炭化物．焼土粒を少量含む。
7．10GY5/1緑灰色．攪乱。
8．2.5Y6/2灰黄色．ローム粒．焼土粒を含む。
9．10YR8/1灰白色．攪乱。
10．10YR6/2灰黄褐色．粘土．ローム粒に富む。
11．10YR7/8黄橙色．攪乱（地山）。
12．10YR7/4にぶい黄橙色．
13．10YR7/8黄橙色．

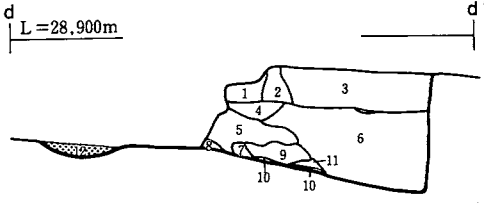






c－c′
1．10YR7/6明黄褐色．焼土粒を多量に含む。
2．10YR8/8黄橙色．ロームブロック。
3．5YR6/8橙色．
4．10YR6/3にぶい黄橙色．ローム粒を含む。
5．7.5YR7/8黄橙色．
6．5YR6/3にぶい橙色．
7．10YR4/2灰黄褐色．ローム粒．焼土粒を含む。

A－A′ B－B′
1．10YR2/3黒褐色．木根含む。
2．10YR3/2黒褐色．炭化物．焼土粒を含む。
3．10YR1.7/1黒色．炭化材を含む。
4．10YR3/4暗褐色．
5．10YR3/2黒褐色．十和田a．白頭山火山灰を含む。
6．10YR4/6褐色．地山崩壊土。
7．10YR3/4暗褐色．
8．10YR5/6黄褐色．
9．10YR3/3暗褐色．黄褐色土を含む。
10．10YR3/4暗褐色．黄褐色土のブロックを含む。
11．10YR2/2黒褐色．
12．10YR4/4褐色．炭化物粒を含む。
13．7.5YR4/4褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
14．10YR4/6褐色．基本土層Ⅳ層起源か？
15．10YR4/5褐色．
16．10YR3/2黒褐色．木根痕。



d－d′
1．2.5YR6/3にぶい黄色．ローム粒を含む。
2．2.5Y6/3にぶい黄色．
3．2.5Y5/3黄褐色．ロームブロック有。
4．2.5Y7/6明黄褐色．
5．2.5Y7/6明黄褐色．白粘土含む。
6．2.5Y6/4にぶい黄色．
7．2.5Y5/1黄灰色．
8．2.5Y6/1黄灰色．
9．2.5Y6/2灰黄色．ローム粒．白粘土含む。
10．2.5Y5/1黄灰色．
11．2.5Y7/6明暗褐色．
12．2.5YR6/8橙色．燃焼部焼土。

図41　E４－Ⅰ住居跡(1)

○２号カマド　〈位置〉北東壁中央からわずかに南隅寄り　〈主軸方向〉　N—59°—E

〈本体〉　２号カマドは１号カマドの精査終了後に床面をはがしたところ、焼土が検出され、存在が確認されたものである。本体で残存するのは燃焼部焼土だけである。平面形は37×38cmの隅丸方形で厚さは６～８cmである。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は壁際から約10°の角度で緩やかに傾斜して下がり煙出し部に続く。煙出し部は小ピットを持たず、底面はほぼ直角に立ち上がる。埋土には白粘土やローム粒が混じっている。

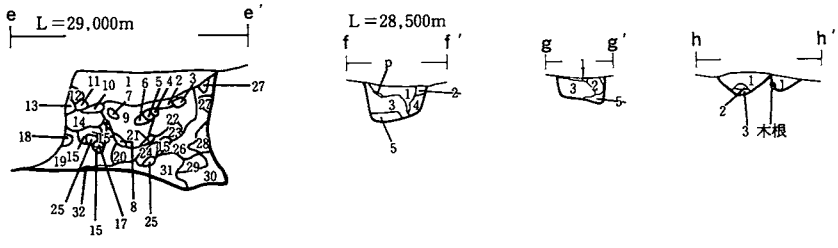
○３号カマド　〈位置〉　南東壁中央からわずかに東隅寄り　〈主軸方向〉　N—30°—E

〈本体〉　すべてつくりかえのため破壊されている。左袖があったと思われる部分にＰ１がある。

〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式であるが、底面は床面と同じ高さで煙道の中間部まで続いた後に、そこから約20°の角度で下がり煙出し部に至る。煙出し部の底面はオーバハングして立ち上がる。埋土には焼土粒が比較的多く含まれている。

重複する遺構　南西壁とほぼ平行してＥ４－１陥し穴状遺構がある。

時期　出土遺物や住居形態から第Ⅲ期に属する。



e－e'
1．10YR4/1褐灰色．ローム粒を含む。
2．10YR5/1褐灰色．炭化物粒をわずかに含む。
3．2.5YR6/8橙色．焼土ブロック。
4．5YR5/4にぶい赤褐色．焼土粒を含む。
5．5YR5/4にぶい赤褐色．
6．10YR6/6明黄褐色．ロームブロック。
7．10YR8/1灰白色．灰？
8．2.5Y8/8黄色．ロームブロック。
9．10YR6/4にぶい黄褐色．ローム粒を含む。
10．2.5Y7/4浅黄色．炭化物を少量含む。
11．2.5Y6/2灰黄色．
12．2.5Y5/1黄灰色．
13．10YR3/1黒褐色．
14．10YR5/1褐灰色．ローム粒をわずかに含む。
15．7.5YR6/6橙色．
16．7.5YR5/2灰褐色．ローム粒を含む。
17．10YR8/6黄橙色．ロームブロック。
18．10YR6/1褐灰色．ローム粒を少量含む。
19．10YR6/4褐灰色．
20．7.5YR5/4にぶい褐色．
21．7.5YR4/1褐灰色．
22．10YR6/3にぶい黄橙色．ローム粒を含む。
23．19YR5/1褐灰色．
24．10YR4/1褐灰色．
25．7.5YR4/1褐灰色．
26．7.5YR4/1褐灰色．
27．10YR8/8黄橙色．ロームブロック。
28．2.5Y6/4にぶい黄色．ローム粒に富む。
29．2.5Y5/2暗灰黄色。
30．2.5Y7/8明黄褐色。
31．2.5Y5/3黄褐色．ローム粒を含む。
32．2.5Y8/8黄色．地山崩壊土。

f－f'　g－g'
1．10YR5/1褐灰色．ローム粒を含む。
2．10YR6/1褐灰色．
3．10YR6/3にぶい黄橙色．ローム粒に富む。
4．10YR7/6明黄褐色．
5．10YR8/8黄橙色．地山まじり。

h－h'
1．10YR5/1褐灰色．白粘土を含む。
2．10YR6/3にぶい黄橙色．ローム粒を含む。
3．10YR8/8黄橙色．焼土粒を含む。

ピット　cm

No	P1	P2	P3
開口部径	54×82	40×42	51×48
底部径	32×70	28×33	9×9
深さ	28	21	18

１号カマド　cm

本体	長さ	102	煙道部	長さ	108	煙出し部	径	36
	幅	72		幅	36		深さ	48

２号カマド　cm

煙道部	長さ	114	煙出し部	径	60
	幅	39		深さ	66

３号カマド　cm

煙道部	長さ	96	煙出し部	径	54
	幅	60		深さ	63

図42　Ｅ４－１住居跡(2)

Ｆ３－ｕ住居跡（図43・44、図版40）

調査区南東部の住居跡群の中で最も北側に位置するものである。北東には切り合っていないが、壁を共有する形でＦ４－ａ住居跡状遺構があり、南方向には軒を接してＥ３－ｙ住居跡がある。表土を除去したところ、44×16cmと50×22cmの褐色の粘土塊が２つ検出された。当初カマドの袖部として処理したが、精査を進めていく課程でこれからが煙道部の天井を構築していたものと判明したため住居跡としたものである。

平面形　隅丸不整形　**規模**　4.7×4.4～4.7m　**主軸方向**　Ｎ－32°－Ｗ

埋土　上位～下位まで黒褐色土が卓越する。壁際も同様である。炭化物粒、焼土粒がその黒褐色土中に多量に含まれている。火山灰の堆積は見られない。

壁　東壁が直立するほかは外傾する。北壁は立ち上がりが２段になっている。

床面　東西方向では中央部が高く、両壁側がわずかにくぼんでいる。その比高差は12cmである。全体的に細かな凹凸があるが、硬く締まっている。床面直上には十数個の角礫が散乱している。

炭化材・焼土　床面直上から20cmまでの範囲に多量の炭化材と大規模な焼土が分布する焼失住居跡である。炭化材は中央部からわずかに北西隅に寄った部分に、概ね放射状に散布している。その他には北西隅と北東隅に数片散布する。特に北西隅のものの中には、カヤ材と思われるススキの炭化物がある。全体では個々の炭化材が大きいのが特徴で、数的には角材と考えられるものと板材と考えられるものが半々ぐらいである。樹種鑑定の結果はクリが最も多く、ついでケヤキ、ナラ、スギである。焼土は中央部と南壁付近を除く各壁に沿う形で検出された。

柱穴　柱穴状ピットが２個検出されたが、位置的には柱穴とならないと思われる。

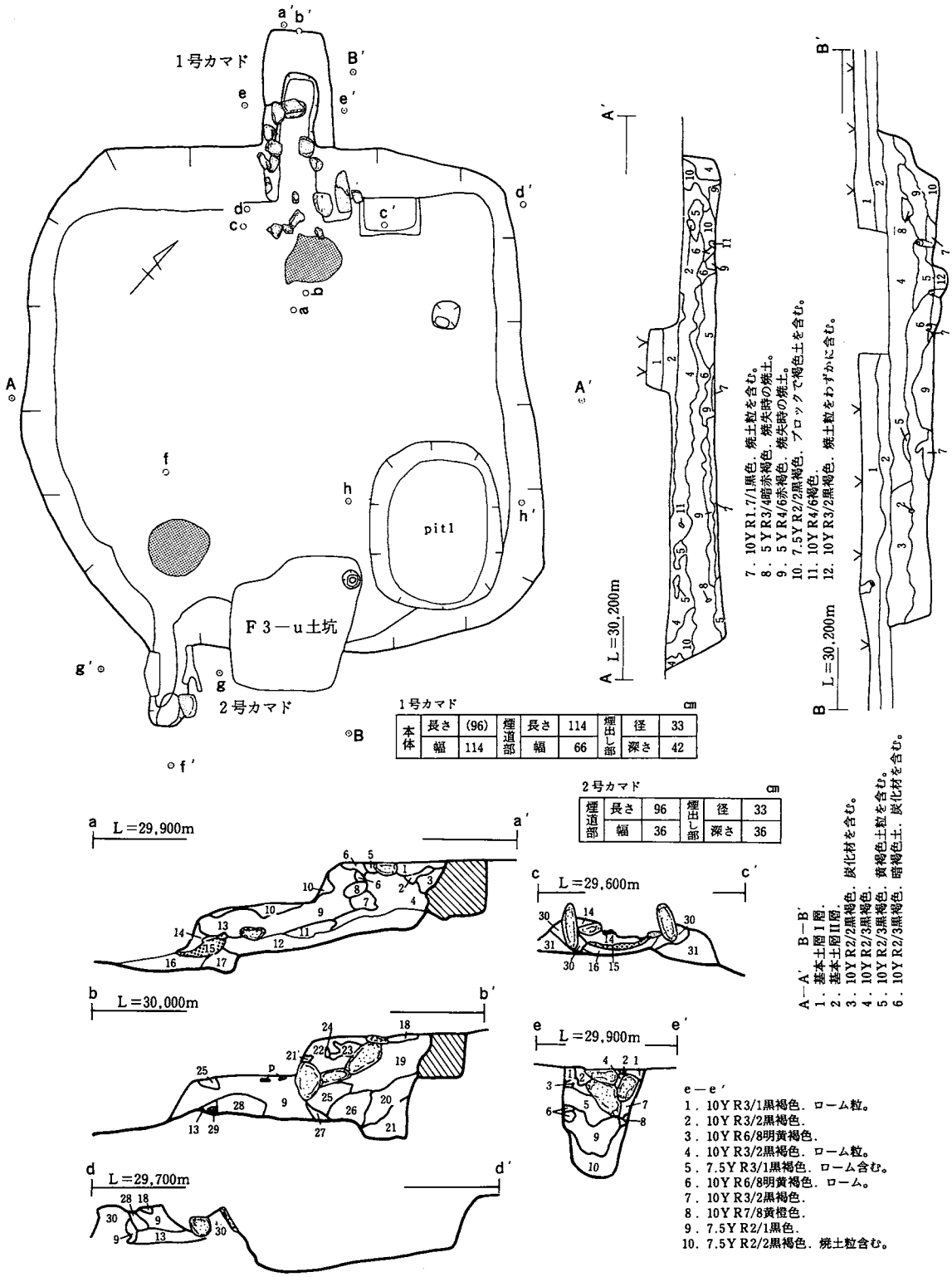
土塊　Ｐ１の１基検出された。南東隅に位置する大型の貯蔵穴と思われる土坑である。平面形は隅丸長方形で深さは39cmである。

カマド　北壁と南東壁に１基ずつ検出された。残存状況から新期のものは北壁のカマドと考えられる。北カマドを１号、南カマドを２号として記述する。

○１号カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉　Ｎ－32°－Ｗ

〈本体〉　残存状態は極めて良好である。袖部は左右ともに粒径10～40cm余りの３～４個の円礫や板状の礫を芯材として使用し、その後、暗褐色シルト質土を貼りつけている。焚口部付近には粒径10～18cmの角礫が４個あり、袖部から崩落したものと考えられる。支脚と思われる礫は10～７cmの円礫で壁際付近にある。燃焼部焼土は43×53cmの不整形で、厚さは８～10cmである。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、煙道両壁に円礫が埋め込まれているタイプである。左壁に粒径20cmほどのものが３個、右壁には１個検出された。埋土中にも円礫が崩れ落



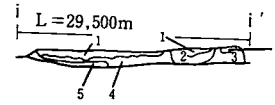
1号カマド　cm

本体	長さ	(96)	煙道部	長さ	114	煙出し部	径	33
	幅	114		幅	66		深さ	42

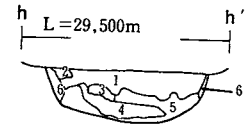
2号カマド　cm

煙道部	長さ	96	煙出し部	径	33
	幅	36		深さ	36

図43　Ｆ３－ｕ住居跡(1)



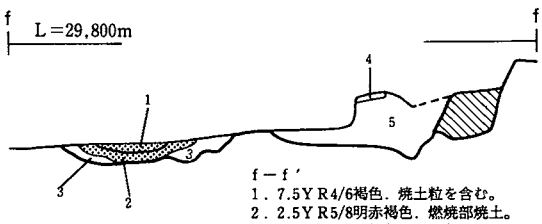
i－i′
1．5YR5/8明赤褐色．焼土を含む。
2．7.5YR4/6褐色．くすんだ焼土。
3．7.5YR4/4褐色．
4．5YR4/6赤褐色．
5．7.5YR4/6褐色．



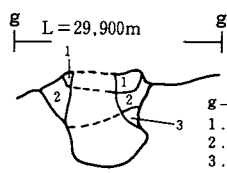
h－h′
1．10YR4/6褐色．黄褐色土．
2．10YR2/3黒褐色．炭化物粒を含む。
3．10YR3/4暗褐色．褐色土粒を含む。
4．10YR3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
5．10YR4/4褐色．黄褐色土との混土。
6．10YR5/6黄褐色．地山崩壊土。

ピット

No.	P1
開口部径	160×129
底部径	137× 96
深さ	39



f－f′
1．7.5YR4/6褐色．焼土粒を含む。
2．2.5YR5/8明赤褐色．燃焼部焼土。
3．7.5YR2/2黒褐色．黄褐色土との混土。
4．7.5YR3/4暗褐色．焼土粒を含む。
5．7.5YR2/3極暗褐色．焼土粒に富む。



g－g′
1．10YR4/6褐色．粘土質土。
2．10YR2/3黒褐色．焼土粒を含む。
3．10YR2/2黒褐色．炭化物．焼土粒を含む。

a－a′～d－d′
1．10YR3/4暗褐色．
2．10YR2/1黒色．
3．7.5YR4/3褐色．
4．10YR4/3暗褐色．
5．10YR3/2黒褐色．
6．10YR3/1黒褐色．
7．10YR7/8黄橙色．
8．10YR5/1褐灰色．
9．10YR4/1褐灰色．
10．10YR5/1褐灰色．
11．10YR6/8黄橙色．
12．5YR2/3極暗赤褐色．
13．7.5YR6/4にぶい橙色．
14．7.53/2黒褐色．
15．5YR4/8赤褐色．
16．2.5YR4/8明赤褐色．
17．10YR3/4暗褐色．
18．10YR6/8明黄褐色．
19．7.5YR3/1黒褐色．
20．7.5YR2/1黒色．
21．7.5YR2/2黒褐色．
22．10YR3/1褐灰色．
23．10YR6/1褐灰色．
24．10YR8/8黄橙色．
25．7.5YR3/1黒褐色．
26．7.5YR2/1黒色．
27．7.5YR3/1黒褐色．
28．7.5YR3/2黒褐色．
29．10YR7/1灰白色．
30．7.5YR3/4暗褐色．
31．10YR4/6褐色．

番号	断面形状	厚さcm	樹種
1	角	5.0～7.0	ナラ
2	板状	3.0～4.0	ナラ
3	板状	3.0	スギ(?)
4	角	4.0	ケヤキ
5	角	3.5	ケヤキ
6	角	3.5	クリ
7	板状	3.5	クリ
8		2.5	クリ
9		4.0	クリ
10		4.5	クリ
11		10.0	クリ
12	板状	3.0	クリ
13	カヤ材	3.0	ススキ
14	角	3.0	ケヤキ
15	板状	2.5	ケヤキ

炭化材観察表

図44　F３－u住居跡(2)

ちている。煙出し部との境には20×18cmの角礫が設置されており、トンネル状になっているのが観察された。煙道の底面は、壁際から約10°の角度で緩やかに上がっていき、煙出し部の小ピットへ続く。その小ピットは煙道底面から16cmほど掘り込まれている。各埋土には焼土粒が多量に含まれている。

○2号カマド　〈位置〉　南東壁の南隅付近　〈主軸方向〉　S－42°－E

〈本体〉　残存するのは燃焼部の焼土だけで袖部は検出されなかった。焼土は直径56cmの円形を呈し、厚さは最大10cmである。焼成は良好である。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道部には前述のようにカマドの天井部のものと思われる粘土塊が残存する。煙道は、掘り込み式のもので底面は壁際から12°の角度で緩やかに下がり、煙出し部の小ピットへ続く。ピットの掘り込みは浅い。また、煙出し口の壁に22×16cmの円礫が1個据えられている。

重複する遺構　西壁とほぼ平行してF3－u陥し穴状遺構が切り合う。また南東壁の中央部がF3－u土塊によって切られている。

時期　出土遺物・住居形態から第IV期に属する。

G3－m住居跡（図45・46、図版41）

調査区の中央部に位置し、東方向にあるG3－u住居跡と約5m、北方向のH3－v住居跡北西方向のH3－1住居跡とはそれぞれ10mの距離がある。II層下部で不明瞭な輪郭の一部が検出されたが、1辺が7mほどもあり、住居跡2棟の可能性も考えられたため、辺に沿ってIII層上面まで検出面を下げたところ、1辺が7m以上の大型住居であることが確認された。

平面形　隅丸方形　**規模**　7.3×7.2m　**主軸方向**　N－38°－W

埋土　上位は暗褐色土、中位～下位にかけて黒色土、下位及び壁際に褐色～黄褐色土が卓越する。中位の黒色土中には十和田a降下火山灰、白頭山降下火山灰がレンズ状に堆積する。前者が下位に、後者が上位に堆積している様子が観察される。全体に炭化材(粒)が多く見られ、埋土最下部には焼失時の焼土が厚く分布する。

壁　総て直立ぎみである。壁高は48～86cmで西壁が最も高い。

床面　全体に平坦であり比高差も8cm程度と小さい。住居跡中央部の4m四方の床面が硬く締まっており、当初拡張された住居跡とも想定されたが、確証が得られなかった。その他の床面は軟らかめで締まりもない。

炭化材・焼土　床面から20cmまでの範囲に多量の炭化材・焼土が分布する焼失住居跡である。炭化材の断面は角材状のものと板状のものがあるが、後者が多い。材は各壁に重直に壁に寄った形で分布し、概ね放射状を呈する。中央部にはほとんど見られない。樹種鑑定の結果はナラ・

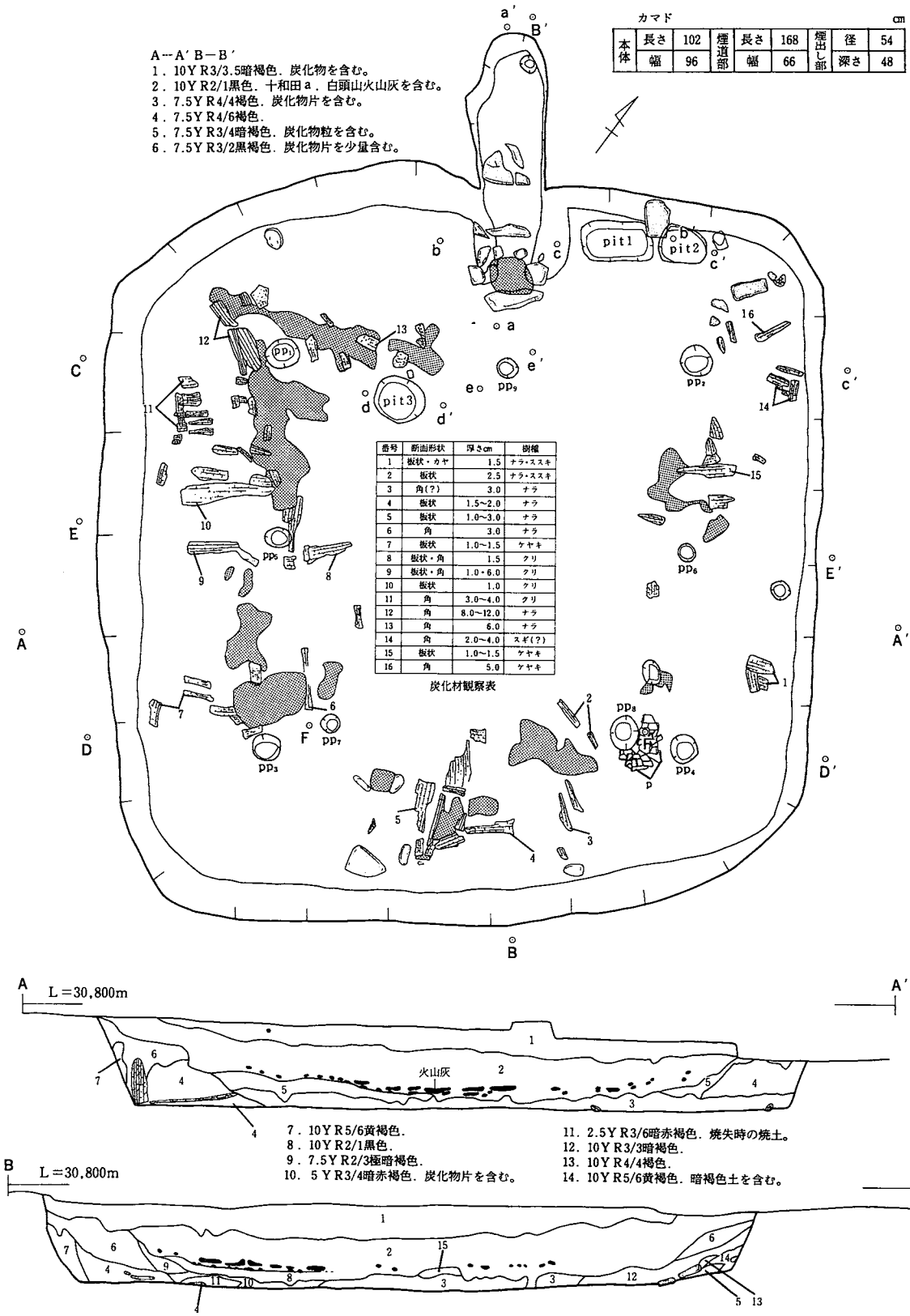

A—A′ B—B′
1．10Y R3/3.5暗褐色．炭化物を含む。
2．10Y R2/1黒色．十和田ａ．白頭山火山灰を含む。
3．7.5Y R4/4褐色．炭化物片を含む。
4．7.5Y R4/6褐色．
5．7.5Y R3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
6．7.5Y R3/2黒褐色．炭化物片を少量含む。
カマド
cm
本体 長さ 102 幅 96
煙道部 長さ 168 幅 66
煙出し部 径 54 深さ 48
pit1
pit2
pit3
pp1
pp2
pp3
pp4
pp5
pp6
pp7
pp8
pp9
炭化材観察表
番号 断面形状 厚さcm 樹種
1 板状・カヤ 1.5 ナラ・ススキ
2 板状 2.5 ナラ・ススキ
3 角(?) 3.0 ナラ
4 板状 1.5～2.0 ナラ
5 板状 1.0～3.0 ナラ
6 角 3.0 ナラ
7 板状 1.0～1.5 ケヤキ
8 板状・角 1.5 クリ
9 板状・角 1.0・6.0 クリ
10 板状 1.0 クリ
11 角 3.0～4.0 クリ
12 角 8.0～12.0 ナラ
13 角 6.0 ナラ
14 角 2.0～4.0 スギ(?)
15 板状 1.0～1.5 ケヤキ
16 角 5.0 ケヤキ
A L＝30,800m A′
火山灰
B L＝30,800m B′
7．10Y R5/6黄褐色．
8．10Y R2/1黒色．
9．7.5Y R2/3極暗褐色．
10．5 Y R3/4暗赤褐色．炭化物片を含む。
11．2.5Y R3/6暗赤褐色．焼失時の焼土。
12．10Y R3/3暗褐色．
13．10Y R4/4褐色．
14．10Y R5/6黄褐色．暗褐色土を含む。

図45　G３—m住居跡(1)

クリ・ケヤキなどで草木類は見られない。焼土は中央部を除く炭化材の近くに分布し、厚さは最大で13cmに及ぶ。個々の規模が比較的大きい。

柱穴　主柱穴、副柱穴、柱穴状ピットを含めPP$_1$—PP$_{10}$の10個検出された。PP$_1$—PP$_4$は主柱穴で平面形はいずれも円形を呈し、深さは64～70cmである。PP$_5$・PP$_6$は副柱穴で、PP$_5$はPP$_1$とPP$_3$の中間に、PP$_6$はPP$_2$とPP$_4$の中間に位置する。平面形はほぼ円形で、深さはPP$_5$が35cm、PP$_6$が15cmといずれも主柱穴より浅い。柱穴配置は四角形の主柱穴に、南北方向の柱穴間にそれぞれ1個ずつの副柱穴を持つ6本柱である。PP$_7$・PP$_8$はそれぞれPP$_3$・PP$_4$のわずかに住居跡中央部に寄ったところに位置する。PP$_9$・PP$_{10}$は柱穴状ピットとしたが、PP$_9$はPP$_1$とPP$_2$の中間部にあり、副柱穴かと思われる部分もあるが、カマドが真正面にあることから断定できない。

土坑　P1～P3の3基検出された。P1・P2はカマド右側に並んで位置し、貯蔵穴と思われる。P1の平面形は隅丸長方形で深さは28～35cmである。P2は不整の円形で深さ45cmとP1より深い。いずれも埋土に遺物を伴っている。P3は住居跡中央部からやや北西隅寄りに位置する円形のものである。機能は不明である。

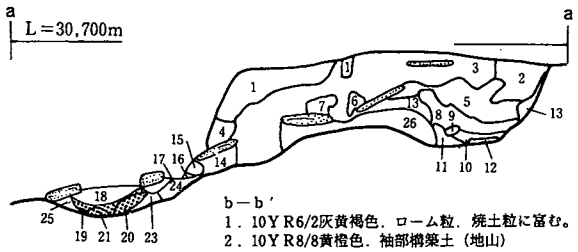
カマド　〈位置〉　北壁（北西壁）中央からわずかに東隅寄り　〈主軸方向〉　N—38°—W

〈本体〉　各部とも残存状態は良好である。袖部は左右ともに地山を削り出した後、ローム粒を含む灰黄褐色のシルト質土を貼り付けて形成されており、焚口側にはさらに、板状の凝灰岩がななめに傾けられて埋め込まれている。また、天井部から崩落したと思われる板状の凝灰岩（60×10cm）が奥壁部分に1個、焚口部手前に1個（60×18cm）あるが、後者は焚口部に据えてあったものと考えられる。支脚と思われる円礫（12×10cm）と珪化木（12×9cm）が燃焼部焼土の奥側に存在する。その焼土は34×40cmの方形状を呈し、厚さは8～10cmで焼成は良い。袖部や天井部に用いられた凝灰岩には、板状にするため加工を施した痕跡が見られる。

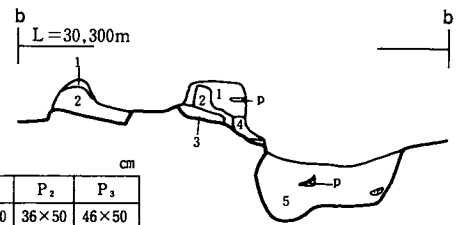
〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、煙道部と本体のつなぎの部分の、天井に使用された板状凝灰岩（40～60cmほどと考えられる）が崩落している。底面は約10°の角度で緩やかに上がっていき、煙出し部には炭化物・焼土粒が多量に含まれる。また、板状凝灰岩の破片も数個含まれている。

重複する遺構　住居跡西壁にG3—m—1、G3—m—2陥し穴状遺跡、カマド直下にG3—h陥し穴状遺跡がある。

時期　出土遺物・住居形態から第II期に属する。



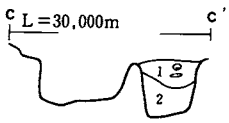
a－a′
1．10Y R5/1褐灰色．ローム粒を含む。
2．10Y R4/1褐灰色．ローム粒．炭化物粒を含む。
3．10Y R6/6明暗褐色．褐灰色土含む。
4．10Y R4/1褐灰色．ローム粒を多量に含む。
5．10Y R4/1褐灰色．
6．10Y R5/1褐灰色．ローム粒を含む。
7．10Y R7/6明黄褐色．
8．7.5Y R4/1褐灰色．焼土粒を多量に含む。
9．10Y R6/6明黄褐色．
10．10Y R1.7/1黒色．炭化材（粒）を含む。
11．10Y R6/6明黄褐色．炭化物．焼土粒を含む。
12．10Y R8/8黄橙色．
13．10Y R5/6黄褐色．
14．7.5Y R4/2灰褐色．
15．10Y R8/8黄橙色．ロームブロック。
16．10Y R4/1褐灰色．焼土粒を含む。
17．5Y R6/2．灰褐色．
18．10Y R6/2灰黄褐色．焼土粒．炭化物．灰を含む。
19．2.5Y R6/6橙色．燃焼部焼土。
20．5Y R7/6橙色．燃焼部焼土。
21．5Y R7/8橙色．燃焼部焼土。
22．10Y R6/2灰黄褐色．
23．10Y R8/8黄橙色．地山が焼成を受けた部分。
24．10Y R8/8黄橙色．地山（掘りすぎ）。
25．10Y R6/2灰黄褐色．粘土質土。
26．10Y R4/1褐灰色．ローム粒を含む。



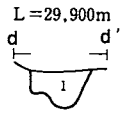
b－b′
1．10Y R6/2灰黄褐色．ローム粒．焼土粒に富む。
2．10Y R8/8黄橙色．袖部構築土（地山）
3．10Y R7/8黄橙色．
4．10Y R6/2灰黄褐色．ローム粒を含む。
10Y R5/2灰黄褐色．粘土．灰などを含む（pit 1分）

ピット　　cm

No	P1	P2	P3
開口部径	40×70	36×50	46×50
底部径	29×59	34×43	37×37
深さ	28～35	45	28



c－c′・e－e′
1．7.5Y R3/2黒褐色．焼土粒．炭化物粒を含む。
2．10Y R4/4褐色．黒褐色土粒を含む。

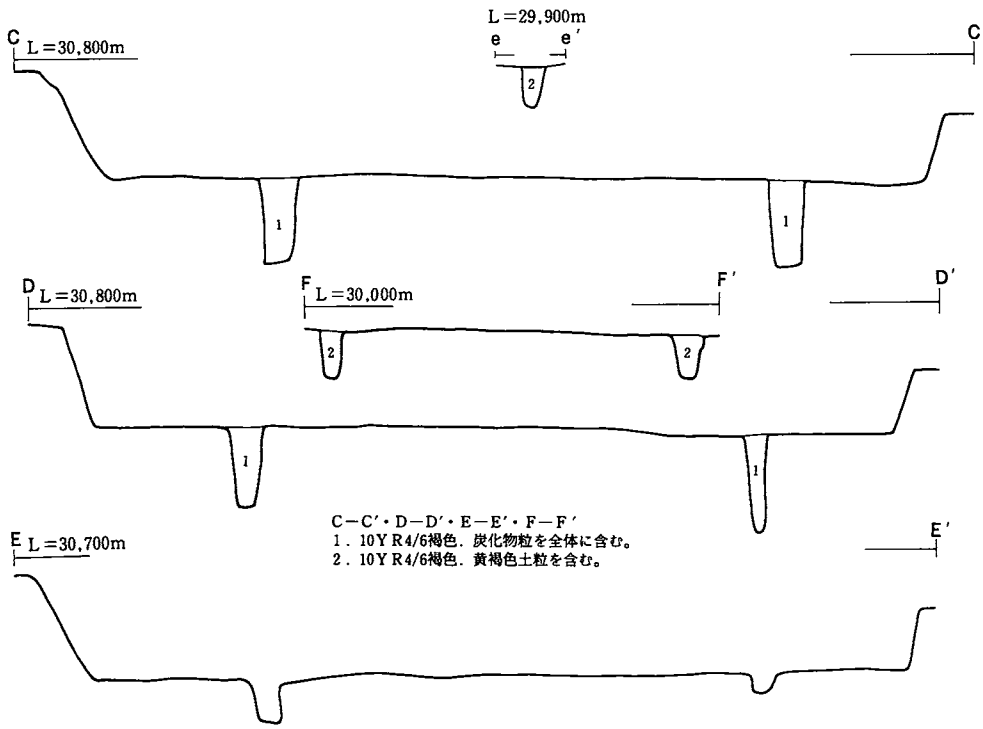


d－d′
1．10Y R4/4褐色．炭化物粒を少量含む。

柱穴　　cm

No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
直径	27×34	30×34	26×29	29×27	19×28	20×18
深さ	70	70	64	78	34	16

PP7	PP8	PP9	PP10
17×20	34×26	20×21	20×20
40	35	33	16



C－C′・D－D′・E－E′・F－F′
1．10Y R4/6褐色．炭化物粒を全体に含む。
2．10Y R4/6褐色．黄褐色土粒を含む。

図46　G 3 －m住居跡(2)

G３－u住居跡（図47、図版42）

調査区中央部の南東側に位置し、北西方向５ｍの距離にＧ３－m住居跡がある。Ⅲ層上面で黒褐色の方形の輪郭として検出された。

平面形　不整隅丸方形　**規模**　4.6×4.4m　**主軸方向**　Ｎ－32°－Ｅ

埋土　上位～中位にかけて黒褐色土、中位～下位には暗褐色土が卓越する。一部の壁際には黄褐色のブロックなどが混入する。火山灰の堆積はいっさい認められず、遺物の混入もきわめて少ない。

壁　南東壁が緩やかに外傾するほかは、総て直立ぎみに立ち上がる。壁高は36～47cm。

床面　ほとんど平坦面で比高差は４～５cmである。貼り床はなく、全体的に較らかい。

炭化材・焼土　炭化材は１片も認められない。焼土は、北西カマド付近に１カ所認められるが焼失に伴うものかは不明である。

柱穴　検出されなかった。

土坑　Ｐ１・Ｐ２の２基検出された。Ｐ１は南隅付近にあり、平面形は隅丸のだ円状を呈する。深さは45cmで貯蔵穴と考えられる。埋土上位には白頭山降下火山灰を含むブロックが認められる。中位からは、アワビ、カキ等の貝類とウニのトゲが出土している。Ｐ２は北隅に位置する隅丸長方形の浅いもので、これも貯蔵穴に類する機能を持っていたと考えられる。このＰ２はその位置関係から北西カマド使用時と同時期に存在したものと考えられる。Ｐ１については不明である。

カマド　北西壁に１基、北東壁に２基検出された。残存状況から最も古期のものは北西カマドと考えられるが、北東カマド２基の新旧関係については確証が得られなかった。可能性としては同時使用も考えられる。北東カマドの北隅寄りを１号カマド、南隅寄りを２号カマド、北西カマドを３号カマドとして記述する。

○１号カマド　〈位置〉　北東壁中央（わずかに北隅寄り）　〈主軸方向〉　Ｎ－37°－Ｅ

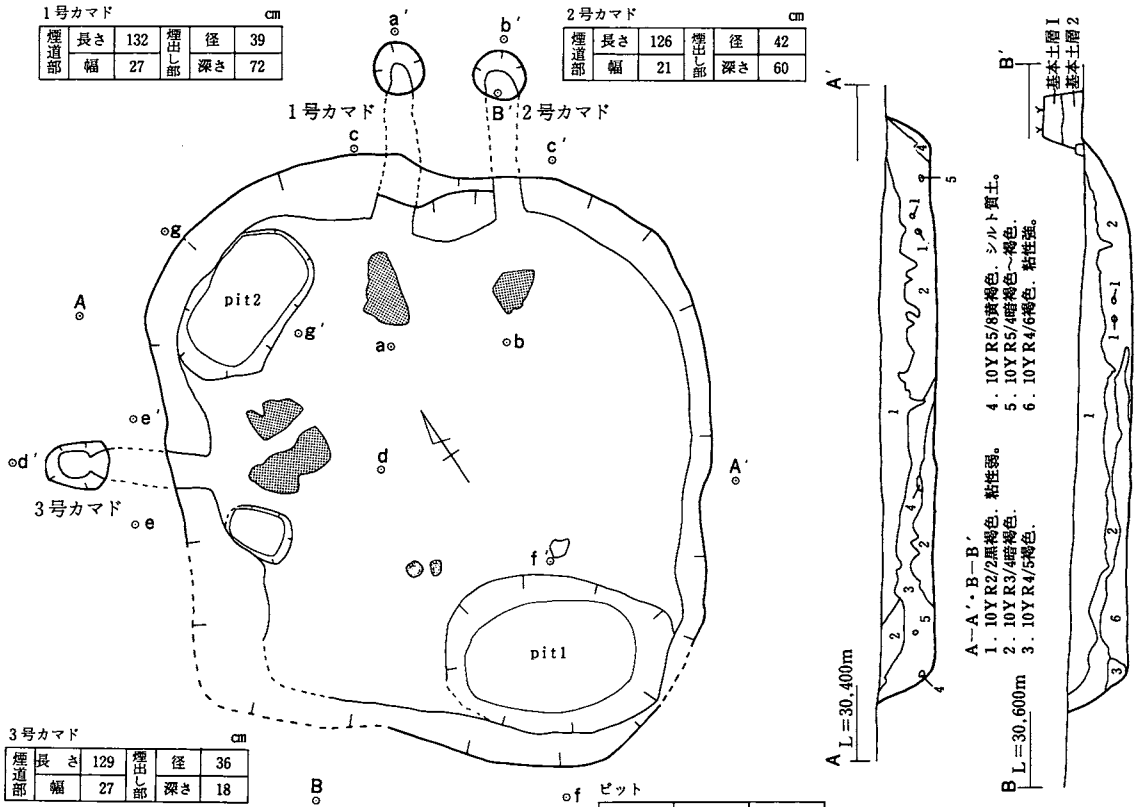
〈本体〉　燃焼部の焼土のみ残存する。58×30cmほどの不整形を呈し、厚さは最大８cmである。焼成は良好である。

〈煙道部・煙出し部〉　くり貫き式の煙道で、底面は壁際から約13°の角度で下がり、煙出し部に続き直立ぎみに立ち上がる。煙出し部には浅い掘り込みが認められる。各埋土には炭化物粒、焼土粒が多量に含まれている。

○２号カマド　〈位置〉　１号カマドと東隅の中間部　〈主軸方向〉　Ｎ－39°－Ｅ

〈本体〉　これも燃焼部焼土だけが残存する。30×32cmの不整形で厚さは５～７cmほどである。

〈煙道部・煙出し部〉　くり貫き式のもので底面は壁際から約20°の角度で下がり、煙出し部



1号カマド

煙道部	長さ	132	煙出し部	径	39
	幅	27		深さ	72

cm

2号カマド

煙道部	長さ	126	煙出し部	径	42
	幅	21		深さ	60

cm

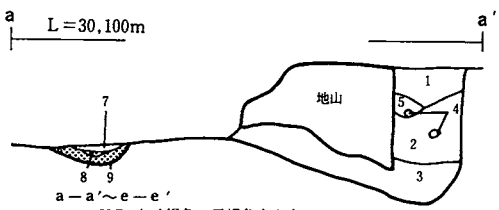
3号カマド

煙道部	長さ	129	煙出し部	径	36
	幅	27		深さ	18

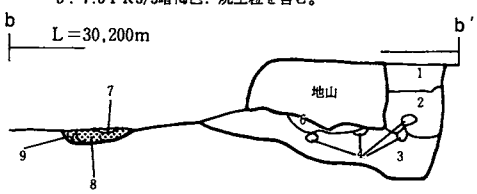
cm

ピット

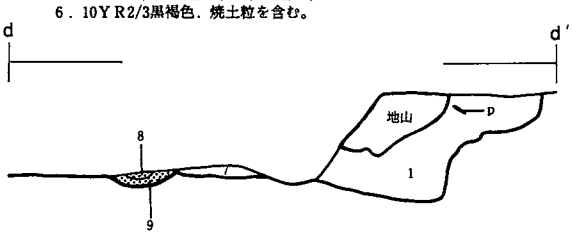
No.	P1	P2
開口部径	177×125	134×73
底部径	138× 90	112×63
深さ	45	8



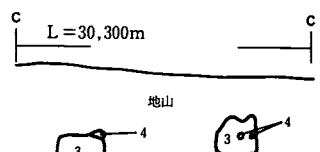
a－a′～e－e′
1．10YR3/4暗褐色．黒褐色土を含む。
2．7.5YR3/2黒褐色．炭化物粒を含む。
3．7.5YR3/3暗褐色．焼土粒を含む。

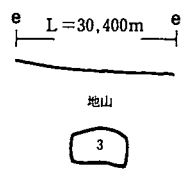


4．5YR2/4極暗赤褐色．焼土塊。
5．7.5YR3/2黒褐色．焼土粒を含む。
6．10YR2/3黒褐色．焼土粒を含む。

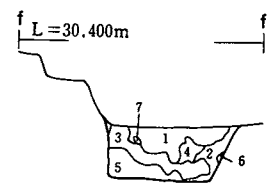


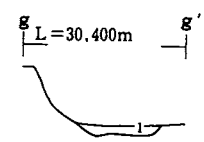
7．10YR5/6黄褐色．
8．5XR5/8明赤褐色．燃焼部焼土。
9．5YR4/8赤褐色．燃焼部焼土．8層より明るい。





f－f′
1．10YR3/2黒褐色．黄褐色土粒を含む。
2．10YR4/4褐色．
3．10YR2/3黒褐色．貝類．炭化物粒を含む。
4．19YR3/4暗褐色．
5．10YR3/3暗褐色．炭化物粒を含む。
6．10YR5/8黄褐色．地山崩壊土。
7．10YR3/2黒褐色．火山灰を含む。





g－g′
1．10YR2/3黒褐色．黄褐色土．

図47　G3－u住居跡

に至る。煙出し部には小ピットは認められない。埋土の状況は1号カマドと同様である。

○3号カマド　〈位置〉　北西壁中央　〈主軸方向〉　N－52°－W

〈本体〉　燃焼部焼土以外は破壊されていると考えられる。焼土は63×22cmの細長い不整形を呈し、厚さは最大6cmである。平面的な規模は1、2号カマドより大きい。

〈煙道部・煙出し部〉　くり貫き式の煙道で、底面は壁際から緩やかに下がり、煙出し部に続く。煙出し部には小ピットを伴わないが、壁の立ち上がりが2段になっている。

重複する遺構　南西壁と平行にG3－u陥し穴状遺構があり、住居跡内のP1を切りあう。

時期　出土遺物、住居形態から第III期に属する。

H2－m住居跡（図48・49、図版43）

調査区の最も西側に位置する住居跡で、H3－i住居跡の南西10m付近にあり、これが最も隣接している住居跡である。調査区を東西に横切る公衆用道路をパワーショベルで切り換えた際、火山灰を含む黒色土が現われたため、検出作業を行ったところ、黒色土の方形状の輪郭が検出された。

平面形　隅丸長方形　**規模**　5.7×6.0m　**主軸方向**　N－16°－W

埋土　上位～中位にかけて黒色～黒褐色土が卓越し、下位は暗褐色土～褐色土を基調とする。火山灰は十和田a降下火山灰、白頭山降下火山灰が中位に堆積している。量的には十和田a降下火山灰のほうが多めである。

壁　直立ぎみに外傾する。立ち上がりは、はっきりしている。壁高は36～48cm。

床面　全体的に軟らかく締まりもない。凹凸もほとんどなく平坦であるが北側にやや傾斜する。比高差は7cm程度である。

炭化材・焼土　少量ではあるが、炭化材・焼土ともに認められることから焼失住居跡と思われる。炭化材は西壁中央部付近に5片分布する。うち1片はカヤ材と思われるもので、他の4片は板材である。焼土は2カ所でともに床上10cmのところにある小規模のものである。

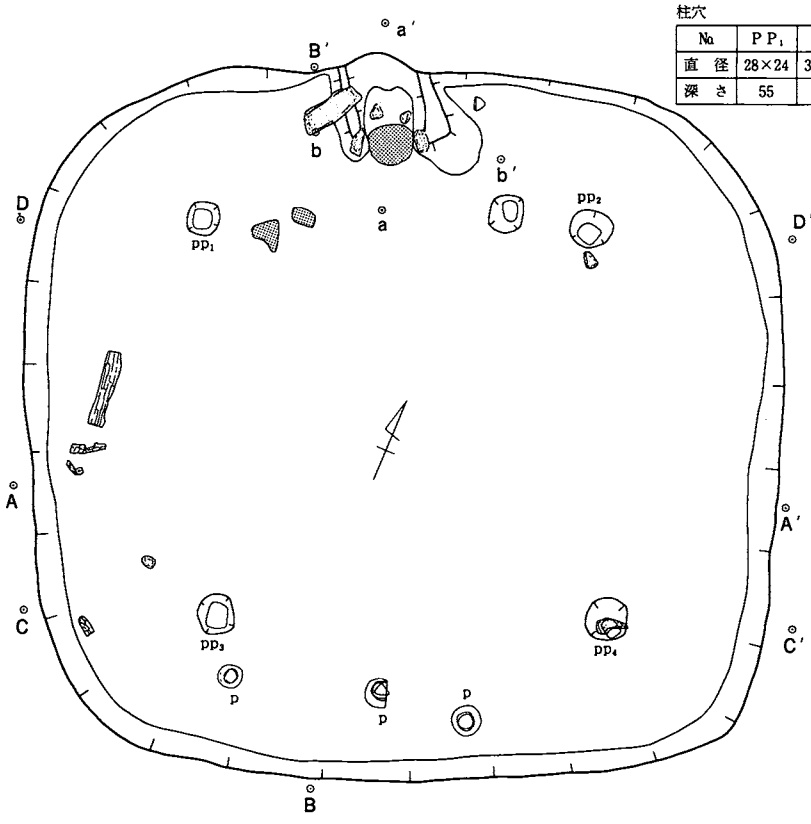
柱穴　PP_1～PP_4の4個検出されており、配置は四角形である。柱穴の平面形はPP_2が円形に近いほかは、総て隅丸方形ぎみである。各柱穴とも四隅から1.1mほどに位置する。柱痕跡は確認できなかった。深さは43～58cmであり、PP_3だけ若干浅い。その他柱穴状ピットがカマド右側PP_1とPP_2の間付近にあるが、位置的に柱穴とは考えにくい。

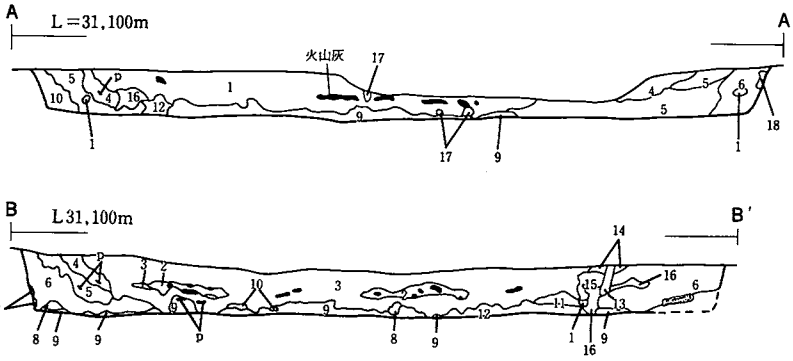
カマド　〈位置〉　北壁中央わずかに西隅寄り　〈主軸方向〉　N－16°－W

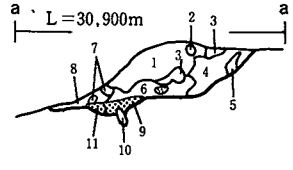
〈本体〉　残存状態は比較的良い。袖部は地山の黄褐色土を削り出してから焚口部の両脇部分に、粒径18cmの円礫と粒径22cmの角礫を1個ずつ埋め込み、ローム粒を含むシルト質土を貼り付けている。支脚と思われる円礫は粒径10cmほどのもので、左右の壁際に1個ずつ置かれて

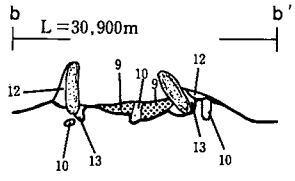
柱穴

No	PP1	PP2	PP3	PP4
直径	28×24	30×34	32×28	33×32
深さ	55	56	43	59









A－A′・B－B′
1．10YR1.7/1黒色．十和田a．白頭山火山灰を含む。
2．10YR2/3黒褐色．両火山灰を含む。
3．10YR2/2黒褐色．焼土粒を少量含む。
4．10YR3/2黒褐色．十和田a火山灰をわずかに含む。
5．10YR3/3暗褐色．褐色土粒を含む。
6．10YR2/3黒褐色．黄褐色土の小ブロックを含む。
7．10YR5/8黄褐色．地山崩壊土。
8．10YR3/4暗褐色．炭化物粒．焼土粒を少量含む。
9．10XR4/4褐色．焼土粒を含む。
10．10YR2/3黒褐色．褐色土粒をまばらに含む。
11．10YR3/2黒褐色．焼土粒をまばらに含む。
12．10YR3/4暗褐色．焼土．炭化物粒を含む。
13．19XR2/1黒褐色．木根痕。
14．10YR3/1黒褐色．粘性有。
15．10YR3/2黒褐色．焼土粒．炭化物粒を全体に含む。
16．10YR2/2黒褐色．黄褐色土粒を含む。
17．10YR5/4にぶい黄褐色．粘土質土。
18．10YR4/4褐色．粘性有。

a－a′・b－b′
1．10YR3/4暗褐色．ローム粒をまばらに含む。
2．10YR3/2黒褐色．
3．10YR5/6黄褐色．ブロック状のローム。
4．10YR3/3暗褐色．焼土粒を全体に含む。
5．10YR4/6褐色．
6．7.5YR4/6褐色．燐土粒．黄褐色土粒を含む。
7．5YR4/6赤褐色．明赤褐色の焼土粒を含む。
8．7.5YR3/3暗褐色．
9．5YR4/8赤褐色．燃焼部燐土．焼成良。
10．7.5YR2/3極暗褐色．木根痕。
11．5YR3/4暗赤褐．焼土だが焼けが弱い。
12．10YR2/3黒褐色．ローム粒を含む。
13．10YR4/6褐色．

図48　H２－m住居跡(1)

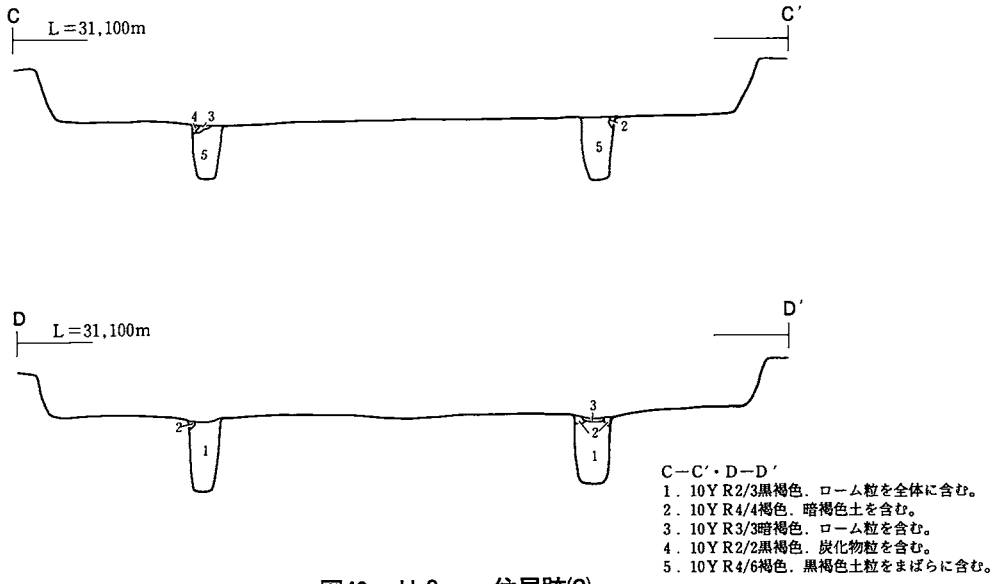


図49　H２－m住居跡(2)

いる。カマド左側の袖の上には天井に使用した長方形（52×20cm）の凝灰岩が崩落している。

燃焼部の焼土は直径36cmの円形で厚さは最大で10cmほどである。一部が木根による攪乱を受け途切れている。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道部～煙出し部は検出されなかった。煙道になると思われる北壁中央部がわずかに張り出しているだけである。

重複する遺構　なし

時期　出土遺物や住居形態から第II期に属する。

H３－ｉ住居跡（図50、図版44）

調査区中央部の西側に位置し、南西約10mにH２－m住居跡、南東約６mにH３－１住居跡がある。Ⅲ層上部で本遺構よりも新しい溝跡とともに検出された。輪郭は黒褐色土であり、白頭山降下火山灰が含まれる。

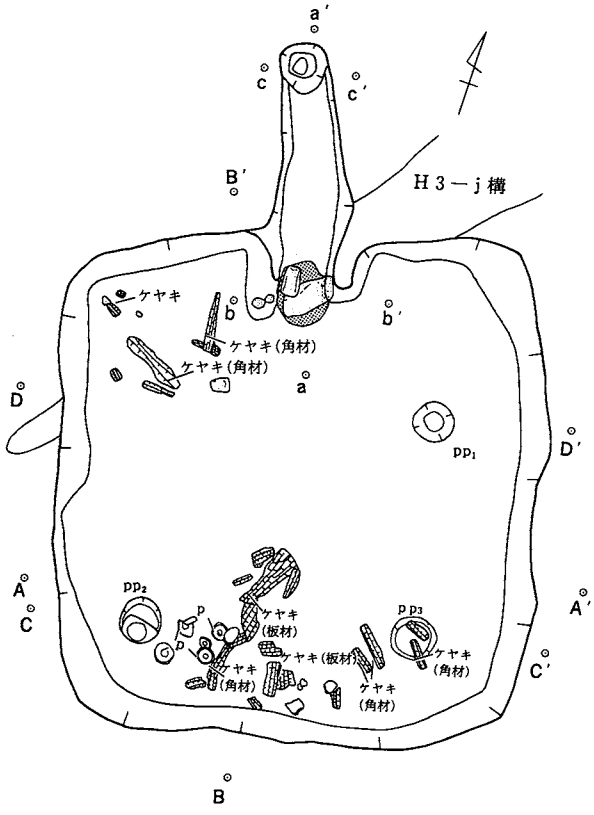
平面形　隅丸方形（わずかに角張っている）　**規模**　4.0×3.8m　**主軸方向**　N－20°－W

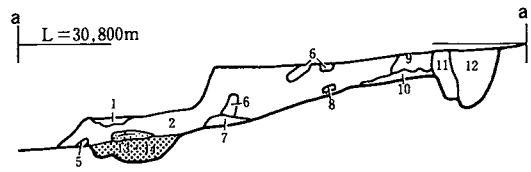
埋土　上位～中位にかけて黒色土、下位は暗褐色土が卓越する。黒色土中に、白頭山降下火山灰がわずかに混入する。下位～床面近くまで焼土粒・炭化物粒が比較的多量に存在する。

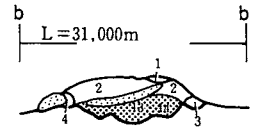
壁　北壁が直立するほかは外傾する。壁高は26～35m。

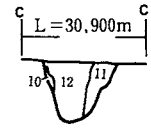
床面　全体的に軟らかく、締まりもない。ほとんど平坦である。比高差は約８cmである。

炭化材・焼土　焼失住居跡と思われるもので、炭化材は大きく２カ所に分布する。北西隅の

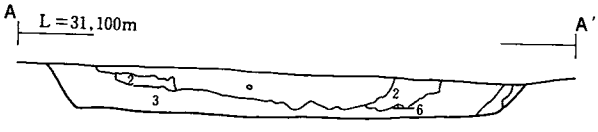








a－a′・b－b′・c－c′
1．10Y R2/3黒褐色．
2．10Y R3/4暗褐色．炭化材．焼土粒を多量に含む。
3．5Y R4/6褐色．焼土粒をわずかに含む。
4．10Y R4/6褐色．焼土粒を含む。
5．10Y R4/6褐色．ブロック状。
6．10Y R4/6褐色．粘土質土。しまりあり。
7．10Y R4/4暗褐色．焼土粒を少量含む。
8．10Y R3/2黒褐色．
9．10Y R3/4暗褐色．ローム粒を含む。
10．10Y R5/8黄褐色．地山崩壊土。
11．10Y R4/3にぶい黄褐色．ローム粒を含む。
12．10Y R4/4暗褐色．ローム粒．焼土粒を含む。
13．7.5Y R5/6明褐色．焼土粒．炭化物粒を含む焼土。
14．5Y R4/8赤褐色．粘土質土。13．14が燃焼部焼土。



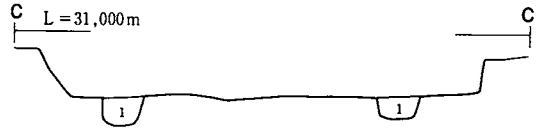
A－A′・B－B′
1．10Y R2/1黒色．白頭山火山灰をわずかに含む。
2．10Y R2/2黒褐色．褐色土粒を含む。
3．10Y R3/3暗褐色．焼土粒．炭化物(粒)を多量に含む。
4．10Y R4/6褐色．地山崩壊土。
5．10Y R3/4暗褐色．炭化物粒をわずかに含む。
6．10Y R4/4褐色．焼土粒を含む。
7．10Y R3/2黒褐色．焼土粒を含む。

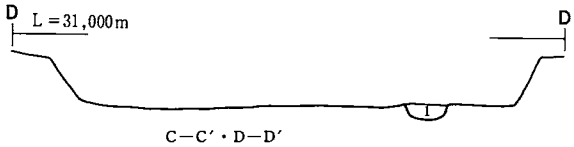
柱穴

No	PP₁	PP₂	PP₃
直　径	33×34	36×32	36×36
深　さ	13	22	18

カマド　　cm

本体	長さ	79	煙道部	長さ	132	煙出し部	径	37
	幅	96		幅	51		深さ	30





C－C′・D－D′
1．10Y R4/6褐色．黒褐色土粒．ローム粒を含む。

図50　H３－ｉ住居跡

10片余りは、割材か板材と思われるものが多く、南壁側のものも同様である。材は埋土下部から床面直上の層位に存在し、その分布はほぼ放射状となる。なお、焼土を伴っているものは少ない。炭化材の樹種鑑定の結果は、すべてケヤキである。

柱穴　北西隅を除く PP_1～PP_3 の3個検出されており、配置は四角形になると思われる。いずれも平面形は円形で深さが13～22cmと浅い。PP_2 に柱痕跡らしきものがあるが断定できない。

カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉　N－20°－W

〈本体〉　残存状態は良好であるが、袖の一部が溝跡によって破壊されている。袖部は黄褐色土の地山を削り出した後に、シルト質の暗褐色土を貼り付けて構築されている。左袖側の内壁には、芯材として板状の凝灰岩が埋め込まれ、前述のシルト質土で被っている。また天井部に使用したと思われる長方形（44×20cm）の板状凝灰岩が燃焼部焼土の上に崩落している。焚口部付近には、数片の炭化材が認められるが、カマドで焼成されたものか、焼失に伴うものかは不明である。燃焼部焼土は52×40cmのだ円形で、厚さは最大12cmを測り、焼成は比較的良い。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道は掘り込み式で、底面は約12°の角度で壁際から緩やかに立ち上がり煙出し口へ続く。煙出し部のピットは、煙道部底面の最上部から16cmほど掘り込まれている。煙道・煙出し部の埋土は、ともに焼土粒や炭化物粒に富んでいる。

重複する遺構　H3－j溝跡がカマド付近を東西方向に切っている。

時期　出土遺物から第II期に属する。

H3－I住居跡（図51、図版45）

調査区のほぼ中央に位置する。隣接するH3－v住居跡とは北東方向に6mほどの距離がある。II層下部で不明瞭な黒褐色の隅丸方形の輪郭として検出された。

平面形　隅丸台形状　**規模**　3.7×3.85～4.3m　**主軸方向**　N－65°－E

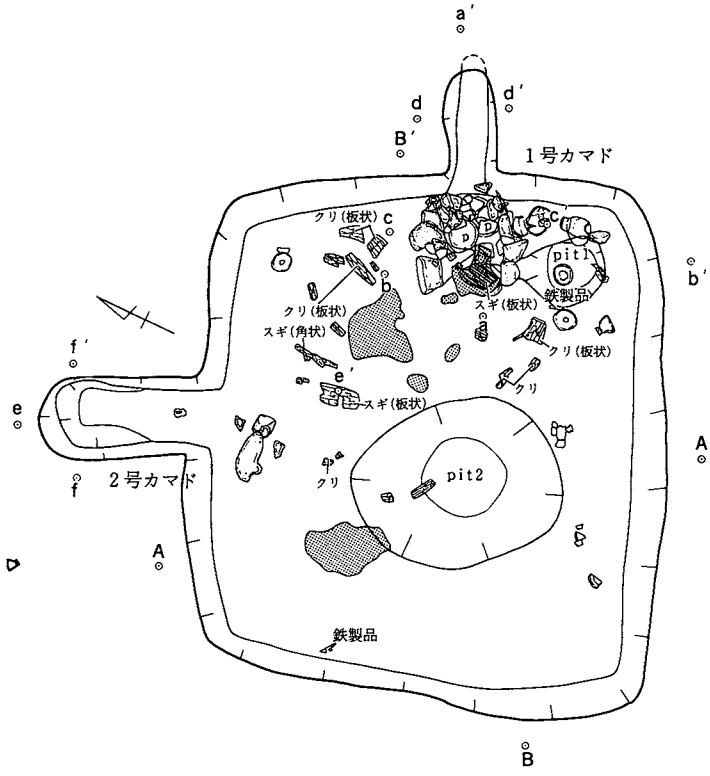
埋土　上位～中位にかけては黒褐色土、壁際の中位～下位にかけては暗褐色～褐色土を主体とする。火山灰の混入は、中位に白頭山降下火山灰の小ブロックが認められる。下位の暗褐色土中には橙色の焼土ブロックや炭化物が含まれている。

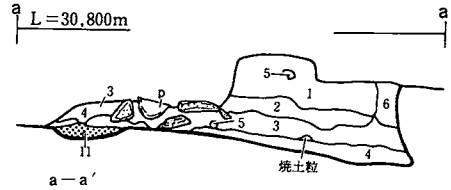
壁　直立ぎみに外傾する。壁高は40～60cm。

床面　全体的に軟らかく貼り床は認められない。中央部から南壁側にかけて、ややくぼんでいる。比高差は約10cmである。

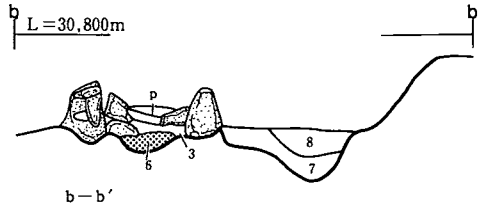
炭化材・焼土　炭化材は、住居跡中央部から東壁側にかけて十数片が半円状に分布し、そのほとんどが板材と思われるものである。樹種はクリが多く、他にナラ・スギなどがある。焼土は小規模なものを含め5カ所に認められるが、いずれも焼失に伴うものである。

柱穴　検出されていない。

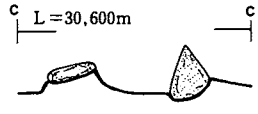


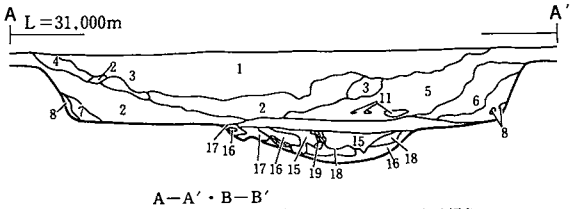


a－a′
1．10Y R3/3暗褐色．
2．10Y R4/4褐色．
3．10Y R3/2黒褐色．
4．10Y R2/3黒褐色．
5．10Y R3/1黒褐色．
6．10Y R3/4暗褐色．
7．10Y R3/3暗褐色．
8．10Y R4/6褐色．
9．5Y R4/6赤褐色．
10．10Y R3/4暗褐色．
11．2.5Y R4/8赤褐色．

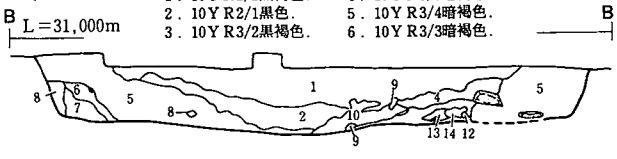


b－b′
1．10Y R3/2黒褐色．
2．10Y R4/6褐色．炭化物を含む。
3．10Y R3/3暗褐色．
4．10Y R3/3暗褐色．シルト質土。
5．10Y R3/4暗褐色．
6．2.5Y R4/8赤褐色．燃焼部焼土．
7．10Y R4/6褐色．
8．7.5Y R4/6褐色．焼土ブロックを含む。

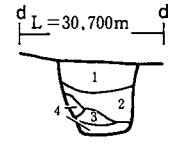




A－A′・B－B′
1．10Y R2/2黒褐色．
2．10Y R2/1黒色．
3．10Y R3/2黒褐色．
4．10Y R3/3暗褐色．
5．10Y R3/4暗褐色．
6．10Y R3/3暗褐色．



7．10Y R4/4褐色．
8．10Y R5/6黄褐色．
9．10Y R4/6褐色．
10．10Y R3/2黒褐色．
11．5Y R6/8橙色．
12．7.5Y R4/6褐色。
13．7.5Y R3/4暗褐色。
14．2.5Y R4/8赤褐色．
15．10Y R2/1黒色土．
16．10Y R4/6褐色．
17．10Y R3/2黒褐色．
18．10Y R4/4暗褐色．
19．7.5Y R5/6明褐色．



d－d′
1．10Y R3/4暗褐色．
2．10Y R2/3黒褐色
3．10Y R4/6褐色．
4．10Y R5/6黄褐色．

ピット

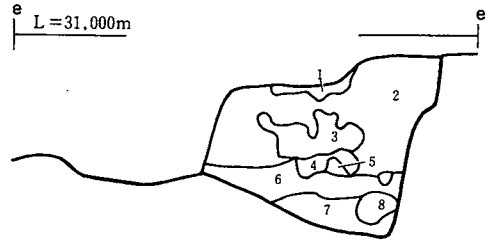
No	P_1	P_2
開口部径	66×56	164×135
底部径	39×34	68×63
深さ	28	25

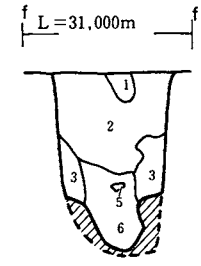
1号カマド　cm

本体	長さ	78	煙道部	長さ	108	煙出し部	径	30
	幅	69		幅	42		深さ	43

2号カマド　cm

本体	長さ	120	煙道部	径	66
	幅	60		深さ	96





e－e′・f－f′
1．10Y R3/4暗褐色．
2．10Y R4/4暗褐色．褐色土粒を含む。
3．10Y R5/6黄褐色．含パミス（φ2㎜）
4．7.5Y R4/4褐色．焼土粒を含む。
5．5Y R3/3暗赤褐色．焼土粒を含む。
6．7.5Y R3/3暗褐色．炭化した穀類を含む。
7．7.5Y R3/4暗褐色．炭化物粒を含む。
8．7.5Y R2/3極暗褐色．焼土粒を含む。

図51　H3－1住居跡

土坑　Ｐ１・Ｐ２の２基検出された。Ｐ１は１号（東）カマドの右側に位置する円形のもので貯蔵穴と考えられる。Ｐ２は住居跡中央部からやや西寄りにある径164×135cmのだ円形を呈するものである。この土坑の埋土中には焼失時のものと思われる炭化材が含まれており、住居跡使用時に伴う何らかの機能を持った土坑と考えられる。

カマド　東壁と北壁で２基検出された。残存状況から東カマド（１号）が新期のものと考えられる。

○１号カマド　〈位置〉　東壁中央からやや南東壁寄り　〈主軸方向〉　Ｎ－65°－Ｅ

〈本体〉　両袖部とその構築礫、燃焼部焼土、各種遺物と残存状況は良好である。右袖には焚口側から粒径17cmの円礫、20×25cmの板状凝灰岩、最大長35cmの角礫、及び粒径15～20cmの礫数個が並べられ、板状凝灰岩の部分には黒色のシルト質土が貼り付けられている。左袖は同様に最大長35cmの角礫、23cmの角礫、12～14cmの円礫２個と、それらに貼り付けられたシルト質土からなるが、右袖の最も焚口側の円礫に対応する部分に、天井部のものと思われる長方形（粒径15～50cm）の凝灰岩が崩落している。燃焼部焼土は、袖部から崩落したと思われる３個の角礫の下から検出された。38×40cmの方形を呈し、厚さは最大で８cmで焼成は良い。

〈煙道部・煙出し部〉　煙道は掘り込み式で、底面は壁際から約10°の角度で下がり煙出し部に至る。煙出し部はＨ３－Ｐ陥し穴状遺構の埋土を掘り込んでつくられている。底面にピットは伴っていないが、壁がオーバーハングして立ち上がる。

○２号カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉　Ｎ－22°－Ｗ

〈本体〉　最大粒径９～38cmの角礫４個が残るのみで、燃焼部の焼土、袖部とも検出されていない。これらの角礫はカマドの構成礫と考えられるが、礫だけ残存していることから断定はできない。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は住居跡の床面より14cmほど掘り下げられた後、壁際から約25°の角度で下がる。検出面からは最も深いところで１ｍほど掘り込まれている。１号カマドに比べ、煙道の巾や深さが大きい。煙出し部にはピットがなく、壁は外傾し立ち上がる。埋土中位から下位にかけての暗褐色土中にヒエ、アワ類の炭化したものが含まれている。

重複する遺構　Ｈ３－Ｐ陥し穴状遺構と北カマド煙道部が切り合う。

時期　出土遺物・住居形態から第Ⅲ期に属する。

Ｈ３－ｖ住居跡（図52、図版46）

調査区のほぼ中央部に位置し、最も隣接する住居跡は南東方向約３ｍほどのＨ３－ｅ住居跡である。II層下部で不明瞭な黒褐色の円形の輪郭が見えたが、プランがとれなかったためIII層上面まで順序掘り下げ検出した。検出時には火山灰の混入は見られなかった。

平面形　隅丸台形状（南側隅が東西方向に広がる）

規模　4.2×3.4～3.8m　**主軸方向**　Ｎ－31°－Ｗ

埋土　最上位に黒褐色土があるほかは、暗褐色～褐色土が主体である。中位の暗褐色土中に火山灰がスポット状に散在するが、いずれのものか確認できなかった。また、部分的に焼土塊が含まれている。

壁　北壁・東壁は外傾し、東壁・西壁は直立ぎみである。壁高23～24cm。

床面　全体に貼り床を施し硬く締まる。細かな凹凸は少ないが全体に波打っている。比高差は13cm程度である。

炭化材・焼土　炭化材は認められないが、焼成の良い焼土が２カ所に渡って分布する。焼土１は住居跡のほぼ中央にあり、62×34cmの規模を持ち、厚さは最大で５cmである。焼土２は、南東隅付近にあり、74×52cmの不整形で厚さは最大11cmを測る。ともに焼失時にできた焼土でなく、炉としての使用の際にできたものと考えられる。

柱穴　北東隅に柱穴状ピットが１個検出された。位置的に柱穴とも考えられるが、１個だけということ、深さがないことなどから柱穴状ピットとした。

土坑　住居跡中央部からややカマド寄りにあるＰ１、南壁際からわずかに西隅に寄ったところにあるＰ２の２基が検出された。Ｐ１の平面形は円形で深さは最大22cmを測る。中心部がややくぼみ、内部に柱穴状の小ピットがある。貯蔵穴的な機能を持った土塊と考えられる。

Ｐ２は柱穴状小ピットを含み、平面形は東西方向に長い不整の楕円状を呈する。埋土には炭化物粒が含まれるが、どのような機能を持つものかは不明である。なお、両方の土坑内に見られる柱穴状ピットは個々の土塊に伴うものではなく、この住居跡よりも新しい杭跡と思われる。

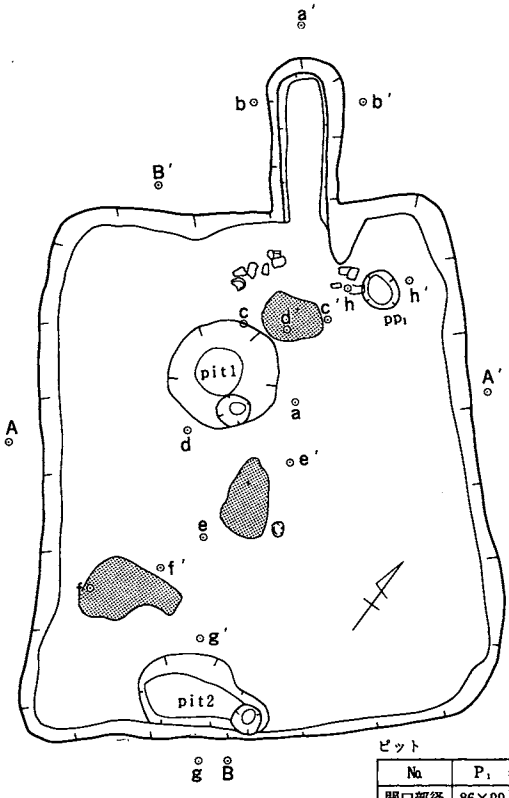
カマド　〈位置〉　北壁中央からやや北東隅寄り　〈主軸方向〉　Ｎ－31°－Ｗ

〈本体〉　焼成の良好な燃焼部焼土と右側の袖が一部残存する程度で崩壊が著しい。焼土と住居跡の北壁の間に多数の土器片が散在していた。焼土は34×48cmのだ円形状で厚さは最大９cmと発達している。右側の袖はわずかは痕跡が残るだけで壊れている。その付近に散在する土器群の１つがあるが、袖の芯材となっていた可能性は少ない。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で、底面は壁際から約15°の角度で下がり煙出し部に至る。煙出し部には小ピットに掘り込まれていない。いずれも埋土には炭化物粒、焼土粒を含みすすけた感じがする。

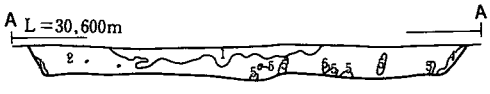
重複する遺構　住居跡南壁とＨ３－ｕ－１・２陥し穴状遺構２基が切り合っている。

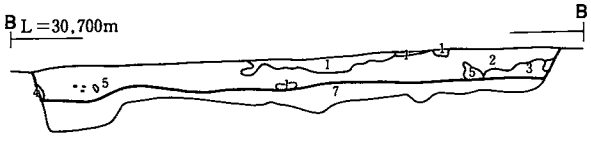
時期　出土遺物・住居形態から第Ⅲ期に属する。



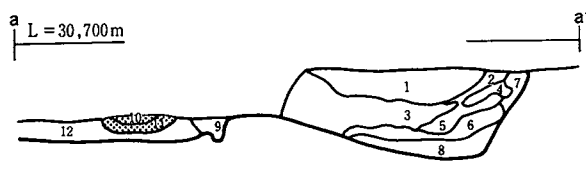
ピット

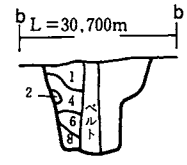
No	P1	P2
開口部径	86×90	56×108
底部径	38×38	28× 96
深さ	22	18

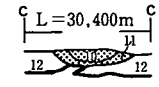




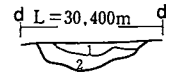
A－A′・B－B′
1．10Ｙ R2/2黒褐色．木根を含む。
2．10Ｙ R3/4暗褐色．両端に火山灰を含む。含炭化物粒。
3．10Ｙ R3/3暗褐色．褐色土の小ブロックを含む。
4．10Ｙ R4/4褐色．地山崩壊土。
5．10Ｙ R4/6褐色．暗褐色土を含む。
6．10Ｙ R4/4褐色．ブロック状。
7．10Ｙ R4/4褐色．掘り方埋土。
8．５Ｙ R4/6赤褐色．焼土塊。

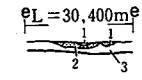






a－a′・b－b′・c－c′
1．10Ｙ R3/3暗褐色．褐色土粒を含む。
2．10Ｙ R4/6褐色．１層と混じる。
3．10Ｙ R4/3暗褐色．焼土粒をわずかに含む。
4．10Ｙ R2/3黒褐色．褐色土粒を全体に含む。
5．7.5Ｙ R4/6褐色．焼土粒をまばらに含む。
6．7.5Ｙ R2/2黒褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
7．10Ｙ R3/4暗褐色．
8．10Ｙ R5/6黄褐色．
9．10Ｙ R3/3暗褐色．炭化物粒．焼土粒を含む。
10．５Ｙ R5/8明赤褐色．焼焼部焼土。焼成良。
11．５Ｙ R4/8赤褐色．焼焼部焼土。くすんでいる。
12．10Ｙ R4/4褐色．掘り方埋土。



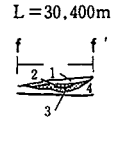


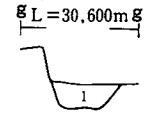
d－d′
1．10Ｙ R3/4暗褐色．褐色土粒を含む。
2．10Ｙ R4/3にぶい黄褐色．暗褐色土の小ブロックを含む。

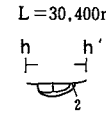
e－e′
1．7.5Ｙ R5/6明褐色．焼土。
2．５Ｙ R5/8明赤褐色．焼成の良い焼土。
3．10Ｙ R2/3黒褐色．住居跡と切り合う陥し穴の埋土。

カマド　　cm

煙道部	長さ	114	煙出し部	径	60
	幅	72		深さ	48







f－f′
1．10Ｙ R4/4褐色．焼土粒を含む。
2．５Ｙ R5/8明赤褐色．焼成の良い焼土。
3．５Ｙ R4/8赤褐色．炭化物粒を含む焼土。
4．10Ｙ R3/3暗褐色．黄褐色土粒を含む。

g－g′
1．10Ｙ R3/3暗褐色．炭化物粒を全体に含む。

h－h′
1．10Ｙ R4/4褐色．黄褐色土粒を両端に含む。
2．10Ｙ R5/6黄褐色．

図52　Ｈ３－ｖ住居跡

Ｉ３－ｔ住居跡（図53・54、図版47）

調査区北西部に位置する。調査区の最も北に位置するＪ３－ｙ住居跡と中央部やや北寄りにあるＨ３－ｉ住居跡のちょうど中間付近にある。両住居跡とは約20mの距離がある。II層下部で検出作業をした際に黒褐色の不整形のプランが現われたが、遺物の出土もなく、当初は住居跡の予想をたてなかったものである。

平面形　隅丸方形（北壁カマド付近が張り出す）　**規模**　4.3～4.8×4.5～5.0m

主軸方向　Ｎ－7°－W

埋土　上位～中位にかけては、黒色～黒褐色土、下位は暗褐色～褐色土を基調とする。主に中位の黒色土中に十和田ａ降下火山灰がスポット状に混入する。白頭山降下火山灰は微量である。下位には焼失時に焼成されたと思われる焼土塊が混じっている。

壁　南壁・北壁は外傾し、西壁は直立ぎみである。東壁はゆるやかに段がつき外傾する。壁高は50～58cm。

床面　全体に硬めで、細かな凹凸も少なく平坦である。比高差は７cm程度である。貼り床は認められない。

炭化材・焼土　ともに焼失時のものと考えられる炭化材４片と焼土４カ所が、ほぼ床面に分布する。炭化材の樹種鑑定では総てクリという結果が出ている。焼土は赤褐色～橙色を呈し炭化物粒を含む。最大規模で23×63cmほどである。

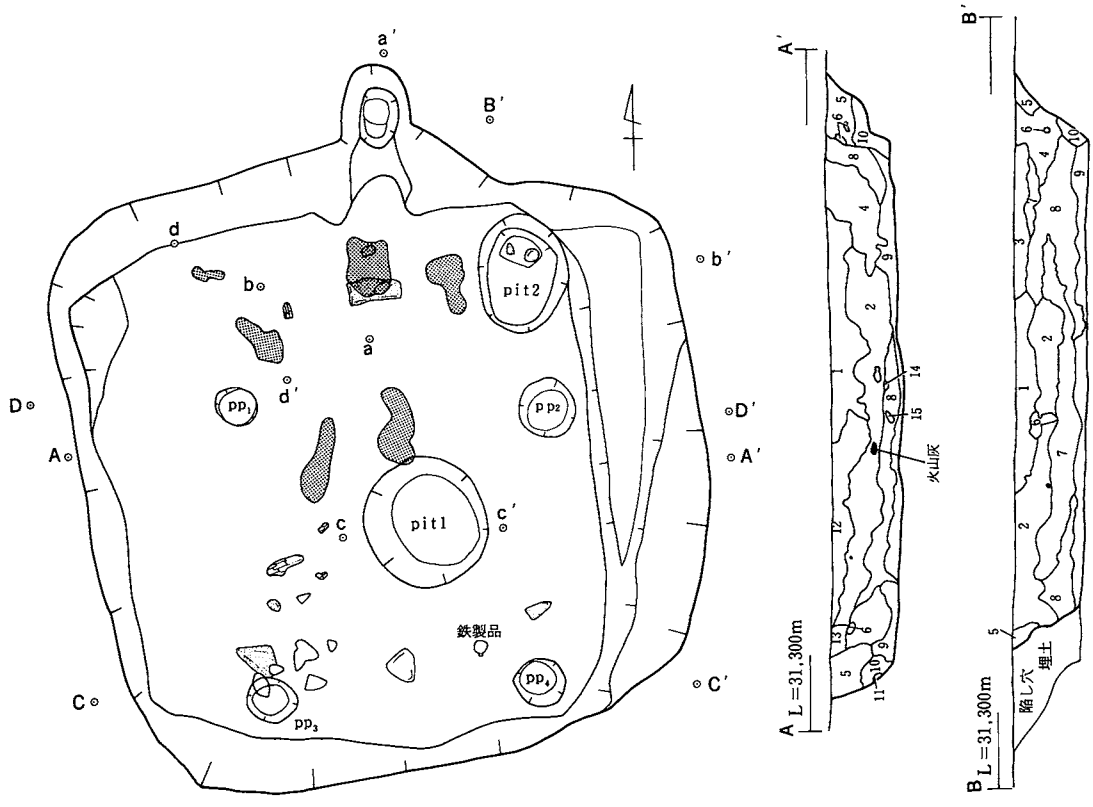
柱穴　PP_1～PP_4の４個検出されており、配置は四角形である。わずかであるが住居跡の主軸方向と柱穴の配置にずれがある。いずれも平面形は円形で深さ18～29cmと浅めである。柱痕跡は確認されなかった。

土坑　住居跡のほぼ中央部にあるＰ１、カマド右側北東隅のＰ２の２基確認されている。Ｐ１の平面形はほぼ円形を呈する。深さは44cmであるが、位置的に貯蔵穴とは考えにくく機能は不明である。Ｐ２は南北方向を長軸とするだ円形で貯蔵穴であろう。粒径14cmの磨石と思われる円礫と６cmの角礫が底面から出土している。

カマド　〈位置〉　北壁やや北東隅寄り　〈主軸方向〉　Ｎ－7°－W

〈本体〉　残存状態は両袖の一部と燃焼部の焼土、天井部から崩落したと考えられる割れた凝灰岩と支脚の礫が残る程度である。燃焼部焼土は42×32cmの長方形状を呈し、厚さは最大で11cmを測る。天井部から崩れた長方形（42×20cm）の板状凝灰岩が焚口側にずれて、焼土の一部を被っている。焼土の分布内には支脚と思われる円礫と凝灰岩の上部に鉄分を多く含んだ円礫１個がある。

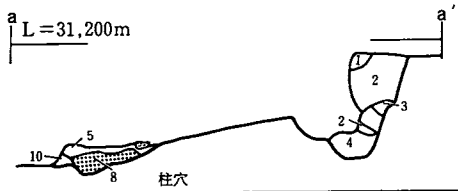
〈煙道部・煙出し部〉　煙道は掘り込み式で、壁際からすぐ煙出し部に続く、全長の短いタイプのものである。底面は約10°の角度で燃焼部焼土奥から上っていき、煙出し部のピットに続



ピット　　cm

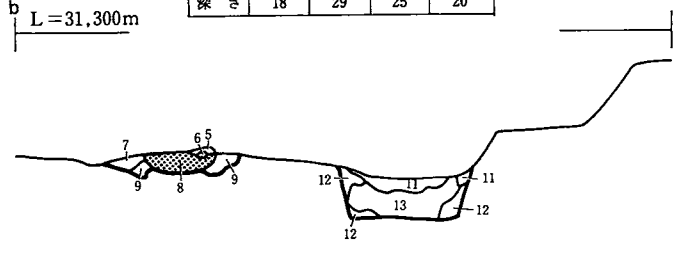
No	P1	P2	P3
開口部径	104×99	92×71	108×105
底部径	70×69	78×54	90×94
深さ	44	25	44

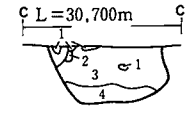
A－A′・B－B′
1. 10YR3/2黒褐色.
2. 10YR2/1黒色.
3. 10YR3/3暗褐色.
4. 10YR3/4暗褐色.
5. 10YR3/3暗褐色.
6. 10YR4/6褐色.
7. 10YR2/3黒褐色.
8. 10YR3/3暗褐色.
9. 10YR4/4褐色.
10. 10YR3/3暗褐色.
11. 10YR5/6黄褐色.
12. 10YR2/1黒色.
13. 10YR2/2黒褐色.
14. 5YR4/6赤褐色.
15. 10YR3/4暗褐色.



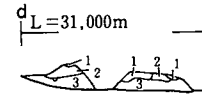
柱穴

No	PP1	PP2	PP3	PP4
直径	30×32	48×45	36×40	38×40
深さ	18	29	25	20





c－c′ pit1
1. 10YR2/2黒褐色. 褐色土粒を含む。
2. 10YR5/8黄褐色. 地山崩壊土。
3. 10YR4/3にぶい黄褐色. 黄褐色土のブロックを含む。
4. 7.5YR4/3褐色. 炭化物粒. 焼土粒を少量含む。



d－d′
1. 5YR5/8明赤褐色. 炭化物粒を含む。
2. 10YR3/3暗褐色. 焼土粒を含む。
3. 10YR5/6黄褐色. 暗褐色土粒を含む。

カマド　　cm

本体	長さ	(66)	煙道部	長さ	54	煙出し部	径	54
	幅	72		幅	57		深さ	57

図53　I 3－t 住居跡(1)

く。ピットは煙道部底面の最上部から23cmほど掘り込まれている。

重複する遺跡　南壁とＩ３－ｓ陥し穴状遺構が平行して切り合っている。また、住居跡内にＩ３－ｔ土坑があり、新旧関係は住居跡のほうが新しい。

時期　出土遺跡と住居形態から第II期に属する

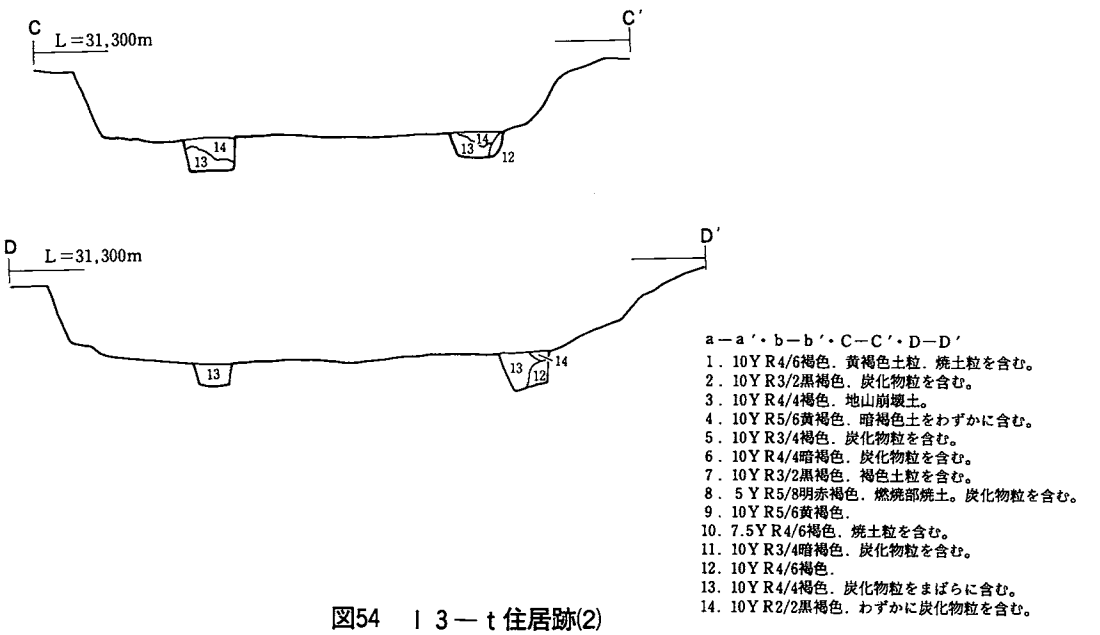


図54　Ｉ３－ｔ住居跡(2)

Ｊ３－ｙ住居跡（図55、図版48）

調査区の最も北側に位置し、その南方向約17m付近にＩ３－ｔ住居跡がある。通学路下を粗掘中にIII層上部で遺物が大量に出土し、住居跡の存在を予測をしたが、谷頭部にあたる場所のため黒色土が深く、平面プランがとれなかったので順次掘り下げ遺構を検出した。なお、この住居跡とともに多数の陥し穴状遺構も検出された。

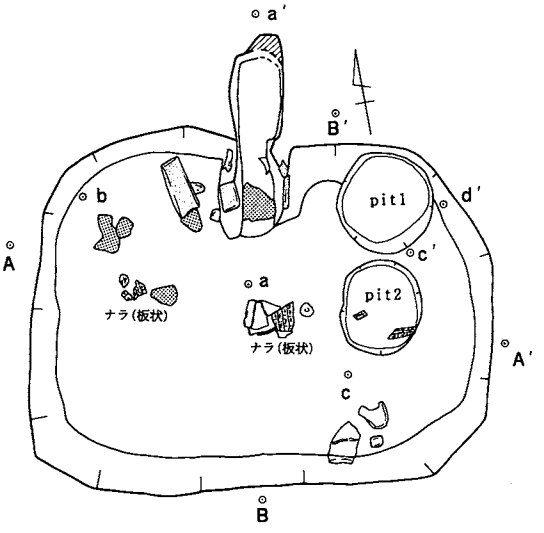
平面　隅丸長方形　**規模**　2.6～2.8×3.5～3.6m　**主軸方向**　N－12°－E

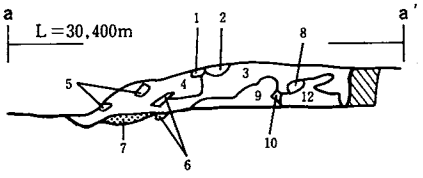
埋土　上位は黒色土、中位は黒褐色土、下位は褐色土と黒褐色土の混土が主体である。中位～下位にかけては焼土のブロック、炭火材が含まれている。火山灰については検出時に確認された。

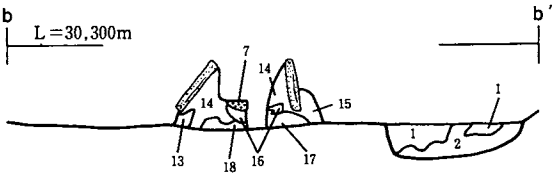
壁　南壁・西壁は直立し、北壁・東壁は外傾する。壁高は24～52cmで北壁が最も浅い。

床面　全体に硬めで締っている。貼り床は認められない。全体にかすかな凹凸が認められる。

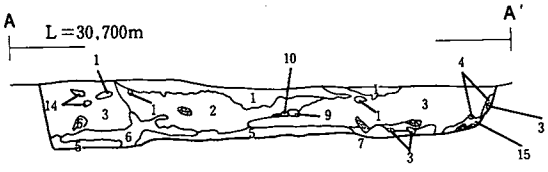
炭化材・焼土　炭化材は、住居跡の中央部に３カ所にわたって分布するが、いずれも小規模である。樹種鑑定の結果はナラとクリである。焼土は北西隅側に３カ所認められ、ほぼ炭化材と同じレベルである。以上のことから焼失住居跡と考えられる。

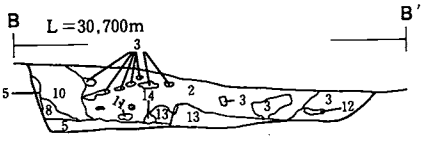




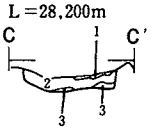


a－a′・b－b′
1．10Y R4/4褐色．
2．10Y R2/3黒褐色．
3．10Y R1.85/1黒色．
4．10Y R2/3黒褐色．
5．5Y R5/8明赤褐色．焼成土。
6．10Y R5/6黄褐色．ブロック状。
7．2.5Y R4/8赤褐色．燃焼部焼土。焼成良。
8．5Y R4/8赤褐色．黒色土との混土。
9．10Y R5/6黄褐色．シルト質土。地山まじり。
10．10Y R5/6黄褐色．黒色土との混土。
11．7.5Y R2/3黒褐色．
12．7.5Y R3/4暗褐色．
13．10Y R4/6褐色．
14．10Y R4/4褐色．黒色土を含む。
15．10Y R4/4褐色．黒褐色土との混土。
16．7.5Y R1.85/1黒色．
17．7.5Y R2/1黒色．褐色土を含む。
18．7.5Y R5/6明褐色．





A－A′・B－B′
1．10Y R1.85/1黒色．シルト質土。
2．10Y R2/3黒褐色．黒色土との混土。炭化材を含む。
3．10Y R2/2黒褐色．炭化材を含む。
4．10Y R4/6褐色．
5．10Y R5/6黄褐色．粘土質土。
6．10Y R2/1黒色．黄褐色土との混土。
7．10Y R5/6黄褐色．黒褐色土との混土。
8．10Y R2/3黒褐色．黄褐色土との混土。
9．10Y R1.75/1黒色．ブロック状。
10．7.5Y R5/8明褐色．焼土。焼成弱い。
11．5Y R4/6赤褐色．焼土。焼失時のもの。
12．10Y R4/4褐色．シルト質土。
13．10Y R2/3黒褐色．褐色土を含む。
14．10Y R4/6褐色．黒褐色土を含む。
15．7.5Y R4/6褐色．



c－c′
1．10Y R1.85/1黒色．黄褐色土のブロックを含む。
2．10Y R3/3暗褐色．黄褐色土のブロックを含む。

カマド　　cm

本体	長さ	72	煙道部	長さ	72	煙出し部	径	42
	幅	57		幅	42		深さ	21

ピット

No.	P_1	P_2
開口部径	78×77	75×64
底部径	68×68	67×57
深さ	20	12

pit1
1．10Y R5/6黄褐色．ブロックの集合。
2．10Y R2/1黒色．黄褐色土のブロックを含む。
3．10Y R5/6黄褐色

図55　J 3－y住居跡

柱穴　検出されていない。

土坑　カマド右側の北東隅にＰ１、その南側にＰ２の２基が検出されている。Ｐ１の平面形はほぼ円形を呈し、深さ20cmの土坑である。位置から貯蔵穴に類するものであろう。Ｐ２は、だ円形状の浅いものである。これも貯蔵穴的に使用されたものと思われるが不明である。

カマド　〈位置〉　北壁中央　〈主軸方向〉　Ｎ－12°－Ｗ

〈本体〉　残存状態は極めて良好である。右側の袖は地山を削り出した後に長方形（26×６cm）の板状凝灰岩を芯材として内壁に埋め込み、最大粒径10cmほどの角礫を１個置いて構築している。左側は内壁の奥に長方形（18×６cm）の凝灰岩を芯材として埋め込み、その手前に長方形（22×14cm）の凝灰岩を斜めにかぶせている。また左右袖ともにシルト質土を貼り付けている。左側の袖の脇約20cmほどのところには、天井部に使用したと思われる44×18cmの板状凝灰岩がすべり落ちている。燃焼部の焼土は、直径20～26cmほどの不整形で、厚さは５cmと小規模である。

〈煙道部・煙出し部〉　掘り込み式の煙道で煙出し部のピットがなく、煙道の底面は、ほぼ水平のまま煙出しの先端に至る。埋土には炭化物粒・焼土粒とも著しい混入はない。煙出し部の一部は陥し穴状遺構と切り合っていたため若干掘り過ぎている。

重複する遺構　４基の陥し穴状遺構と切り合っている。

時期　出土遺物、住居形態から第II期に属している。

⑵出土遺物

Ｂ４－ｄ住居跡（図57、図版50）

出土遺物は土製支脚が２点だけである。

１は円柱状の土製支脚である。上部が５分の１ほど欠損している。底部径は8.3cm、直径は5.5cmである。器面には指頭圧痕が残っている。

２も円柱状の土製支脚で、底部と上部が欠損している。直径4.3cmを測り、現存長は7.8cmである。明瞭な指頭圧痕はみられない。

Ｃ３－ｙ住居跡（図57、図版50）

３はロクロ不使用の甕の体部で、底部がわずかに残っている。器面調整は外面が軽いヘラケズリ、内面はヘラナデである。底部には木葉痕が観察される。

４・５は須恵器の甕の体部破片で、タタキ目が明瞭に残る。

Ｄ４－ｔ住居跡（図57、図版50）

６はロクロ使用の坏の底部である。切り離しは回転糸切りで、中心部から底部外周方向に軽いヘラミガキが施される。内面は不規則なヘラミガキ調整である。

７はロクロ不使用の甕の体部で、底部がわずかに残る。器面調整は、体部の外面がヘラケズリ、底部付近が斜位のヘラケズリ、内面は縦位のヘラナデである。底部は粗くヘラミガキされている。

８は鑑定依頼した鉄滓である。詳細は付篇７を参照されたい。

Ｅ３－ｕ住居跡（図58～60、図版50・51）

９はロクロ使用の坏の底部である。切り離しは回転糸切りで、一部に再調整痕が残る。内面は黒色処理され、放射状のヘラミガキ調整がみられる。

10は高台付坏の高台部である。下端まで末広がりに外反している。坏部内面の底は黒色処理されている。

11はロクロ不使用の甕の体部上半である。頸部は括れ、外面に軽い段を持つ。口縁部はわずかに外反し、口唇部は上方につまみ出されている。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面は不規則なハケメ調整である。

12はロクロ不使用の小型甕の口縁部と体部上半部である。口縁部は短く緩やかに外反する。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が軽いヘラケズリ、内面は横位のハケメである。

13はロクロ不使用の甕の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整が施され、わずかに残存する体部の外面にはヘラケズリ調整がみられる。

14はロクロ不使用の小型甕の口縁部と体部上半部である。口縁部は短くわずかに外反する。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面は不規則はヘラナデである。

15はロクロ不使用の小型甕の口縁部と体部上半である。口縁部は極端に短く外傾する。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ調整である。

16はロクロ使用のミニチュアの壺である。内外面にロクロ調整痕がみられる。底部は回転糸切りによって切り離され、細いヘラ状工具による再調整が認められる。口縁部は短く緩やかに外傾する。

17～22は須恵器の甕か壺と思われる破片である。20が肩部付近の破片と考えられる他は、体部の破片である。

25を除く23～26はＰ１出土の鉄製品である。23は角釘で先端部を欠く。24は鉄鏃の完形品である。26は鍛錬前のものと考えられる刀子２本である。２本が接着したまま出土している。

25はＰ１出土の鉄滓と思われるものである。

27～29はフイゴの羽口の欠損品である。27はＰ１から、28・29は住居跡の埋土から出土している。27・28の外面にはヘラナデ調整がみられる。

30はＰ３から出土した円柱状の土製支脚の欠損品である。直径5.7～7.5cm、現存高4.3cmを測る。

Ｅ３－ｖ住居跡（図60～62、図版51）

31は住居跡埋土出土の石鏃で、尖基鏃に分類される。長さ3.6cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmを測る。

32は高台を持つ坏で、高台部と口縁部が欠損している。調整は外面はロクロ調整痕、内面は放射状のヘラミガキが施される。また黒色処理されている。

33はロクロ使用の高台付の坏である。体部は緩く内彎し、口縁部はわずかに外反ぎみである。高台部は中央付近で緩やかに内彎し、下部は外反する。内面は黒色処理され、不規則なヘラミガキ調整が施されている。

34は高台付坏の高台部である。下端まで末広がりに外反する。

35はロクロ使用の坏の底部と体部下半である。内面調整は放射状のヘラミガキが盛行する。底部の切り離しは回転糸切りで、ヘラ状工具による再調整がみられる。

36はロクロ使用の坏の口縁部から体部上半である。体部は緩やかに内彎し、口縁部はわずか

に外反する。調整は外面がロクロ調整痕、内面は横位と縦位のヘラミガキ調整で黒色処理されている。

37はロクロ使用の坏の口縁部付近の破片である。体部は幾分内彎し、口縁部は緩く外反する。内面の調整は縦位のヘラミガキで黒色処理されている。

38はロクロ使用の坏の底部である。体部もわずかに残る。切り離しは回転糸切りである。内面はヘラミガキ調整され、黒色処理が施される。

39は赤焼き土器の坏である。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。

40は赤焼き土器の坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外傾ぎみである。

41はロクロ不使用の小型甕の口縁部と体部上半である。口縁部は短く外反ぎみである。体部は緩く内彎して立ち上がる。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面は縦位のヘラケズリ、内面は斜位のハケメである。

42はロクロ不使用の甕の口縁部付近の破片である。頸部は括れ、口縁部は外反する。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面が縦位のヘラケズリ、内面は斜位のヘラナデである。

43はロクロ使用の甕の口縁部と体部上半である。短い口縁部は外傾し、口唇部が上方に挽き出されている。また口唇部全体にロクロ調整による軽い沈線が巡っている。器面調整は口縁部が内外面ともロクロ調整痕、体部は外面がロクロ調整後に横位のヘラケズリ、内面はロクロ調整後のヘラナデである。

44はロクロ使用の甕の破片である。体部はわずかに内彎して立ち上がる。短い口縁部は直立し、口唇部は上方につまみ出されている。器面は体部の外面が縦位のヘラケズリ調整、それ以外はロクロ調整痕が残る。

45は須恵器の甕の体部下半と思われる破片で、底部は欠損している。器面調整は外面が横位のヘラケズリ、内面は不規則なヘラナデである。

46は1号カマドに設置されていた中空の土製支脚である。巻き上げ痕が明瞭に残り、外面には指頭圧痕、内面には一部ヘラナデの痕跡がある。フイゴの羽口として製作後、未使用のまま支脚に転用したものと考えられる。直径は6.5～8.5cm、高さ10.5cmである。

E3－y－1住居跡（図62、図版52）

47は黒色処理・ヘラミガキの施されない赤焼き土器の坏で、カマド及びその煙道内から出土したものである。体部は内彎ぎみに外傾し、口縁部は外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、ヘラ状工具による再調整が全体に施される。底部が極端に厚く、重量感に富む。なおこの土器の底部はE4－h住居跡の床面出土のものである。

E 3－y－2住居跡（図62、図版52）

48はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。口縁部は外傾し、ヨコナデ調整が内外面に施される。体部外面は斜位のヘラケズリ、内面は斜位及び横位のヘラナデ調整である。

49は須恵器の甕の体部下端部の破片である。

50はカマド内から出土した土製支脚である。先端部が一部欠損している。直径4.6～7.0cm、高さ17.5cmを測る。

E 4－d住居跡（図63・64、図版52）

51はロクロ不使用の坏である。内外面とも段は持たず、ヘラミガキで入念に調整されている。体部下端の外面にはヘラケズリの痕跡が残る。底部は欠損しているが、平底風と思われる。

52はロクロ不使用の坏で、内外面の体部中央からやや上位に明瞭な段を持つ。また外面下位には軽いくぼみがみられる。体部は内彎ぎみに外傾し、上位の段から口縁部にかけてはわずかに外反する。器面調整は内外面ともに不規則なヘラミガキが入念に施され、内面は黒色処理されている。底部は平底である。

53は高台付坏の高台部である。末広がりに外反する。

54はロクロ使用の高台付坏である。高台部は欠損している。体部は内彎ぎみに立ち上がる。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

55はロクロ使用の坏の破片である。体部は内彎ぎみである。器面調整は、体部外面の中央にわずかにヘラミガキが施され、内面は縦位のヘラミガキ後、黒色処理されている。

56はロクロ使用の坏である。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。底部は回転糸切りで切り離されている。

57・58はロクロ使用の坏の口縁部破片である。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されているが、一部焼成を受け剝落している。

59はロクロ使用の坏である。体部は外傾しながら立ち上がる。器面調整は、内面及び外面の体部上半と口縁部にヘラミガキが施されている。内面は黒色処理される。

60は赤焼き土器の坏である。胎土に小石が多く含まれている。口縁部は外傾する。底部は回転糸切りである。

61はロクロ不使用の小型甕である。底部は欠損している。体部は内彎し、口縁部に続く。口縁部も内彎するが、口唇部に向かうに従い細くなっている。調整は外面がヘラケズリ後にヘラミガキ、内面は横位のハケメ後に部分的にヘラミガキが施されている。

62はロクロ不使用の甕の底部付近である。底部下端は強く外側に張り出し、内面は卵形を呈する。器面調整は内外面ともハケメで、外面の一部にヘラミガキが加えられている。内面は剝

落が激しく不明である。

63はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に括れを持ち、口縁部は外反する。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面は斜位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデである。また口縁部には炭化物の付着がみられる。

64はロクロ使用の甕の口縁部である。口縁部は外傾し、口唇部は上方につまみ出されている。

65はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。口縁部はわずかに外傾するが、体部は直線的である。器面は外面がヘラケズリ調整、内面が斜位のヘラナデ調整されている。胎土は不良で、つくりも粗雑である。

66・67は刀子の欠損品である。現存長は66が6.6cm、67が6.2cmとほぼ同じである。

68は平砥石である。4面が使用されており、各砥面は弓状に凹んでいる。仕上げ砥と思われる。長さは4.7cm、幅3.3cm、厚さ2.0cmである。

E4－g住居跡（図65、図版53）

69はロクロ不使用の坏である。内外面ともに明瞭な段は持たず、軽いくぼみが体部外面の中央にみられる。器面調整は内外面ともヘラミガキ後、黒色処理が施される。底部は丸底である。

70は赤焼き土器の坏の底部付近である。底部は回転糸切りで切り離されている。

71は赤焼き土器の坏で全体の2分の1を欠く。体部はわずかに内彎し、口縁部は外傾する。

72は赤焼き土器の坏で、体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部に続く。

73は赤焼き土器の坏で、底部は回転糸切りによって切り離されているが、外面に5個の種子痕が付着している。

74はロクロ不使用の小型甕である。頸部の括れは明瞭でなく、わずかに窪む程度である。口縁部は幾分外傾し、口唇部の一部が内彎ぎみに立ち上がる。体部最大径を肩部付近に持ち、底部下端にかけて窄む。底部下端は外側に張り出すが、底部のヘラ状工具による再調整のために上方にめくれた感じである。器面調整は口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ、体部外面は縦位のハケメ後一部ヘラミガキ、内面は横位のハケメである。

75はロクロ不使用の甕である。頸部の括れは不明瞭である。口縁部は外傾する。体部最大径を肩部付近に持ち、体部下端で窄まる。底部は強く外側に張り出す。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、外面がヨコナデ後、横位のハケメ、体部外面は縦位のケズリ後、全体に入念なヘラミガキ、内面は全体に横位のハケメである。底部の内面は平らである。

76はロクロ不使用の長胴甕である。頸部の括れは不明瞭である。口縁部は緩く外傾し、口唇部でわずかに外反する。体部は細身であり、最大径は体部中央のやや上位にある。体部下端で極端に窄まり、底部は外側に強く張り出す。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外

面はハケメ後に全体に入念な縦位のヘラミガキが施される。内面は横位のハケメ後、一部にヘラミガキが加わる。底部内面は卵形を呈する。

77はロクロ不使用の甕の底部破片で、底部外面は外側に張り出す。底はヘラ状工具による調整が施されている。内外面もヘラナデ調整されている。

78は器種不明の鉄製品である。現存長4.1cm、厚さ0.2～1.2cmを測る。

Ｅ４－ｈ住居跡（図66～71、図版55）

79は高台付坏であるが、高台部を欠く。体部下端はわずかに内彎ぎみであり、体部中央から外反ぎみに立ち上がる。口縁部も外反する。内面はヘラミガキが入念に施され、黒色処理されている。

80は高台付坏で、高台部は欠損している。体部は緩く内彎し、口縁部で外反ぎみとなる。内面はヘラミガキ後、黒色処理されているが、一部剝落が認められる。

81はロクロ使用の坏で底部を欠く。内外面とも煤で汚れている。体部は内彎しながら口縁部に至る。黒色処理されていたと思われるが、ほとんど剝落している。

82はロクロ使用の坏である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部下端で外面に軽いくぼみを持ちながら外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

83はロクロ使用の坏で、内外面はともにヘラミガキ調整後、黒色処理されている。外面のヘラミガキは横位のもので、体部下端ほど粗雑である。底部は回転糸切りで切り離されている。

84はロクロ使用の刻書のある坏である。体部中央付近に『万』と描かれていると考えられる。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。器面は内外面ともにヘラミガキ調整され、内面はこの後に黒色処理されている。なお、実測図ではヘラミガキとの区別をするため、刻書部分を黒く塗りつぶしている。

85はロクロ使用の坏の口縁部と体部である。口縁部は緩く外反する。

86はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されていたと思われるが、ほとんどが剝落している。

87はロクロ使用の坏である。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。内面の調整はヘラミガキで、黒色処理されているが、全て剝落している。底部は回転糸切りで切り離されている。

88はロクロ使用の坏である。体部は緩く内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。底部が厚く重量がある。切り離しは回転糸切りである。

89はロクロ使用の坏で、体部は外傾ぎみに立ち上がり、口縁部で外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

90はロクロ使用の坏の破片で底部を欠く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに外反ぎみとなる。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。外面には4条のロクロ調整による沈線が巡る。

91はロクロ使用の坏の完形品である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

92はロクロ使用の坏の口縁部付近である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部で外反する。調整は内面がヘラミガキで、黒色処理されている。

93は手捏ね土器である。外面には指頭圧痕がみられる。

94～116は赤焼き土器の坏である。すべてに内面のヘラミガキ調整や黒色処理はみられない。切り離しはほとんどが回転糸切り無調整であるが、97、98は細いヘラ状工具による再調整が一部に認められる。また98の口縁部付近には種子痕1つが観察される。116は燈明皿として使用された痕跡を残すもので、内面の半面に点々と3～5㎜大の燈芯痕がみられる。外面は、芯が垂れていたと思われる部分が染み状に黒くなっている。また、底部には種子痕が4カ所に付着している。全体に器形が歪んでおり、坏としては未使用と考えられる。

これらの赤焼き土器群の法量をみてみると、口径は12.5～14.2cm、底径は4.8～5.9cm、器高は4.1～4.9cmの範囲であり、ある規格を持ってつくられた可能性が考えられる。本住居跡からはロクロピットが検出されており、この土器群がこの住居産のものであることが予想される。

117はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。口縁部は外反ぎみに外傾する。頸部から肩部にかけて緩やかに括れ、体部は内彎ぎみと思われる。器面調整は内外面ともヨコナデである。

118はロクロ不使用の甕の体部上半部である。最大径は体部中央付近と思われる。頸部は括れ、口縁部は外反しているが、口唇部は横に張り出す感じである。器面は口縁部が内外面ともヨコナデ調整、体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のハケメ調整されている。

119～124はロクロ使用の甕である。

119は短い口唇部が上方につまみ出されている。頸部は括れ、体部は内彎している。

120はロクロ調整による凹凸が器面全体にみられる。口縁部は外傾し、口唇部はつまみ出されている。

121は頸部の括れが小さく、口縁部は内彎ぎみに外傾する。

122は口縁部が極端に小さく、なだらかに体部に続く。ロクロ調整の凹凸がみられる。外面はロクロ調整後、ヘラケズリされている。

123は底部を欠く甕で、口縁部、体部とも内彎する。頸部に括れはなく、口縁部と体部が一続きになっている。口縁部には4条ほどの沈線が巡るが、ロクロ調整によるものである。体部の器面調整は外面が不規則なヘラケズリ、内面が縦位のヘラナデである。

124は最大径を体部中央に持つと思われる甕で、頸部にかけて窄まり、口縁部で内彎ぎみに立ち上がる。口唇部先端は細くなっている。体部は外面がヘラケズリ調整、内面は横位にヘラナデ調整されている。口縁部の内面はヨコナデ調整である。

125・126は須恵器の蓋と思われる破片である。

125は外面がヘラミガキ調整後、黒色処理されている。内面も黒いが黒色処理によるものかは不明である。

126は内外黒の蓋で上部は欠損している。外面はヘラミガキが施されるが、これも125同様、内面は黒色処理されたものかは不明である。

127は釣針と思われる鉄製品である。先端部が欠損している。長さ5.0cm、幅1.5cmを測る。

128は土製紡錘車で全面が入念にヘラミガキされている。上面は凹状にくぼむ。上面径3.2cm下面径4.5cm、厚さ2.1cmを測る。

E 4－I 住居跡（図72・73、図版56）

129は高台である。内外面ともに黒色処理が施され、外面はヘラミガキ調整されている。

130はロクロ使用の坏である。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理される。内外面にはロクロ調整による沈線が巡っている。

131はロクロ使用の坏で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理されている。

132は底部を欠くロクロ使用の坏である。ロクロ調整による沈線が2条巡る。口縁部は外反ぎみである。内面はヘラミガキ後、黒色処理される。

133はロクロ使用の小振りの坏である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

134はロクロ使用の坏で底部は欠損している。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。内面は縦位のヘラミガキ後、黒色処理をされている。

135はロクロ使用の坏の完形品である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理が施される。

136は内外面とも黒区処理が施されたロクロ使用の坏である。体部は外傾し、口縁部へ続く。調整は内外面ともに横位のヘラミガキである。

137は赤焼き土器の坏で底部を欠く。外面はロクロ調整による凹凸が激しい。

138はロクロ不使用の甕の体部下端と底部の破片である。内面の器面調整はハケメ、外面は粗いヘラケズリである。

139はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。内面の調整は、口縁部がヨコナデとハケメ、体

部がハケメ、外面は口縁部がヨコナデ、体部は斜位のヘラケズリである。

140は鍛錬される前のものと考えられる刀子２本で、付着したまま出土した。長さ19.4cm、幅1.4cm、厚さは1.6cmを測る。

141～144は角釘と思われる鉄製品であるが、143については刀子の半製品の可能性も考えられる。141、142、144はいずれも右側に弓状に反っている。計測値は一覧表を参照されたい。

145は馬具と思われる鉄製品である。長さ7.1cm、幅5.2cm、厚さ0.3～0.45cmを測るが、２破片を接合しての数値であり、正確さに欠ける。

146は鉄鏃や銛などの刺突具の先端部と思われる。菱形を呈し、長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.65cmを測る。

147は鑑定依頼した鉄滓である。鑑定結果は付編７を参照されたい。

148はフイゴの羽口の欠損品である。計測値は現存長8.7cm、直径6.4cmである。

Ｆ３－ｕ住居跡（図74～76、図版57）

149はロクロ不使用の坏の破片で底部を欠く。器面調整は内面がヘラナデ後、横位のヘラミガキ、外面はヘラケズリ後にヘラミガキが加わる。

150は赤焼き土器の坏である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部で外傾ぎみとなる。

151はロクロ使用の坏の破片である。口縁部がわずかに外反する。器面調整は内面がヘラミガキで、黒色処理されている。外面はロクロ調整による１条の沈線を持つ。

152は赤焼き土器の坏で、ロクロ調整による凹凸が数条みられる。底部は回転糸切りされている。

153は高台付坏の完形品である。体部は外傾ぎみに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面の器面調整はヘラミガキで、黒色処理されている。

154はロクロ不使用の甕の体部下端である。器面調整は内面がヘラナデ、外面がヘラケズリである。

155はロクロ不使用の甕で、体部は内彎して頸部付近まで窄まり、口縁部は外反する。頸部に明瞭な段を持つ。器面調整は内面の口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ、外面の口縁部は軽いヘラケズリで、体部は縦位のヘラケズリである。体部最大径はほぼ体部中央に持つ。

156はロクロ不使用の甕の体部下半である。底部外面はやや張り出している。器面調整は、内面がヘラナデ、外面がヘラケズリ後軽いヘラミガキである。

157はロクロ不使用の甕の体部上半である。体部は内彎して立ち上がり、頸部で括れ口縁部に至る。口縁部は外傾し、口唇部が横に張り出す感じである。器面調整は、体部内面がヘラナデ外面がヘラケズリで、ともに口縁の一部に及ぶ。口縁部外面はヨコナデ調整である。

158はロクロ不使用の小型の甕である。P2から倒立する形で出土した。体部は内彎しながら頸部で括れ、口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。器面は内面の口縁部、体部ともヘラナデ調整で、外面の体部はヘラケズリ後、ヘラミガキが一部に加わる。底部外面は木葉痕が残る。

159はロクロ使用の甕の体部上半で、体部は直立し、口縁部で外傾する。外面の一部はヘラナデ調整がみられる。

160はロクロ使用の甕である。体部は直立し、口縁部は外傾しているが、口唇部が上方に挽き出されている。体部外面は縦位のヘラケズリ調整されている。

161はロクロ使用の甕の破片である。体部は内彎して立ち上がり、頸部で括れ外傾する口縁部に続く。口唇部は上方につまみ出されている。器面はロクロ調整後、外面がヘラケズリ調整、内面が横位のヘラナデ調整されている。

162は2号カマドの煙道内から出土した須恵器の壺である。最大径を肩部付近に持ち、ロクロ成形による凹凸が数条みられる。口縁部の内外面と体部下半には入念なヘラミガキ調整が施される。また、外面と口縁部内面は黒色処理されている。口縁部は外反ぎみに立ち上がっている。

163は須恵器の甕の肩部付近の破片と思われる。外面にタタキ目が明瞭に残る。

164は1号カマド付近から出土した鉄製紡錘車である。撚棒の両端は欠損している。現存長10.6cm、幅（直径）5.5cmを測る。

165は硬砂岩の磨石で、1カ所に敲打痕もみられる。長さ11.4cm、幅5.5cm、厚さ5.7cmを測る。

G3－m住居跡（図77～80、図版58・59）

166はロクロ不使用の坏で底部は欠損している。内外面とも入念なヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている。体部下端の形状から丸底と考えられる。

167はロクロ不使用の坏で底部を欠く、体部から緩く外傾しながら立ち上がり口縁部に至る。内外面ともヘラミガキ調整され、内面は黒色処理されている。

168はロクロ不使用の坏である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は内彎ぎみである。口縁部下端には軽い段を持つ。入念なヘラミガキが内外面ともに施され、内面は黒色処理される。底部は平底風丸底である。

169は手捏ね土器である。体部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部はほぼ直立している。器面調整は内面がヘラナデ、外面がハケメでヘラミガキ調整はみられない。

170はP1出土のロクロ不使用の坏である。体部は緩やかに外傾し、口縁部に続く、底部は平底風の丸底である。内外面ともヘラミガキ調整、内面は黒色処理が施される。

171は赤焼き土器の坏である。ロクロによる調整痕以外は見られない。底部は回転系切りされ

ている。

172は甕の体部下端である。底部外面は、やや外側に張り出している。調整は外面がヘラミガキ、内面がハケメ調整である。

173は小型甕である。体部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がる。調整は外面がヘラミガキ（ハケメ調整後のものと思われる）、内面はハケメ調整である。

174はロクロ不使用の甕の上半部である。全体に明瞭な輪積み痕を持つ、口縁部はやや外反している。器面調整は口縁部内面にヘラミガキ、体部内面はハケメ調整であり、口縁部外面はハケメ、体部外面は粗雑なヘラミガキである。

175はロクロ不使用の甕の下半部である。内面に輪積み痕が明瞭に残る。器面調整は内面がヘラナデ、外面がヘラケズリ後、ヘラミガキである。底部下端の外面は強く外側に張り出している。その内面は、わずかに卵型を呈している。

176はロクロ不使用の甕で底部を欠く。体部は直立ぎみに外傾し、口縁部に至る。口縁部はわずかに外反している。器面調整は外面の口縁部、体部ともにヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は口縁部がハケメ調整、 体部がヘラケズリ後ヘラミガキ調整である。 全体に輪積み痕がみられる。

177はロクロ不使用の甕の底部付近である。底部下端はわずかに外側に張り出し、その内面は丸みを帯びる。器面は内外面ともハケメ調整が施され、内面には輪積み痕を残す。

178は小型のロクロ不使用の甕である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部との境に軽い段を持ちながら、口縁部で外反する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は、ヘラミガキ、内面はハケメ調整である。底部下端の外面はわずかに外側に張り出し、その内面は丸みを呈している。底には木葉痕がみられる。

179はロクロ不使用の甕で体部下端、底部を欠く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外傾する。器面は内外面ともにヘラミガキが主体で、輪積み痕が明瞭に残る。

180はロクロ不使用の長胴甕である。最大径を体部上半に持ち、底部に向かって窄む。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外傾して口唇部で内彎ぎみとなる。器面調整は外面が縦位のハケメ調整、内面は横位のハケメ調整である。底部下端の外面に張り出しはほとんどないが、わずかに括れている。

181はロクロ不使用の長胴甕である。最大径はほぼ体部中央にあり、体部下端で緩やかに窄まる。体部は内彎し、口縁部は内彎ぎみに外傾する。口唇部がわずかに丸みを帯びている。器面は外面が縦位のハケメ調整、内面が横位のハケメ調整である。底部下端に張り出しはないがわずかに括れを持つ。

182は、ロクロ不使用の球胴甕でほぼ完形である。体部中央が強く張り出し、最大径をその付

近に持つ。体部は強く内彎し、口縁部は内彎ぎみである。口唇部は細く、上方に立ち上っている。器面調整は外面がハケメ後にヘラミガキ、内面が横位のハケメ調整である。内外面には明瞭な輪積み痕が認められる。底部下端は張り出さず、わずかに括れを持つ。底部内面は平らである。

183は鍛錬前の半製品と思われる刀子である。長さ14.2cm、幅1.0cm、厚さ0.3～0.4cmを測る。

G 3－u住居跡（図80、図版59）

184はロクロ不使用の甕の口縁部破片である。口縁部は短く直立ぎみにわずかに外傾する。器面は内面にヘラナデ調整が施され、口縁部外面はヨコナデ調整である。

185は、黒燿石製の円形掻器で、埋土上部から出土した。長さ3.1cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmである。

186は凹石と思われる礫石器で、磨石としても使用されている。長さは12.0cm、幅10.0cm、厚さ1.8cmである。床面から出土している。

H 2－m住居跡（図81・82、図版59・60）

187はロクロ不使用の坏である。体部は緩く外傾し、直立ぎみに口縁部に続く。口縁部も直立ぎみである。体部外面の中央付近と内面の底部近く軽い段を持つ。器面は内外面とも入念なヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている。底は丸底風平底である。

188はロクロ不使用の小型甕である。底部と口縁部は欠損している。器面調整は外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はハケメ調整である。

189はロクロ不使用の甕である。最大径を体部中央に持つ。肩部付近は張り出しぎみである。体部は上半部で強く内彎し口縁部に続く。口縁部は内彎ぎみで外傾する。頸部には軽い括れを持つ。器面は外面の口縁部がハケメ調整、体部が粗雑なハケメ後ヘラミガキ、内面は口縁部、体部とも横位のハケメ調整が施される。

190はロクロ不使用の甕である。体部中央に最大径を持ち、体部は全体に緩やかに丸みを帯びる。頸部にわずかな段を持つ。口縁部は内彎ぎみに外傾する。189のような肩部の張り出しは見られない。器面調整は、外面口縁部が縦位のハケメ、体部が粗いハケメ後、一部ヘラミガキであり、内面はともに横位のハケメ調整である。底部下端はわずかに外側に張り出している。

191はロクロ不使用の球胴甕である。体部中央が強く張り出し、最大径をそこに持つ。頸部にわずかに段を持つ。口縁部は外反ぎみに外傾する。器面調整は内外面の口縁部が入念なヘラミガキ、体部外面がハケメ調整後一部ヘラミガキ、体部内面は横位のハケメが施されている。内外面に輪積み痕が明瞭に残っている。底部下端はわずかに括れている。

H３－ｉ住居跡（図82・83、図版60）

192～198はロクロ不使用の坏の完形品で、床面から重なって出土したものである。192は平底で外傾しながら口縁部に続く。193は丸底風の平底を呈する。外傾しながら口縁部に至るが、口唇部が細くなっている。194は内彎ぎみに口縁部に至る。底は平底風の丸底である。195は碗に近いタイプで底部から体部下端の部分で丸みを帯びて立ち上がり、口縁部に至る。丸底風の平底である。196は195より強く立ち上がり、口縁部先端でわずかに細くなる。底は平底である。197は口縁部がわずかに外反ぎみでは丸底風の平底を呈する。198は丸底を呈する。体部の立ち上がりが緩やかである。192～198は内外面ともに明瞭な段を持たない。いずれも器面は、内外面とも入念なヘラケズリ、内面は黒色処理が施されている。

199はロクロ不使用の小型甕である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に続く。器面調整は内外面に入念なヘラミガキで、内面にわずかにそれ以前のヘラナデ調整がみられる。

200は無底式の甑の完形品である。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、体部中央から底部にかけて窄まる。器面は外面がハケメ後ヘラミガキ調整、内面はヘラナデ調整されている。

H３－ｌ住居跡（図83～86、図版61・62）

201はロクロ使用の高台付坏の完形品である。体部は外傾し、口縁部でわずかに外反している。外面はロクロ調整による凹凸が数条みられる。内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。

202～208はロクロ使用の坏である。202の体部は内彎ぎみに外傾し、口縁部に至る。203は体部下端から内彎ぎみに外傾し立ち上がる。口縁部はわずかに外反ぎみである。204も同様であるが、器高が大きい。

205、206の体部は緩く外傾し、口縁部はわずかに外反する。207の体部は中央付近から内彎ぎみに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。体部下端に括れを持つ。他に203、205も同様である。208は碗に近いタイプの坏である。体部は内彎して口縁部で直立し、口唇部は外反している。いずれも内面はヘラミガキ調整され、黒色処理が施れている。

209、210は墨書のあるロクロ使用の坏である。209は高台を持つもので、口縁部付近に正位に書かれた文字と思われるが、文字の下部は薄くなっており、判読が不可能である。坏自体は完形品で外面はロクロ調整による凹凸が残る。内面の調整はヘラミガキで黒色処理されている。210は体部中央からやや口縁部寄りに正位に『必』と書かれたと思われる坏である。内面調整はヘラミガキ、その後黒色処理が施されている。墨書を伴う坏の出土は、この住居跡からの２点のみである。211・212は赤焼き土器の坏である。211は高台を伴う。体部は緩やかに外傾して口縁部に至る。212は体部が内彎ぎみに外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反ぎみとなる。

213はロクロ使用の羽釜風の極小型甕である。体部は内彎しながら立ち上がり、中央部付近で

外反して鍔は斜め上方に引き出された感じである。内外面ともにロクロ調整による凹凸がみられる。底部は回転糸切りで切り離されている。

214はロクロ使用の甕である。頸部で括れ、体部は緩やかに内彎している。最大径は、体部中央付近に持つ。口縁部は強く外反し、下端に補修孔が伴う。

215はロクロ不使用の小型甕である。頸部に軽い括れを持ち、口縁部は直立ぎみに外反している。器面調整は外面が粗雑なヘラケズリ、内面はヘラナデである。

216はロクロ不使用の甕の体部である。器面調整は外面が粗いヘラナデ、内面がヘラケズリ調整である。

217はロクロ不使用の甕である。体部は内彎して立ち上がり、頸部で括れ口縁部に至る。口縁部は外傾している。器面調整は内外面とも口縁部に明瞭な調整は見られないが、体部外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整である。胎土に小石を多く含んでいる。

218はロクロ不使用の甕である。体部は内彎し、肩部付近に最大径を持つ。口縁部は外傾するが、口唇部が横に引き出されたようになっている。器面調整は内外面の口縁部がヨコナデ体部の外面がヘラケズリ、内面は横位のヘラナデである。

219はロクロ不使用の甕である。最大径を体部中央付近に持ち、口縁部は直立ぎみに外傾する。頸部には軽い段が残っている。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面が粗いヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。底部下端はわずかに外側に強く張り出している。

220は鉄製紡錘車である。１号カマド付近から出土している。長さは23.5cm、紡錘車径5.7cmを測る。

221、222は刀子の欠損品と思われる。出土場所は不明である。

223～227は石器の剝片である。使用痕を持つものはない。221～227の計測値、石器の産地等は遺物一覧表を参照されたい。

Ｈ３－ｖ住居跡（図86、図版63）

228はロクロ不使用の甕の底部破片である。底部下端がわずかに窪んでいる。調整は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。底部はヘラ状工具によって調整されている。

229は小型甕の体部上半と口縁部である。体部は直立して立ち上がり、頸部付近でわずかに括れる。口縁部は外傾するが、先端はつまみ出されたように細くなる。器面調整は外面の口縁部が縦位のヘラナデ、体部がヘラケズリ、内面はともにヘラナデ調整が施されている。

230はロクロ不使用の甕の体部破片である。輪積み痕が明瞭に残り、胎土も悪い。内面調整はヘラナデである。

231はロクロ不使用の甕で底部を欠く。体部は内彎して立ち上がり、頸部で窄む。短かめの口

縁部はわずかに外反している。頸部には補修孔を持つ。器面調整は、内外面の口縁部がヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。

232はロクロ不使用の甕である。体部は上半で直立ぎみに内彎し、頸部に続く。頸部には軽い段を持ち、口縁部は強く外反する。口唇部先端は凹状を呈する。231と同様に頸部に補修孔を持つ。器面調整は内外面の口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面は上半が横位のハケメ、下半が縦位のヘラナデ調整である。

Ｉ３－ｓ住居跡（図87、図版63）

234はロクロ不使用の坏の底部破片である。外面の底部下端は軽く窪む。内外面ともにヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている。

235はロクロ不使用の甕の底部である。底部下端にわずかに窪みを持つ。器面は外面はハケメ後ヘラミガキ調整され、内面はハケメ調整のみである。

236はロクロ不使用の甕の口縁部で、内彎ぎみに外傾している。内面はヨコナデ調整、外面はハケメ後、ヘラミガキが施されている。

237はロクロ不使用の甕の底部破片で、内面ヘラナデ、外面はヘラミガキされている。底部も一部、ヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。

238はロクロ不使用の甕の体部上半部である。体部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反している。頸部の括れは不明瞭である。器面調整は口縁部の内外面ともハケメ後にヘラミガキ、体部の外面も同様であるが、内面はハケメ調整のみである。

239はロクロ不使用の長胴甕である。体部は直立ぎみに立ち上がり、上部で内彎する。頸部は括れ、口縁部は外反する。底部下端はわずかに外側に張り出す。器面調整は、口縁部は内外面ともハケメ後ヘラミガキされ、体部外面もハケメ後ヘラミガキ調整であるが、内面はハケメのみである。

240・241は器種不明の鉄製品である。240は角釘、241は刀子の一部と考えたが、断面形状から不明とした。

242はＰ２内から出土した磨石である。２面が磨面として使用されている。

243は石器の剝片であり、使用痕等はみられない。240～243の計測値は遺物一覧表に示している。

Ｊ３－ｙ住居跡（図88・89、図版64）

244はロクロ不使用の坏であるが、底部が意識的に穿孔されている。体部は外傾して立ち上がり、直立ぎみの口縁部に至る。器面は内外面ともに入念なヘラミガキ調整が施され、内面は黒

色処理されている。底部の孔は焼成後、打ち欠かれたものであり、坏として使用後に何らかの用途を持っていたものと考えられるが不明である。

245はロクロ不使用の甕の口縁部付近である。頸部に軽い段を持ち、口縁部は内彎ぎみに外傾する。内面はヘラミガキ調整が施されている。

246はロクロ不使用の甕で、体部下半と底部を欠く。最大径を肩部付近に持ち口縁部は強く外反する。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリで、内面がハケメである。

247・248・249・250はロクロ不使用の長胴甕である。247は最大径を体部上半付近に持つ。口縁部は直立ぎみに外傾する。頸部の括れは不明瞭である。器面調整は、口縁部の外面がヘラナデ後ヘラミガキ、内面はハケメ後ヘラミガキが施され、体部は外面がハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメ調整のみである。248は頸部に明瞭な段を持ち、口縁部は外反するが、口唇部付近から内彎ぎみとなる。体部は底部にかけて窄み、底部下端はかなり細みである。最大径を肩部付近に持つ。器面調整は、口縁部外面が入念なヘラミガキ、内面はヨコナデ後一部ヘラミガキがみられる。体部外面は入念なヘラミガキ、内面はヘラナデとヘラミガキが一部に施されている。249最大径を肩部付近に持つ。頸部は括れ、口縁部は外反ぎみである。器面調整は口縁部外面がヨコナデ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施され、体部は外面がハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメのみである。底部の下端はやや外側に張り出している。249は底部内面はわずかに丸みを持っている。250は最大径を体部中央付近に持つ。頸部は軽い段を残すように括れ、口縁部は内彎して立ち上がる。器面調整は口縁部外面がヨコナデ後横位のヘラミガキ、内面はヘラミガきがみられ、体部外面はハケメ後入念なヘラミガキ、内面がヘラナデ後ヘラミガキ調整が施されている。249同様、底部下端は張り出している。

251は無底式の甑で口縁部を欠く。体部は内彎して窄まる。器面は外面がヘラケズリ後、入念なヘラミガキ調整、内面が横位のハケメ調整が施されている。

(3)住居跡以外の遺構内出土遺物

D3－w土坑（図90、図版65）

252～256は、いずれも埋土からの出土である。252はロクロ使用の坏で底部を欠く。内面はヘラミガキ後黒色処理されている。253は赤焼き土器の坏で底部を欠く。254は赤焼き土器の坏の口縁部である。255はロクロ使用の甕である。口唇部は凹状に窪んでいる。体部外面はヘラケズリ調整されている。256は円柱状の土製支脚で、半分ほどが欠損していると思われる。直径4.2cmで現存高は8.0cmである。器面には指頭圧痕が残っている。

Ｄ３－ｘ土坑（図90、図版65）

257はロクロ使用の坏で底部が欠損している。体部は内彎ぎみに外傾し、口縁部はわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。

Ｊ４－ｂ土坑（図90、図版65）

多量の鉄滓が埋土に含まれていた土坑である。この土坑からフイゴの羽口、碗形鉄滓、角釘が出土している。

258～259はフイゴの羽口である。いずれも欠損品であるが、260は欠損部が少なく、形状が観察できる。258は260の欠損部位にあたるものかも知れない。各羽口は、ハケメ、ヘラケズリ、ヘラミガキ等の調整が外面に施されている。

261は角釘と思われる鉄製品である。両端が欠損している。計測値は4.4cm、厚さ0.5cmである。

262・263は鑑定依頼した鉄滓である。262はいわゆる碗形鉄滓である。鑑定結果は付編７を参照されたい。

Ｈ２－ｇ陥し穴状遺構（図93、図版68）

301は埋土上部出土の石器剝片である。

Ｈ３－ｐ陥し穴状遺構（図93、図版68）

302・303は使用痕のある石器剝片で、埋土上部から出土している。

Ｈ３－ａ陥し穴状遺構（図93）

304は縄文土器片で、埋土上部から出土しているが、細片のため時期については不明である。

6．住居跡状遺構

Ｆ４－ａ住居跡状遺構（図56、図版49）

調査区南東部の住居跡が集中する地域の最も北側に位置する。検出の段階で隣り合うＦ３－ｕ住居跡と切り合うと思われたが、壁が接する形で掘り上がった。検出時には、十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰が輪郭として確認された。

平面形　隅丸長方形　**規模**　3.8×2.7～3.0m

埋土　上半部を占める黒褐色土下部に十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰の小ブロックがレンズ状に混入する。埋土中位にくすんだ色調の焼土のブロックが散在する。

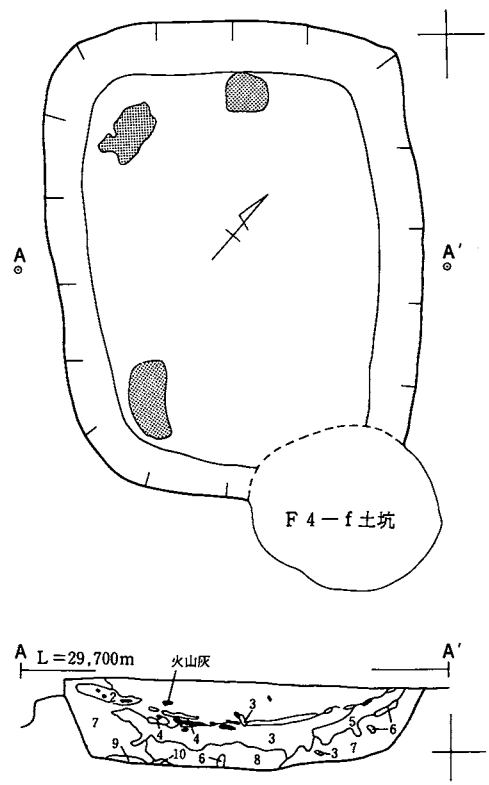
壁　外傾。壁高は54～66cm。南東壁が高い。

床面　全体に軟らかい。比較的平坦である。

炭化材・焼土　床面に焼失時のものと思われる焼土が３カ所認められるが、炭化材は見られない。南隅、東隅に１カ所ずつと北西壁中央部付近に１カ所である。

重複する遺構　埋土に火山灰の混入するＦ４－ｆ土坑が東壁を切る。その下にＦ４－ａ陥し穴状遺構があり、３遺構が切り合っている。

時期　出土遺構が全くないが、住居形態、埋土の状況などから奈良時代と考えられる。



A－A′
1．10Y R2/3黒褐色．層下部に白頭山・十和田ａ火山灰を含む。
2．10Y R2/1黒色．層上部に両火山灰を含む。
3．10Y R1.7/1黒色．焼土の小ブロックを含む。
4．7.5Y R4/4褐色．焼けている。
5．7.5Y R2/2黒褐色．両火山灰を含む。
6．7.5Y R4/3褐色．砂質土。
7．10Y R2/3黒褐色．炭化物粒をまばらに含む。
8．10Y R2/2黒褐色．黒色土のブロックをまばらに含む。
9．7.5Y R3/4暗褐色．黄褐色土の小ブロックを含む。
10．5Y R4/6赤褐色．焼失時の焼土と思われる。
11．7.5Y R4/4褐色．地山崩壊土。

図56　Ｆ４－ａ住居跡状遺構

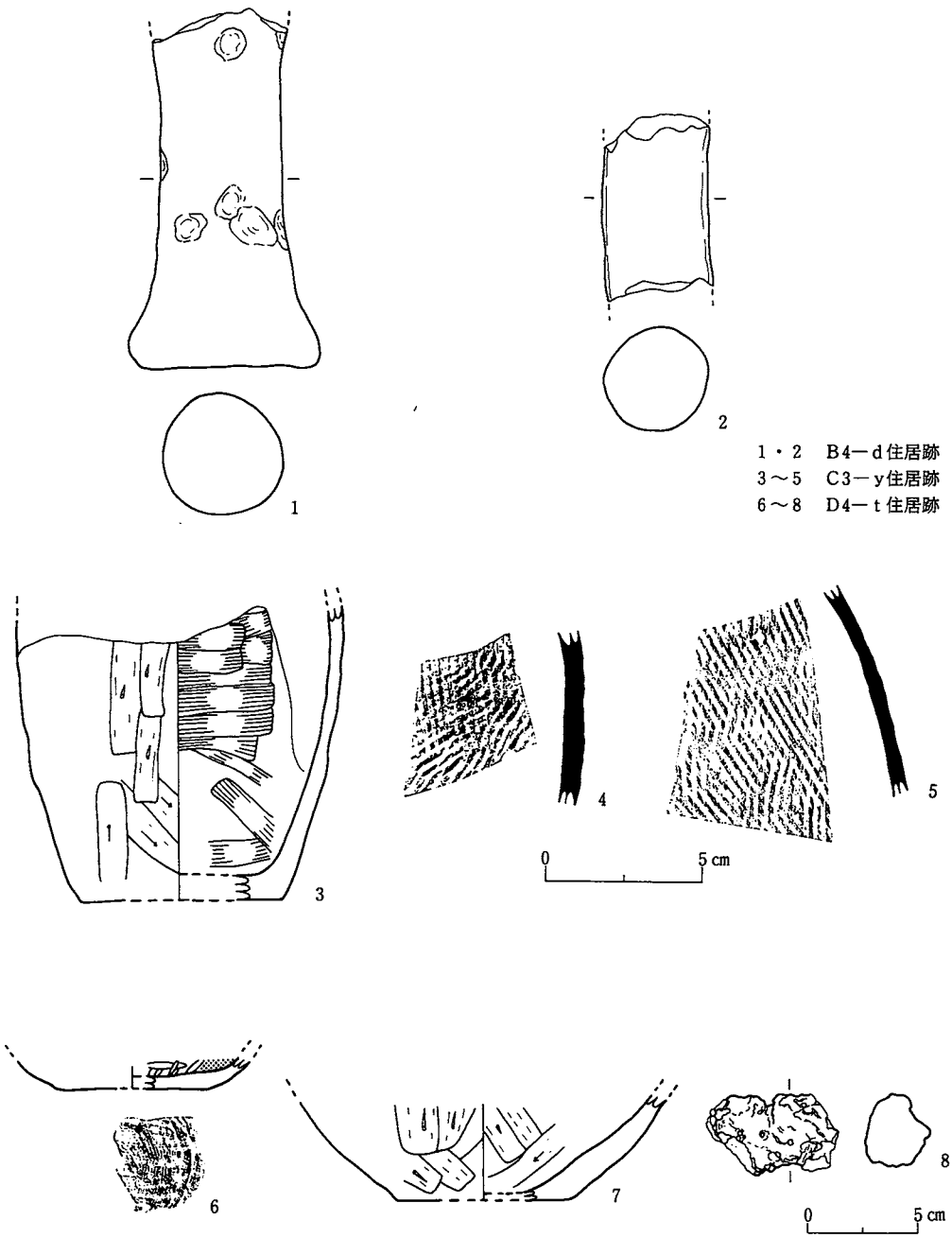


図57　B 4—d 住居跡・C 3—y 住居跡・D 4—t 住居跡

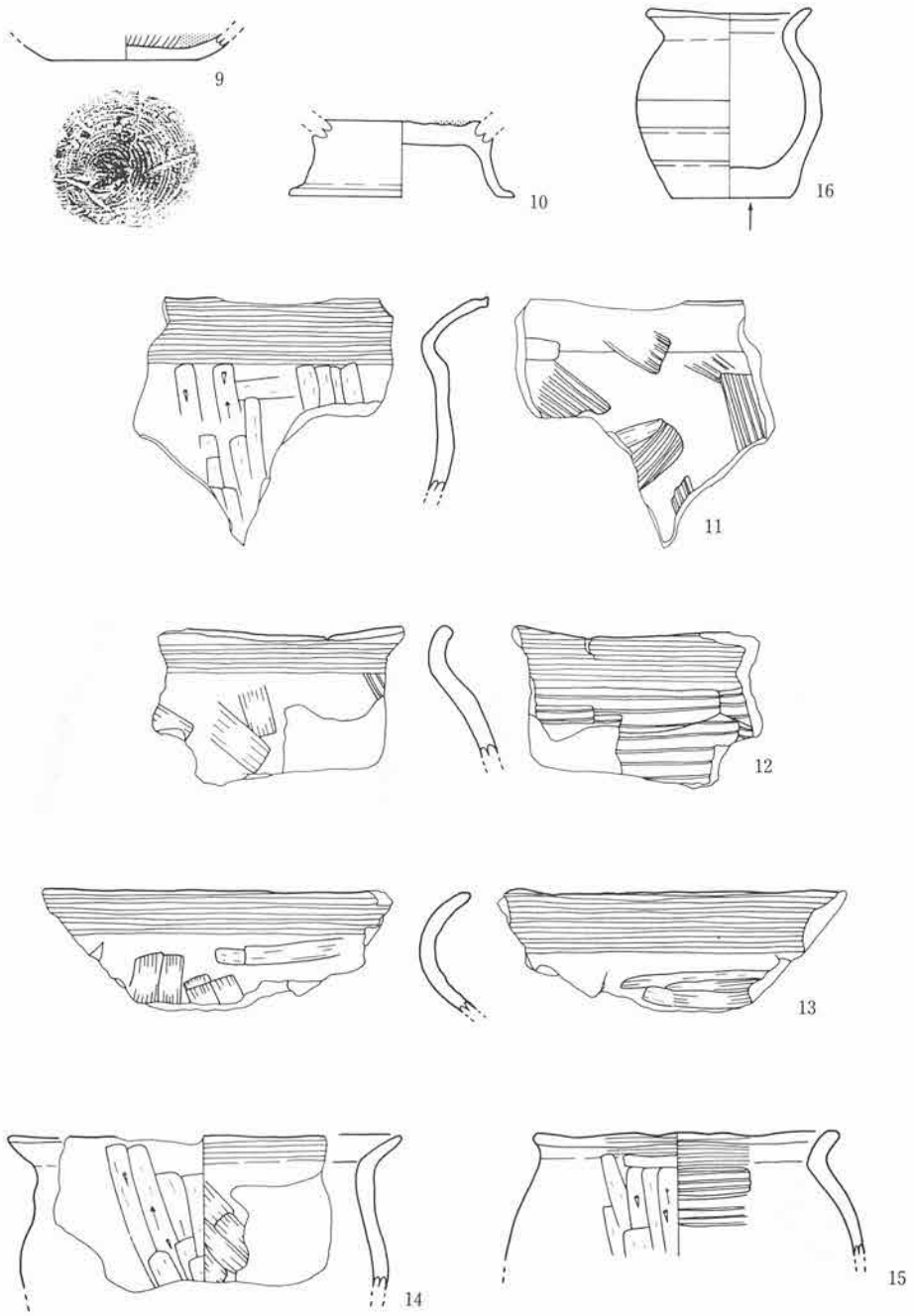


図58　E 3—u 住居跡(1)

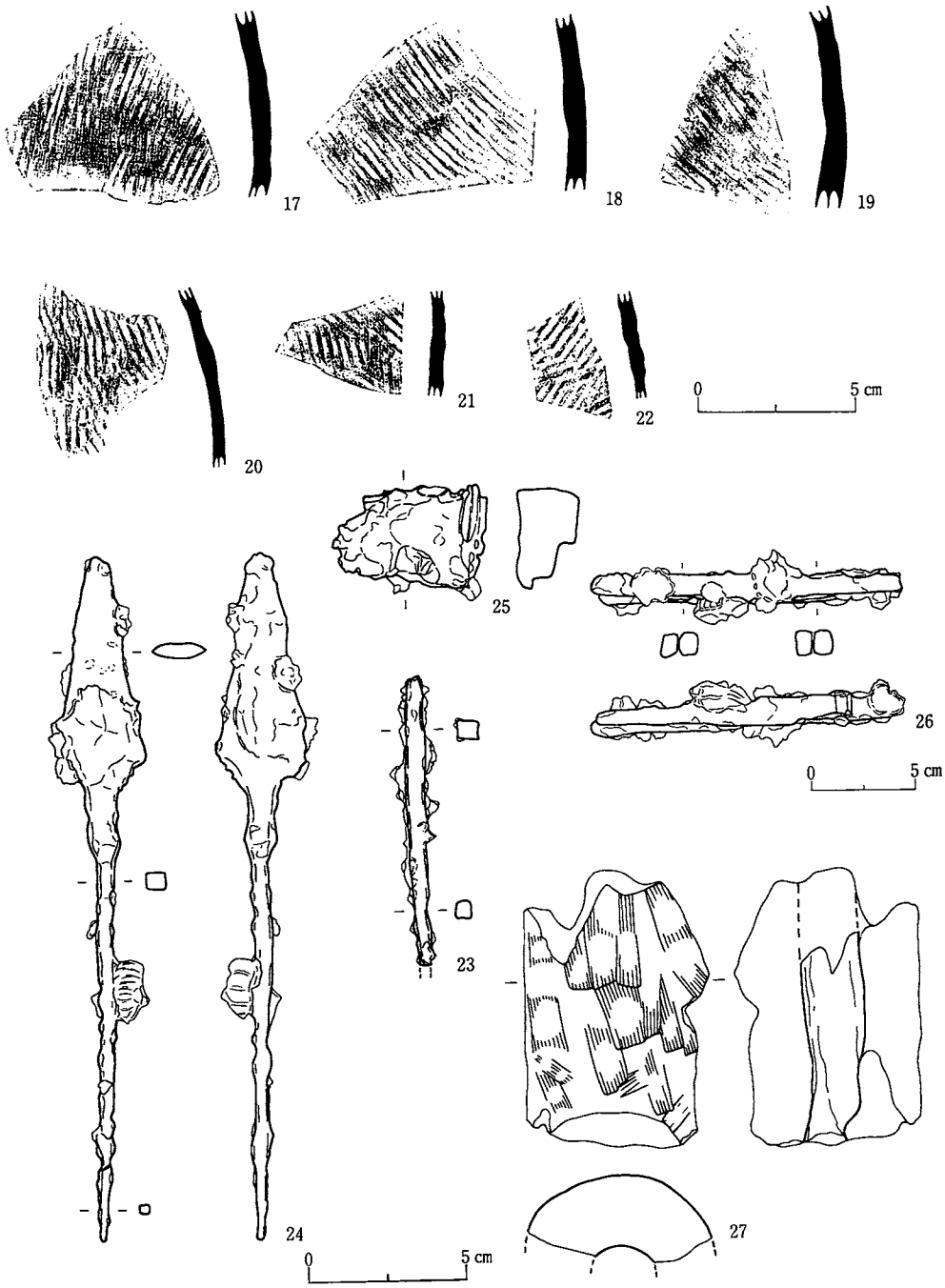
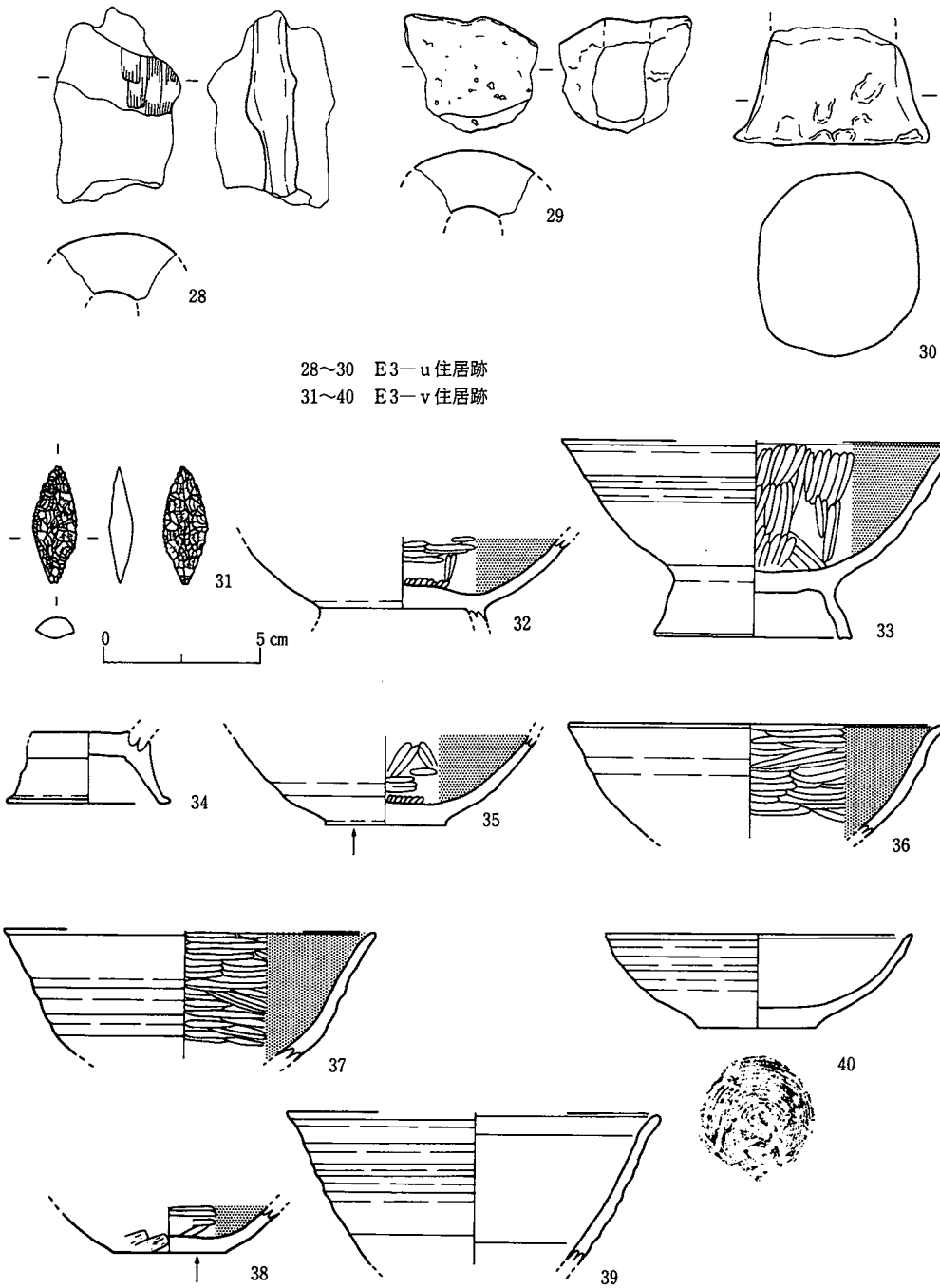


図59　E 3—u 住居跡(2)



28～30　E3－u住居跡
31～40　E3－v住居跡

図60　E 3－u 住居跡(3)・E 3－v 住居跡(1)

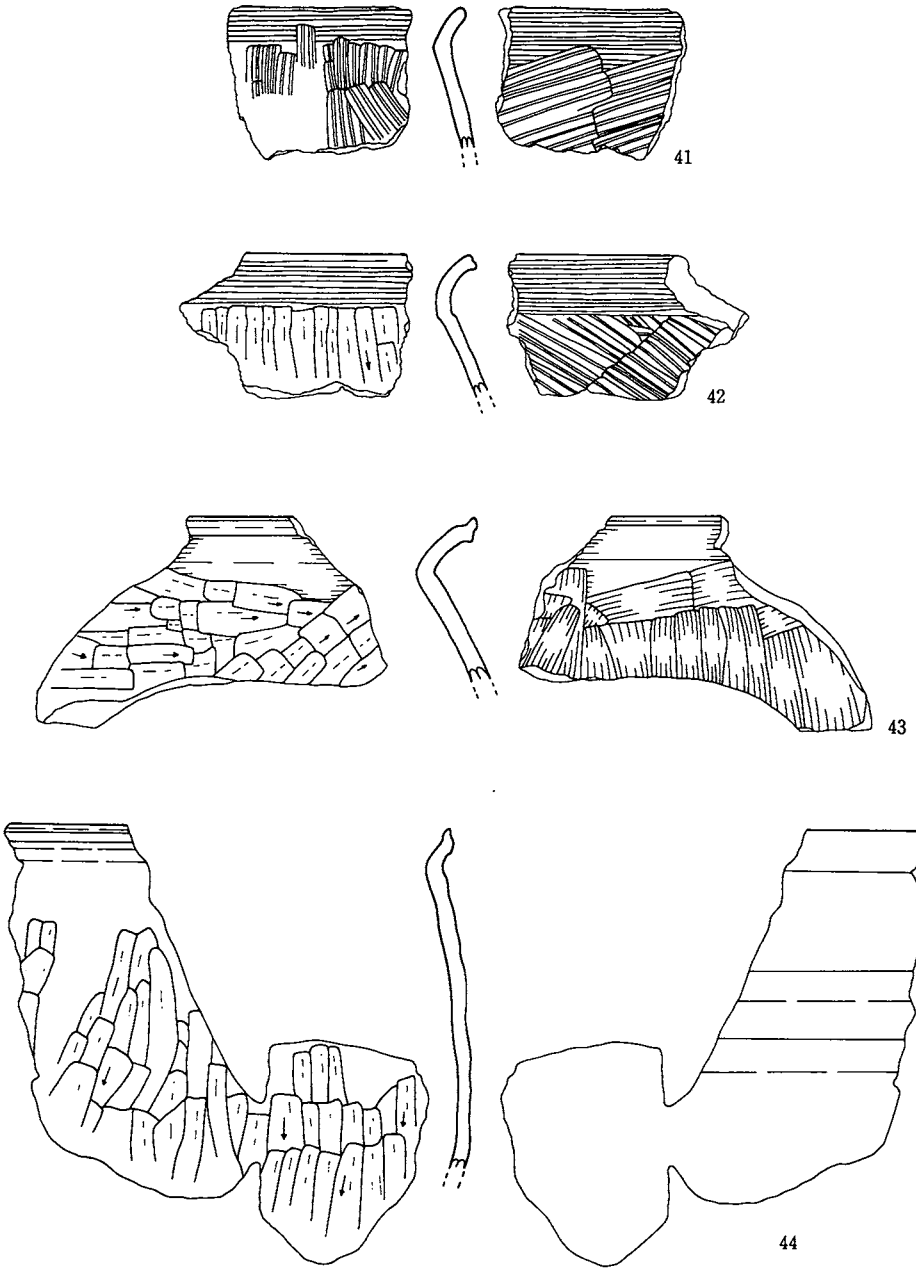
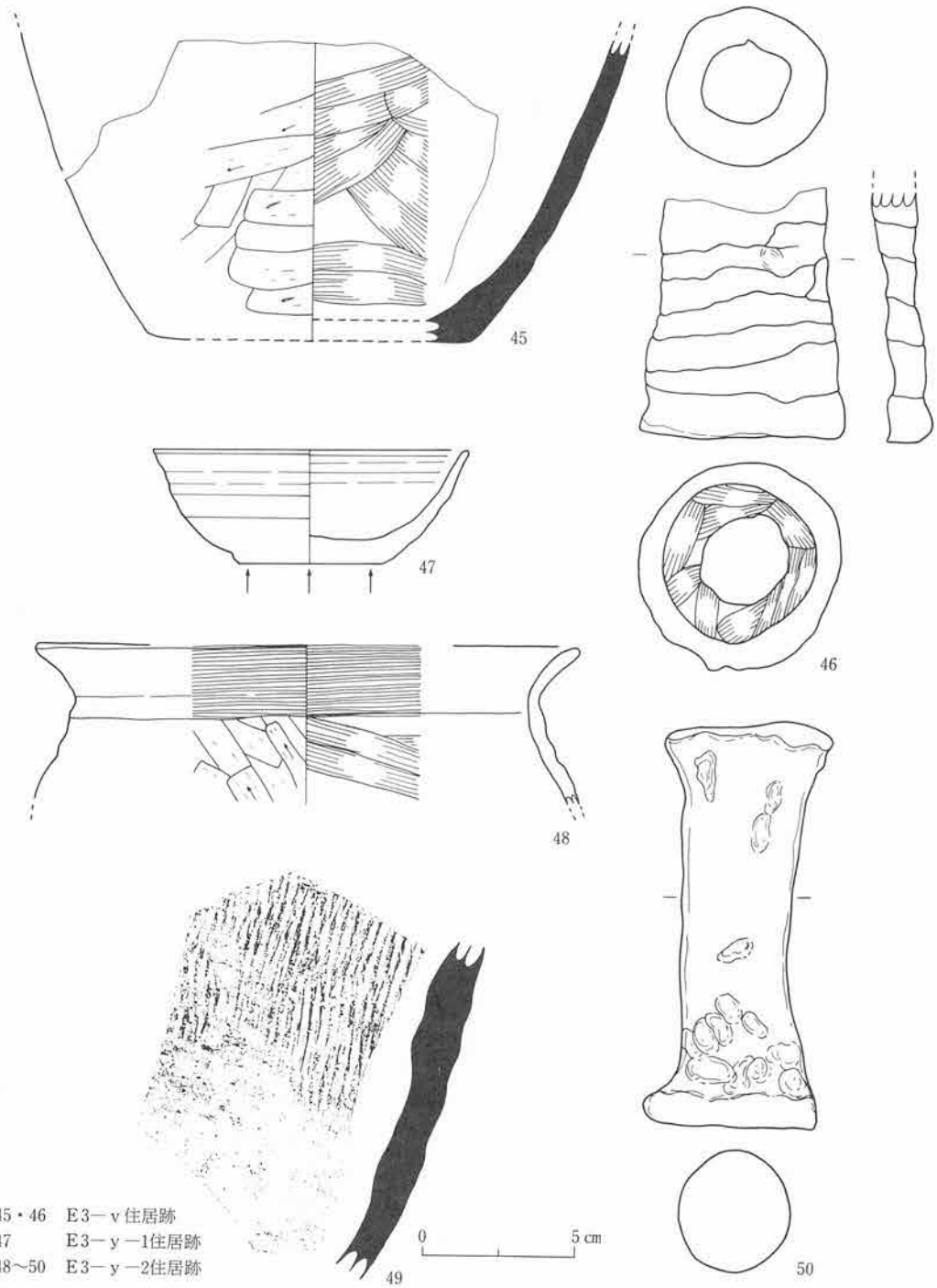


図61　E 3— v 住居跡(2)



45・46　E3—v住居跡
47　E3—y—1住居跡
48～50　E3—y—2住居跡

図62　E 3—v 住居跡(3)・E 3—y —1住居跡・E 3—y —2住居跡

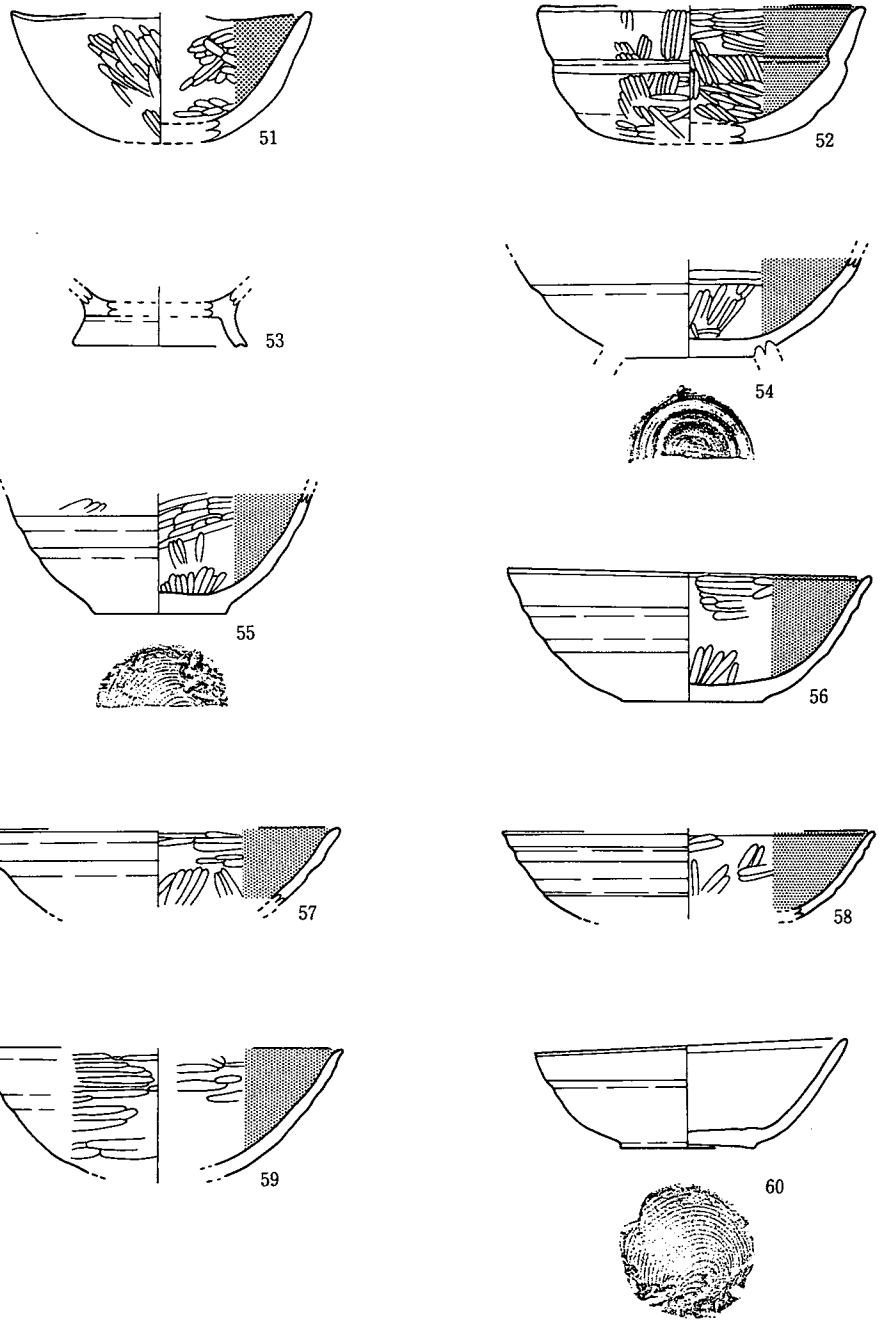


図63　E 4—d 住居跡(1)

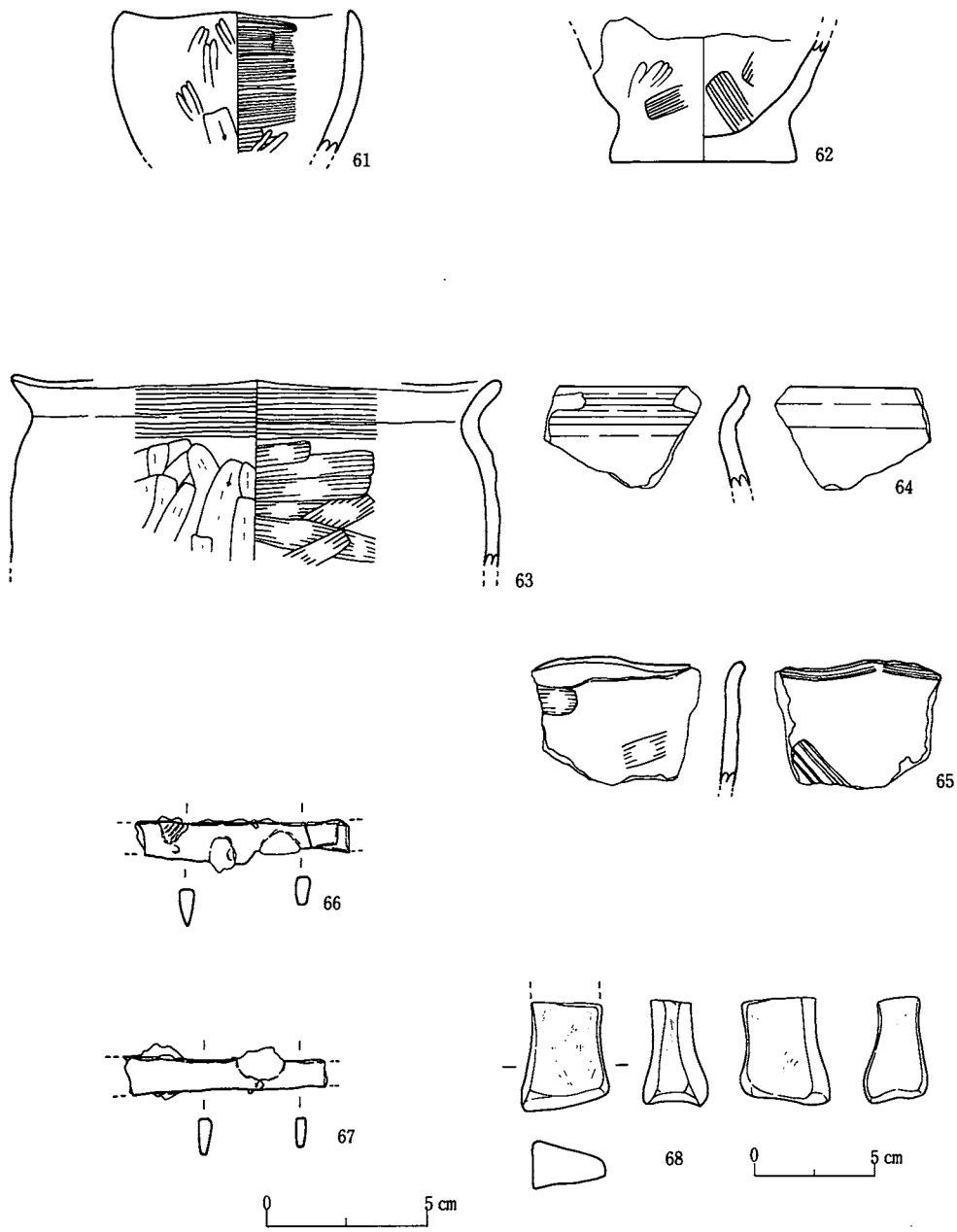


図64　E 4—d 住居跡(2)

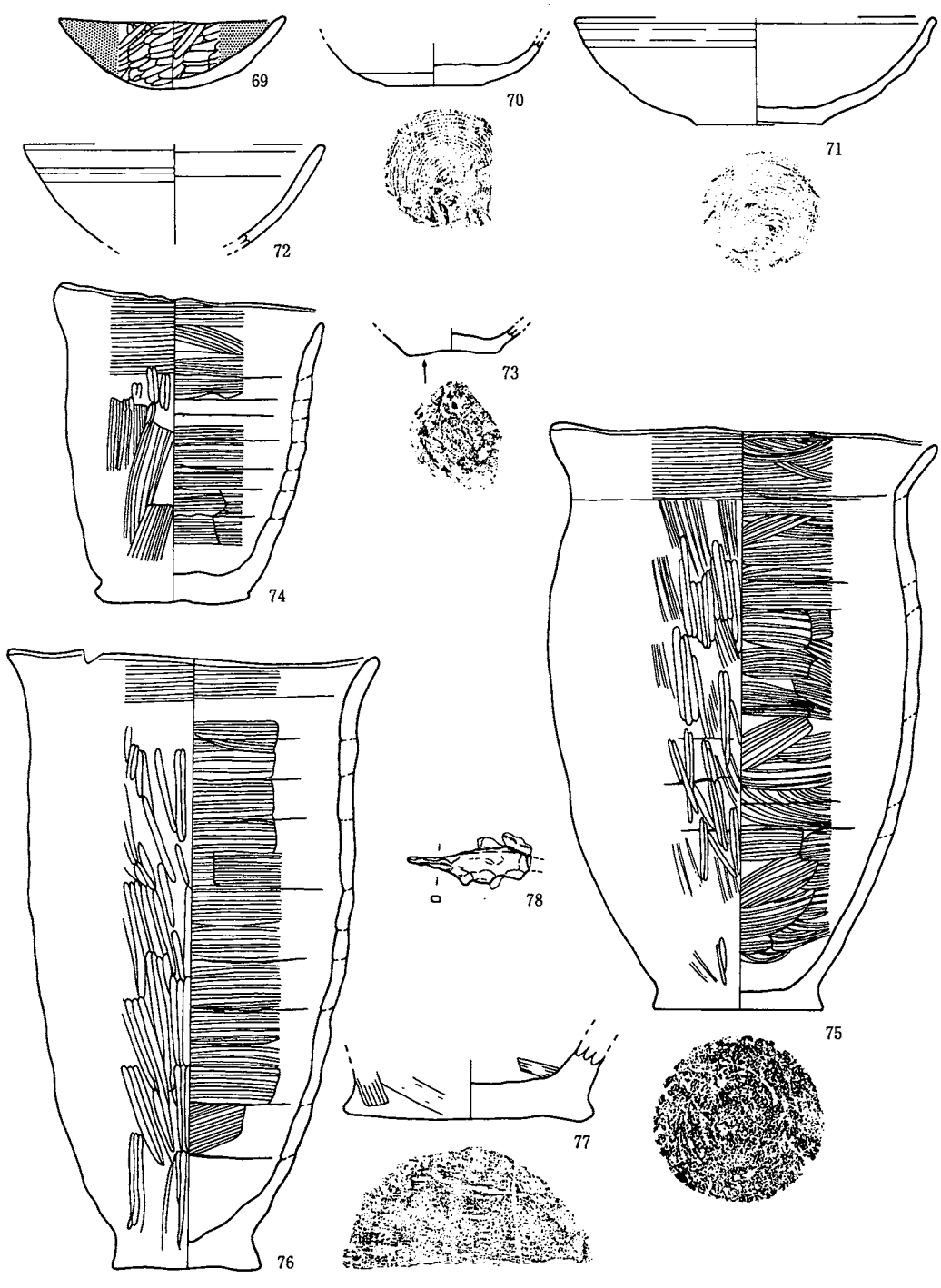


図65　E 4—g 住居跡

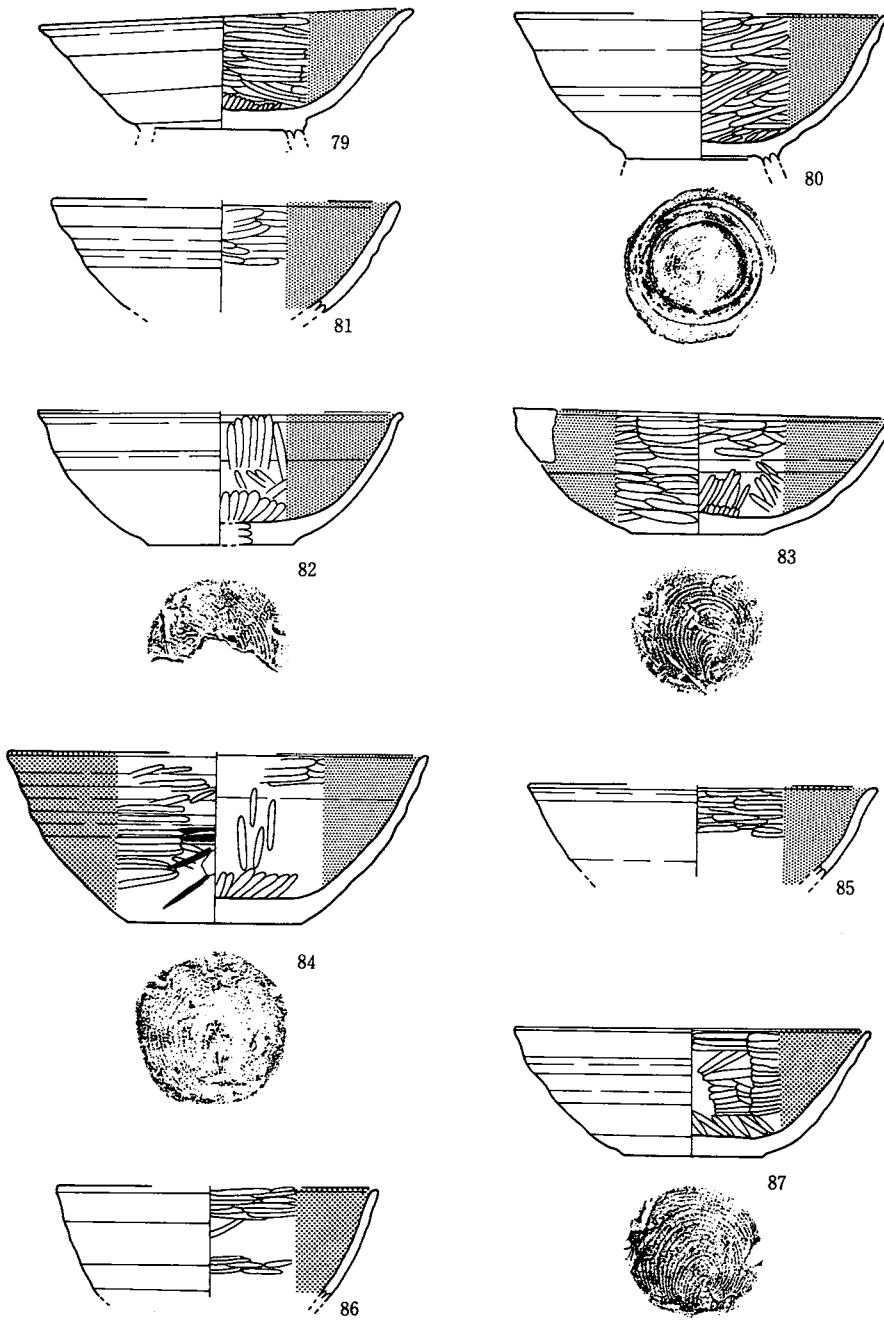


図66　E 4—h 住居跡(1)

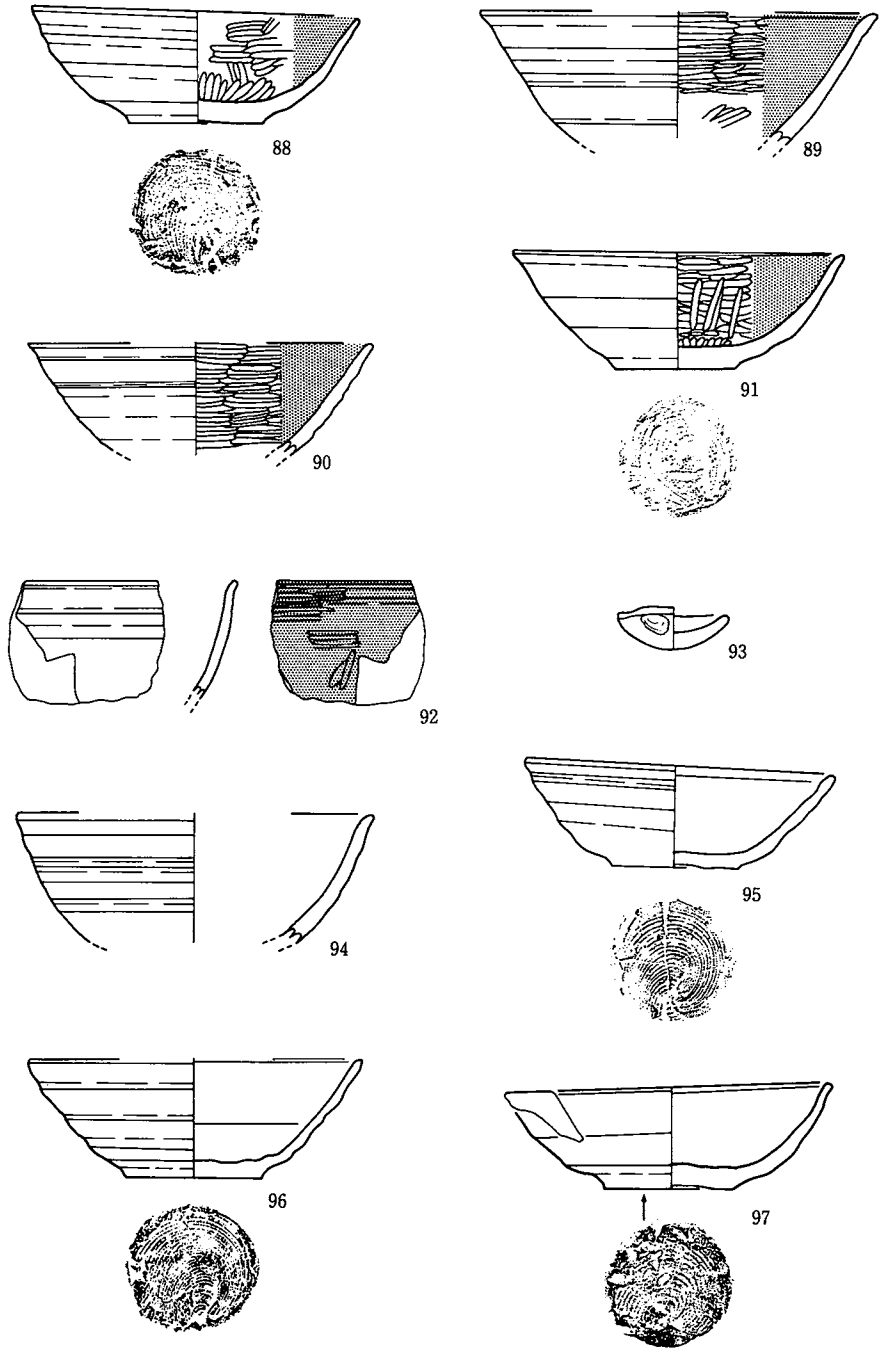


図67　E 4—h 住居跡(2)

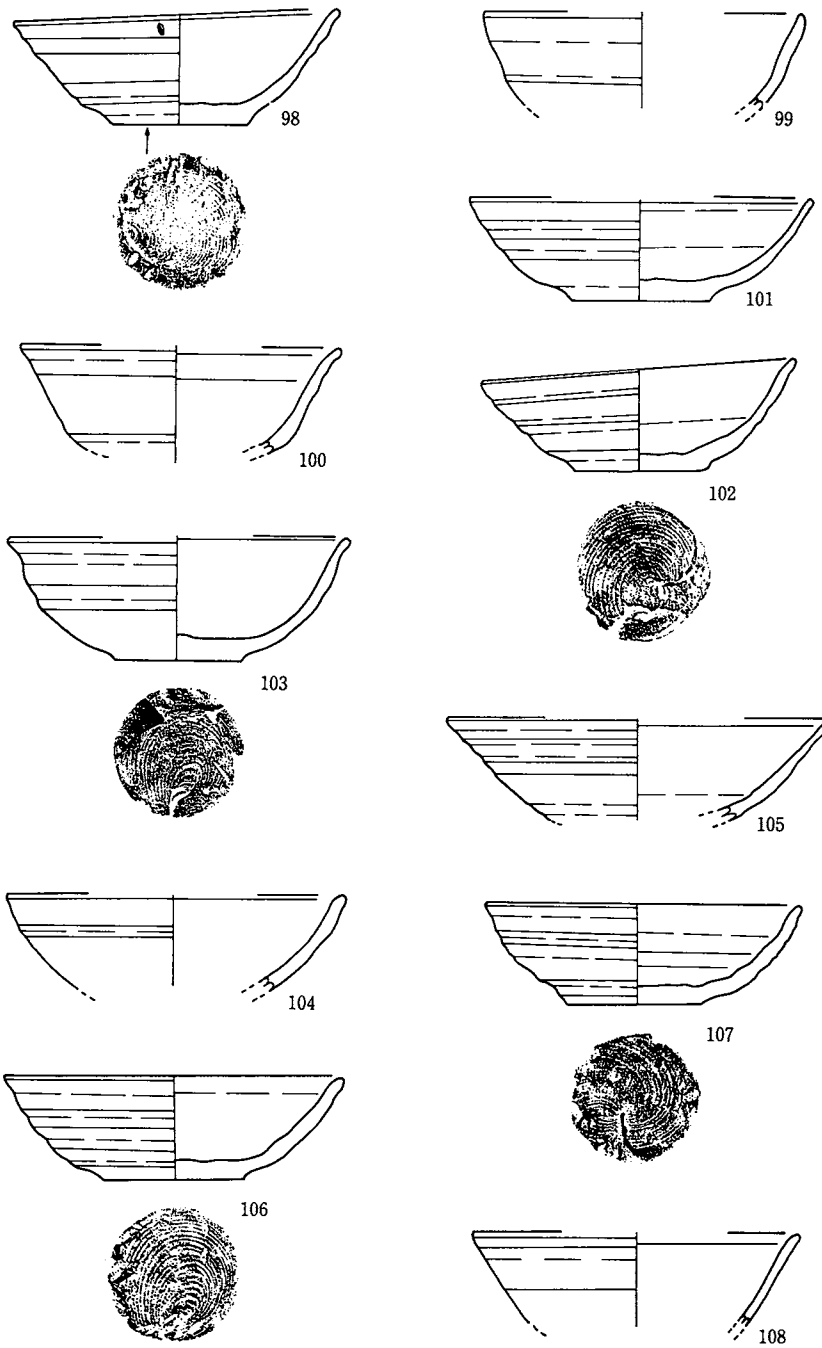


図68　E 4—h 住居跡(3)

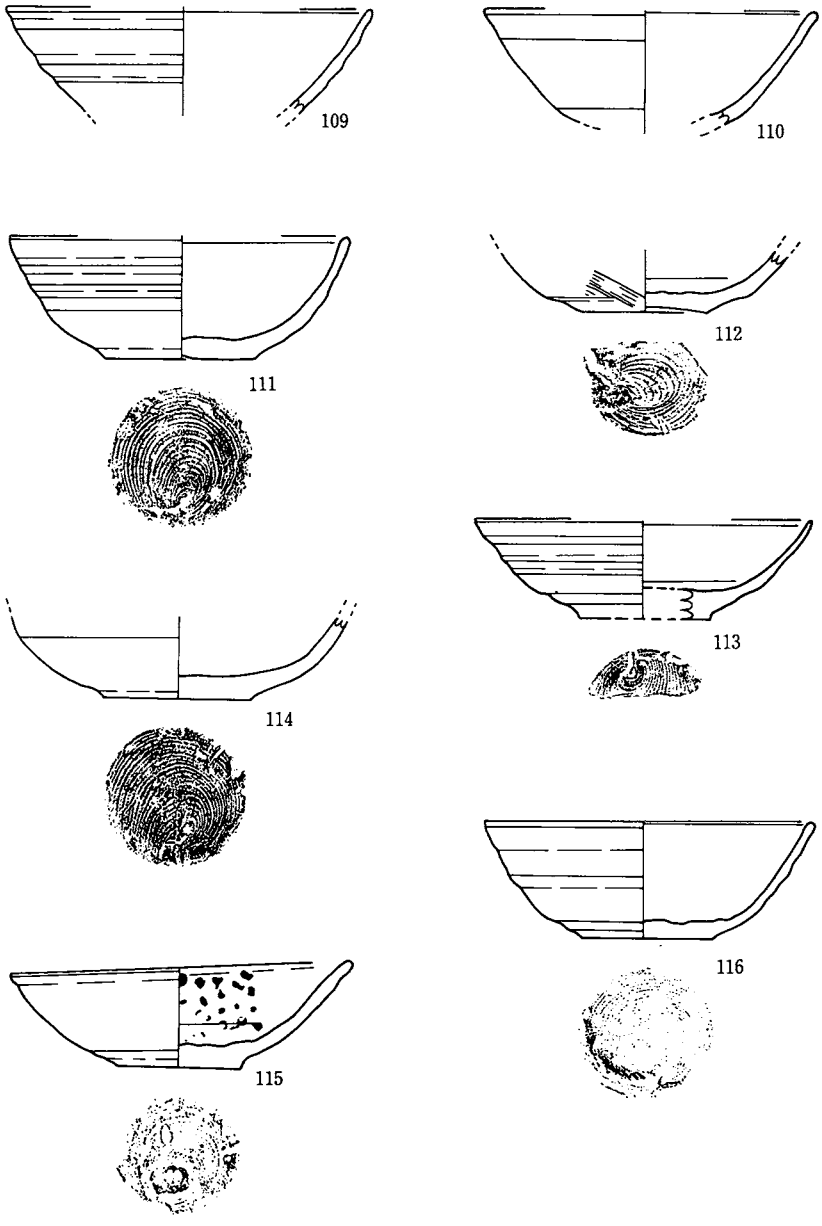
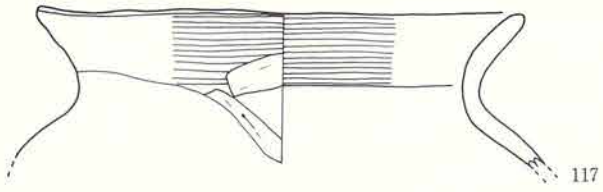
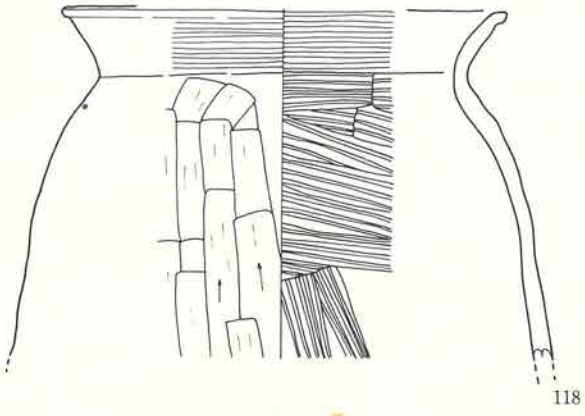
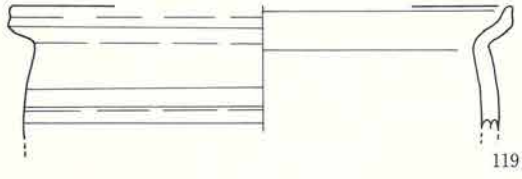
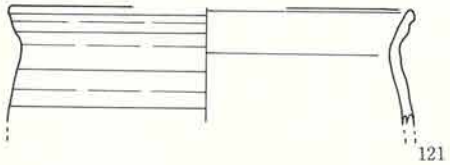


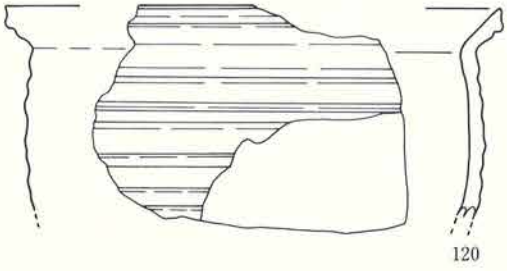
図69　E 4—h 住居跡(4)











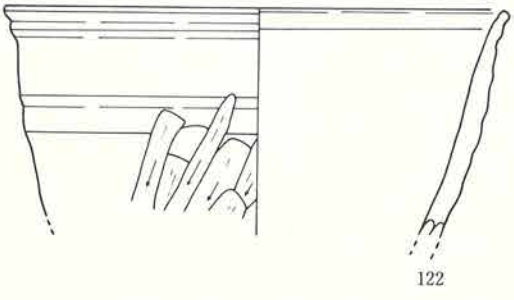


図70　E 4—h 住居跡(5)

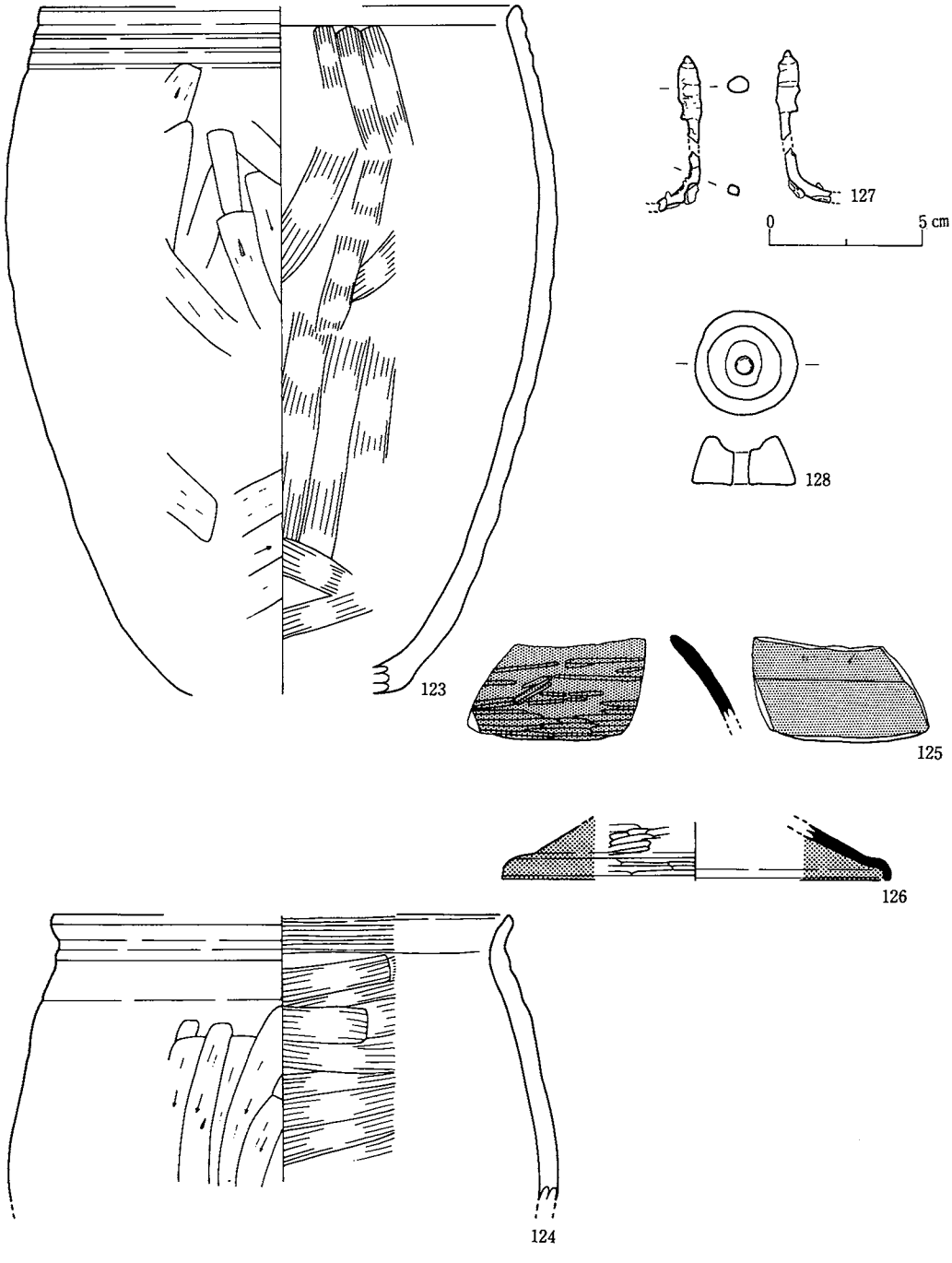


図71　E 4—h 住居跡(6)

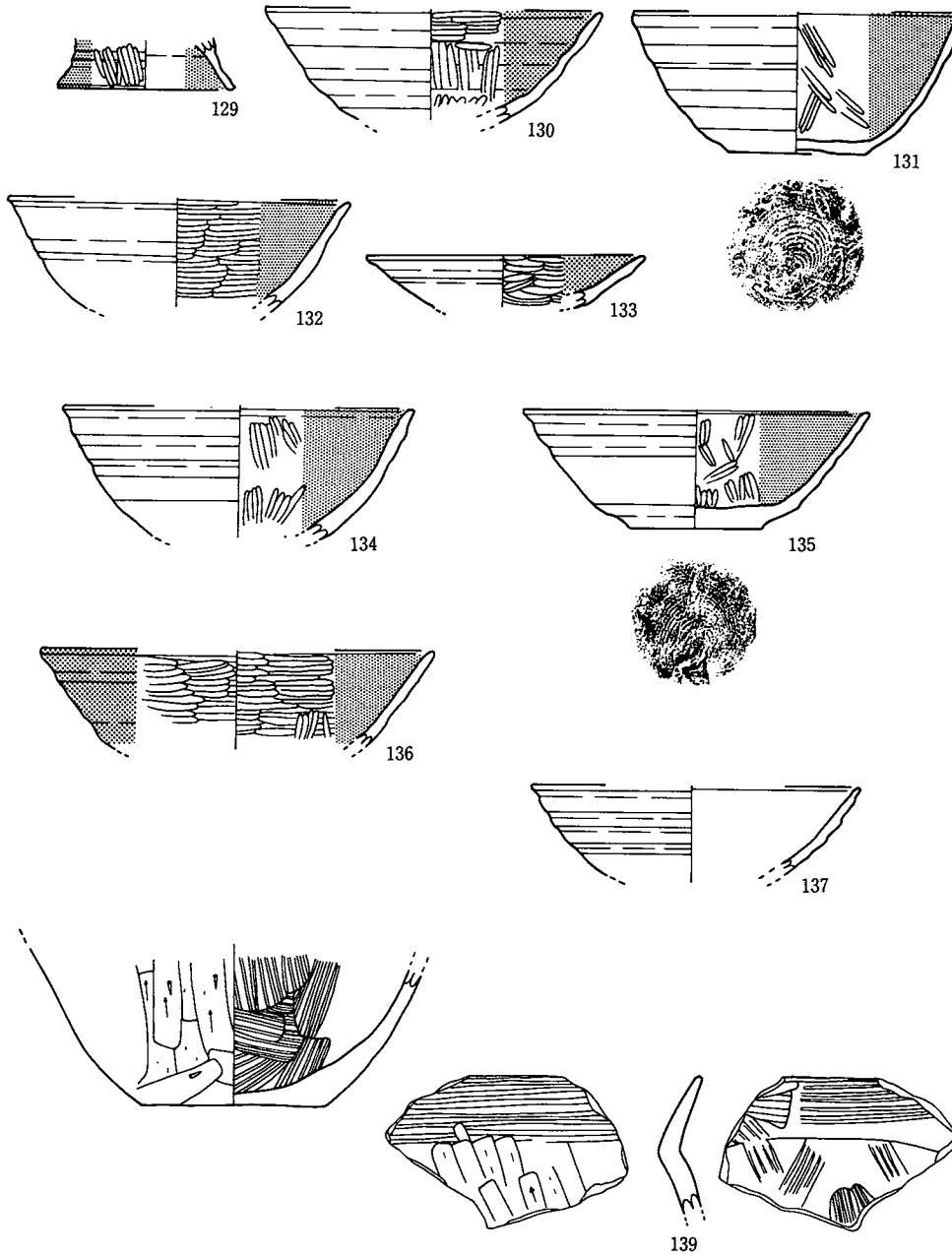


図72　E 4—I 住居跡(1)

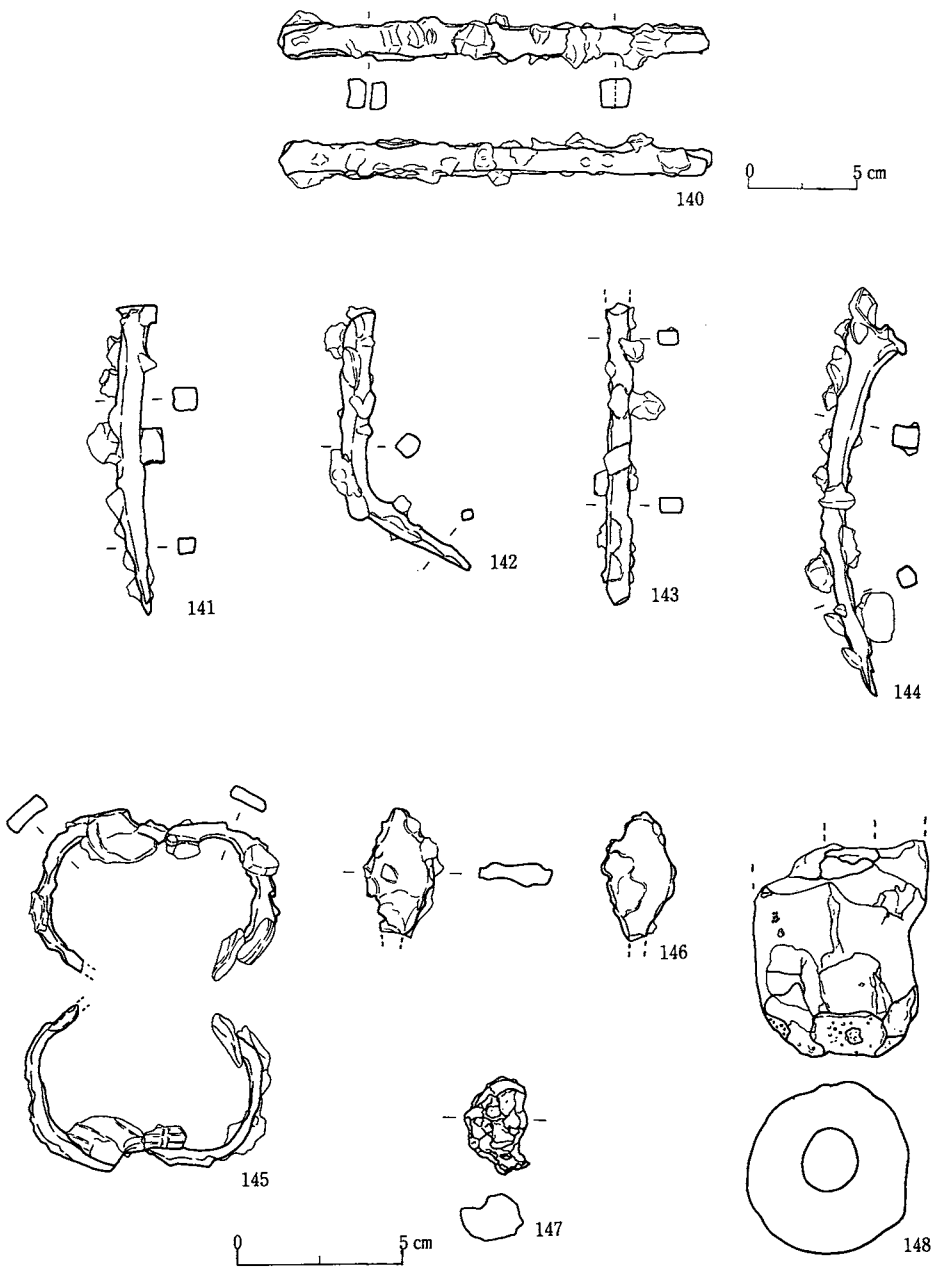


図73　E 4—I 住居跡(2)

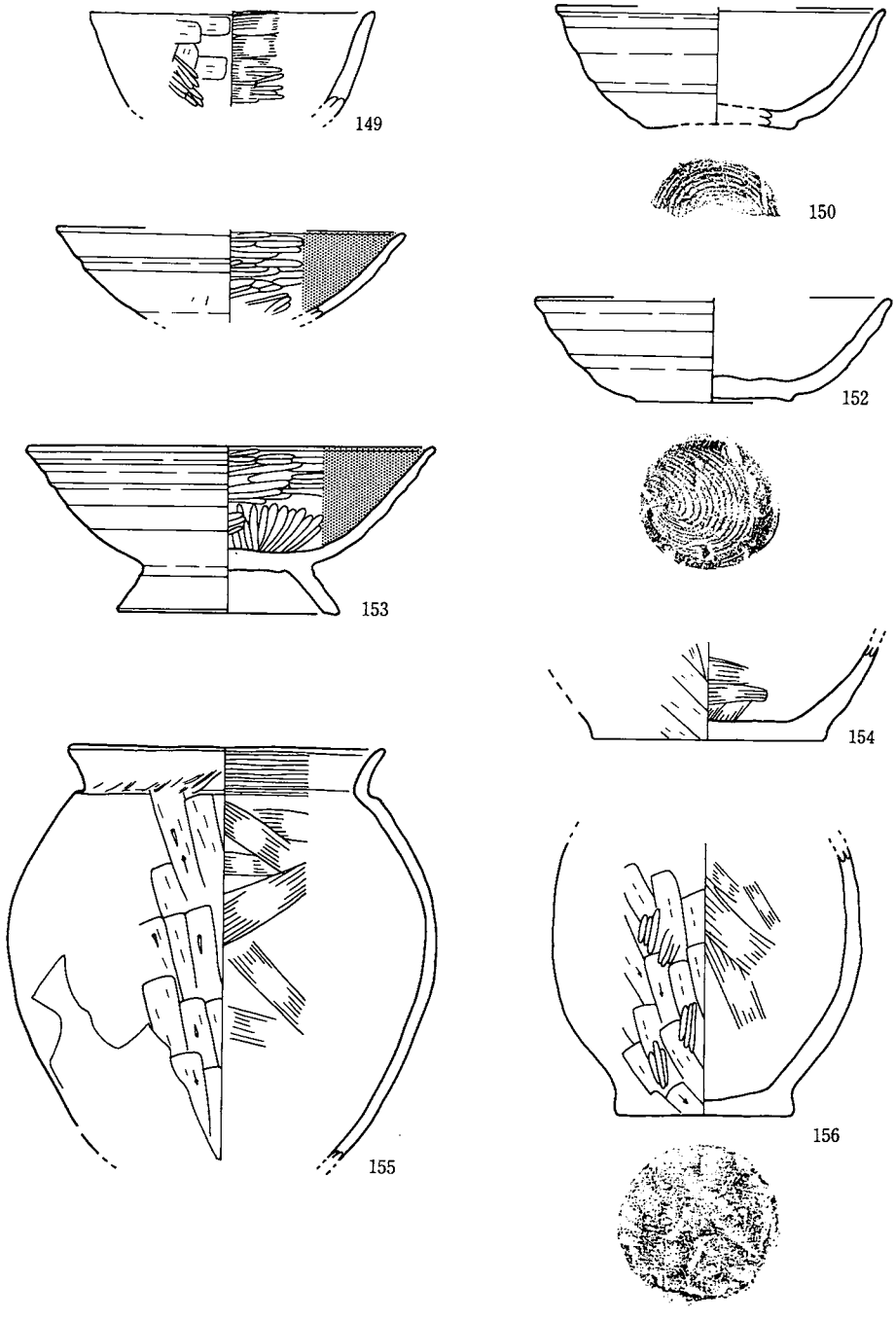
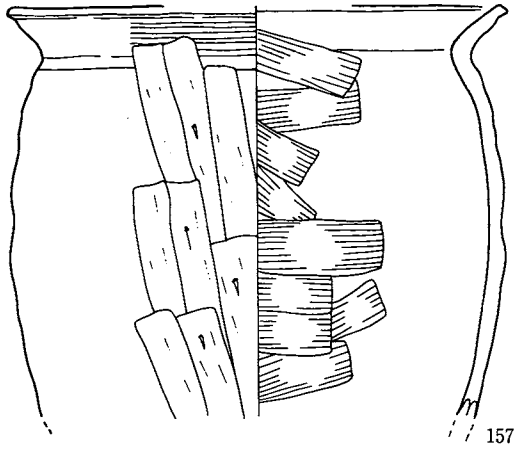
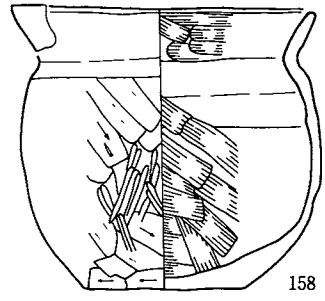
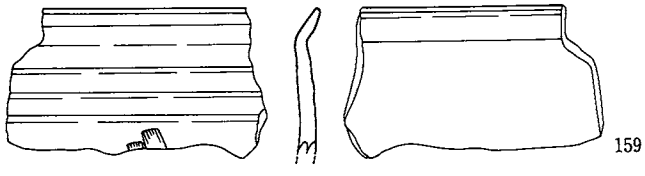
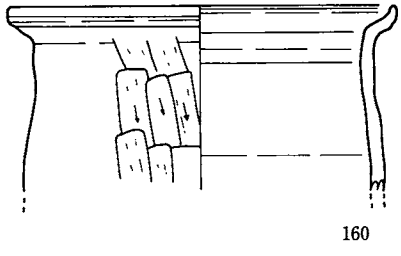


図74　F 3—u 住居跡(1)









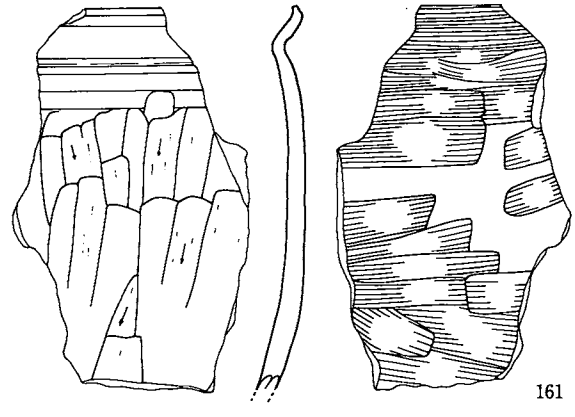


図75　F 3—u 住居跡(2)

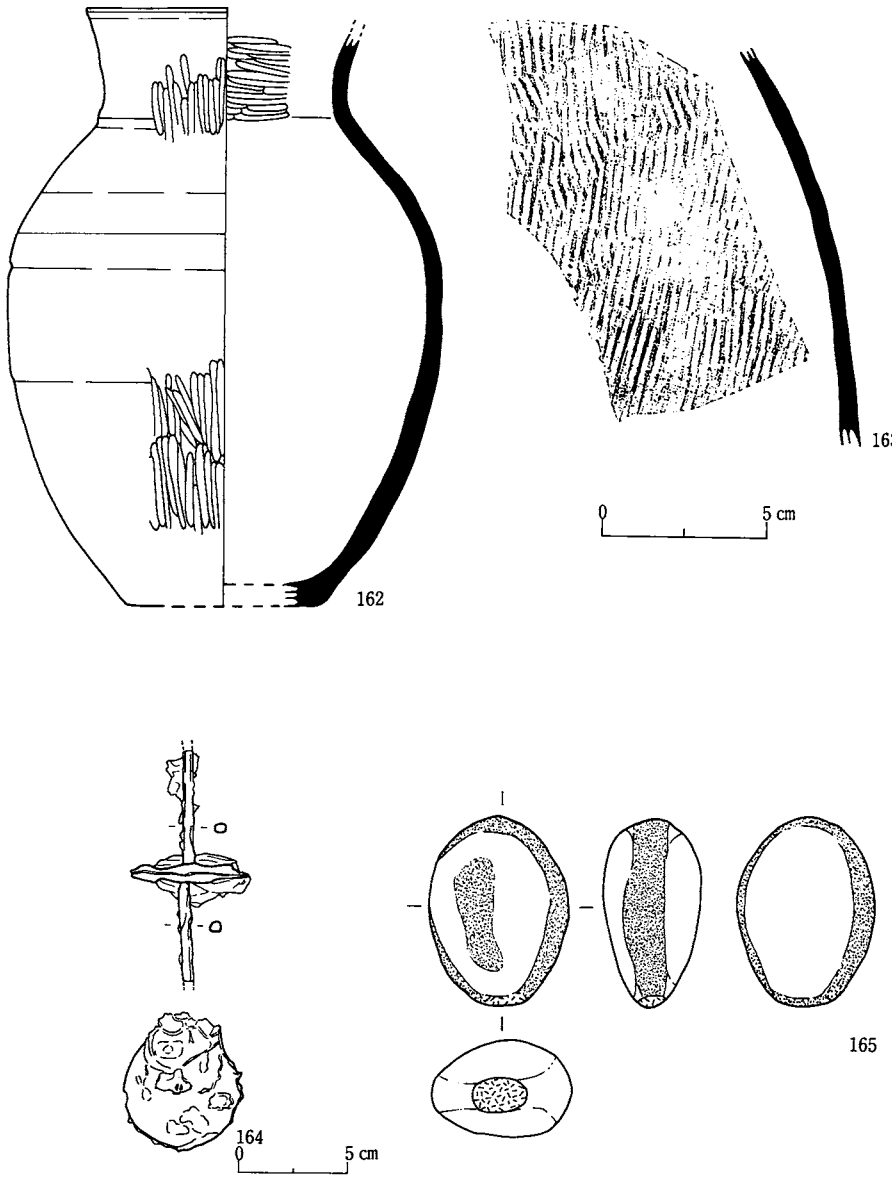


図76　F 3—u 住居跡(3)

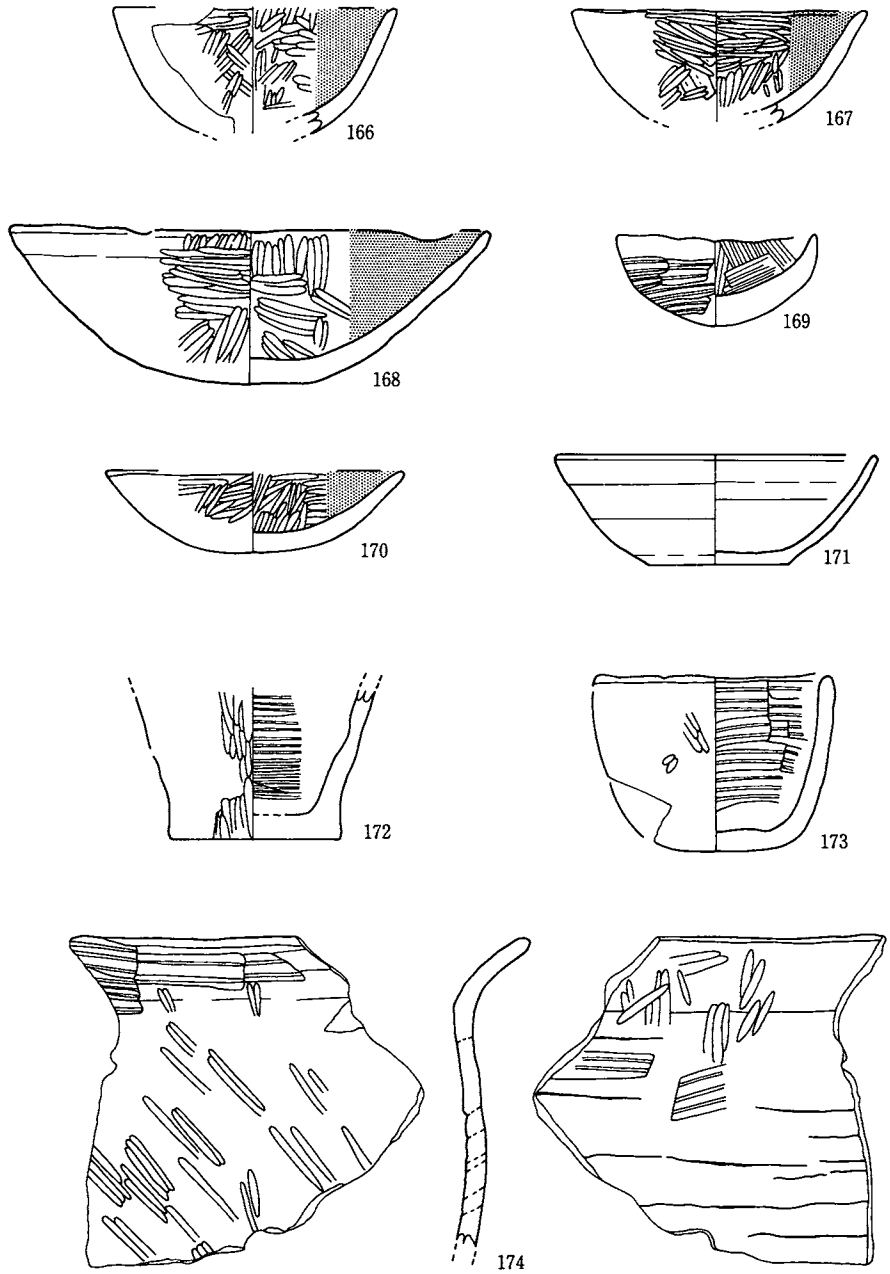


図77　G 3—m住居跡(1)

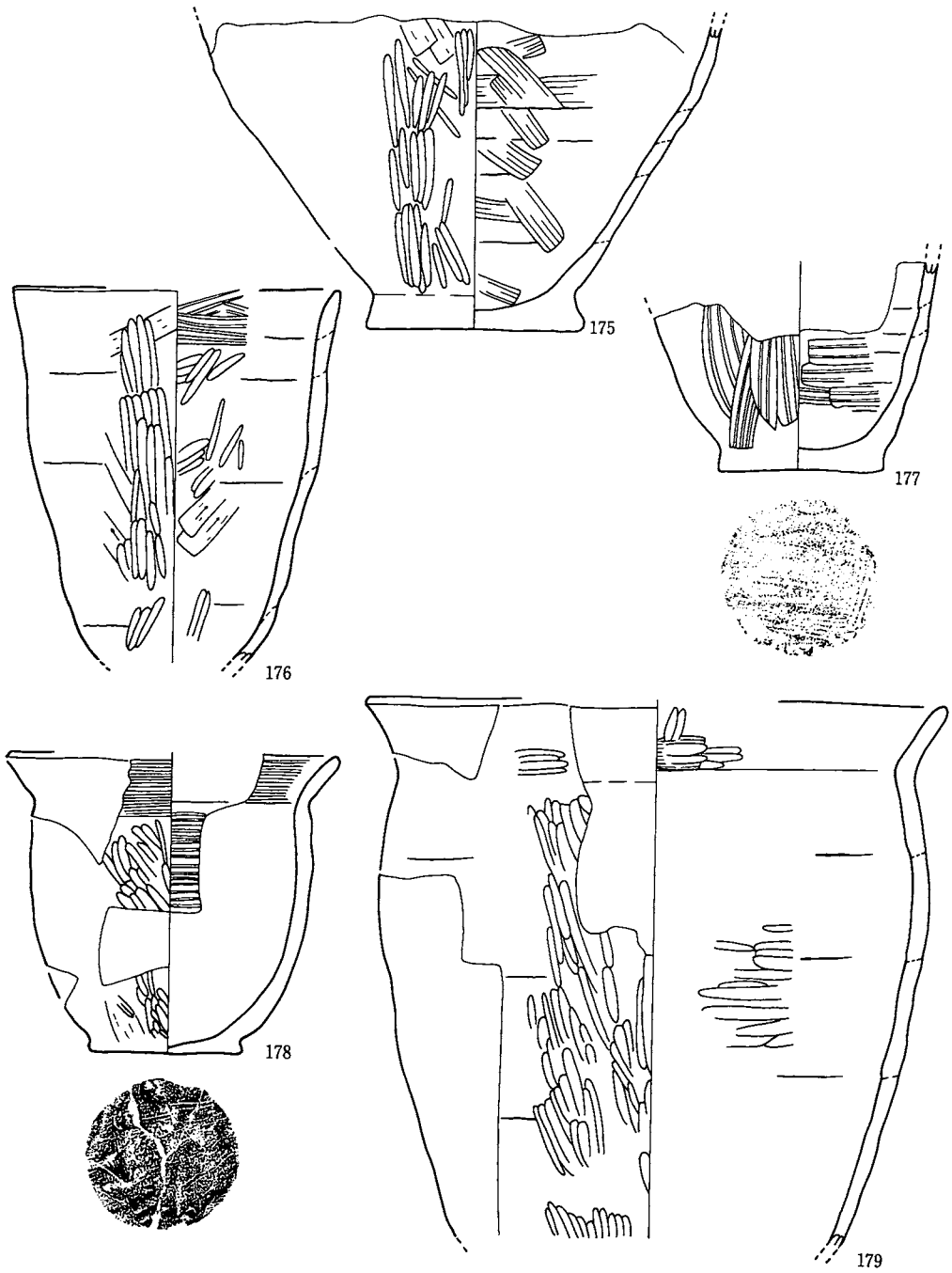


図78　G 3— m住居跡(2)

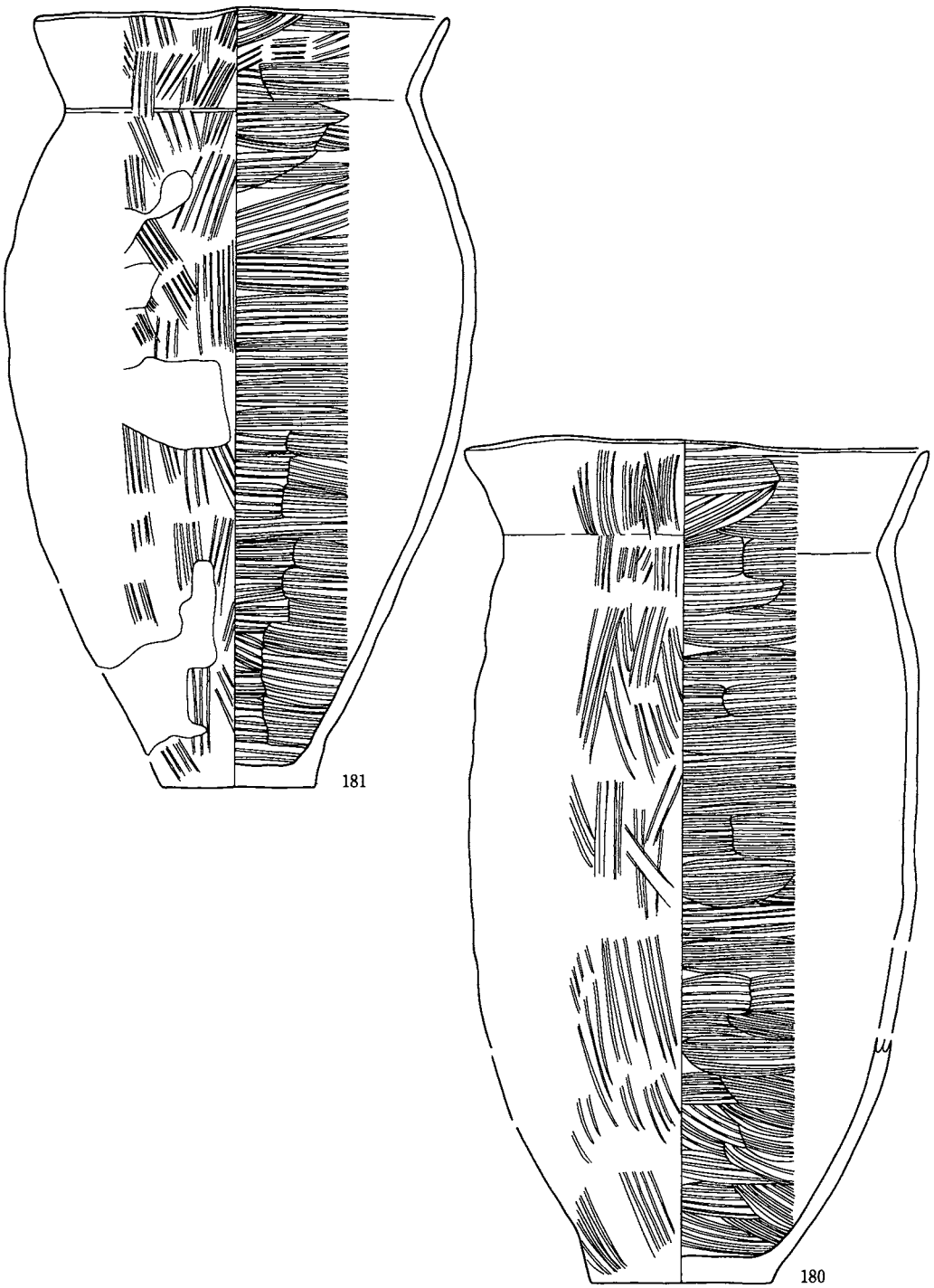


図79　G 3—m住居跡(3)

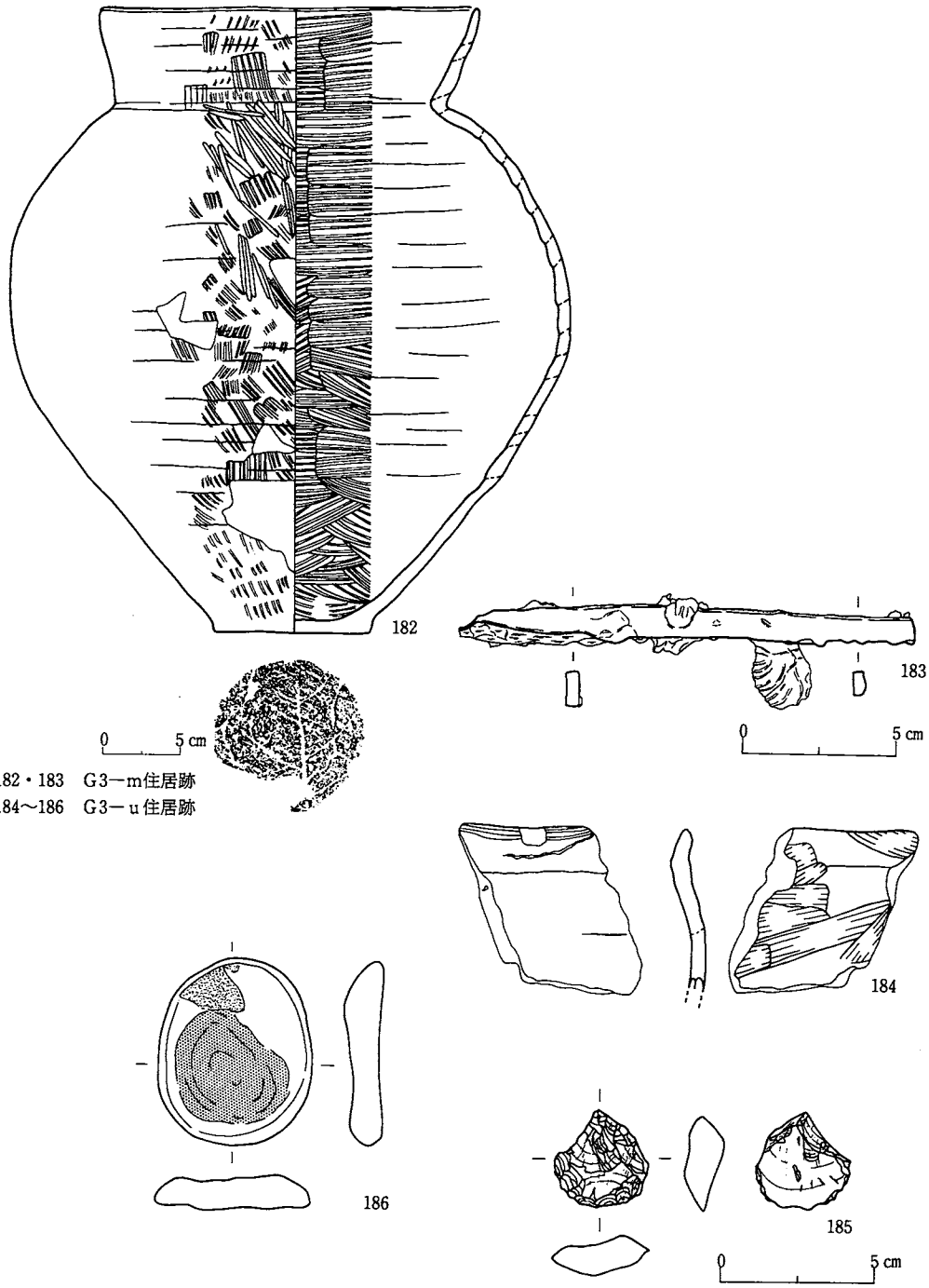


図80　G3－m住居跡(4)・G3－u 住居跡

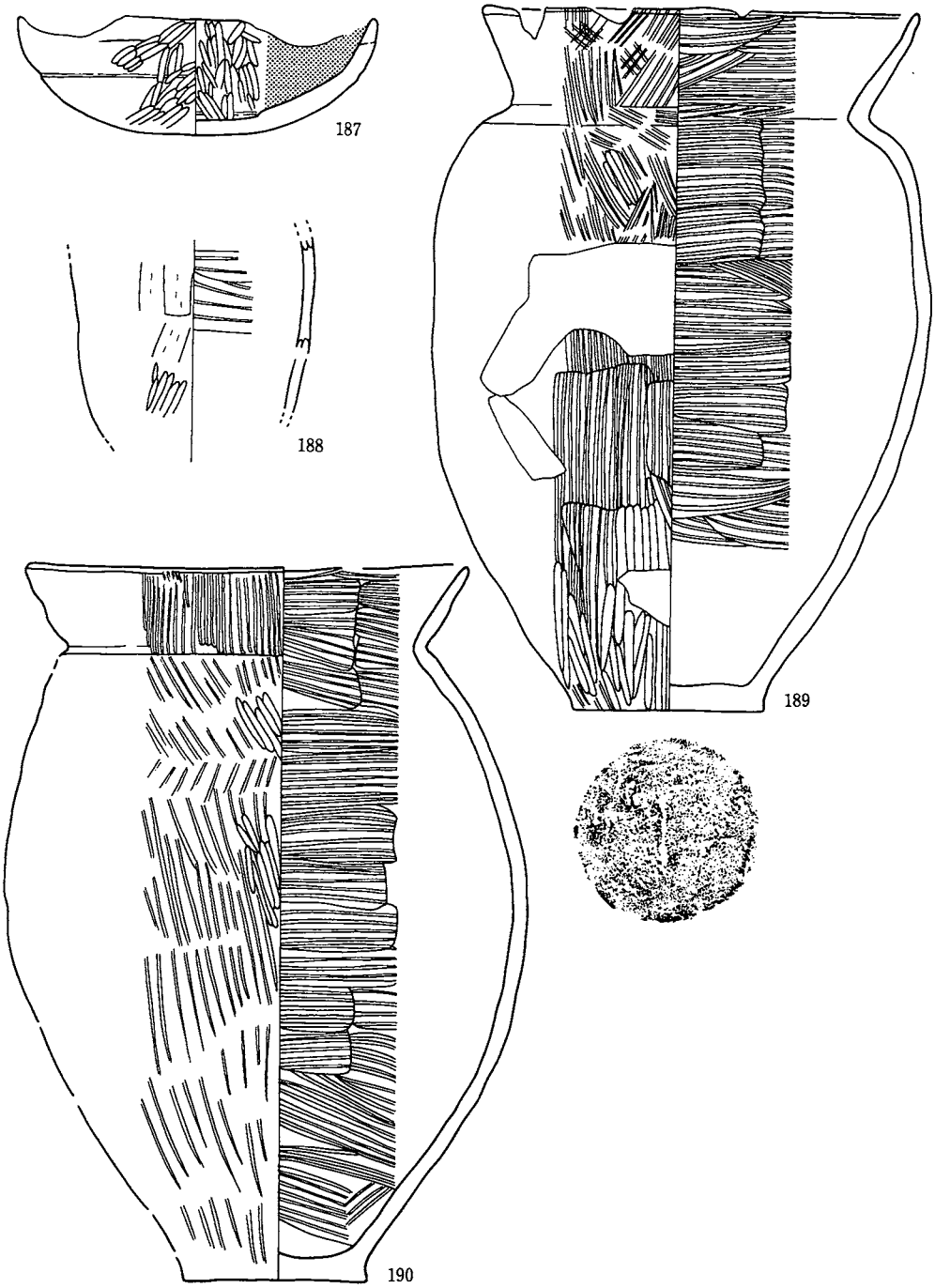
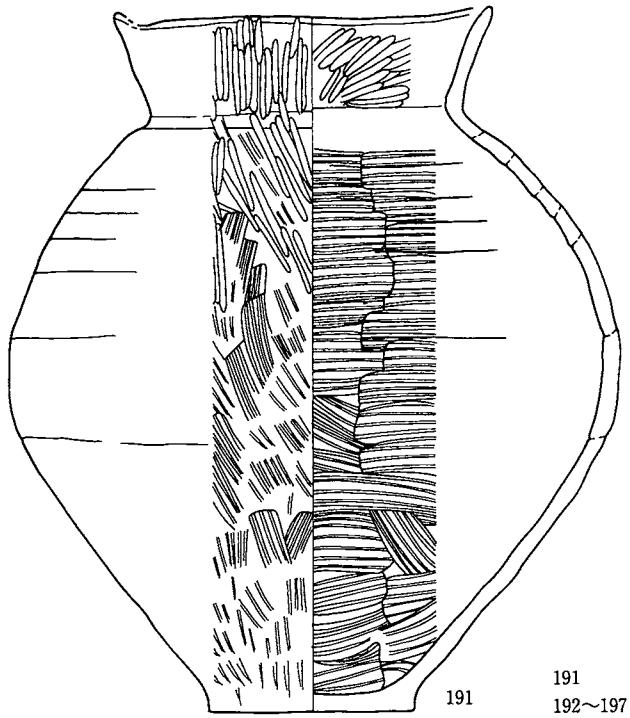
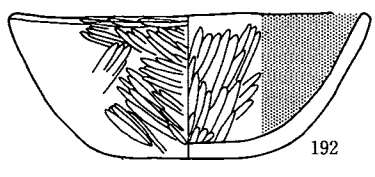
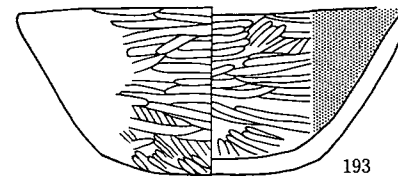


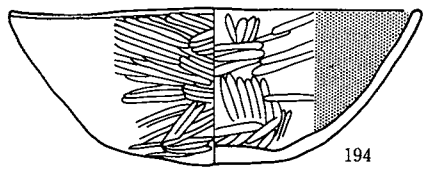
図81　H 2—m住居跡(1)

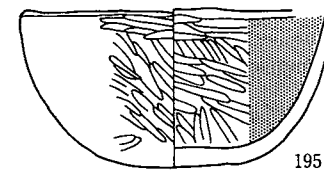


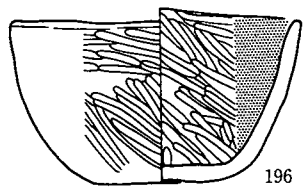
191　　H2—m住居跡
192～197　H3—ｉ住居跡











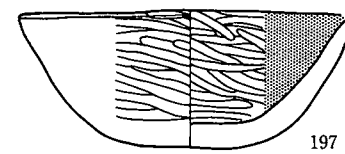


図82　H 2—m住居跡(2)・H 3—ｉ 住居跡(1)

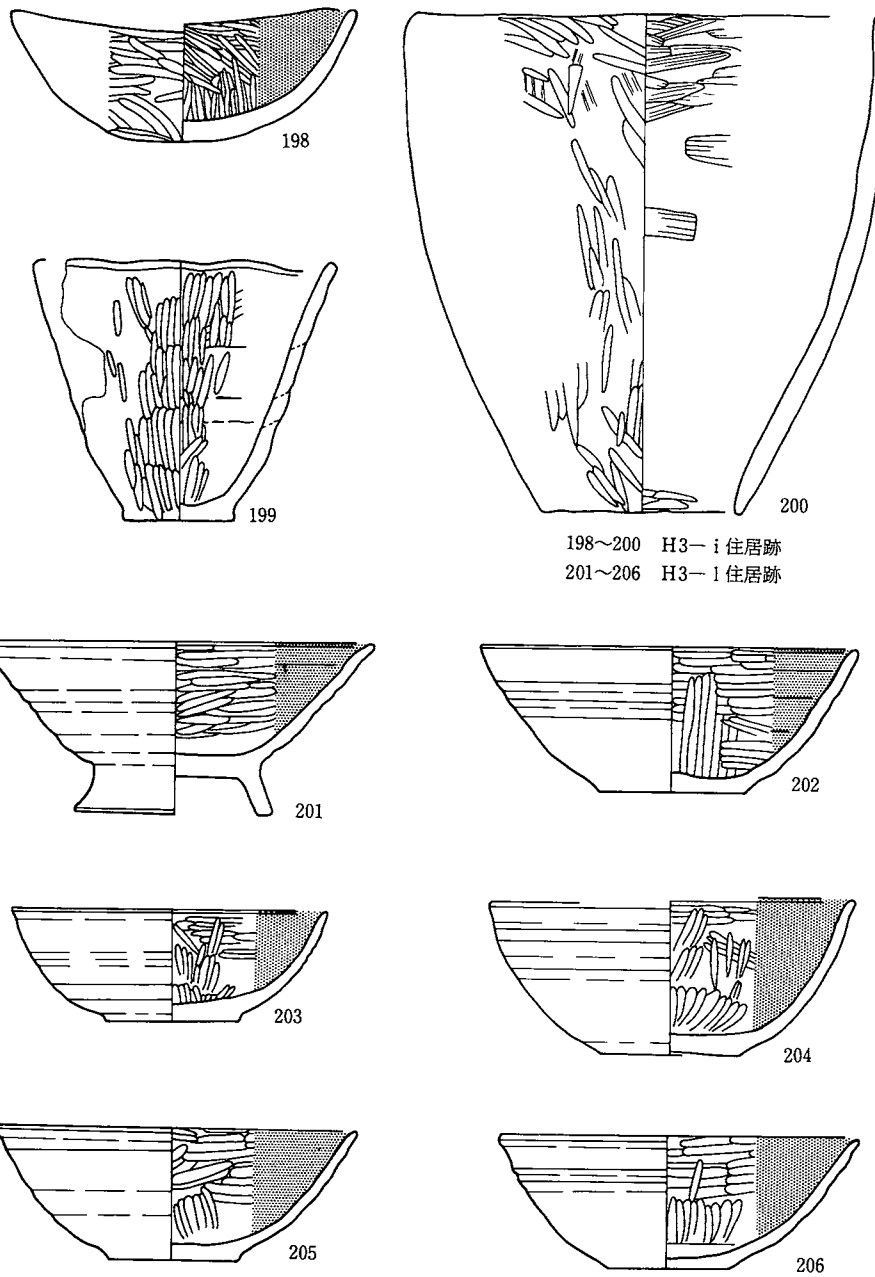


図83　H３—ｉ 住居跡(2)・H３—ｌ 住居跡(1)

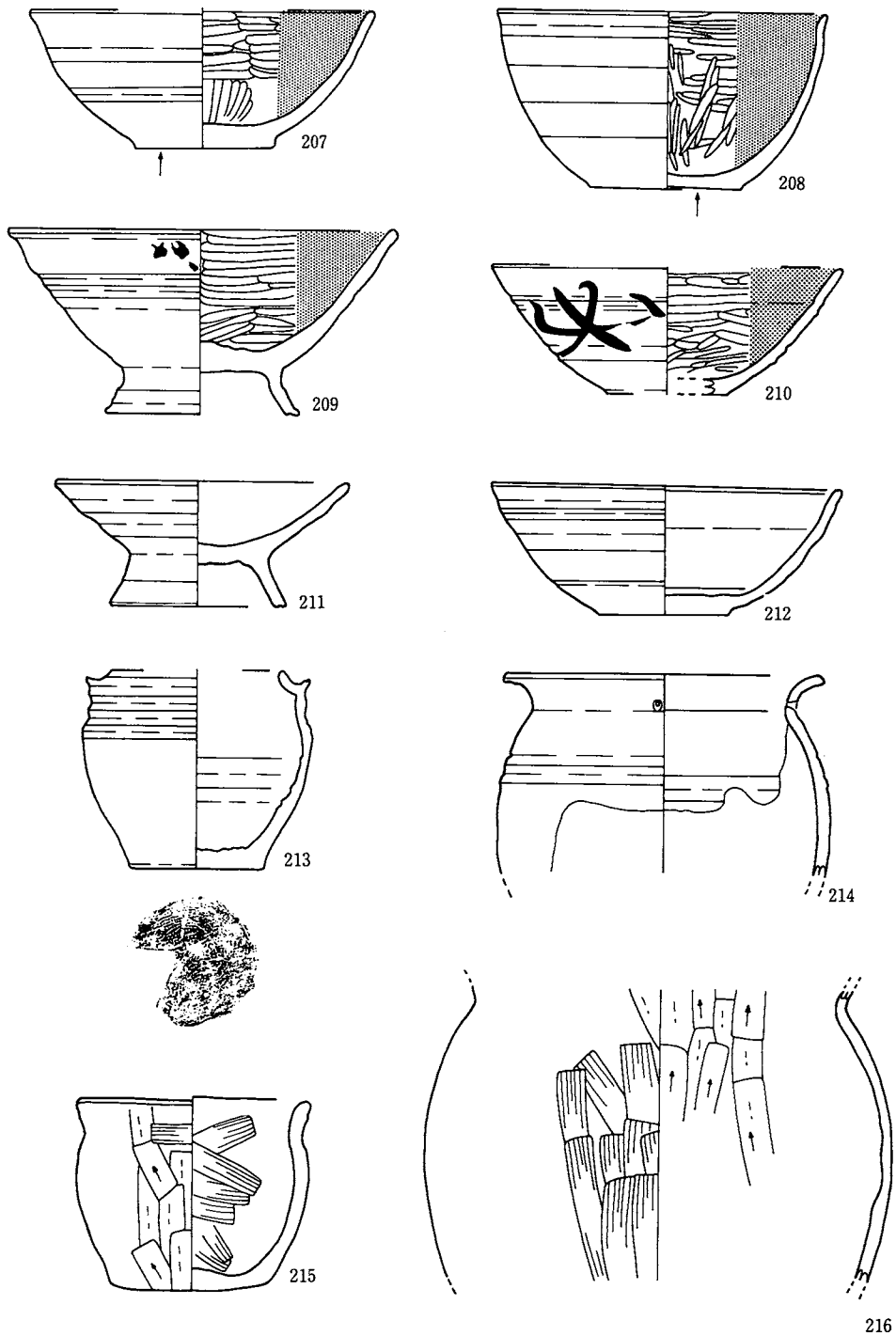


図84　H 3—I 住居跡(2)

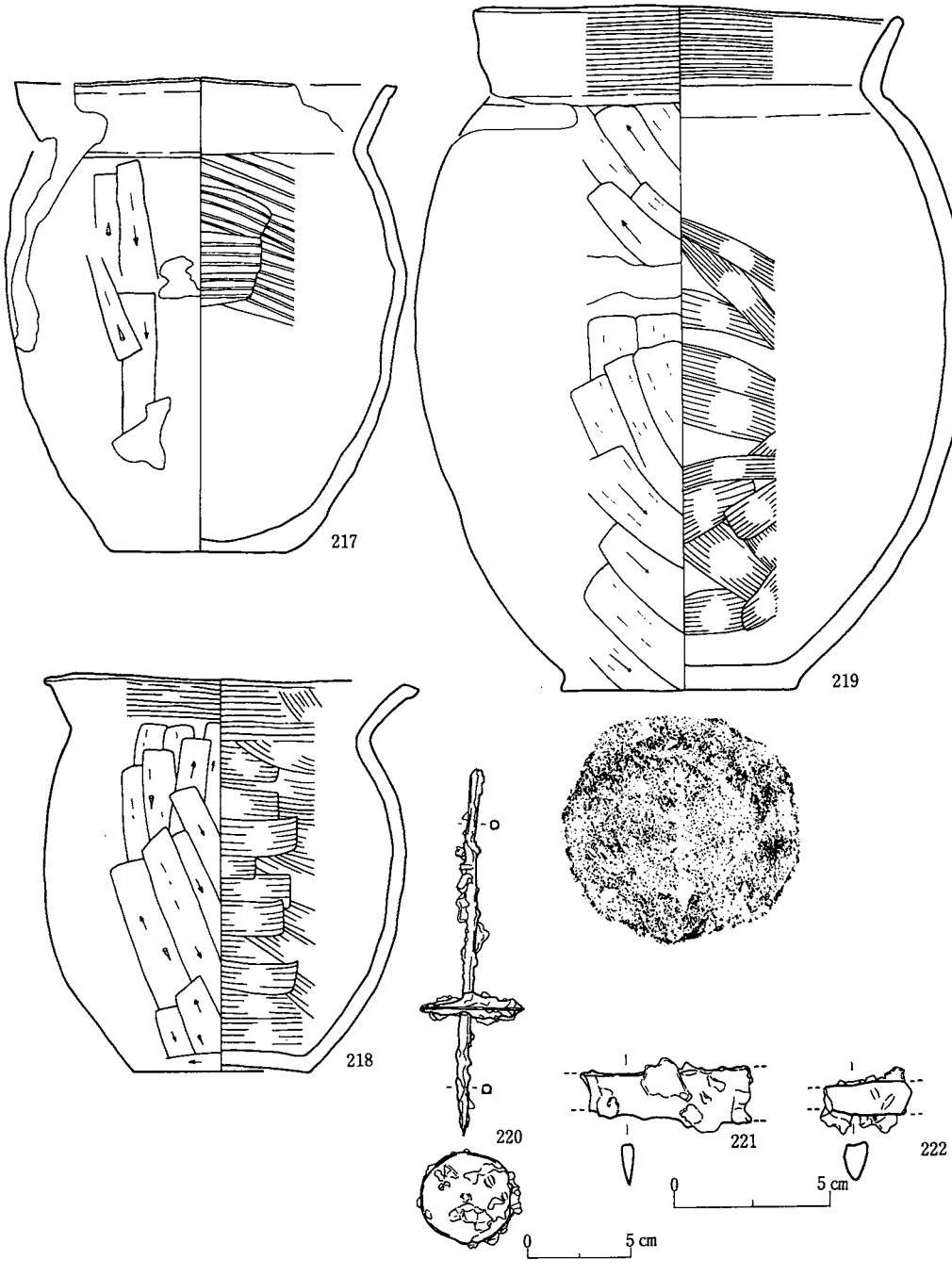


図85　H 3—I 住居跡(3)

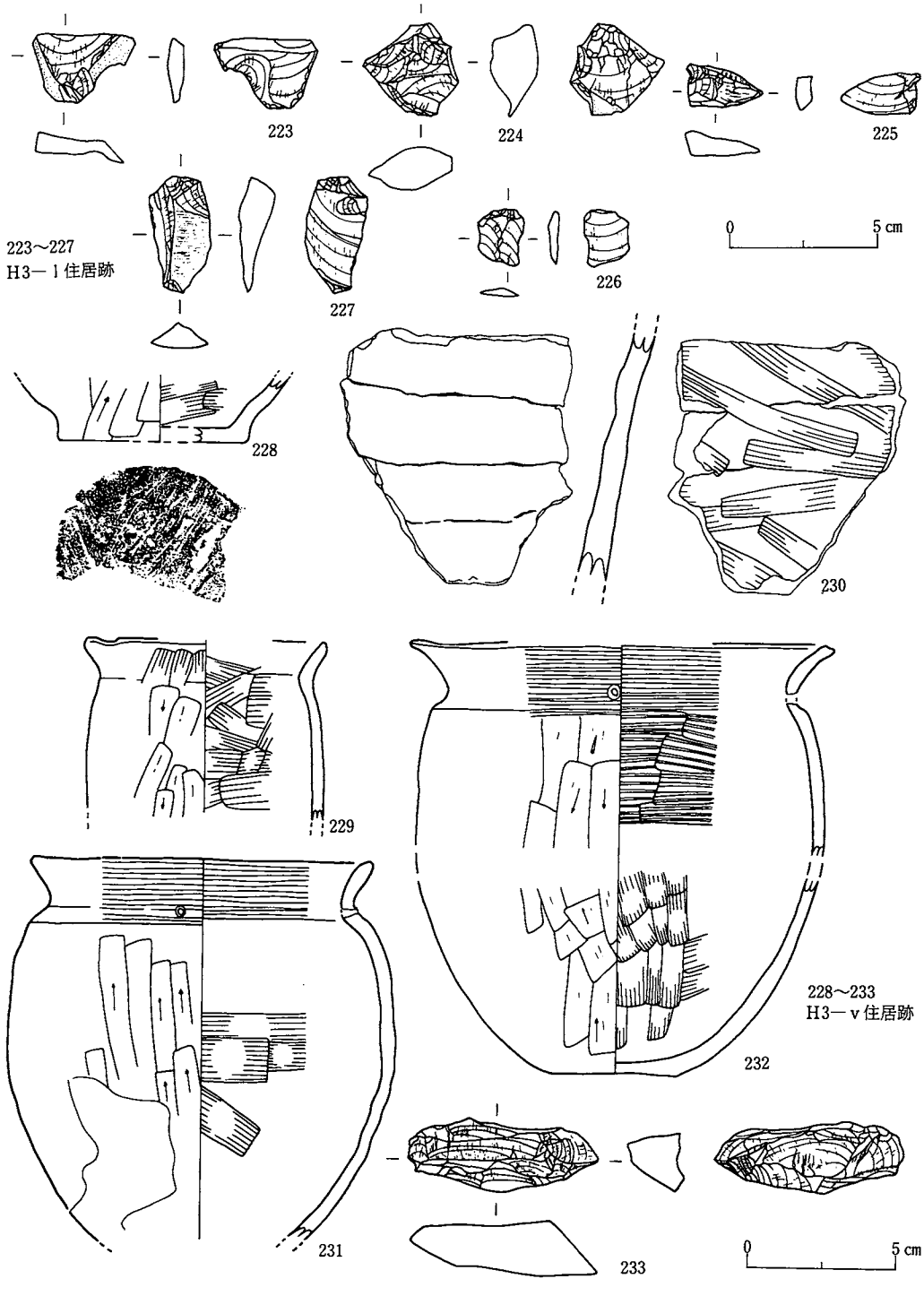


図86　H 3—l 住居跡(4)・H 3—v 住居跡

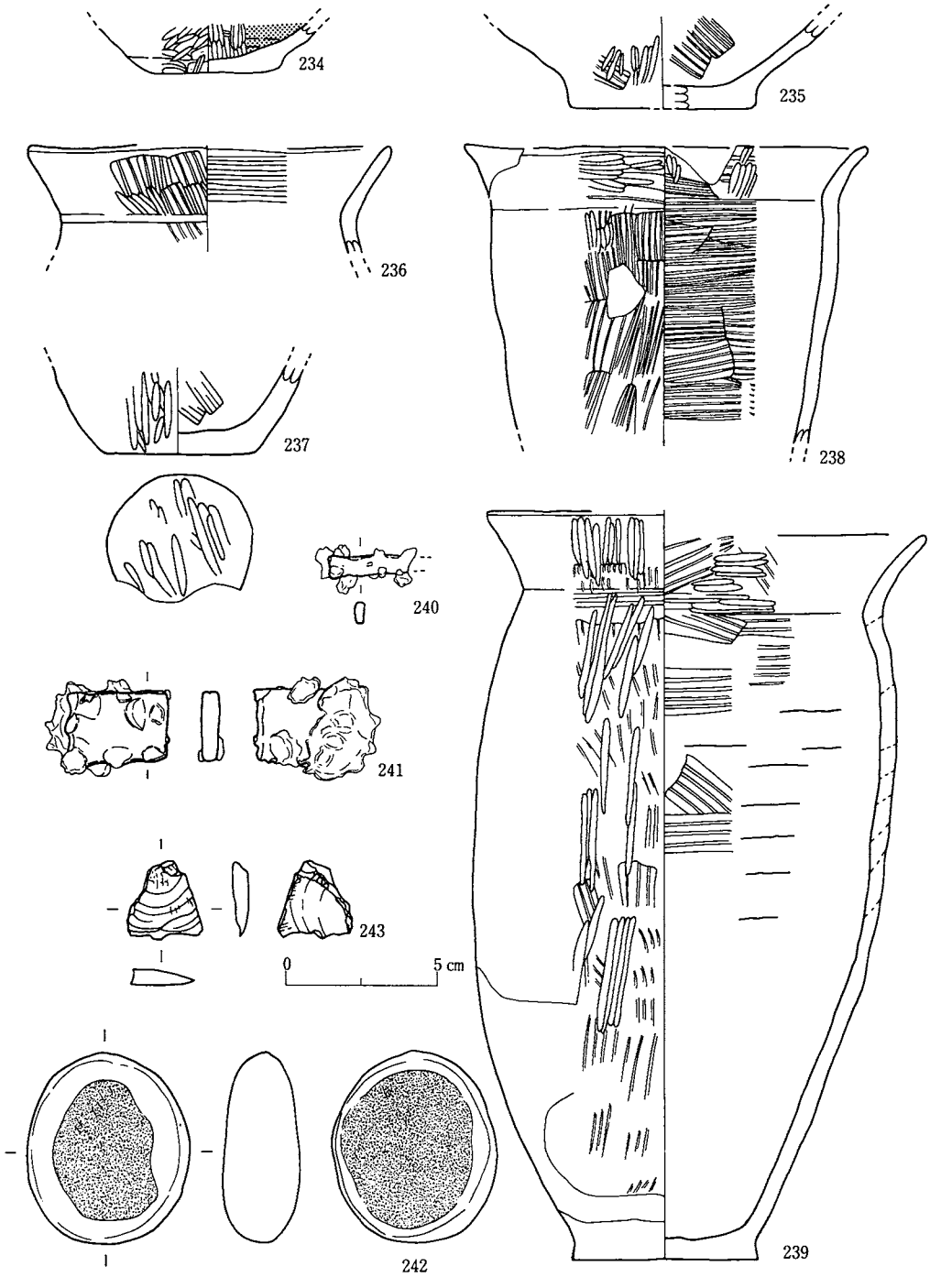
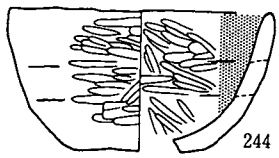
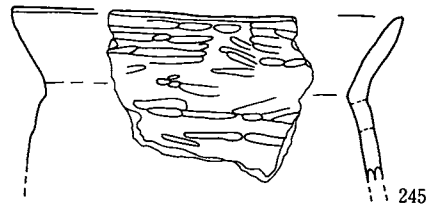
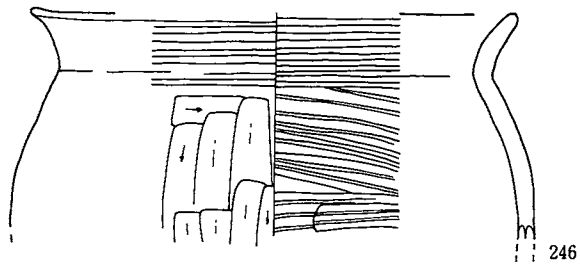
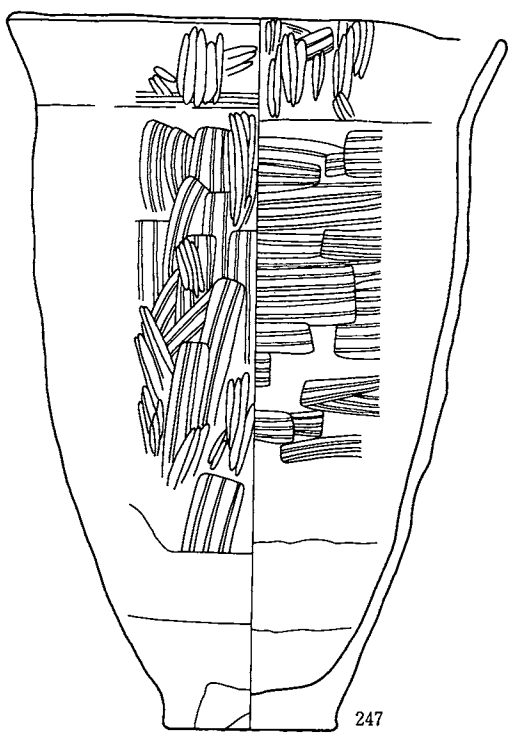


図87　I 3—t 住居跡









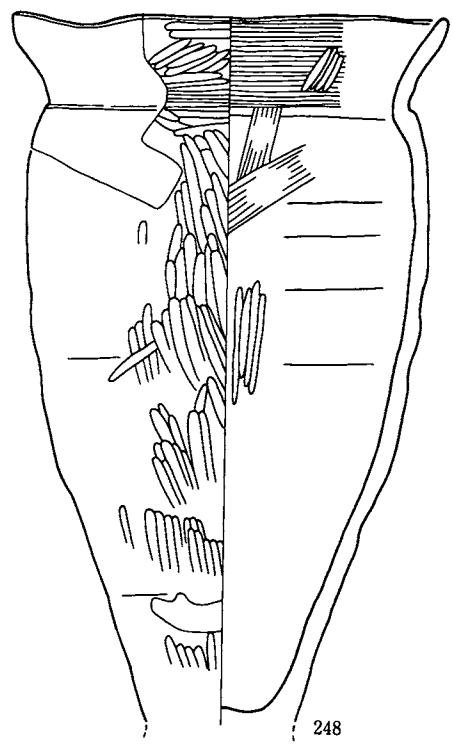
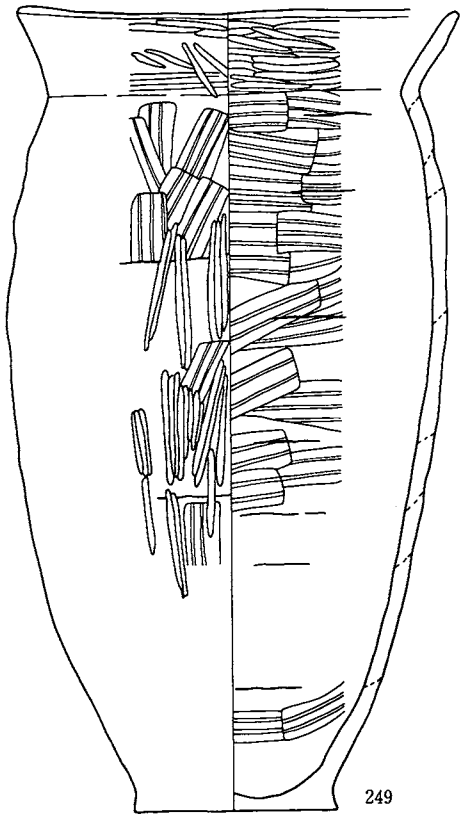
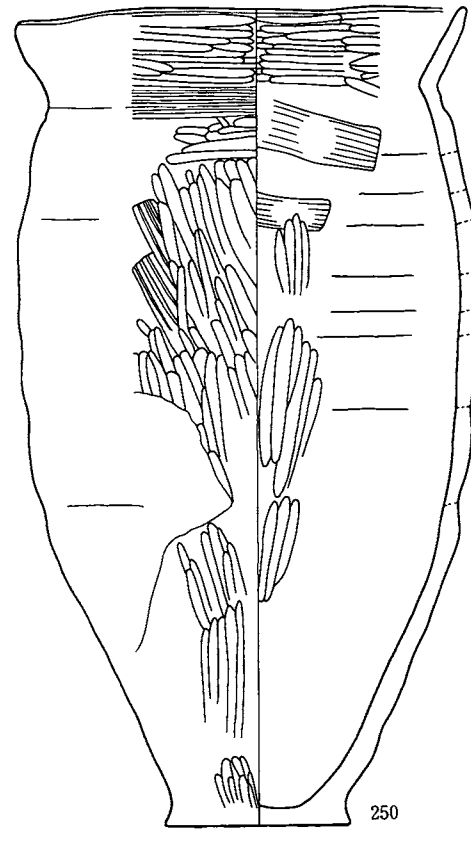


図88　J 3— y 住居跡(1)





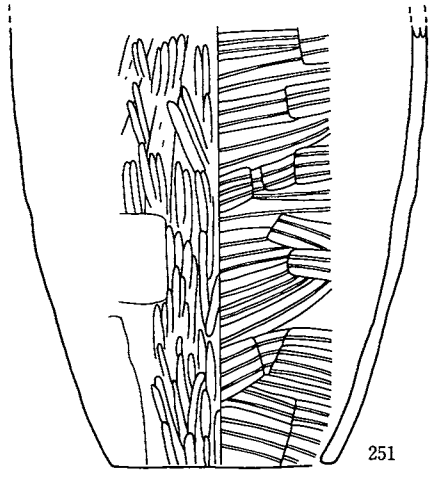


図89　J 3— y 住居跡(2)

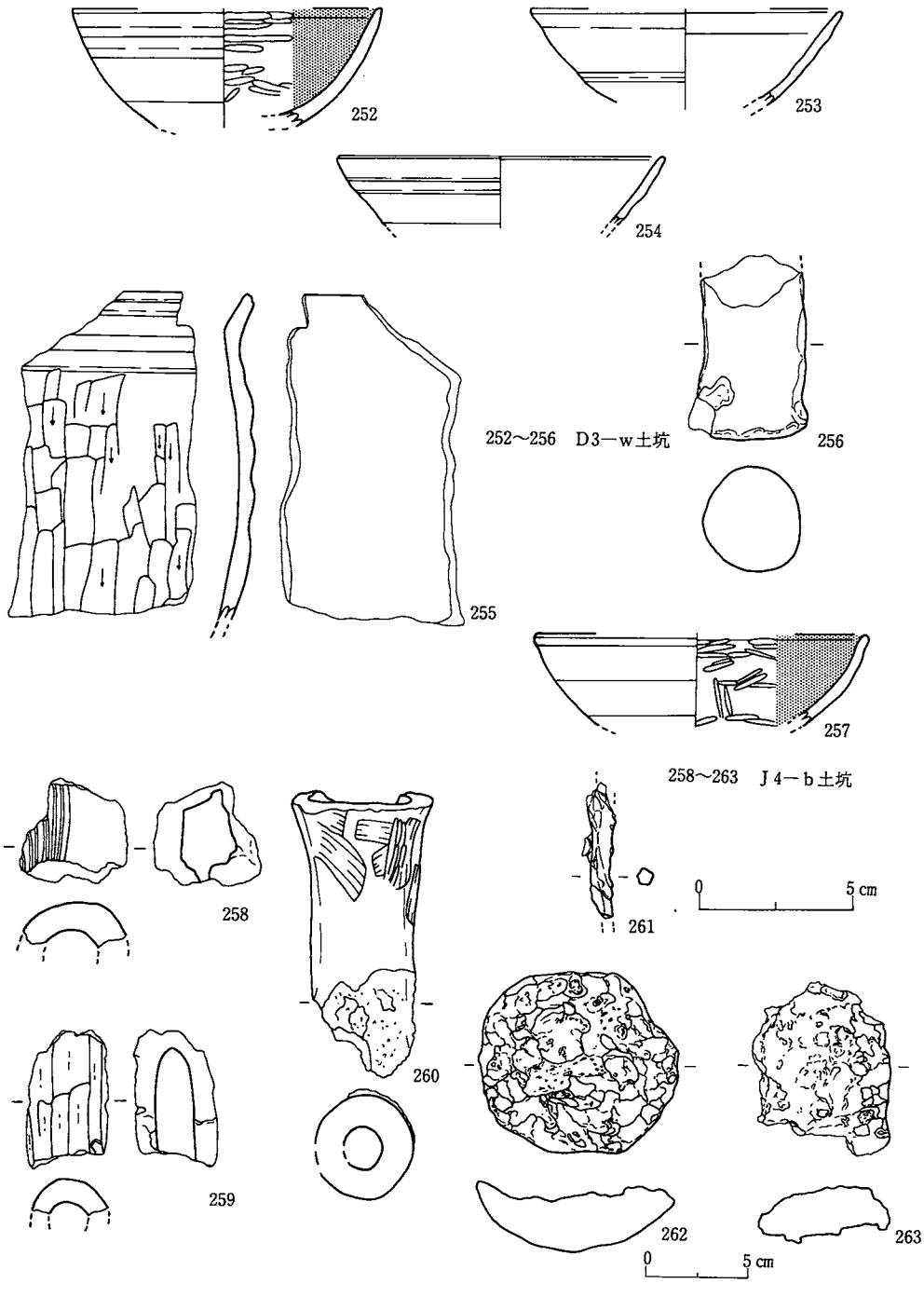


図90　D3－w土坑・D3－x 土坑・J 4－b 土坑

Ⅴ．遺構外の出土遺物

1．縄文時代

264～266は縄文時代後期初頭の土器片と思われる。十腰内Ⅰ式に相当するものと考えられるが、細片のため詳細は不明である。

267～277は石器の剝片である。使用痕の認められるものは271、272、273の3点のみである。石質、産地については遺物一覧表に示している。

276は黒燿石製の円形掻器である、G3－u住居跡出土のものと石質や調整等において酷似しているが、表土からの出土である。277、278は水晶で表面に擦痕が認められる。

2．古代

279は赤焼き土器の坏で底部は回転糸切りで再調整はない。

280はロクロ使用の坏の底部破片で、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。

281はロクロ不使用の坏である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は直立ぎみに外傾している。器面は外面がヘラゲズリ後ヘラミガキ、内面は入念なヘラミガキ調整が施され、内外面とも黒色処理されている。

3．近世以降

本遺跡の中心部から北西方向約200mほどにある本波長松氏宅裏には、近世末から近代初頭にかけて営まれていたとされる窯跡が1基存在する。平山窯跡と呼ばれており、窯は長さ約12m、幅6mの登り窯である。現在は樹木に覆われているが、斜面が溝状に凹み、その付近には焼き台などの窯道具が散乱している。本波氏が住居建築した際には、大量の陶器の破片や窯道具が出土したため、完形品以外は周辺にそれらを廃棄したとのことであった。その廃棄されたと思われる窯道具や陶器破片が本遺跡の表土から出土しているので、窯道具を主体として掲載した。(283～300) なお、295～300については実測図を省略している。

282は素焼きの小型の壺である。ロクロ使用で底部は回転糸切りされている。

283～293は円形をなす焼き台である。285、286、292の3点は裏面に3～4個の円錘形の足が付されているが、その他は脚部が桔梗型にヘラ切りされている。3足のものは283、290の2点、4足は287～289、291の4点、5足は293の1点である。また、293以外はすべて中心部が穿孔されている。

294も円形の焼き台で、直径4.1cm、厚さ2.6cmである。

296は大型の焼き台である、現在高6.0cmを測る。外面には釉薬が付着している。

297～300はスサ入りの焼き台で、小指の先ほどの大きさのものは「トチン」と呼ばれるが、それよりは大型のものである。計測値は遺物一覧表に掲載している。

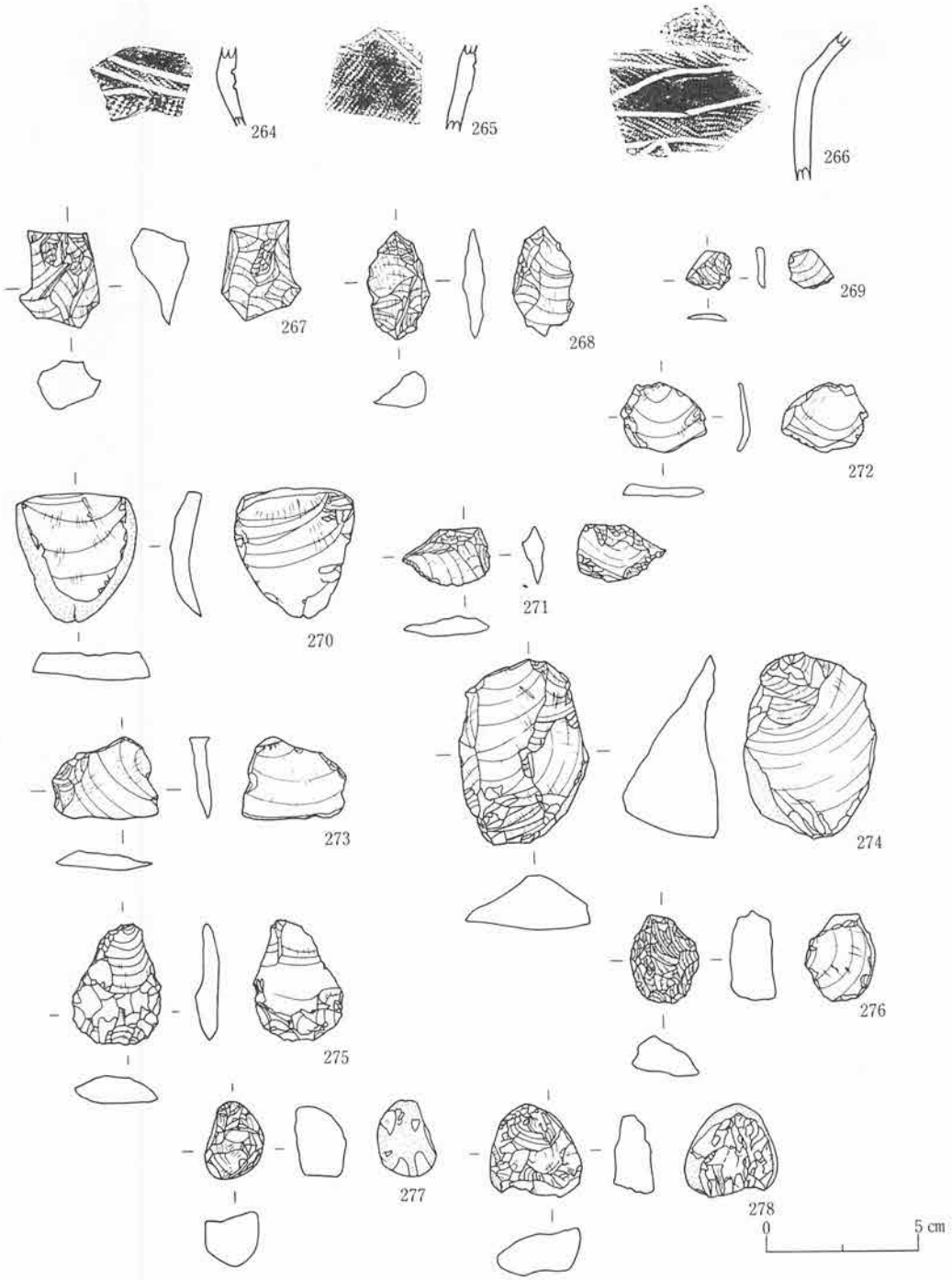


図91　遺構外出土遺物(1)

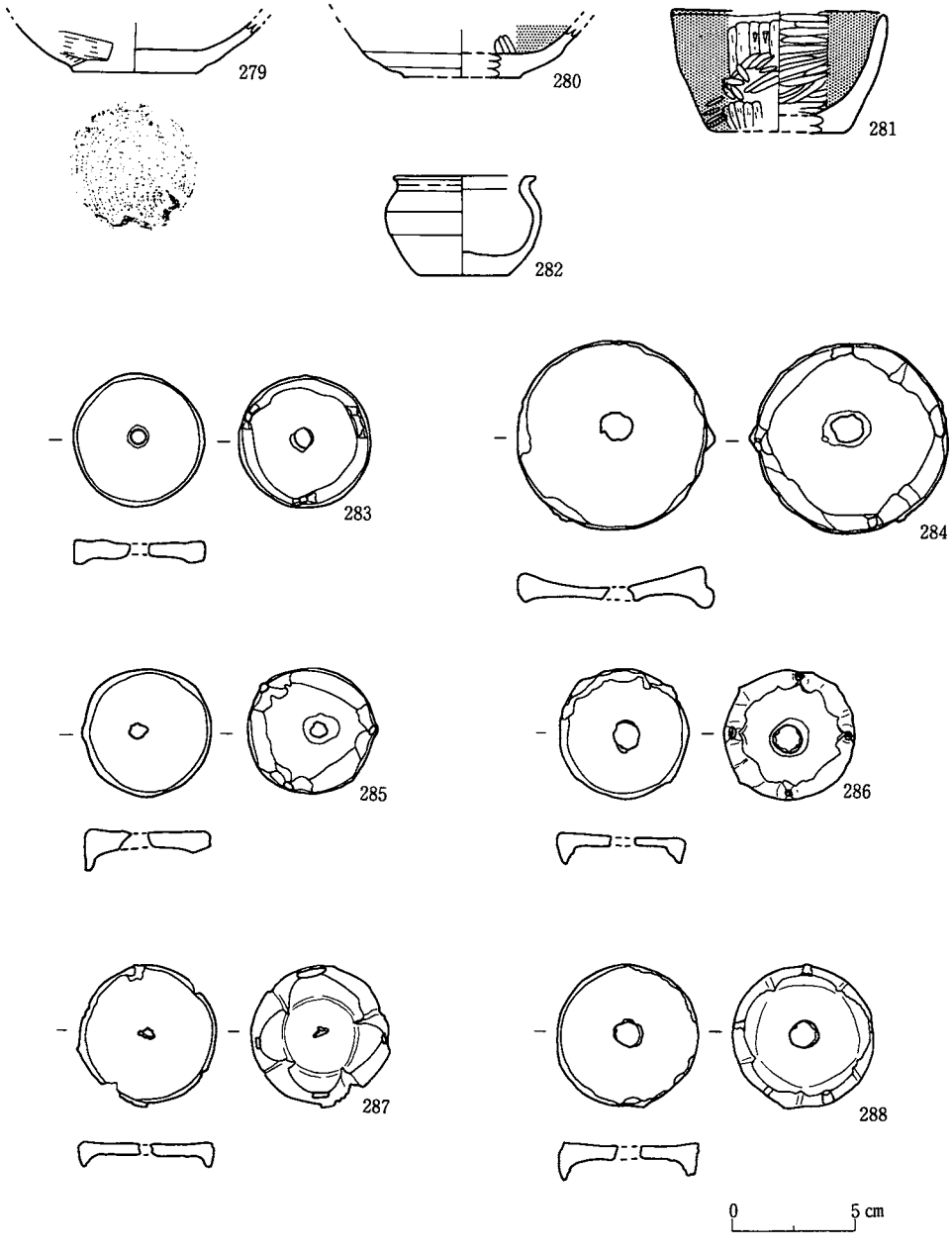


図92　遺構外出土遺物(2)

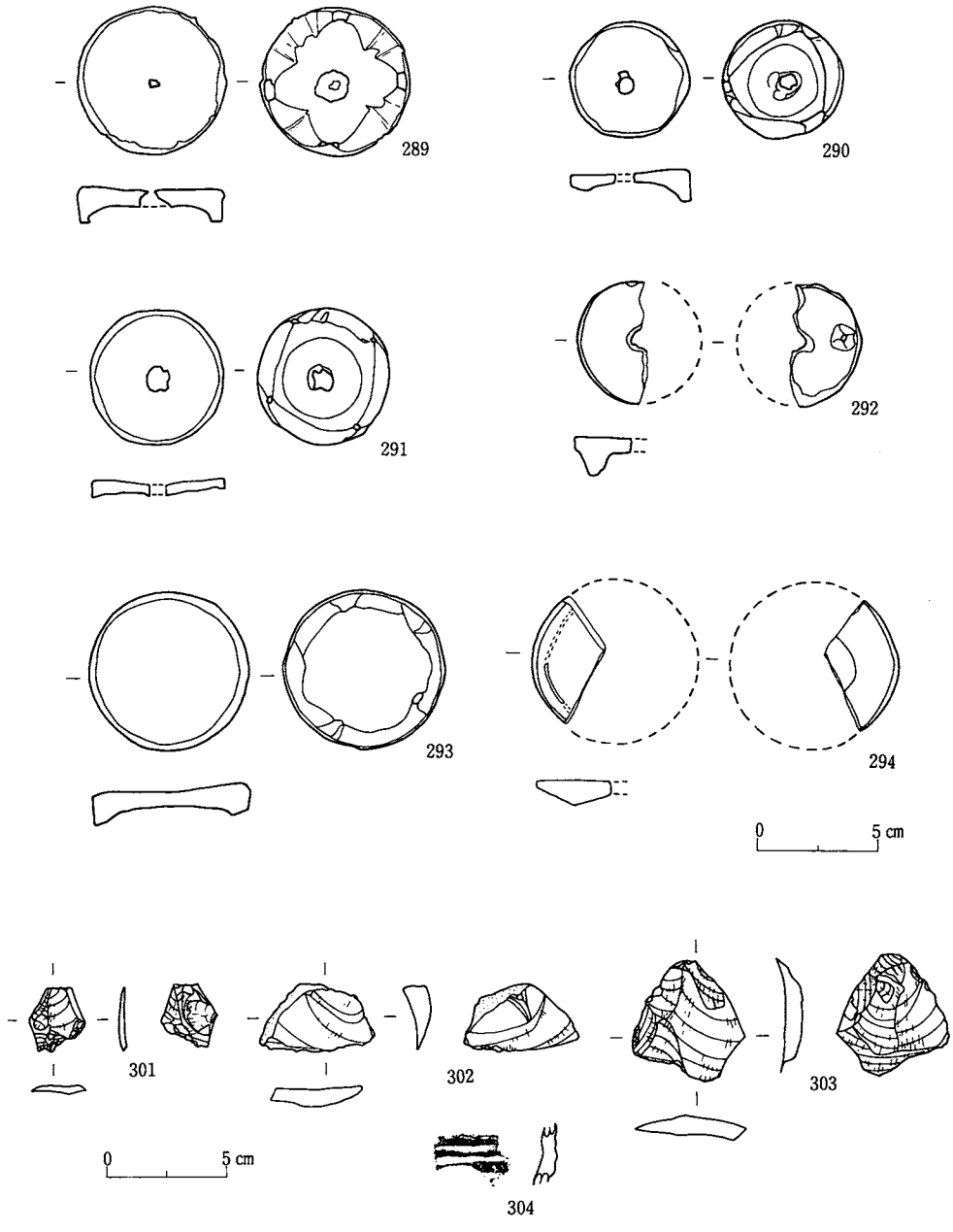


図93　遺構外出土遺物(3)・陥し穴状遺構出土遺物

VI. まとめ

1．陥し穴状遺構

(1)分類基準

開口部平面形を2群、縦断面形、横断面形をそれぞれ小群に分け、これら3属性の組み合わせで大群に分類した、3属性の区分基準を次に示す。

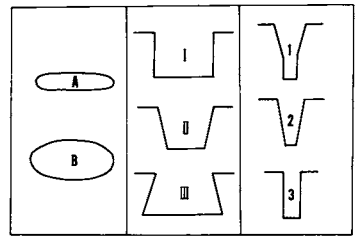


図94　分類図

「開口部平面形」

開口部模縦比でA型、B型の2群に区分した。A型は当該比0.3未満、B型は当該比0.3以上のものものとした。前者は典型的な溝状陥し穴を含む群、後者は相対的に幅広の陥し穴を核とする群になると想定した。

「縦断面形」

開口部縦長、底部縦長の長短関係によりI型、II型、III型の3群に区分した、I型は両者の縦長の差が30cm以内にあり、縦断面がほぼ箱状を呈する群、II型は開口部縦長が底部縦長より31cm以上長く、縦断面が平底ボール状を呈する群、III型は底部縦長が開口部縦長より31cm以上長く、縦断面がフラスコ状を呈する群とした。

「横断面形」

横断面の形状により1～3の3群に区分する。1型はY字状、2型はV字状、3型はU字状を呈する群である。

(3)分類群帰属数

検出遺構85基のうち、新期の遺構により切られるなどして、分類に必要な属性を具備しないものがかなりあり、分類できたものは54基であった。各分類群への帰属数は表1に示した。平面形では、A型が49基でB型が5基である。縦断面形では、I型が20基、II型が32基、III型が2基で、大半がI型とII型で占められる。横断面形では、1型が22基、2型が32基で3型に属するものはない。3つの属性の組み合わせは18群が可能であるが、存在するのは8大群であり、各大群への帰属数は、IA1群8基、IA

表4　陥し穴状遺構分類集計表

縦断面形	横断面形	開口部平面形 A	開口部平面形 B	横断面形計	縦断面形計	総計
I	1	8		8	20	54
	2	10	2	12		
	3					
II	1	13	1	14	32	
	2	16	2	18		
	3					
III	1				2	
	2	2		2		
	3					
開口部平面形計		49	5			
総計		54				

2群10基、ＩＢ２群２基、ⅡＡ１群13基、ⅡＡ２群16基、ⅡＢ１群１基、ⅡＢ２群２基、ⅢＡ２群２基となる。

⑶属性値の分布特性

開口部平面形は、開口部の横長と縦長の比値0.3でＡ型とＢ型に区分したが、この区分に厳密な裏付けがあるわけではない。図２ｈは分類可能な54基の開口部平面形の横長と縦長の分布を示したものである。横長縦長比0.3で有意な群が識別できるわけではなく、当該値で区分する積極的な根拠は得られない。また、他の比値での区分が可能かといえば、それを示す偏りも現れてはいない、したがって、検出遺構は一群のいわゆる溝状陥し穴として一括するのが妥当ということになろうか。

開口部縦長分布を図95・ａに示したが、計測可の遺構は63基で、最小270cm、最大510cm、平均368cmである。300～400cmの域に偏った分布がみとめられ、このことは、横長・縦長比分布図において縦長が450cm以上の相対的に長大なものが不明瞭なまとまりをもつことと対応していよう。標本数が少ないので断定できないが、何らかの有意な一群の存在を示しているのかもしれない。図95・ｂは開口部横長分布を示している。計測可の遺構は81基で、最小25cm、最大170cm、平均90cmであり、その大半は60～120cmの域に含まれる。

底部縦長については、計測可の遺構は79基で、その分布は図95・ｆに示したが、ほぼ正規分布型を呈する。最小240cm、最大490cm、平均344cmである。図95・ｃには、開口部縦長と底部縦長の差の分布を示した。差がマイナス域のものは底部縦長の方が長い遺構、一方、差がプラス域のものは開口部縦長の方が長い遺構に該当する。差の最小値は－60cm、最大値は＋100cm、平均値は30cmであり、その分布中心は、明らかに開口部縦長が長い域にある。このことは、開口部縦長と底部縦長の分布型が異なること、および、縦断面分類でⅠ型、Ⅱ型が大半を占めることと対応している。底部横長分布を図95・ｄに示した。全検出遺構について計測値が得られ、最小８cm、最大40cm、平均19cmである。その分布幅は、開口部横長の分布幅より狭く、その分布中心は明らかに小さい値域に属する。これは、横断面分類で全遺構が、開口部横長の方が長い１型、２型に帰属することと対応する。

図95・ｇに長軸方向の分布を示した。全遺構について計測値が得られ、南北（ＮＳ）方向を示すものが４基、東西（ＥＷ）方向を示すものが２基、北東（ＮＥ）域に属するものが20基、北西（ＮＷ）域に属するものが59基である。北西域に属する群では、その分布は正規分布型を示し、Ｎ40°Ｗ～Ｎ60°Ｗの値域にその分布中心があるのに対し、北東域に属する群では、その分布がばらつく特徴がある。このような分布特性の違いに、段丘崖線の走向、微地形などの制約の影響が感じられるものの、それらの因果関係を立証するには至らなかった。

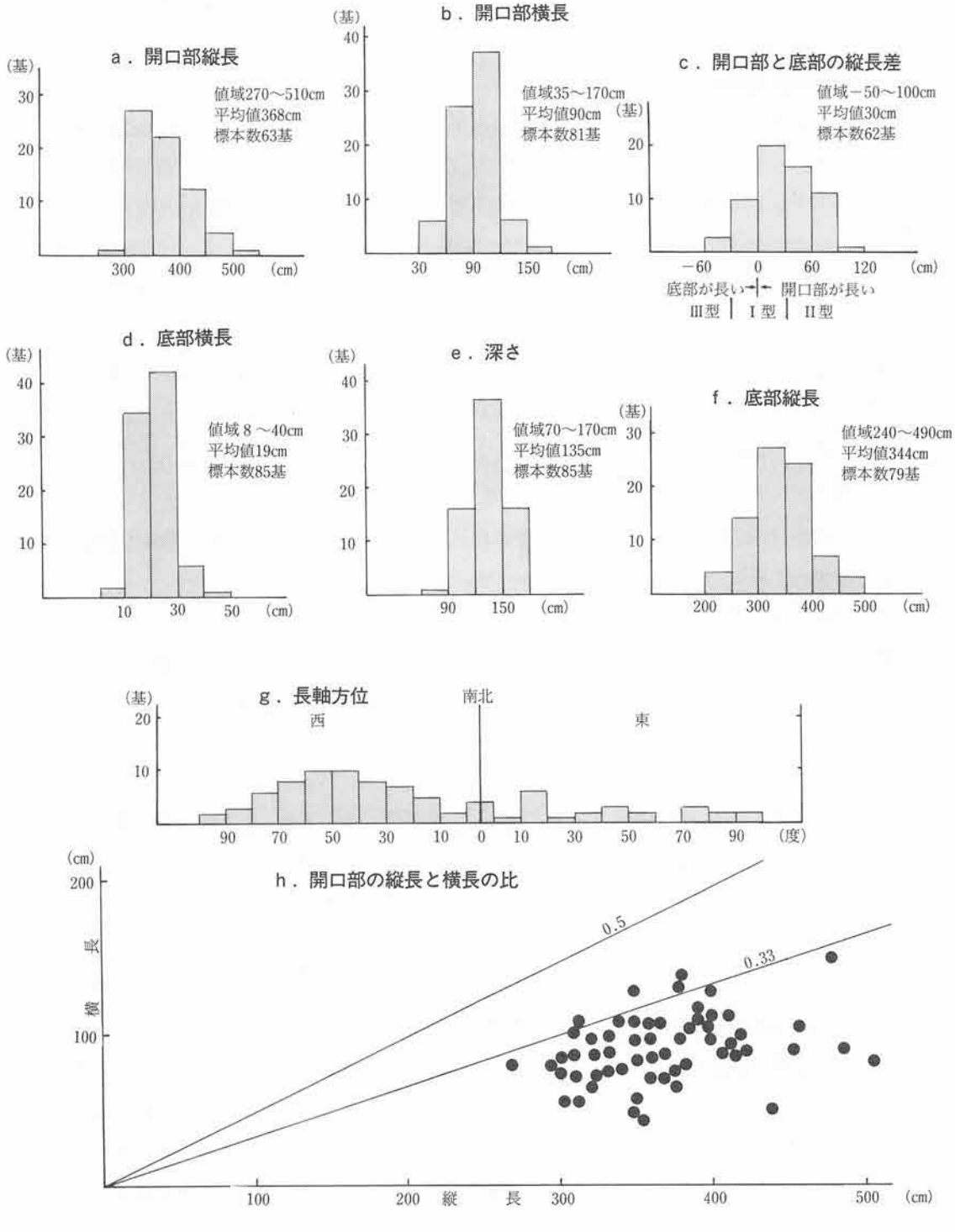

a．開口部縦長
(基)
値域270～510cm
平均値368cm
標本数63基
(cm)
b．開口部横長
(基)
値域35～170cm
平均値90cm
標本数81基
(cm)
c．開口部と底部の縦長差
(基)
値域－50～100cm
平均値30cm
標本数62基
(cm)
底部が長い
開口部が長い
III型
I型
II型
d．底部横長
(基)
値域 8 ～40cm
平均値19cm
標本数85基
(cm)
e．深さ
(基)
値域70～170cm
平均値135cm
標本数85基
(cm)
f．底部縦長
(基)
値域240～490cm
平均値344cm
標本数79基
(cm)
g．長軸方位
(基)
西
南北
東
(度)
h．開口部の縦長と横長の比
(cm)
横
長
縦
長
0.5
0.33
(cm)

図95　陥し穴の属性値

(4)時代

検出面がIII層（黄褐色土層）上面より下がるものはないこと、また、多くの場合、埋土下部に黒色土を伴うことから、これらの溝状陥し穴は、完新世（１万年前以降）に入ってから構築されたと推定される。なぜなら、黒色腐植土は、気候が温暖湿潤化した完新世になって生成が開始したと一般的に考えられているからである。構築時代の有効な決め手となりえるのは出土遺物であり、Ｈ３－ａ陥し穴からは縄文早期と思われる土器片が出土している。しかし、既存の資料によれば、縄文前期以前の陥し穴は円形あるいは楕円形の平面形を呈し、溝状のものは中期以後に出現する傾向がうかがえるので、出土した縄文早期土器片は、構築時代を示すものではなく、流れこみの可能性が大きいと思われる。遺構の切り合い関係も遺構の時代の示標となる場合がある。検出全陥し穴85基のうち約半数の41基が切り合いの関係にある。このうち23基は古代住居跡に切られ、18基は陥し穴同志で切り合っている。このことから、陥し穴の構築時代は古代より古いといえそうである。約1000年前に降下堆積した十和田ａ火山灰や白頭山火山灰を埋土に伴う陥し穴や、また、比較的新規の形態と考えられている平面形が長方形を呈する陥し穴がないことは、この推定と矛盾しない。

Ｊ４－ｄ－１・２・３は互いに切り合う陥し穴群である。このうち最も構築時期が古いのはＪ４－ｄ－１陥し穴である。Ｊ４－ｄ－１陥し穴は３基の中で最も大きな開口部横縦比と開口部および底部横長を有する陥し穴であり、少なくとも、ここでは幅広タイプの陥し穴への形状変化が読みとれる。この変化は、縄文時代前期から中期かけて生じたと推定されている平面形が円形あるいは楕円形の陥し穴から溝状の陥し穴への変化過程を埋めるものである可能性もある。

(5)埋土

多くの陥し穴遺構について、２つの共通した属性が認められる。一つは、埋土下部が極めてしまりに乏しいこと、二つ目は、黒色土を埋土の構成層とすることである。前者は、これらの陥し穴遺構が狭い横幅を有していることの当然の帰結であろう。後者については、この色調の土層が多くの場合、遺構の覆土にみられないので、その起源について興味深いものがある。黒色埋土は遺構構築時代の表土に起源する可能性が大きいので、それは当時の土壌塊の「化石」であり、したがって当時の地表環境を推察する好材料といえる。黒色土の黒色の原因は腐植の量と質にあり、これらは特に気候植生環境に規定され、温暖湿潤な気候と草原(様)植生環境がより黒色の腐植の集積を促進すると考えられている。したがって、遺構構築当時は、現在より草原的な植生が卓越する環境が推定されるのである。もとより、本邦の最近１万年間(完新世)の自然極相は森林であって、草原(様)植生の半ば継続的な成立には、植生遷移を阻害する要因が必要である。このような要因として人間の森林への干渉が有力視され、具体的には狩猟という生業が想定されている。当遺跡における85基の陥し穴の密な分布、埋土に残された黒色土塊

の存在は、有史前の地表環境と人間との関係をおしはかる上で良好な資料となろう。

(6)分布

陥し穴は、調査区全域に均一に分布しているわけではなく、その分布密度には相当の偏りがある。特に分布密度が高いのは、Ｊ３、Ｊ４、Ｋ３、Ｋ４のグリッドが接する域である。ここでは、陥し穴同志が著しく重複し、また古代住居跡との切り合いがみられる。当域に陥し穴が集中するのは、狩り場としての立地条件が良かったためと考えられる。ここでは、黒色腐植土が厚く堆積することから、埋積された沢であったと推定されるので、「水場」あるいは「ぬた場」を求めて動物が集り易く、それらを狩る場として都合がよかったのであろう。同様なことが、Ｂ４－ｄ－ｅ区の陥し穴群についてもいえそうである。

85基の陥し穴のうち、規則性をもって配列していると考えられるのは、Ｋ３－ｕ・Ｋ３－ｖの陥し穴対、Ｊ４－ｅ－3・Ｊ４－ｅ－２陥し穴対、Ｈ４－ｊ－１・Ｈ４－ｊ－２の陥し穴対などである。いずれも、形状、規模の類似した２基の陥し穴が２～４ｍ程の間隔で平行に配列する。３基以上の陥し穴が規則的に配列する例は認められなかった。

２．竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡22棟は、互いに切り合うことなく存在している。岩手県の県北においては、現在の地表面から竪穴住居を凹みで確認できる（埋没の速度が遅く埋まりきらない）と言われているが、この22棟についてはそのような状況は認められなかった。検出は火山灰の存在や、焼土の分布、カマドの煙道部の礫の露出、降雨後の土壌の乾きの違い等によった。この切り合いのみられない状況を埋没速度の遅さから考えることも可能と思われる。

表５に住居跡の一覧を示した。項目毎に特記すべき事柄を取り挙げてみたい。

平面形は、隅丸方形と隅丸長方形が主体であり、奈良時代と平安時代での違いはないが、平安時代の住居跡は、コーナーの丸みがとれて角張ってくる傾向が認められる。また、隅丸でも不整形や台形を呈するものが多く、それは規模の数値に反映している。

規模を時代別にみると、平安時代では一辺が3.5～５ｍのものが主体となるのに対し、奈良時代（古墳～奈良時代含む）ではその数値に属さないものが半数以上あり、規模が区々である。

柱穴が検出された住居跡は11棟で、いずれも柱痕跡はみつからなかった。柱穴配置が確認されたものは、Ｅ４－ｄ、Ｇ３－ｍ、Ｈ２－ｍ、Ｉ３－ｔの４棟である。一辺が7.2mの規模を持つＧ３－ｍ住居跡は、４個の主柱穴に２個かあるいは４個の副柱穴を伴う６本柱か８本柱を持つものと考えられる。他の３棟は４本を持ち、配置は四角形である。柱穴が確認できなかった11棟は一辺がほぼ3.5～4.7mの規模のものである。

表5　住居跡一覧表

No	住居跡名	平面形	規模(m)	壁高(cm)	柱穴数	カマドの位置	埋土中の火山灰		焼失家屋	土師器以外の出土遺物						時代	備考
							十和田a	白頭山		フイゴ	支脚	鉄製品	琥珀	須恵器	その他		
1	B4－d	隅丸長方形	3.9～4.1 ×3.4～3.8	34～56		南壁の南西隅寄り					円柱状2		(g)			平安	
2	C3－y	隅丸長方形	4.2～4.5 ×4.0	40～50		東壁の南東隅寄り	○	○					0.85	○		平安	
3	D3－v	不明	南北3.66	35～45		北東壁の南東隅寄り	○	○								平安	一部調査区外
4	D4－c	隅丸台形状	3.5×3.4～ 4.0	46～52	2	北壁中央	○	○								奈良	出土遺物なし
5	D4－t	凸辺不整台形状	5.3×4.9	24～50	1	南壁中央と南西隅間			○			鉄滓1	5.1			平安	
6	E3－u	隅丸凸辺台形	5.2～5.4 ×5.1	54～74	2	東壁2基、南壁1基				3	円柱状1	鉄滓など3	0.7	○		平安	鍛冶工房跡
7	E3－v	隅丸不整形	南北4.3	56～60		北壁1基、東壁1基	○	○			中空1			○		平安	一部調査区外
8	E3－y－1	隅丸方形	南北3.5		1	南壁の南東隅										平安	一部調査区外
9	E3－y－2	(隅丸台形状)	南北4.9～ 6.0	18～28	2	東壁の南東隅	○	○			円柱状1			○		平安	E3－y－1住の拡張後
10	E4－d	隅丸方形	4.9×4.9	40～48	4	北壁中央	○	○	○			刀子2	0.75		砥石1	奈良	
11	E4－g	隅丸方形	3.7～3.9 ×3.9	48～59		北西壁中央	○	○	焼土のみ			1				古墳・奈良	
12	E4－h	不整隅丸方形	3.6～3.9 ×3.7～4.1	42～54		東壁の南東隅寄り			焼土のみ			釣針(?)1	16.0	蓋2	紡錘車1	平安	土器工房跡
13	E4－l	隅丸方形	3.9～4.2 ×4.0～4.1	43～63		北東壁2基、南東壁1基	○	○	焼土のみ	1		刀子など9	8.1			平安	鍛冶工房跡(?)
14	F3－u	隅丸不整形	4.7×4.4～ 4.7	37～50		北壁1基、南東壁1基			○			紡錘草1		壺1	磨石1	平安	
15	G3－m	隅丸方形	7.3×7.2	48～86	6(8)	北西壁中央の東隅寄り	○	○	○			刀子1	2.7		手捏ね土器	奈良	
16	G3－u	不整隅丸方形	4.6×4.4	36～47		北西壁1基、北東壁2基			焼土のみ						円形掻器1	平安	貝類出土
17	H2－m	隅丸長方形	5.7×6.0	36～48	4	北壁中央から西隅寄り	○	○	○							奈良	
18	H3－i	隅丸方形	4.0×3.8	26～35	3	北壁中央		○	○						甑1	奈良	
19	H3－l	隅丸台形状	3.7×3.85～ 4.3	40～60		東壁1、北壁1	○	○	○			刀子など3			剝片5	平安	
20	H3－v	隅丸台形状	4.2×3.4～ 3.8	23～24	(1)	北壁中央から北東隅寄り	○	○					5.8		剝片1	平安	
21	I3－t	隅丸方形	4.3～4.8 ×4.5～5.0	50～58	4	北壁の北東隅寄り	○	○	○			2			磨石など2	奈良	
22	J3－y	隅丸長方形	2.6～2.8 ×3.5～3.6	24～52		北壁中央	○	○	○						甑1	奈良	

カマドは22棟すべてに検出された。つくり替えられて複数のカマドを持つ住居跡は6棟あり、すべて平安時代に属する。カマドを2基持つものはE3－v、F3－u、H3－1、3基持つものはE3－u、E4－1、G3－uの3棟ずつである。E3－vでは東壁→北壁に、F3－uでは南東壁→北壁に、H3－1では北壁→東壁に、それぞれつくり替えられている。E3－uは東壁南東隅寄り→南壁→東壁北東隅寄りの順に、E4－1では南東壁→北東壁南側→北東壁北側の順に、G3－uでは北西壁→北東壁2基のうちどちらかにつくり替えられている。

カマドの方位分布を図96に示した。これは住居跡の主軸方向と一致している。奈良時代（古墳～奈良時代含む）では、北を中心に50°の範囲内にすべておさまるのに対し、平安時代のカマドは、分布域が北西から南（南西と西を除く）と180°以上に及ぶ。方位別にみると、北西1、北4、北東2、東7、南6となり、奈良時代に比べて東、南カマドが増加している。また、設置される位置は、奈良時代ではすべてが北壁・北西壁の中央付近であるが、平安時代では各壁の右側に寄るものが10基、左側に寄るものが2基と、どちらかのコーナー寄りのものが多い。

煙道部には掘り込み式とくり貫き式のものがあり、総数は30基である。掘り込み式のものが圧倒的に多く、くり貫き式は平安時代の住居跡に限られ、全部で7基である。

平安時代の住居跡の中には、煙道部や煙出し部を礫で組み上げていた住居跡が4棟あり、掘り込み式は煙道部が、くり貫き式は煙出し部が円礫で組まれていたと考えられる。前者が3棟、後者が1棟である。

埋土に十和田a降下火山灰、白頭山降下火山灰がともに認められる住居跡は13棟あり、白頭山降下火山灰だけを含むものは1棟である。堆積の状況は、断続的に小ブロックが凹レンズ状に含まれるものと、小ブロックが点在するものがあり、後者は2次的な堆積の結果と考えられる。前者の例は奈良時代（古墳～奈良時代含む）の住居跡に顕著である。

炭化材と焼土がみられる焼失住居跡は9棟検出された。床面近くに焼土だけ分布するものが

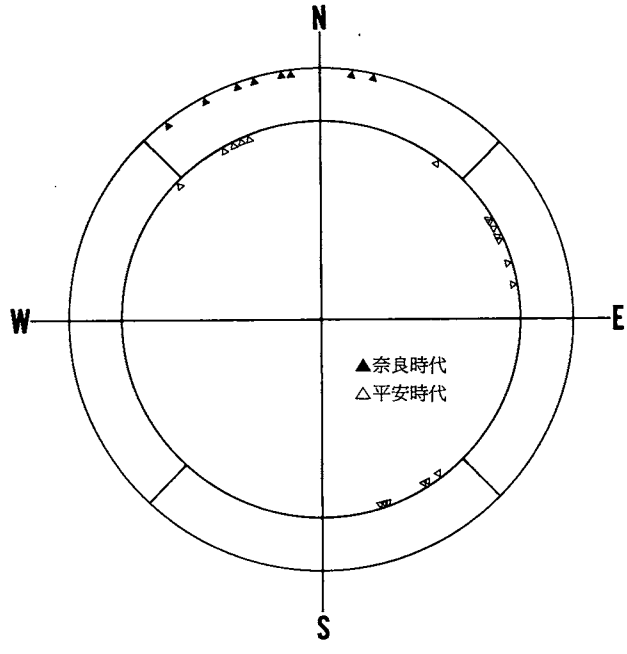


図96　カマド方位分布図

4棟あるが、これらは焼失住居とは断定できない。炭化材が多く散布する住居跡では、材が放射状に分布するものがみられる。また、奈良時代（古墳～奈良時代含む）の焼失住居跡6棟のうち、炭化材・焼土とも認められないものは1棟だけで、その住居跡からは遺物が一点も出土していない。このことが住居の廃棄行動と直接関連するかは定かでないが、何らかの意味を持つものと考えられる。一方、平安時代の焼失住居跡は3棟である。

付属施設を持つ住居跡は3棟確認されている。Ｆ４－ｈ住居跡はロクロ回転台を据えるためのピットを持つ土器製作の工房跡と思われる住居である。住居内には製作の際に素材となったと思われる白色粘土も検出された。出土した土器は破片も含めて70点以上に及び、半数以上が赤焼き土器の坏である。同様のピットを持つ住居跡が検出された遺跡には、杉ノ上II遺跡（紫波町）や煤孫遺跡（北上市）などがある。Ｅ３－ｕ住居跡は鍛冶工房跡と考えられるもので、フイゴの羽口や鉄滓、鉄製品が出土し、住居内には大型の作業ピットを伴う。鉄製品の中には、鍛錬する前の段階の刀子2本が接着して出土しており、小鍛冶的な作業を行っていたと考えられる。前述の刀子はＥ４－１住居跡からも出土しているが、作業に使用したと思われるピットが検出されなかったことから、一覧表には？を付している。しかし、鉄製品が9点と数多く、鉄滓やフイゴの羽口もみつかっているので、鈴冶作業を行っていた可能性は高い。このことと関連して、Ｊ４－ｂ土坑からは総重量3.9kgの鉄滓とフイゴの羽口3個が出土しており、この付近に製鉄炉の存在が予想されたが検出されなかった。本遺跡から出土した鉄滓の総重量は6.83kgに及んでいる。

3．出土遺物

(1)土器の分類

ここでは土師器坏・甕の分類を行う。甑、壺、須恵器については出土量が少ないため、一覧表（表6）に示すにとどめたい。

坏　A類：ロクロ不使用のもの、B類：ロクロ使用のもの、C類：高台付坏に大別し、A類は丸底（平底風丸底を含む）のものをＡＩ類、平底（丸底風平底を含む）のものをＡII類に分類した。さらに、ＡＩ類・AII類は次のように細分した。

ＡＩａ類：内外面に段を持つもの。

ＡＩｂ類：内外面ともに段を持たないもの。

AIIａ類：口径比（器高÷口径）が0.5未満のもの。

AIIｂ類：口径比が0.5以上のもの。

B類は内面が黒色処理されるものをＢＩ類、内外面が黒色処理されるものをＢII類、内外面がともに黒色処理されていないもの(いわゆる赤焼き土器)をＢIII類に分類した。さらにＢＩ・

ＢII類は口径比から、ＢIIIは底部の再調整の有無から次のように細分した。

ＢＩａ類：口径比が0.4未満のもの。

ＢＩｂ類：口径比が0.4以上のもの。

ＢIIａ類：口径比が0.4未満のもの。

ＢIIｂ類：口径比が0.4以上のもの。

ＢIIIａ類：底部に再調整が認められるもの。

ＢIIIｂ類：底部に再調整が認められないもの。

Ｃ類はロクロ使用の高台付坏であるが、

ＣＩ類：内面が黒色処理されるもの、ＣII類：内面が黒色処理されないもの、に分類した。

甕　大きくロクロ不使用のものとロクロ使用のものに大別できる。ロクロ不使用の甕については、Ａ類：器高26cm以上のもの(大型甕)、Ｂ類：器高16.5～20.5cmのもの(中型甕)、Ｃ類：器高10.5～14.0cmのもの(小型甕)、Ｄ類：器高10cm以下のもの(極小型甕)に分類した。また、ロクロ不使用の球胴甕はＥ類とした。Ｆ類はロクロ使用の甕である。

Ａ類・Ｂ類・Ｃ類は、最大径を基準として、ＡＩ・ＢＩ・ＣＩ類が口縁部に最大径を持つもの、AII・BII・CII類が口縁部径を体部最大径がほぼ同じもの、AIII・BIIIが体部に最大径

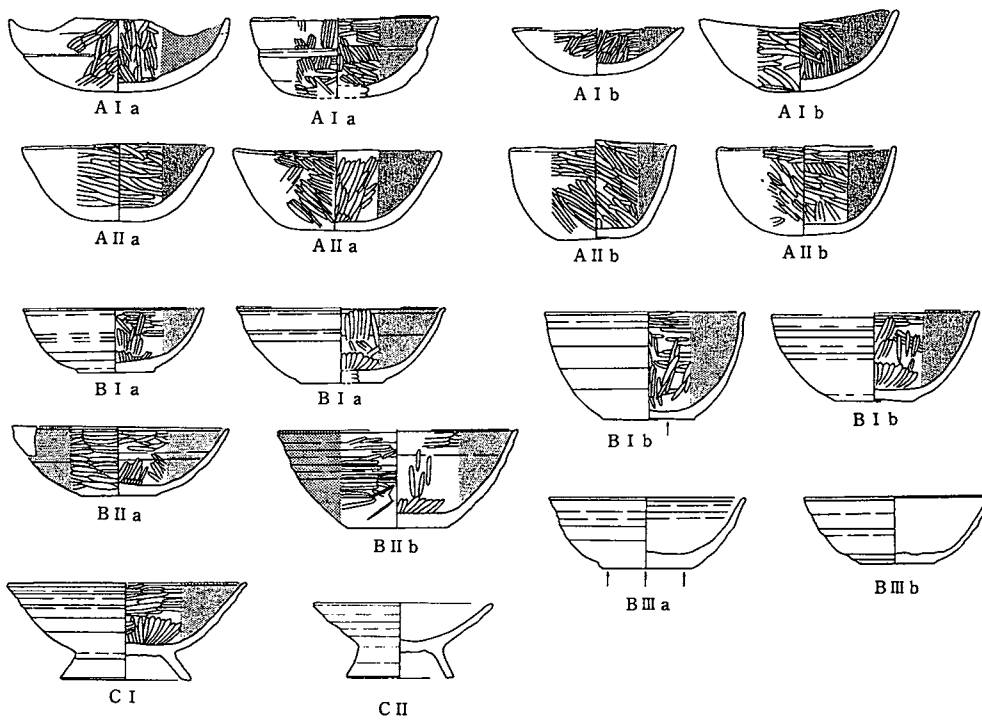


図97　坏分類図

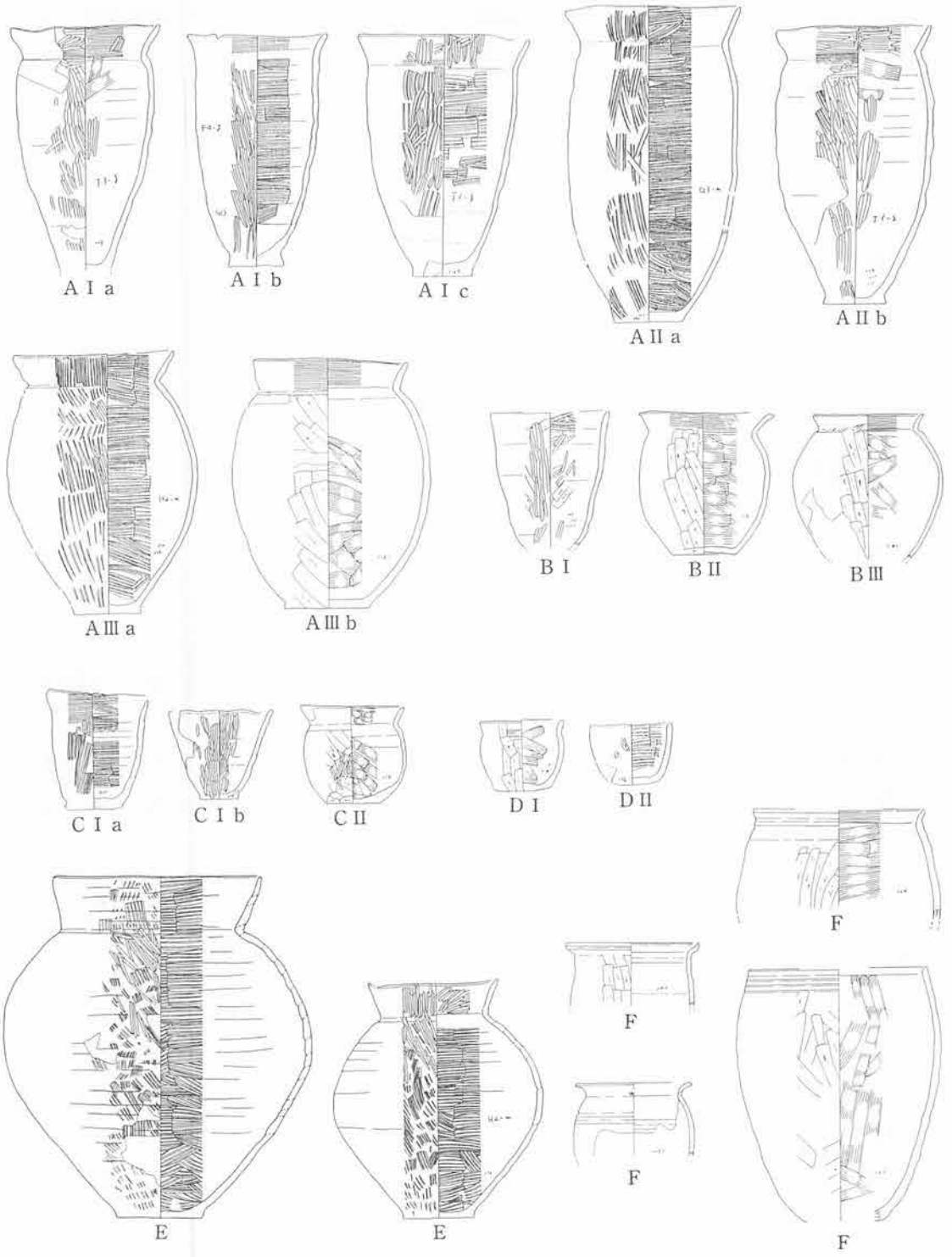

A I a
A I b
A I c
A II a
A II b
A III a
A III b
B I
B II
B III
C I a
C I b
C II
D I
D II
F
F
F
F
E
E

図98　甕分類図

を持つもの、に分類した。さらに、ＡＩ・ＡII・ＡIII・ＣＩについては、体部の器面調整や頸部の形状から次のように細分した。

ＡＩａ類：外面の調整がヘラミガキ主体で、頸部に段を持つもの。

ＡＩｂ類：外面の調整がヘラミガキ主体で、頸部に段を持たないもの。

ＡＩｃ類：外面の調整がハケメ主体のもの。

ＡIIａ類：内外面の調整がハケメ主体のもの。

ＡIIｂ類：外面の調整がハケメ後にヘラミガキされているもの。

ＡIIIａ類：内外面の調整がハケメ主体のもの。

ＡIIIｂ類：内面がヘラナデ及びハケメで、外面がヘラケズリされているもの。

ＢＩ類・ＢII類・ＢIII類

ＣＩａ類：外面の調整がハケメ主体のもの。

ＣＩｂ類：外面の調整がヘラミガキ主体のもの。・ＣII類

D類は、ＤＩ類：頸部に括れを持つもの、ＤII類：頸部に括れを持たないもの、に分類した。

Ｅ類

Ｆ類

⑵共伴関係と土器の年代

表６に示した共伴関係から、本遺跡の土器群は第Ｉ～第VI期に大別される。各期ごとの組み合わせを次に示す。

第Ｉ期　坏ＡＩｂ類、甕ＡＩｂ類・ＡIIｂ類・ＣＩａ類からなる土器群で、Ｅ４－ｇ住居跡１棟だけがこの時期に相当する。甕ＡＩｂ類は頸部に括れを持たず、底部外面が強く外側に張り出し、その内面は卵形の丸みを呈するものである。

第II期　坏A類(AIIIｂ類を除く)、甕A類、ＢＩ類、ＣＩ類、ＤII類、Ｅ類を主体とする土器群である。この組み合わせを持つ住居跡は５棟であり、個別にみると器種の組み合わせ、調整技法に若干の違いがみられる。そこで主な組み合わせをａ・ｂの２群に分けた。

ａ群：甕ＡＩａ類・ＡＩｂ類・ＡIIｂ類・ＣＩｂ類のように、外面がヘラミガキ調整を主体とする土器群を持つもので、Ｈ３－ｉ・Ｉ３－ｔ・Ｊ３－ｙの各住居跡がこの時期に所属する。坏はＡＩａ類・ＡＩｂ類・ＡIIａ類・ＡIIｂ類が共伴している。また、甑はＨ３－ｉ・Ｊ３－ｙ住居跡から出土している。

ｂ群：甕ＡＩｃ類・ＡIIａ類・ＡIIIａ類・ＣＩａ類のように、外面がハケメ調整を主体とするもので、Ｇ３－m・Ｈ２－m住居跡が相当する。坏はＡＩａ類・ＡＩｂ類が共伴する。また、Ｅ類の球胴甕はこの２棟からしか出土していない。

表6　出土土器一覧表

住居跡＼分類	土師器坏 A類 Ia	埋土	Ib	IIa	IIb	B類 Ia	Ib	IIa	IIb	IIIa	IIIb	C類 I	II	土師器甕 A類 Ia	Ib	Ic	IIa	IIb	IIIa	IIIb	B類 I	II	III	C類 Ia	Ib	II	D類 I	II	E類	F類	土師器 手捏ね土器	甑	須恵器 壺	蓋	破片	時期区分
C3－y住	床面																																		2	第III期
E3－u住																																			26	〃
E3－v住												1	1 2																	1						〃
E3－y－1住											1																									〃
E3－y－2住																														1					1	〃
E4－d住	1		1				1				1	1	1															1								第II期
E4－g住			1								2				1			1						1												第I期
E4－h住						7	1	1	1	2	12	1	1							1									6	1			2			第IV期
E4－I住						3	1	1															1													第III期
F3－u住						1					1	1	1							1						1			2	1			1		1	第IV期
G3－m住			3	1							1			1	1		1		1		1				1	1			1	1	1					第II期
G3－u住																																			1	第III期
H2－m住	1																		2										1							第II期
H3－i住			2		2		3																		1						1					〃
H3－I住						4		3			1		2	1							1		2	1				1		2					1	第III期
H3－v住																						1	1			1										〃
I3－t住															1			1																		第II期
J3－y住														1	1	1		2			1											1				〃
D3－w土坑							1																													第II期以降
D3－x土坑							1																													?

第Ⅲ期　坏ＢＩａ類・ＢＩｂ類・ＣＩ類、甕はＢ類・ＣⅡ類を主体とする土器群の時期である。Ｅ３－ｖ・Ｈ３－ｌ・Ｈ３－ｖの各住居跡が相当する。ＢⅢ類・ＣⅡ類の赤焼き土器が共伴するものもあるが、個体数が少ない。ロクロ使用の羽釜風極小型甕は、Ｈ３－１住居跡から出土している。

第Ⅳ期　坏ＢＩａ類・ＢⅡ類・ＢⅢ類・Ｃ類、甕はＡⅢｂ類・ＣⅡ類・Ｆ類を主体とする土器群の時期である。Ｅ４－ｈ・Ｆ３－ｕの各住居跡がこの時期に相当する。Ⅲ期に比べて、ＢⅢ類の赤焼き土器やＦ類のロクロ使用甕の個体数が増加している。また、第Ⅲ期にはみられなかった、内外面がヘラミガキ後黒色処理される土器が現われる。同様の調整を持つ須恵器の蓋や壺もこの時期に含まれる。

なお、遺物が極めて少ないものや、埋土内の出土土器だけで共伴関係が定かでない住居跡（Ｂ４－ｄ・Ｃ３－ｙ・Ｄ３－ｖ・Ｄ４－ｃ・Ｄ４－ｔ・Ｅ３－ｕ・Ｅ３－ｙ－１・２各住居跡）については分類から除外している。

以上のように各期ごとの土器群の構成についてみてきたが、４期に区分された土器群は、第Ⅰ期→第Ⅱ期→第Ⅲ期→第Ⅳ期という時間的な流れとして把えられる。住居跡相互の切り合いがみられず、明瞭な前後関係は示すことができないが、高橋（1982）の岩手県の土師器の編年に対比させ、実年代を考察してみたい。

第Ⅰ期は高橋のⅡ－１群期に相当すると考えられる。高橋は岩手県県北において、二戸市の堀野・上田面遺跡をⅡ－１群に挙げ、７世紀後半～８世紀初頭の年代を与えている。また。上田面遺跡の土器は、坏の器形・甕の調整技法の違いから堀野遺跡に後続するとしている。本遺跡の第Ⅰ期土器群は、坏の器形、甕の器形や調整技法から上田面遺跡のものに類似しており、前述の堀野→上田面の順となる点から、８世紀初頭の実年代を想定しておく。

第Ⅱ期はⅡ－２群期に相当すると考えられる。本遺跡の第Ⅱ期ａ群は、長胴甕の外面の器面調整がヘラミガキを主体とするものの、底部外面の張り出しの減少、底部内面の平底化が認められる。第Ⅱ期ｂ群では、長胴甕の外面の器面調整がハケメ主体となり、底部外面の張り出しはほとんど消失する。また、球胴甕が伴うのも特徴である。このような状況から、第Ⅱ期ｂ群が高橋のⅡ－２群期、８世紀中～後半に位置づけられる。第Ⅱ期ａ群はｂ群より先行する土器群と考えられ、８世紀前半～中頃という年代を想定しておく。他の遺跡と比較すると、第Ⅱ期のａ群は二戸市長瀬Ｂ遺跡が、第Ⅱ期ｂ群は一戸町上野Ｄ遺跡、二戸市中曽根Ⅱ遺跡が相当すると思われる。

第Ⅲ群はⅢ－１群期に相当する。ロクロ使用の内黒の坏の普及期であり、数は少ないが、ロクロ使用の甕や赤焼き土器を含む。また、口径比の大きい碗に近いタイプの坏もみられる。９世紀前～後半の実年代を想定しておく。

第IV期はIII－２群期にあたると思われる。甕へのロクロ使用、赤焼き土器の割合が高くなる。坏は黒色処理され、切り離しは回転糸切りで再調整がみられない。この期の年代を考えるにあたっては、内外面に黒色処理の施される坏や、黒色の須恵器の蓋・壺などの存在が問題となろう。また、第IV期に属する住居跡には火山灰の堆積が認められないことから、年代は10世紀前～後半と考えている。

４．鼻館跡の集落の変遷

鼻館跡で検出された古代の住居跡22棟を出土遺物、住居形態などから時期区分したものが図99の集落の変遷図である。遺物の分類で示した第Ｉ期～第IV期に従って区分し、特にIII・IV期については出土遺物が全くない住居跡や少ない住居跡があるが、住居形態や火山灰の堆積の有無、集落の構成から各期に帰属させた。

第Ｉ期にはＥ４－ｇ住居跡１棟が帰属する。８世紀初頭の住居跡である。

第II期は甕の調整技法の違いからａ群とｂ群に分けたが、ここでは一括して第II期に帰属させた。集落の構成を考えると、第II期の住居跡群はＧ３－ｍ住居跡を中心とする一群とも推測できそうであり、また、ｂ群のハケメ主体の甕とａ群のヘラミガキ主体の甕が共伴する住居跡が、Ｇ３－ｍ住居跡、Ｊ３－ｙ住居跡にみられることから、ａ群とｂ群の時間的な差違は小さいものと考えられる。このような観点からａ群とｂ群に境界を設けず８世紀前～後半ととらえた。

なお、第Ｉ・第II期群の住居跡の埋土には、十和田ａ降下火山灰、白頭山降下火山灰の両方がレンズ状に堆積する例が多い。

第II期は上記の火山灰が埋土に小ブロックで散在する住居跡群である。細分が可能と思われ

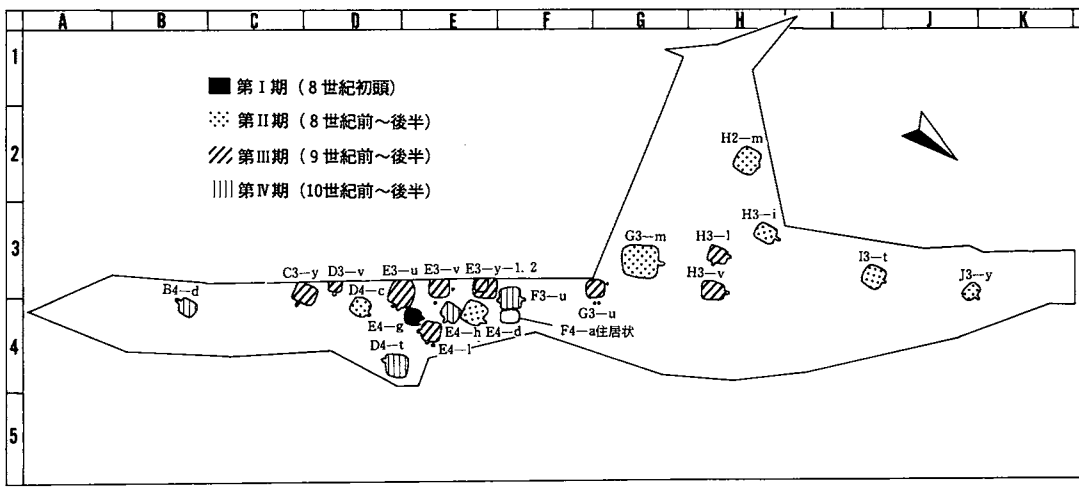


図99　鼻館跡の集落の変遷

る部分もあるが、出土遺物の少ない住居跡が多いため、一括して9世紀前～後半の年代を与えている。鍛冶工房跡として考えられるＥ３－ｕ・Ｅ４－１住居跡はこの期に属している。

第Ⅳ期は両火山灰の混入が認められない住居跡群で、土器工房跡のＥ４－ｈ住居跡もこの期の住居跡である。十和田ａ降下火山灰の降下年代は10世紀初頭とされており、火山灰の降下後に構築された住居跡群と考えられる。実年代は10世紀前～後半と推定した。

以上鼻館跡の古代の集落の変遷をみてきた。第Ⅰ期を除き、第Ⅱ～第Ⅳ期は複数の住居跡が存在するが、第Ⅱ期の8世紀代の住居跡群はほぼ同一の主軸方向を持ち、規模の違いはあるものの、集落を考える上で説得力のある状況を示した。第Ⅲ・第Ⅳ期では規模的にまとまる傾向が認められるが、主軸方向等は様々であり、同時存在するかしないかという問題はさらに詳細な検討をすべきと思われる。

土器分類や時期区分、年代の想定などの再考すべき点が多く、数々の問題点があるが、他の発掘調査の成果と比較し、検討すべき材料として頂きたい。

なお、中世の城館に関する遺構・遺物は、いっさい検出されていない。

引用・参考文献

相原康二（1983）：岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器前期土師器の内容について.『考古学論叢①』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行委員会.

一戸町教育委員会（1981）：『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』. 一戸町文化財調査報告書第1集.

今村啓爾（1983）：陥穴（おとし穴）『縄文文化の研究2生業』. 雄山閣.

岩手県教育委員会（1979）：『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅲ―』. 岩手県文化財調査報告書35集.

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）：『源道遺跡発掘調査報告書』. 岩埋文報告書第138集.

〃　（1988）：『平沢Ⅰ遺跡調査報告書』. 岩埋文報告書第125集.

〃　（1991）：『明神遺跡発掘調査報告書』. 岩埋文報告書第150集.

宇部則保（1989）：青森県における7・8世紀の土師器―馬淵川下流域を中心として―.『北海道考古学第25号』.

大島秀俊（1989）：北海道小樽市蘭島遺跡群における土師器供膳形態の様相について.『北海道考古学第25号』.

久慈市教育委員会（1984）：『上野山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』. 久慈市文化財調査報告書第4集.

〃　（1990）：『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』. 久慈市文化財報告書第12集.

〃　（1988）：『中長内遺跡発掘調査報告書』. 久慈市文化財調査報告書第8集.

昆野　靖・石川長喜（1985）：花巻市桜町窯出土の陶磁器.『紀要Ⅴ』. 岩手県埋蔵文化財センター.

田村壮一（1987）：陥し穴状遺構の形態と時期について―岩手県北地方を中心として―.『紀要Ⅶ』. 岩手県埋蔵文化財センター.

平山久夫（1969）：津軽平野の須恵器（予報）.『津軽・前田野目窯跡』. ニューサイエンス社.

二戸市教育委員会（1981）：『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』.

八戸市教育委員会（1983）：『史跡根城跡発掘調査報告書』. 八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集.

宮城県文化財保護協会（1990）：『切込窯跡』―近世磁器窯跡の調査―. 官崎町文化財調査報告書第3集.

表7　掲載遺物一覧表(1)

（　）推定、〈　〉現存高

（土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕）

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量（cm）			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
1	図59	支脚	B4－d住　埋土下部	—	—	S	S	—	8.3	〈15.0〉	×	指頭圧痕、円柱状
2	〃	支脚	B4－d住　埋土下部	—	—	—	—	—	4.3（中央部）	〈 7.8〉	×	円柱状、中央部以外欠損
3	〃	甕	C3－2住　埋土	—	N	—	K	—	—	〈12.5〉	×	
4	〃	須恵器	C3－y住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
5	〃	須恵器	C3－y住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
6	〃	坏	D4－t住　埋土	—	M	—	R	—	(6.4)	〈 1.3〉	○	内黒、回転糸切り痕
7	〃	甕	D4－t住　埋土	—	K	—	K	—	(7.4)	〈 4.3〉		底部ヘラケズリ
8	〃	鉄滓	D4－t住　埋土	長さ4.1		幅2.5		厚さ2.1		重量120		鑑定済
9	図60	坏	E3－u住　埋土	—	M	—	R	—	5.8	〈 1.2〉	○	内黒、回転糸切り痕
10	〃	高台	E3－u住　埋土	—	M	—	R	—	6.9	〈 2.4〉	○	
11	〃	甕	E3－u住　東カマド内	Y	H	Y	K	—	—	〈 7.5〉		
12	〃	甕	E3－u住　東カマド内	Y	H	Y	N	—	—	〈 6.4〉		
13	〃	甕	E3－u住　pit 1埋土	Y	N	Y	N	—	—	〈 4.9〉		
14	〃	甕	E3－u住　pit 1埋土	Y	N	Y	N	12.0	—	〈 6.3〉		
15	〃	甕	E3－u住　pit 1埋土	Y	H	Y	K	9.3	—	〈 5.0〉		
16	〃	壺(ミニチュア)	E3－u住　南カマド煙出底面	R	R	R	R	6.8	5.0	7.7	○	回転糸切り後再調整
17	図61	須恵器	E3－u住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
18	〃	須恵器	E3－u住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
19	〃	須恵器	E3－u住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
20	〃	須恵器	E3－u住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
21	〃	須恵器	E3－u住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		
22	〃	須恵器	E3－u住　pit 1埋土	—	—	—	T	—	—	—		
23	〃	角釘	E3－u住　pit 1埋土	長さ〈9.0〉		幅—		厚さ0.4～0.5				先端欠損
24	〃	鉄鏃	E3－u住　pit 1埋土	長さ21.5		幅2.8		厚さ0.2～0.6				
25	〃	鉄滓	E3－u住　pit 1埋土	長さ 4.8		幅3.1		厚さ1.8				
26	〃	刀子(2本)	E3－u住　pit 1埋土	長さ15.0(12.1)		幅1.1(1.0)		厚さともに0.7				半製品(鍛錬前のもの?)
27	〃	フイゴ	E3－u住　pit 1埋土	—	—	—	N	(6.0)		〈 8.6〉		
28	図62	フイゴ	E3－u住　埋土	—	—	—	N	—	—	〈 5.8〉		
29	〃	フイゴ	E3－u住　埋土	—	—	—	—	5.7	—	〈 3.5〉		
30	〃	支脚	E3－u住　pit 3埋土	—	—	S	S	—	6.3	〈 3.7〉		指頭押圧、中央部欠損
31	〃	石鏃	E3－v住　埋土	長さ3.6		幅1.4		厚さ0.7				尖基鏃
32	〃	坏(高台付)	E3－v住　埋土	—	M	—	R	—	—	〈 2.2〉	○	内黒、回転糸切り痕
33	〃	坏(高台付)	E3－v住　床面	M	M	R	R	(16.6)	8.4	8.3	○	内黒、回転糸切り痕
34	〃	高台	E3－v住　埋土	—	R	—	R	—	5.2	〈 2.3〉	○	はがれたもの
35	〃	坏	E3－v住　埋土	—	M	—	R	—	5.2	〈 3.8〉	○	内黒、回転糸切り後再調整
36	〃	坏	E3－v住　埋土	M	M	R	R	15.8	—	〈 4.8〉	○	内黒
37	〃	坏	E3－v住　埋土	M	M	R	R	15.6	—	〈 5.5〉	○	内黒
38	〃	坏	E3－v住　埋土	—	M	—	R	—	4.8	〈 1.9〉	○	内黒、回転糸切り後再調整
39	〃	坏	E3－v住　pit 埋土	R	R	R	R	(15.6)	—	〈 6.5〉	○	赤焼き
40	〃	坏	E3－v住　埋土	R	R	R	R	13.0	5.0	4.0	○	赤焼き、回転糸切り痕
41	図63	甕	E3－v住　埋土	Y	H	Y	H	—	—	〈 6.1〉		
42	〃	甕	E3－v住　pit 1埋土	Y	H	Y	K	—	—	〈 5.8〉		
43	〃	甕	E3－v住　pit 1埋土	R	N	R	K	—	—	〈 8.5〉	○	口唇部つまみ出し
44	〃	甕	E3－v住　埋土	R	R	R	R→K	—	—	〈17.6〉	○	口唇部つまみ出し
45	図64	甕(須恵器)	E3－y住	—	N	—	K	—	(14.3)	〈13.3〉	○	ロクロ使用の須恵器甕
46	〃	支脚	E3－y住　北カマド	N		輪積み痕		—	6.8	〈 8.3〉		輪積み痕 フイゴとしては未使用
47	〃	坏	E3－y住　南カマド内	R	R	R	R	13.6	6.1	5.0	○	赤焼き、回転糸切り再調整(ヘラ)
48	〃	甕	E3－y住　東カマド	Y	N	Y	K	24.0	—	(6.9)		
49	〃	須恵器	E3－y住　埋土	—	—	—	T	—	—	—		体部下端破片
50	〃	支脚	E3－y住　東カマド内	—	—	—	S	—	7.7	17.8		指頭圧痕、円柱状
51	図65	坏	E4－d住　埋土	M	M	M	M	(12.1)	—	5.3	×	内黒と思われる
52	〃	坏	E4－d住　床面	M	M	M	M	(12.9)	—	6.8	×	内黒、平底、内外面に有段
53	〃	高台	E4－d住　埋土	—	R	—	R	—	(5.3)	〈 1.7〉	○	
54	〃	坏(高台付)	E4－d住　埋土	—	M	—	R	—	—	〈 2.9〉	○	内黒、坏部回転糸切り痕

掲載遺物一覧表(2)

(　)推定、〈　〉現存高

(土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕)

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量(cm)			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
55	図65	坏	E4－d住　埋土	－	M	－	R	－	(5.5)	4.9	○	内黒、回転糸切り痕
56	〃	坏	E4－d住　埋土	M	M	R	R	14.7	5.7	5.3	○	内黒、回転糸切り痕
57	〃	坏	E4－d住　埋土	M	M	R	R	(14.8)	－	〈3.0〉	○	内黒、回転糸切り痕
58	〃	坏	E4－d住　埋土	M	M	R	R	(15.0)	－	〈2.7〉	○	内黒、回転糸切り痕
59	〃	坏	E4－d住　埋土	M	M	R→M	R→M	(15.0)	－	〈5.0〉	○	内黒、回転糸切り痕
60	〃	坏	E4－d住　埋土	R	R	R	R	12.7	5.4	4.4	○	赤焼き、回転糸切り痕
61	図66	甕	E4－d住　埋土	H	H→M	M	K→M	9.8	－	〈4.9〉		
62	〃	甕	E4－d住　北カマド煙道内	－	H	－	H	－	7.6	〈5.2〉		
63	〃	甕	E4－d住　埋土	Y	N	Y	K	(20.4)	－	〈7.7〉		
64	〃	甕	E4－d住　埋土	R	－	R	－	－	－	－		
65	〃	甕	E4－d住　埋土	Y	－	Y→N	－	－	－	－		
66	〃	刀子	E4－d住　床面	長さ〈6.6〉		幅1.3		厚さ0.45				欠損部あり
67	〃	刀子	E4－d住　床面	長さ〈6.2〉		幅1.0		厚さ0.32				欠損部あり
68	〃	砥石	E4－d住　埋土下部	長さ〈4.7〉		幅3.3		厚さ2.0		重量60		4面使用痕あり
69	図67	坏	E4－g住　床面	M	M	M	M	9.8	2.6	3.1	×	内外黒、丸底
70	〃	坏	E4－g住　埋土	－	R	－	R	－	5.5	〈0.7〉	○	赤焼き、回転糸切り痕
71	〃	坏	E4－g住　埋土	R	R	R	R	5.5	5.8	0.6	○	赤焼き、回転糸切り痕
72	〃	坏	E4－g住	R	R	R	R	(13.2)	－	〈4.5〉	○	赤焼き、回転糸切り痕
73	〃	坏	E4－g住	－	－	－	－	－	(4.2)	〈1.0〉	○	底部に糸痕あり、底部再調整
74	〃	甕	E4－g住　床面	H	H	Y	H→M	12.1	7.0	13.8		輪積み痕、小型の甕
75	〃	甕	E4－g住　床面	H	H	Y	H→M	16.8	7.5	26.0		輪積み痕
76	〃	甕	E4－g住　床面	Y	H	Y	M	16.5	6.5	27.8		輪積み痕
77	〃	甕	E4－g住　埋土	－	N	－	N	－	(11.0)	〈1.8〉		ヘラによる再調整
78	〃	鉄製品	E4－g住　埋土	長さ〈4.1〉		幅－		厚さ0.2～1.2				器種不明
79	図68	坏(高台付)	E4－h住	M	M	R	R	14.8	－	〈5.0〉	○	高台部欠損、内黒
80	〃	坏(高台付)	E4－h住　東カマド内	M	M	R	R	(15.1)	－	〈5.8〉	○	高台部欠損、内黒、回転糸切り痕
81	〃	坏	E4－h住	M	M	R	R	13.7	－	〈4.5〉	○	内黒、回転糸切り痕
82	〃	坏	E4－h住　pit 1埋土	M	M	R	R	(14.6)	(6.0)	5.5	○	内黒、回転糸切り痕
83	〃	坏	E4－h住　pit 1埋土	M	M	M	M	15.3	5.4	5.1	○	内外黒、回転糸切り痕
84	〃	坏	E4－h住　pit 2埋土	M	M	M	M	(16.9)	5.3	7.9	○	内外黒、回転糸切り痕、刻書
85	〃	坏	E4－h住　床面	M	－	R	－	(13.6)	－	〈3.7〉	○	内黒
86	〃	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	(12.7)	－	〈4.7〉	○	内黒
87	〃	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	14.8	5.3	5.2	○	内黒だったと思われる
88	図69	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	13.2	5.4	4.8	○	内黒
89	〃	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	(15.2)	－	〈6.0〉	○	内黒
90	〃	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	(13.8)	－	〈5.0〉	○	内黒
91	〃	坏	E4－h住　床面	M	M	R	R	13.5	5.0	4.8	○	内黒、回転糸切り痕
92	〃	坏	E4－h住	M	－	R	－	－	－	－	○	内黒
93	〃	手捏ね土器	E4－h住　床面	－	S	－	－	4.4	1.0	1.8		指頭圧痕
94	〃	坏	E4－h住　埋土上部	R	R	R	R	(14.2)	－	(5.2)	○	赤焼き、回転糸切り痕
95	〃	坏	E4－h住	R	R	R	R	(12.7)	(5.0)	4.3	○	赤焼き、回転糸切り痕
96	〃	坏	E4－h住	R	R	R	R	(15.4)	5.2	4.9	○	赤焼き、回転糸切り痕
97	〃	坏	E4－h住	R	R	R	R	13.1	5.0	4.3	○	赤焼き、回転糸切り後再調整
98	図70	坏	E4－h住	R	R	R	R	13.2	4.8	3.2～3.8	○	赤焼き、回転糸切り後再調整、口縁部に煤る痕
99	〃	坏	E4－h住　pit 3埋土	R	R	R	R	(12.7)	－	〈3.8〉	○	赤焼き、回転糸切り痕
100	〃	坏	E4－h住　pit 3埋土	R	R	R	R	(13.0)	－	〈4.8〉	○	赤焼き
101	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	(14.0)	5.6	4.2	○	赤焼き
102	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	12.5	5.4	4.1	○	赤焼き、回転糸切り痕
103	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	(13.8)	5.2	4.7	○	赤焼き、回転糸切り痕
104	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	(13.5)	－	〈4.1〉	○	赤焼き
105	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	(15.5)	－	〈4.1〉	○	赤焼き
106	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	13.4	5.2	4.2	○	赤焼き、回転糸切り痕
107	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	12.7	5.3	4.1	○	赤焼き、回転糸切り痕
108	〃	坏	E4－h住　床面	R	R	R	R	(12.6)	－	〈4.1〉	○	赤焼き

掲載遺物一覧表(3)

(　)推定、〈　〉現存高

(土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕)

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量(cm)			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
109	図71	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	(14.3)	—	〈4.8〉	○	赤焼き
110	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	(13.0)	—	〈5.1〉	○	赤焼き
111	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	(13.6)	5.7	5.1	○	赤焼き、回転糸切り痕
112	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	—	(5.0)	〈2.5〉	○	赤焼き、回転糸切り痕
113	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	(13.3)	(5.2)	4.0	○	赤焼き、回転糸切り痕
114	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	—	(5.9)	〈3.2〉	○	赤焼き、回転糸切り痕
115	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	13.1	5.2	4.7	○	赤焼き、回転糸切り痕
116	〃	坏	E4－h住 床面	R	R	R	R	13.8	5.0	4.5	○	赤焼き、回転糸切り痕、灯明皿に転用
117	図72	甕	E4－h住 床面	Y	—	Y・K	—	(19.7)	—	〈6.1〉		
118	〃	甕	E4－h住 東カマド袖部内	Y	H	Y	K	(18.0)	—	〈15.0〉		
119	〃	甕	E4－h住 埋土	R	R	R	R	(20.0)	—	〈5.0〉	○	口唇部つまみ出し
120	〃	甕	E4－h住 床面	R	R	R	R	(20.0)	—	〈8.5〉	○	口唇部つまみ出し
121	〃	甕	E4－h住 床面	R	R	R	R	(16.6)	—	〈9.9〉	○	
122	〃	甕	E4－h住 床面	R	R	R	R→K	(20.4)	—	〈9.2〉	○	
123	図73	甕	E4－h住 床面	R	N	R	K	(20.7)	—	〈30.2〉	○	口唇部つまみ出し
124	〃	甕	E4－h住 東カマド内	R→Y	N	R	K	(20.2)	—	〈12.5〉	○	口唇部つまみ出し
125	〃	須恵器(蓋)	E4－h住	M	—	R	—	—	—	—	○	内外黒
126	〃	須恵器(蓋)	E4－h住 埋土	R	R	R→M	R→M	(16.9)	—	〈1.8〉	○	内外黒
127	〃	釣針(?)	E4－h住 埋土	長さ〈5.0〉		幅〈1.5〉						芯部一部、先端部欠損
128	〃	紡錘車	E4－h住 埋土	上面径3.2		下面径4.5		厚さ2.1				土製、全面ヘラミガキ
129	図74	高台	E4－1住	—	R	—	M	—	7.2	〈2.1〉	○	外黒
130	〃	坏	E4－1住	M	M	R	R	(14.0)	—	〈4.6〉	○	内黒だったと思われる
131	〃	坏	E4－1住 埋土	M	M	R	R	(13.4)	5.7	5.8	○	内黒、回転糸切り痕
132	〃	坏	E4－1住 埋土	M	M	R	R	(13.8)	—	〈4.6〉	○	内黒
133	〃	坏	E4－1住 埋土	M	M	R	R	(11.1)	—	〈3.7〉	○	内黒だったと思われる、高台付?
134	〃	坏	E4－1住	M	M	R	R	(14.5)	—	〈5.3〉	○	内黒
135	〃	坏	E4－1住 埋土	M	M	R	R	(14.2)	5.3	5.0	○	内黒、回転糸切り痕
136	〃	坏	E4－1住	M	M	M	M	(15.8)	—	〈4.0〉	○	内外黒
137	〃	坏	E4－1住	R	R	R	R	(12.2)	—	〈4.4〉	○	赤焼き
138	〃	甕	E4－1住 床面	—	H	—	K	—	7.5	〈6.2〉	○	底部はヘラによる再調整
139	〃	甕	E4－1住 pit 3埋土	Y	H	Y	K	—	—	—		
140	図75	刀子(2本)	E4－1住 床面	長さ19.4(19.5)		幅1.4(1.2)		厚さ0.9(0.7)		—		半製品(鍛錬前のもの?)
141	〃	角釘	E4－1住 床面	長さ 9.3		幅—		厚さ0.3～0.7		—		
142	〃	角釘	E4－1住 床面	長さ 8.0		幅—		厚さ0.3～0.65		—		
143	〃	角釘(?)	E4－1住 床面	長さ〈9.1〉		幅—		厚さ0.5		—		刀子(?)
144	〃	角釘	E4－1住 床面	長さ11.4		幅—		厚さ0.3～0.8		—		
145	〃	馬具(?)	E4－1住 床面	長さ(7.1)		幅(5.2)		厚さ0.3～0.45				金具(?)
146	〃	鉄鏃(銙)	E4－1住 床面	長さ〈4.0〉		幅(2.0)		厚さ0.65				先端部のみ
147	〃	鉄滓	E4－1住 埋土下部	長さ 3.0		幅 1.9		厚さ1.3		重量26.1		鑑定済
148	〃	フイゴ	E4－1住 床面	—	—	—	—	6.4	—	〈8.7〉		
149	図76	坏	F3－u住 埋土	N	N→M	K	K→M	(12.0)	—	〈4.3〉	×	
150	〃	坏	F3－u住 埋土	R	R	R	R	(13.8)	(6.0)	4.8	○	赤焼き、回転糸切り痕
151	〃	坏	F3－u住 pit 2埋土	M	M	R	R	(14.3)	—	〈4.8〉	○	内黒
152	〃	坏	F3－u住 南カマド内	R	R	R	R	(14.9)	5.6	4.3	○	赤焼き、回転糸切り痕
153	〃	坏(高台付)	F3－u住 床面	M	M	R	R	17.0	9.4	7.1	○	内黒、回転糸切り
154	〃	甕	F3－u住 埋土	—	N	—	K	—	9.6	〈4.1〉		
155	〃	甕	F3－u住 埋土	Y	N	Y	K	14.0	—	〈16.9〉		
156	〃	甕	F3－u住 北カマド煙道内	—	N	—	K→M	—	7.4	〈11.3〉		
157	図77	甕	F3－u住 北カマド煙道内	Y	N	Y→K	K	(20.2)	—	〈16.8〉		
158	〃	甕	F3－u住 pit 2内	N	N	—	K→M	12.2	6.5	11.4		
159	〃	甕	F3－u住 埋土	R	R	R	R→N	—	—	〈6.0〉	○	口唇部つまみ出し
160	〃	甕	F3－u住 南カマド煙道内	R	R	R	R→K	(15.2)	—	〈7.5〉	○	口唇部つまみ出し
161	〃	甕	F3－u住 南カマド煙道内	R→Y	R→N	R	R→K	—	—	〈14.6〉	○	口唇部つまみ出し
162	図78	須恵器(壺)	F3－u住 埋土・南カマド煙道内	M	—	M	R→M	(11.3)	(7.6)	〈23.9〉	○	内外黒(内外面黒色処理)

掲載遺物一覧表(4)

(　)推定、〈　〉現存高

(土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕)

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量(cm)			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
163	図78	須恵器	F3－u住	—	—	—	T	—	—	—		甕の肩部破片
164	〃	紡錘車	F3－u住　北カマド付近	長さ〈10.6〉		幅5.5		厚さ0.5～0.6				鉄製、紡錘車直径5.5
165	〃	磨石	F3－u住　北カマド内	長さ11.4		幅8.3		厚さ5.7		重量740		敲石としても使用、硬砂岩
166	図79	坏	G3－m住	M	M	M	M	(11.6)	—	〈5.0〉	×	内黒、丸底と思われる
167	〃	坏	G3－m住　床面	M	M	M	M	(11.6)		〈4.5〉	×	内黒、丸底と思われる
168	〃	坏	G3－m住　床面	M	M	M	M	(19.6)	—	6.2	×	内黒、内黒、平底風丸底
169	〃	手捏ね土器	G3－m住　床面	N	N	H	H	8.2	—	3.7	×	丸底
170	〃	坏	G3－m住　pit 1埋土	M	M	M	M	(11.8)	—	3.6	×	平底風丸底
171	〃	坏	G3－m住　埋土上部	R	R	R	R	(12.9)	5.5	4.4	○	赤焼き、回転糸切り痕
172	〃	甕	G3－m住	—	H	—	N→M	—	6.9	〈6.7〉		
173	〃	甕	G3－m住　埋土	H	H	M	M	9.2	4.0	7.5		
174	〃	甕	G3－m住　埋土	H	M	M	H	—	—	〈13.3〉		輪積み痕
175	図80	甕	G3－m住　床面	—	M	—	N	—	9.1	〈13.6〉		輪積み痕
176	〃	甕	G3－m住　床面	H	K→M	N	K→M	(14.0)	—	〈16.0〉		輪積み痕
177	〃	甕	G3－m住　pit 1埋土	—	H	—	H	—	7.0	〈9.0〉		輪積み痕、底部にヘラミガキ
178	〃	甕	G3－m住　北カマド内	Y	H	Y	K→M	(14.3)	6.3	12.8		底部不葉痕
179	〃	甕	G3－m住　北カマド煙道内	N→M	M	M	M	(24.9)	—	〈23.0〉		輪積み痕
180	図81	甕	G3－m住　埋土下部	H	H	H	H	18.2	6.7	34.5		軽いヘラミガキが入る
181	〃	甕	G3－m住　埋土下部	H	H	H	H	20.3	8.0	37.6		軽いヘラミガキが入る
182	図82	甕	G3－m住　床面	H	H	H	H→M	24.2	5.2	40.1		輪積み痕
183	〃	刀子	G3－m住　埋土下部	長さ14.2		幅1.0		厚さ0.3～0.4				半製品(鍛錬前のもの?)
184	〃	甕	G3－u住　埋土	Y	—	N	N	—	—	〈7.2〉		
185	〃	円形掻器	G3－u住　埋土	長さ3.1		幅3.0		厚さ1.1		重量9.9		黒曜石(夏井一帯)
186	〃	凹石	G3－u住　床面	長さ12.0		幅10.0		厚さ1.8		重量340		磨石としても使用
187	図83	坏	H2－m住　床面	M	M	M	M	15.5	4.0	5.1	×	内黒、丸底風平底、内外面有段
188	〃	甕	H2－m住　床面	—	H	—	K→M	—	—	6.4		
189	〃	甕	H2－m住　床面	H	H	H	H→M	18.4	8.1	30.1		
190	〃	甕	H2－m住　床面	H	H	H	H→M	18.6	7.4	30.6		
191	図84	甕	H2－m住　床面	M	H	M	H→M	12.1	8.0	28.3		輪積み痕
192	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	14.6	4.4	5.7	×	内黒、平底
193	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	16.1	3.9	6.7	×	内黒、丸底風平底
194	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	16.6	5.2	6.2	×	内黒、平底風丸底
195	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	12.4	4.0	6.3	×	内黒、丸底風平底
196	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	11.9	4.9	7.0	×	内黒、平底
197	〃	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	13.7	3.2	5.5	×	内黒、丸底風平底
198	図85	坏	H3－i住　床面	M	M	M	M	14.1	3.1	5.5	×	内黒、丸底
199	〃	甕	H3－i住　床面	N→M	M	M	M	(12.4)	4.3	10.5		輪積み痕
200	〃	甑	H3－i住　床面	N	一部M	M	H→M	19.6	8.0	20.0		
201	〃	坏(高台付)	H3－1住　床面	M	M	R	R	15.6	7.9	7.9	○	内黒
202	〃	坏	H3－1住　埋土下部	M	M	R	R	15.3	4.9	5.9	○	内黒、回転糸切り痕
203	〃	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	12.5	5.3	4.6	○	内黒、回転糸切り痕
204	〃	坏	H3－1住　東カマド内	M	M	R	R	14.6	5.6	6.4	○	内黒、回転糸切り痕、床面のものと接合
205	〃	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	14.6	5.2	5.5	○	内黒、回転糸切り後再調整
206	〃	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	14.5	5.0	5.5	○	内黒、回転糸切り痕
207	図86	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	14.6	5.8	5.9	○	内黒、回転糸切り後再調整
208	〃	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	13.6	6.6	7.6	○	内黒、回転糸切り後再調整
209	〃	坏(高台付)	H3－1住　床面	M	M	R	R	16.6	8.4	7.9	○	内黒、墨書土器
210	〃	坏	H3－1住　床面	M	M	R	R	(15.0)	(4.2)	5.5	○	内黒、墨書土器
211	〃	坏(高台付)	H3－1住　床面	R	R	R	R	12.6	7.6	6.4	○	赤焼き
212	〃	坏	H3－1住　床面	R	R	R	R	14.8	5.4	5.7	○	赤焼き、回転糸切り痕
213	〃	甕	H3－1住　埋土下部	R	R	R	R	7.3	5.8	8.5	○	底部回転糸切り痕、羽釜風
214	〃	甕	H3－1住	R	R	R	R	(13.8)	—	8.6	○	補修孔
215	〃	甕	H3－1住　床面	N	N	K→N	K	9.6	6.6	9.4		
216	〃	甕	H3－1住　床面	—	K	—	N	—	—	〈12.7〉		口縁部欠損

掲載遺物一覧表(5)

(　)推定、〈　〉現存高

(土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕)

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量(cm)			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
217	図87	甕	H3－1住　床面	—	H	—	K	16.4	7.7	20.2		
218	〃	甕	H3－1住　床面	Y→N	N	Y	K	16.0	7.6	16.7		
219	〃	甕	H3－1住　カマド付近床面	Y	N	Y	K	17.8	9.7	29.2		
220	〃	紡錘車	H3－1住　東カマド付近	長さ23.5		幅5.7		厚さ0.5～0.6				鉄製、紡錘車直径5.7
221	〃	刀子	H3－1住	長さ 5.5		幅1.3		厚さ0.4				
222	〃	刀子	H3－1住	長さ 2.8		幅1.1		厚さ0.7				
223	図88	剝片	H3－1住　埋土下部	長さ 2.3		幅3.0		厚さ0.5		重量 6.05		珪質凝灰岩（夏井）
224	〃	剝片	H3－1住　埋土下部	長さ 3.1		幅3.0		厚さ1.6		重量11.55		珪質凝灰岩（夏井）
225	〃	剝片	H3－1住　埋土下部	長さ 2.6		幅1.4		厚さ0.5		重量 2.2		珪質凝灰岩（夏井）
226	〃	剝片	H3－1住　埋土下部	長さ 1.9		幅1.3		厚さ0.2		重量 0.7		珪質頁岩(夏井)
227	〃	剝片	H3－1住　埋土	長さ 3.9		幅1.9		厚さ0.7		重量 6.05		珪質凝灰岩（夏井）
228	〃	甕	H3－v住　カマド左袖	—	N	—	K	—	6.9	2.4		底部再調整(ヘラ)
229	〃	甕	H3－v住　カマド左袖	N	N	N	K	(10.9)	—	〈 7.9〉		
230	〃	甕	H3－v住　床面	—	—	—	N	—	—	〈11.2〉		体部破片、輪積み痕
231	〃	甕	H3－v住　床面	Y	N	Y	K	15.3	—	〈16.5〉		補修孔
232	〃	甕	H3－v住　カマド袖	Y	N	Y	K	(17.1)	7.6	19.2		補修孔
233	〃	剝片	H3－v住　埋土	長さ 2.2		幅6.4		厚さ1.5		重さ28.7		珪質凝灰岩（夏井）
234	図89	坏	I3－s住　床面	—	M	—	M	—	4.9	〈 2.3〉	×	内黒、外面有段、平底
235	〃	甕	I3－s住　埋土下部	—	H	—	H→M	—	(8.1)	〈 4.7〉		
236	〃	甕	I3－s住　pit 1 埋土	Y	—	H→M	—	15.7	—	〈 4.8〉		
237	〃	甕	I3－s住　床面	—	N	—	M	—	6.5	〈 4.0〉		底部ヘラミガキ
238	〃	甕	I3－s住　床面	H→M	H	H→M	H→M	(17.3)	—	〈13.0〉		
239	〃	甕	I3－s住　床面	H→M	H	H→M	H→M	(19.0)	8.0	33.0		輪積み痕
240	〃	鉄製品	I3－s住　埋土	長さ 2.9		幅—		厚さ0.7～1.3				器種不明
241	〃	鉄製品	I3－s住　床面	長さ 3.4		幅 2.5		厚さ0.55				器種不明
242	〃	磨石	I3－s住　pit 2 底面	長さ12.5		幅10.7		厚さ4.9		重量340		硬砂岩(夏井中生界)
243	〃	剝片	I3－s住　埋土	長さ 2.5		幅 2.2		厚さ0.5		重量2.85		珪質凝灰岩（夏井）
244	図90	坏	J3－y住　床面	M	M	M	M	10.8	(5.0)	5.7	×	内黒、底部穿孔(径3.7)
245	〃	甕	J3－y住	M	M	M	M	16.0	—	6.4		
246	〃	甕	J3－y住　埋土	Y	H	Y	K	(21.5)	—	〈 9.0〉		
247	〃	甕	J3－y住　床面	H→M	H	Y→M	H→M	20.1	7.1	28.7		輪積み痕
248	〃	甕	J3－y住　床面	Y→M	N→M	Y→M	M	17.6	—	28.5		輪積み痕
249	図91	甕	J3－y住　床面	M	H	Y→M	M	17.5	8.0	32.5		輪積み痕
250	〃	甕	J3－y住　床面	M	N→M	Y→M	H→M	18.2	7.4	33.0		輪積み痕、底部再調整
251	〃	甑	J3－y住　床面	—	H	—	K→M	—	9.4	〈17.7〉		
252	図92	坏	D3－w土坑　埋土	M	M	R	R	(13.2)	—	〈 5.1〉	○	内黒
253	〃	坏	D3－w土坑　埋土	R	R	R	R	(13.3)	—	〈 4.0〉	○	赤焼き
254	〃	坏	D3－w土坑　埋土	R	R	R	R	(14.1)	—	〈 3.0〉	○	赤焼き
255	〃	甕	D3－w土坑　埋土	R	R	R	K	—	—	〈14.1〉	○	
256	〃	支脚	D3－w土坑	—	—	—	S	—	4.2	〈 8.0〉		指頭圧痕、円柱状
257	〃	坏	D3－x土坑	M	M	R	R	(14.1)	—	〈 4.6〉	○	内黒
258	〃	フイゴ	J4－b土坑　埋土	—	—	—	H	—	—	〈 4.4〉		
259	〃	フイゴ	J4－b土坑　埋土	—	—	—	K	—	—	〈 5.8〉		
260	〃	フイゴ	J4－b土坑　埋土	—	—	—	N→K	最大径 6.1	最小径 4.5	〈12.4〉		
261	〃	角釘	J4－b土坑　埋土	長さ4.4		幅—		厚さ0.5				両側欠損
262	〃	鉄滓	J4－b土坑　埋土	径8.5		厚さ2.5		重量400				碗形鉄滓、鑑定済
263	〃	鉄滓	J4－b土坑　埋土	幅6.5		厚さ2.0		重量180				鑑定済
264	図93	縄文土器	I3－p 3層上部	—	—	—	—	—	—	—		破片(後期)
265	〃	縄文土器	I3－p 3層上部	—	—	—	—	—	—	—		破片(後期)
266	〃	縄文土器	I3－p 3層上部	—	—	—	—	—	—	—		破片(後期)
267	〃	剝片	G3－o表土	長さ3.2		幅2.0		厚さ1.3		重量11.48		珪質頁岩(夏井中生界)
268	〃	剝片	H3－m 3層上部	長さ3.6		幅1.9		厚さ0.6		重量 4.65		珪質凝灰岩(夏井)
269	〃	剝片	H3－m 2層～3層	長さ1.3		幅1.4		厚さ0.2		重量 0.35		珪質頁岩(夏井中生界)
270	〃	剝片	J3－m 2層～3層	長さ4.2		幅3.7		厚さ0.7		重量15.25		珪質凝灰岩(夏井)

掲載遺物一覧表(6)

（　）推定、〈　〉現存高

（土師器……Y＝ヨコナデ、N＝ヘラナデ、K＝ヘラケズリ、M＝ヘラミガキ、H＝ハケメ、R＝ロクロ調整、T＝タタキ目、S＝指頭圧痕）

遺物番号	実測図	器種	出土地点	内面調整		外面調整		法量(cm)			ロクロ使用	備考
				口縁部	体部	口縁部	体部	口径	底径	器高		
271	図93	剝片	H2－u表土	長さ1.9		幅2.8		厚さ0.6		重量 3.1		珪質凝灰岩(夏井)、使用痕あり
272	〃	剝片	H2－w3層	長さ2.1		幅2.6		厚さ0.2		重量 1.95		珪質凝灰岩(夏井)、使用痕あり
273	〃	剝片	H3－e2層～3層	長さ3.3		幅2.7		厚さ0.5		重量 5.75		珪質凝灰岩(夏井)、使用痕あり
274	〃	石核	J3－v2層～3層	長さ6.1		幅4.1		厚さ2.5		重量58.45		珪質凝灰岩(夏井)
275	〃	削器	H3－p2層～3層	長さ4.0		幅2.6		厚さ0.7		重量 7.9		珪質凝灰岩(夏井)
276	〃	円形掻器	H2－a表土	長さ2.9		幅2.2		厚さ1.4		重量10.25		黒曜石(夏井一帯中生界)
277	〃	水晶	E3－u2層～3層	長さ2.6		幅1.9		厚さ1.5		重量 9.85		水晶(夏井中生界)
278	〃	水晶	E3－w2層～3層	長さ2.9		幅2.8		厚さ1.2		重量13.22		水晶(夏井中生界)
279	図94	坏	D4－b2層～3層	—	M	—	R	—	(5.2)	2.0	○	赤焼き、糸切り痕
280	〃	坏	J4－f表土	—	M	—	R	—	(4.6)	2.0	○	内黒、回転糸切り痕
281	〃	坏	D4－i3層上部	M	M	K	K→M	(9.6)	(5.5)	4.9		内外黒
282	〃	壺	表採	R	R	R	R	5.7	3.7	4.1	○	素焼き
283	〃	窯道具(焼台)	B4－a表土	—	—	—	—	—	6.0	1.0	○	3足(ヘラ切り)
284	〃	窯道具(焼台)	H4区表土	—	—	—	—	—	9.1	1.9	○	1足(2足は欠損する、ヘラ切り)
285	〃	窯道具(焼台)		—	—	—	—	—	6.0	2.0	○	3足(貼付)
286	〃	窯道具(焼台)	G3区表土	—	—	—	—	—	6.0	1.5	○	4足(貼付)
287	〃	窯道具(焼台)	H2区表土	—	—	—	—	—	6.3	1.2	○	4足(ヘラ切り)
288	〃	窯道具(焼台)	H2区表土	—	—	—	—	—	6.5	1.6	○	4足(ヘラ切り)
289	図95	窯道具(焼台)	F3区表土	—	—	—	—	—	7.1	1.6	○	4足(ヘラ切り)
290	〃	窯道具(焼台)	H3区表土	—	—	—	—	—	5.6	1.5	○	3足(ヘラ切り)
291	〃	窯道具(焼台)	H3－c表土	—	—	—	—	—	6.3	0.8	○	4足(ヘラ切り)
292	〃	窯道具(焼台)	H3区表土	—	—	—	—	—	5.7	1.8	○	半分欠損、1足(貼付)
293	〃	窯道具(焼台)	H2区表土	—	—	—	—	—	7.5	1.5	○	5足(ヘラ切り)穿孔なし
294	〃	窯道具(焼台)	G2－i表土	—	—	—	—	—	(7.2)	1.0	○	足なし
295	なし	窯道具(焼台)	表採	—	—	—	—	—	—	6.0	○	大型焼台の破片
296	なし	窯道具(焼台)	H2－1表土	—	—	—	—	—	4.1	2.6		環状、スサ入り
297	なし	窯道具(焼台)	表採	—	—	—	—	—	幅4.2	高さ6.2		スサ入り
298	なし	窯道具(焼台)	表採	—	—	—	—	—	幅2.4	高さ5.0		スサ入り
299	なし	窯道具(焼台)	表採	—	—	—	—	—	幅1.4～3.0	高さ4.8		スサ入り
300	なし	窯道具(焼台)	表採	—	—	—	—	—	幅7.4	高さ—		スサ入り
301	図95	剝片	H2－g陥し穴　埋土上部	長さ2.0		幅1.7		厚さ2.0		重量1.2		凝灰岩(夏井中生界)
302	〃	剝片	H3－p陥し穴　埋土上部	長さ2.1		幅3.0		厚さ0.5		重量4.46		珪質凝灰岩(夏井)使用痕あり
303	〃	剝片	H3－p陥し穴　埋土上部	長さ3.1		幅3.4		厚さ0.6		重量7.25		凝灰岩(夏井中生界)使用痕あり
304	〃	縄文土器	H3－a陥し穴　埋土1層	—	—	—	—	—	—	—		破片(時期不明)

付編3

鼻館跡出土火山灰分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試料

試料は、鼻館跡の住居跡埋土から検出されたテフラ11点である。各試料の採取された住居跡と岩質を表1に示す。

2．分析方法

試料約10gに水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などの産状を調べる。さらに必要ならば火山ガラスの屈折率の測定を行う。これらの観察および測定結果より、試料となったテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、新井（1972）の浸液法に従った。

表1　鼻館跡テフラ分析試料表

No.	遺構名	出土状況	岩質
1	D4-c住居跡⑲	埋土上層内	黄灰色　極細砂～シルト
2	D4-c住居跡⑳	埋土下層内	灰色　中砂～細砂
3	E4-d住居跡⑨	埋土内	黄灰色　極細砂～シルト
4	E4-g住居跡⑱	埋土内	黄灰色　極細砂～シルト
5	F4-a住居状⑯	埋土上層内	黄灰色　極細砂～シルト
6	F4-a住居状⑰	埋土下層内	灰色　中砂～細砂
7	G3-m住居跡②	埋土内	灰色　中砂～細砂
8	H2-m住居跡⑪	埋土内	灰色　中砂～細砂
9	H3-l住居跡③	埋土内	灰色　中砂～細砂
10	H3-v住居跡①	埋土内	黄灰色　極細砂～シルト
11	I3-s住居跡⑩	埋土内	灰色　中砂～細砂

3．分析結果

・試料番号1

ほとんど細砂～極細砂径の火山ガラスからなる。火山ガラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型と気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型およびスポンジ状に発泡した軽石型の3形態が混在する。この中では、繊維束型と軽石型がやや多い。どの形態のものも、ほとんどが無色透明であるが、少量の淡褐色のものも認められた。

火山ガラスの屈折率は、n1.510～1.515であった。

・試料番号2

多量の軽石と火山ガラス、中量の安山岩片および微量の遊離結晶からなる。軽石は、最大径約1.2㎜、スポンジ状に発泡したものと繊維束状に伸びて発泡したものが混在する。軽石の色は白色のものが多いが、少量の淡緑色のものが混じる。火山ガラスは、細砂径～極細砂径で形態は軽石と同様の状況を呈する。安山岩片は灰色から黒灰色を呈し角礫状である。遊離結晶は、斜方輝石と単斜輝石が認められた。

火山ガラスの屈折率は、n1.496～1.501であった。

・試料番号3

試料番号1と同様である。

・試料番号4

試料番号1と同様である。

・試料番号5

試料番号1と同様である。

・試料番号6

試料番号2と同様である。

・試料番号7

試料番号2と同様である。

・試料番号8

試料番号2と同様である。

・試料番号9

試料番号2と同様である。

・試料番号10

試料番号1と同様である。

・試料番号11

試料番号2と同様である。

4．テフラの同定

本分析の試料11点は、2種類のテフラを採取したものと考えられる。内訳は、試料番号1、3、4、5、10のテフラと試料番号2、6、7、8、9、11のテフラである。2種類のテフラは、試料番号1と2および試料番号5と6にみられるように前者のテフラが上位で後者のテフラが下位である。また、住居跡の属する時代は、奈良・平安時代と考えられている。

以上の状況とテフラの特徴から、前者のテフラは、白頭山一苫小牧火山灰）B—Tm：町田ほか、1981）に同定され、後者のテフラは、十和田ａテフラ（To—a：町田ほか、1984）に同定される。

B—Tmは中国と北朝鮮国境にある白頭山を給源とし、11～12世紀の間に噴出したとされている。層位学的検知からA.D. 915年より新しく、1334年より古いと考えられている（町田ほか、1984）。また、To—aは十和田カルデラを給源とし、A.D. 915年に噴出したと考えられている（町田ほか、1984）。

鼻館跡のＤ４－ｃ住居跡とＦ４－ａ住居状遺構の埋土には両テフラが上下関係をもって存在しており、他の住居跡はどちらか一方のテフラとなった。年代示標が明らかなこれらのテフラと埋土中における状況を把握し、住居跡の年代観を検討すべきと考える。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究—．第四紀研究，11，p. 254—269．

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p. 562—569．

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然化学」，p. 865—928．

図版Ⅰ

B—Tmの火山ガラス
（試料番号１）

To—aの軽石
（試料番号２）

To—aの火山ガラス
（試料番号２）

付編4

鼻館跡出土試料種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試料

鼻館跡と柳上遺跡・林崎館遺跡より採取された炭化種子の同定を行った。

鼻館跡からは3試料（№1・2・3）、柳上遺跡からは1試料（№4）、林崎館遺跡からは1試料（№5）の計5試料（№1～5）を本同定の試料とした。試料の状態は№1で炭化物粒混りの土壌であった以外は炭化材片を混在する炭化種子片及び炭化種子片のみが袋に入ったものであった。各々属する時代・時期と出土遺構も含め、試料表（表1）にまとめた。

表1　種子同定試料表

№	遺跡名	時代・時期	遺構名	出土状況	試料の質・量
1	鼻館跡	奈良・平安	H3－1住居跡	北側籠の煙道内出土	炭化物含む土壌
2	〃	〃	E4－1住居跡	埋土内出土	炭化種子1粒
3	〃	〃	F3－u住居跡	南籠内出土	炭化破片20粒位
4	柳上遺跡	縄文中～後期（大木10式期前後）	J40住居跡P5	ピット内出土	炭化物片多量
5	林崎館遺跡	不明			炭化物片多量

2．分析方法

№1の分析方法は、試料約500mlを容器にいれ、5％苛生ソーダ（NaOH）水溶液を加えて一昼夜放置し、試料を泥化させる。ときどき容器を静かに振って泥化を促進させる。その後、希塩酸を加えて放置し試料を中和させた後、0.5mmの篩に通す。残った残渣について、双眼実体顕微鏡で観察し大型植物遺体と思われるものを拾い、№2～5と同定を行う。

№2～5は肉眼および実体顕微鏡を用いて同定を行い、写真撮影（図版1）も行った。

3．結果および考察

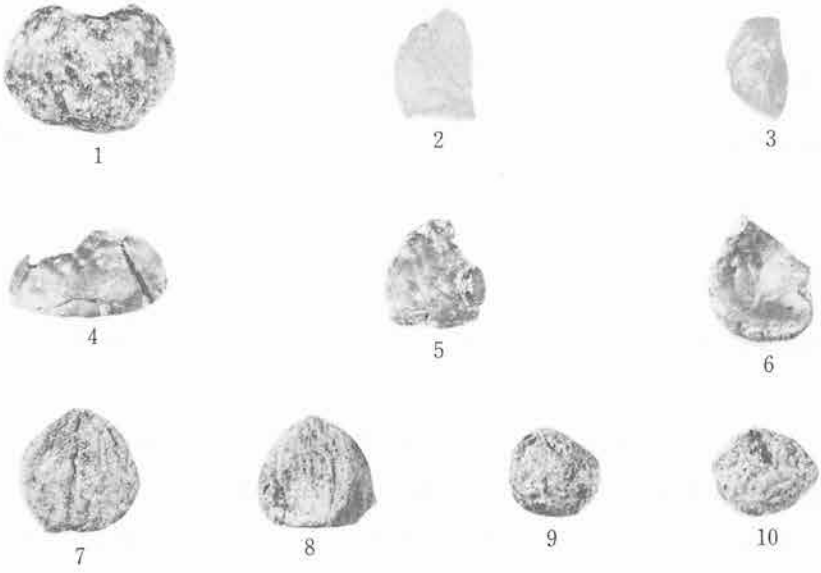
No.1からは、種類が同定可能と思われる大型植物遺体は、検出されなかった。0.5㎜以上の残渣は、団粒状になった泥や円磨された堆積岩起源の岩片や軽鉱物が多い。炭化物は、植物起源と思われる黒色の炭化片や、タール状の物質がわずかに認められたにすぎない。今回分析を行った堆積物は、煙道内のものであることから、タール状の物質は煙道内にたまった「すす」に起因しているのかもしれない。また、肉眼で種子のように見えたものは、タール状の物質が付着して光沢をもち丸みをおびた炭化物片であり、種子ではない。

No.2・3は、いずれもクリの炭化果実及び炭化果皮片である。果実の大きさの推定値は、写真1に用いたもので、幅2.2cm、高さ1.8cm、厚みのある個体である。

No.4は、炭化材片のほかはクリと考えられる炭化した果実及び種子である。クリは果皮に包まれた状態で炭化した個体、果皮が取り去られた後に炭化した個体が混在している。果実の大きさの推定値は、幅1.8～2.5cm、高さ1.5～2.0cmと考えられる。

No.5は、炭化材片、炭化したクリの種子である。ほとんどが果皮をつけずに炭化しているものと考えられ、鼻館跡（No.2・3）、柳上遺跡（No.4）とやや産出状況が異なる。また、種子の大きさの推定値は、幅1.4～1.8cm、高さ1.3～1.8と鼻館跡・柳上遺跡で産出している大きさよりもやや小型である。

図版Ⅰ



1．クリ（果実、No.2鼻館跡）、2．クリ（果皮、No.3鼻館跡）、3．クリ（果実、No.3鼻館跡）、4．クリ（果実、No.4、柳上遺跡）、5．クリ（果実、No.4柳上遺跡）、6．クリ（果実、No.4柳上遺跡）、7．クリ（果実、No.5林崎館遺跡）、8．クリ（果実、No.5林崎館遺跡）、9．クリ（果実、No.5林崎館遺跡）、10．クリ（果実、No.5林崎館遺跡）
※倍率はすべて0.8倍

付編5

鼻館跡G 3 — u 住居跡出土の動物遺存体について

陸前高田市立博物館　佐　藤　正　彦
岩手考古学会会員　熊　谷　　賢

Ⅰ．はじめに

久慈市鼻館跡の発掘調査において、平安時代の竪穴住居G 3 — u 住の pit 1 の埋土中より、比較的保存状態の良好な動物遺存体の出土をみた。本県における平安時代の動物遺存体の出土例は最近増加傾向にあるが(註1)、依然出土例が少なく、平安時代の食生活の一端を知る上で良好な資料と思われ、これらの資料について種の同定と計測を行ったのでその所見について報告する。なお、種の同定及び学名の記載については、学研生物図鑑貝Ⅰ・Ⅱと、北隆館　日本動物図鑑を参考とした。

註1　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1988)：「平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第125集
この他、宮古市館山貝塚、同館山遺跡よりも出土している。

Ⅱ．出土動物遺存体

A　軟体動物

a　腹足綱

1．エゾアワビ　Haliotis (Nordotis) discus hannai Ino

18片出土した。いずれも破砕が著しく、計測可能個体は少ない。大きさは、最大のもので長径9.60cmで、最小のものは長径5cm未満とばらつきがみられ、概して小型のものが多い。最少個体数は、殻頂部の残存する資料から推定して8個体程度である。(表1)

2．クボガイ　Chlorostoma argyrostoma lischkei (Tapparrore Canefri)

4点出土している。いずれも破砕が著しく、計測可能個体は1個体のみであるが充分食用となる大きさである。計測値は、殻高2.24cm・殻径2.7cmである。

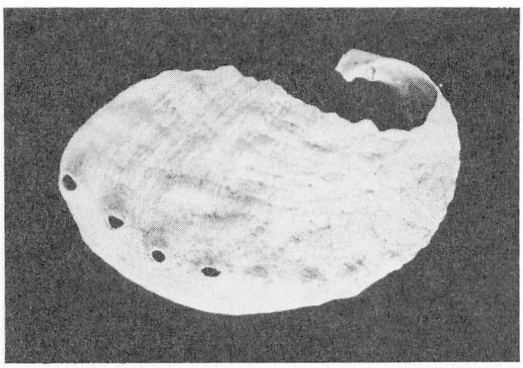
b　二枚貝綱

1．ムラサキインコガイ　Septifer (Mytilisepta) virgatus (Wiegmann)

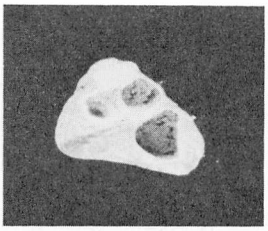
右殻2点、左殻3点出土している。3点が完存個体である。左右の殻にはそれぞれ接合関係は無い。計測表は表2のとおりである。

2．イガイ　Mytilus corsucus Gould

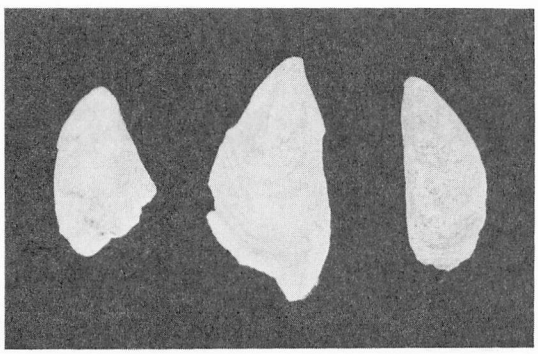
右殻2点、左殻2点が出土した。破損が著しく計測可能個体は無い。※は人為的な加工痕を



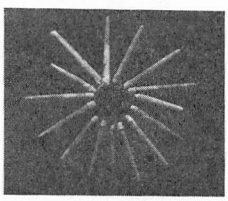
1



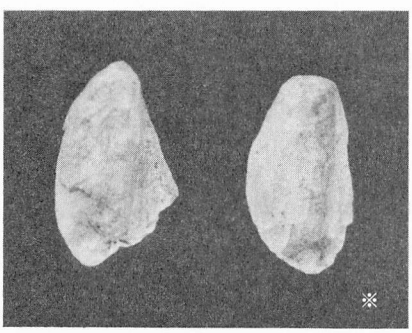
4



2



5



3

1　エゾアワビ
2　ムラサキインコガイ
3　エゾイガイ
4　イタボガキ科の一種
5　ムラサキウニ
※加工痕のあるエゾイガイ（3の右側）

鼻館跡出土動物遺存体

有するものである。殻頂部に平坦面を有し、表面は、殻皮を削ぎ落とすように面取りが施されている。製品を意識して面取りを行った可能性もある。計測値は、長さ3.57cm、幅1.96cmである。

3．エゾイガイ　Crenomytilus grayanus （Dunker）

右殻3点、左殻1点が出土した。左右の殻には接合関係がない。保存状態は比較的良好であるが、計測可能個体は1点である。計測値は、殻長2.26cm、殻高4.58cmで、概して小型である。

4．イタボガキの一種　Ostreidae gen. etsp. indet.

磨滅の著しい資料が一点出土している。種の同定は不可能である。

B　棘皮動物

1．ムラサキウニ　Anthochidaris crassispina （A. AGASSIZ）

少量の棘が出土している。口器などの個体数を算定するための部位の出土は無い。

III．まとめ

1．鼻館跡より出土した動物遺存体は、全体量は少ないが、軟体動物6種、棘皮動物1種である。魚類・哺乳類の出土は見られず、貝は岩礁部に生息する種に限られ、本遺跡における特色と思われる。同様の出土傾向を示す例としては久慈市平沢I遺跡の例がある。

2．特記すべきことは、人為的な加工痕を有する貝の出土をみたことである。加工痕は、殻頂部に平坦面を設け、殻皮を削ぎ落とすように面取りを施したものである。現段階では製品を意識しての加工かどうかは、類例もなく判然としない。仮に貝製品とすれば、平安時代の出土遺物では本県唯一のものと思われる。

表1　エゾアワビの計測値

	標本番号	長　径	短　径	殻　高
No.1	No.1	—	—	2.8
No.2	No.2	8.86	—	—
No.3	No.3	9.6	—	3.06
No.4	No.4	6.3	4.3	(1.58)
No.6	No.5	—	—	1.53
No.8	No.6	—	5.55	—
No27	No.8	—	—	0.9
No31	No27	—	—	1.03

表2　ムラサキインコガイの計測値

標本番号	殻　長	殻　高	備　考
No11	1.2	2.62	右殻
No21	1.8	4.4	左殻
No22	1.52	3.54	左殻

単位はcm
（　）は欠損による残存長
—は計測不可

付編8

鼻館跡の古代のD3－w土坑、E4－a土坑の埋土に挟在する灰層の植物珪酸体分析、灰像分析

佐瀬　隆

鼻館跡遺跡のD3－w土坑、E4－a土坑の埋土には、植物灰の薄層が認められた。いかなる植物の燃焼残渣なのかを知るために、植物珪酸体分析および灰像分析を行ったので、その結果を報告する。

1．試料と方法

分析に用いた試料は、D3－w土坑、E4－a土坑の埋土に挟在する植物灰層より採取した（図1）。これらの灰層はその下位に焼成土を伴うことから現地性の灰層と判断される。

各試料とも薬ざし1杯量をトールビーカーにとり、H_2O_2法による有機物分解、ジチオナイト法による脱鉄処理、篩と沈降法による10～100 μm粒径画分の分離、乾燥、プレパラート作製、検鏡の手順で分析をすすめた。植物珪酸体については既報（佐瀬ほか1990）の分類に準じ、同定し組成を求めた。一方、珪化組織片については、給源植物分類群、給源組織と関連づけて区分し、便宜的に15群に分けて同定し組成を求めた。検出された代表的な植物珪酸体、珪化組織片の顕微鏡写真を図版にまとめて示した。

2．結　果

各試料の植物珪酸体群集組成は表1－aに、珪化組織片群集組成は表1－bに示した。

『D3－w土坑』

植物珪酸体群集、珪化組織片群集のいずれにおいても、非イネ科植物起源と同定できるものは認められず、植物珪酸体、珪化組織片の大部分がイネ科起源と推定される。

植物珪酸体群集：試料1、試料2ともに、非短細胞起源珪酸体の組成はファン型（機動細胞起源）＞棒状型（長細胞起源）＞ポイント型（プリケルヘアー細胞起源）で、ファン型ではII型（非タケ亜科起源）が大半を占め、試料1ではその全てが、試料2では半数以上がイネ様のものと判定される。短細胞起源珪酸体の検出数は

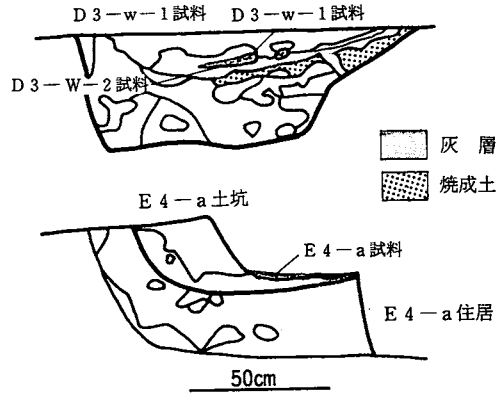


図1　分析試料の採取位置

表1　鼻館跡遺跡のD3-w土坑、E4-g土坑の埋土に狭在する灰層の植物珪酸体・珪化組織片の組成

a．植物珪酸体組成

試料	非短細胞起源					短細胞起源									その他	計	珪化組織片	読取総数
	ファン型			棒状型	ポイント型	タケ型			ヒゲシバ型	キビ型	ウグシノケサ型	イネ型	未分類					
	I	II	III			I	II	III										
D3w-1	21	(21)	8	17	2	1						4	2	6	58	258	316
	36.2	(36.2)	8.6	29.3	3.4	11.7						7.0	3.4	10.3			
D3w-2	35	(23)		29	6					2	1	13	2	15	103	227	330
	34.0	(22.3)		28.2	5.8					1.9	0.9	12.6	1.9	14.6			
E4g	19	(9)	1	11	5	1					1	2		4	43	210	253
	44.2	(20.9)	2.3	25.6	11.6	2.3					2.3	4.7		9.3			

b．珪化組織片組成

試料	イネ科																カヤツリグサ科	計
	類組織片			葉部組織片										基本組織片				
	イネ様	キビ・ヒエ・アワ様	ムギ様	イネ含有珪酸体型をする	イネ様フアン型を含有する	キビ型を含有	ヒゲシバ型を含有	タケ型を含有	ウシノケグサ型含有	イネ葉鞘様	弱珪化毛片	イボ状突起を有する片	組織	A1)	B2)	C3)		
D3w-1	54			57						2	6	36	14	14	75			258
	20.9			22.1						0.8	2.3	14.0	5.4	5.4	29.1			
D3w-2	43	3		61	4					3	7	22	42	12	30			227
	18.9	1.3		26.9	1.8					1.3	3.1	9.7	18.5	5.3	13.2			
E4a	160			15	5					1	9	3	1	5	11			210
	76.2			7.1	2.4					0.5	4.3	1.4	0.5	2.4	5.2			

1）小突起の連続する長辺を有する長細胞の集合体　2）平滑長辺を有する長細胞の集合体　3）その他

少ないが、ともにイネ型（イネ属を特徴づける）が最も多く認められ、その他に、試料1ではタケⅠ型（タケ亜科を特徴づけ、サケ属に多いタイプ）、試料2ではキビ型（キビ亜科を特徴づける）、ウシノケグサ型（イチゴツナギ亜科を特徴づける）が検出される。

珪化組織片群集：試料1では、穎組織片、葉部組織片ともに全てイネ（属）起源と推定されるもので占められ、また、イネ（属）の葉、葉鞘、稈に普遍的に存在する「イボ状突起を有する組織片」や「イネ（属）葉鞘様組織片」も認められる。試料2も試料1とほぼ同様の組成を示すが、「キビ、ヒエ、アワ穎様組織片」がわずかであるが検出される。

『E4－a土坑』

D3－w土坑の試料と同様に植物珪酸体群集、珪化組織片群集のいずれにおいても非イネ科植物起源と同定できるものは検出されないで、それらの大部分はイネ科起源と推定される。

植物珪酸体群集：非短細胞起源珪酸体の組成はファン型＞棒状型＞ポイント型で、ファン型ではII型が大半を占めその半数近くがイネ様のものと判定される。短細胞起源珪酸体の検出数は少ないが、イネ型、ウシノケグサ型、タケⅠ型が認められる。

珪化組織片群集：穎組織片、葉部組織片ともに全てイネ（属）起源と推定されるもので占められ、「イボ状突起を有する組織片」、「イネ（属）葉鞘様組織片」も検出され、D3w土坑の試料と大概同様な傾向を示す。ただ、穎組織片の占める割合が78%と高率なのが特徴といえ、D3

w土坑の試料状20%前後であるのに比べて明らかに大きい。

3．考　察

植物珪酸体は、土壌あるいは地表履歴を有する風化生成物には普遍的に含まれているので、本分析に用いた試料より検出された植物珪酸体が全て、燃焼植物残渣に由来するものとはいえない。それに対して、珪化組織片は、通常、土壌などの風化生成物から検出されることは稀であり、したがってそれらの大半は燃焼植物残渣に由来するものと考えられる。この様な考え方に立ち、以下で各試料の灰の給源を推定することにする。

いずれの試料の珪化組織片群集においても、イネ（属）由来と推定される組織片に極めて富み、イネ（属）以外の植物分類群に帰属できるものはD４－w土坑の試料２で「キビ・ヒエ・アワ穎様組織片」がわずかに検出されたにすぎない。したがって、灰はほとんどイネ（属）の藁、籾殻の燃焼残渣によって構成されていると考えられる。なお、E４－a土坑の試料は、先に述べたように穎組織片の検出率が高いことから、D３－w土坑の試料に比較して燃焼された植物体集合における籾殻の占有率が大きかったものと推定される。

いずれにしても、すべての灰試料が籾殻、稲藁と思われる燃焼残渣からなっていることは注目に値する。なぜなら、籾殻の灰（珪化穎組織片）のみならば、籾が他の地域から搬入された可能性が否定できないが、葉部や鞘、稈の珪化組織片など藁の燃焼残渣を含んでいることは、遺跡近辺で稲が栽培されていたことを示唆していると思われるからである。D３－w土坑、E４－a土坑ともに古代の土坑と推定され、特にD３－w土坑は平安時代の土師器を伴うことからその構築時期は平安時代と判断してほぼ間違いないので、本分析の結果は、久慈地方の稲作が少くとも平安時代までさかのぼることを示す。なお、当遺跡の南東方に位置する久慈市源道遺跡においても平安時代の土坑埋土に残存していた灰層が稲藁、籾殻の燃焼残渣であることが明らかにされている（佐瀬、1989）。

引用文献

佐瀬　隆（1989）：源道遺跡のM25土坑埋土に挟在する灰層の植物珪酸体分析・灰像分析・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集．源道遺跡発掘調査報告書．（財）岩手県文化振興事業団埋文化財センター．243—246．

佐瀬　隆・近藤錬三・井上克弘（1990）：岩手山麓における最近13,000年間の火山灰土壌の植生環境——分火山灰層の植物珪酸体分析——．ペドロジスト．34．15—30．

図版説明

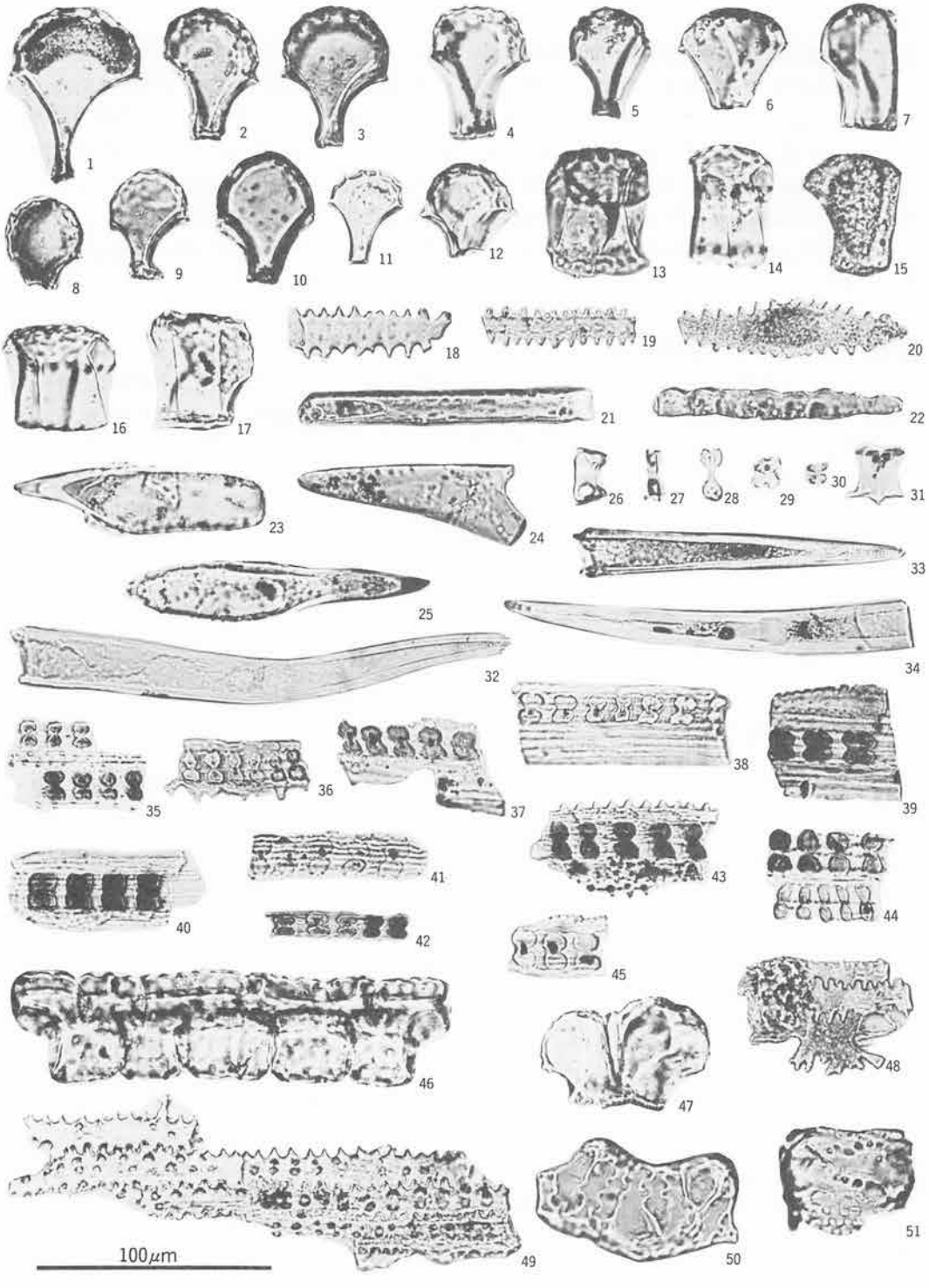
図版Ⅰ　植物珪酸体、珪化組織片の顕微鏡写真

1～14･16･17　ファンII型珪酸体（イネ様）、15　ファンII型珪酸体（非イネ様）、18～22　棒状型珪酸体、23～24　ポイント型珪酸体、26　タケⅠ型珪酸体（サケ属タイプ）、27･28　キビ型珪酸体、29･30　イネ型珪酸体、31　未分類短細胞起源珪酸体、32～34　弱珪化毛片、35～45　イネ型珪酸体を有する珪化葉部組織片、46･47　ファンII型珪酸体（イネ楽）の集合片（表1－bの基本組織片Cとして計測）、48･49　棒状珪酸体の集合片（表1－bの基本組織片Cとして計測）、50･51　イネ穎様組織片

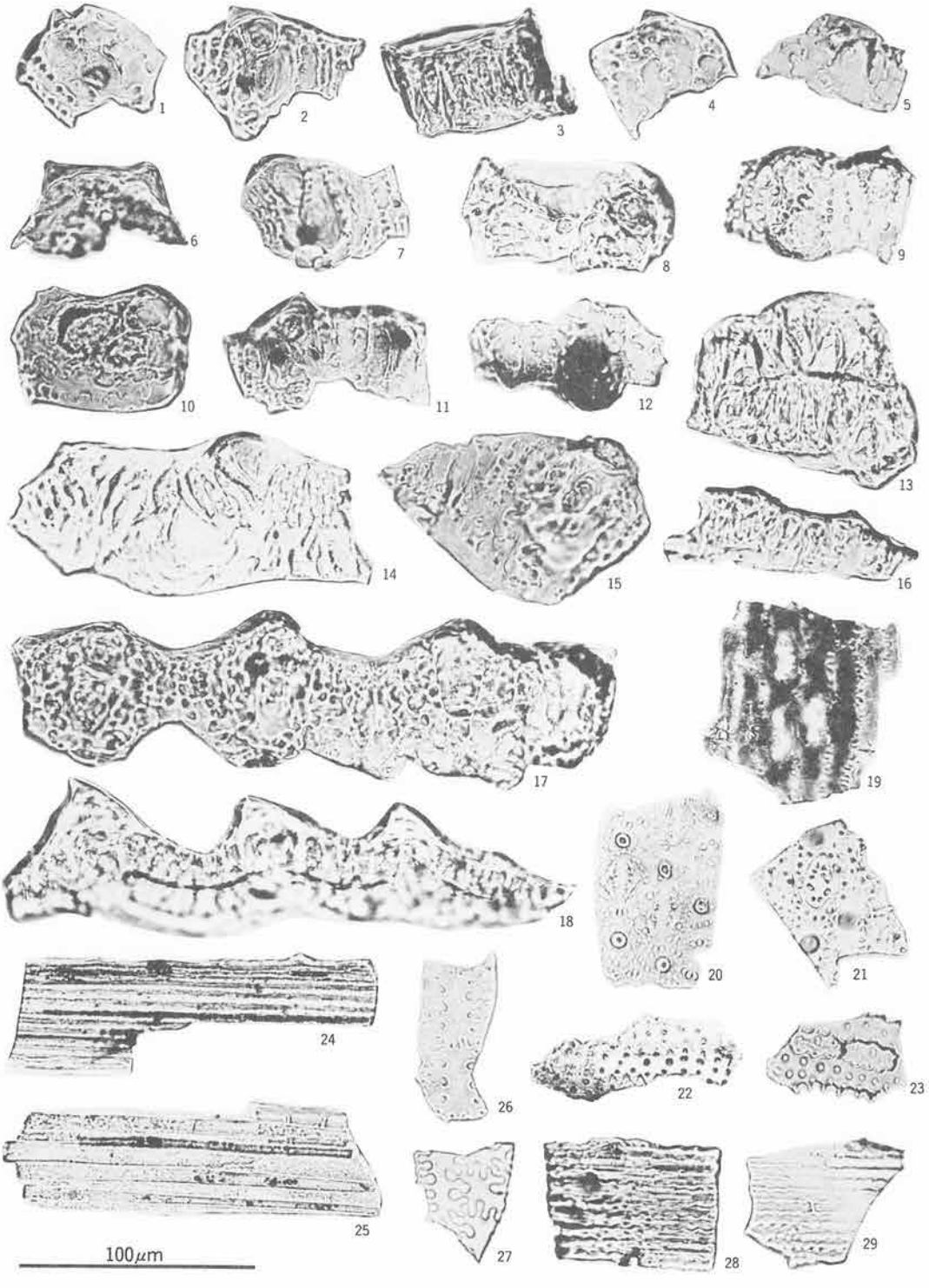
6・7・10･12･17･18･20･25-27･35･42･45･46　B3w土坑試料1より分離、1・2・4・5・9・16･19･23･28･31･33･37･38･40･41･43･44･49･50･51　B3w土坑試料2より分離、3・8・11･13-15･21･22･24･29･30･32･34･36･39･47･48　E4a土坑試料より分離

図版II　珪化組織片の顕微鏡写真

1～18　イネ様穎組織片、19～21　イネ葉鞘　珪化組織片、22･23　イボ状突起を有する珪化組織片、24･25　基本組織片、26･27　キビ・ヒエ・アワ穎様組織片、28･29　基本組織片A　12･13･16･20　28　B3w土坑試料1より分離、8-11･15･19･23･26･27･29　B3w土坑試料2より分離、1-7・14･17･18･25　E4a土坑試料より分離。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
100μm

図版 I


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
100μm

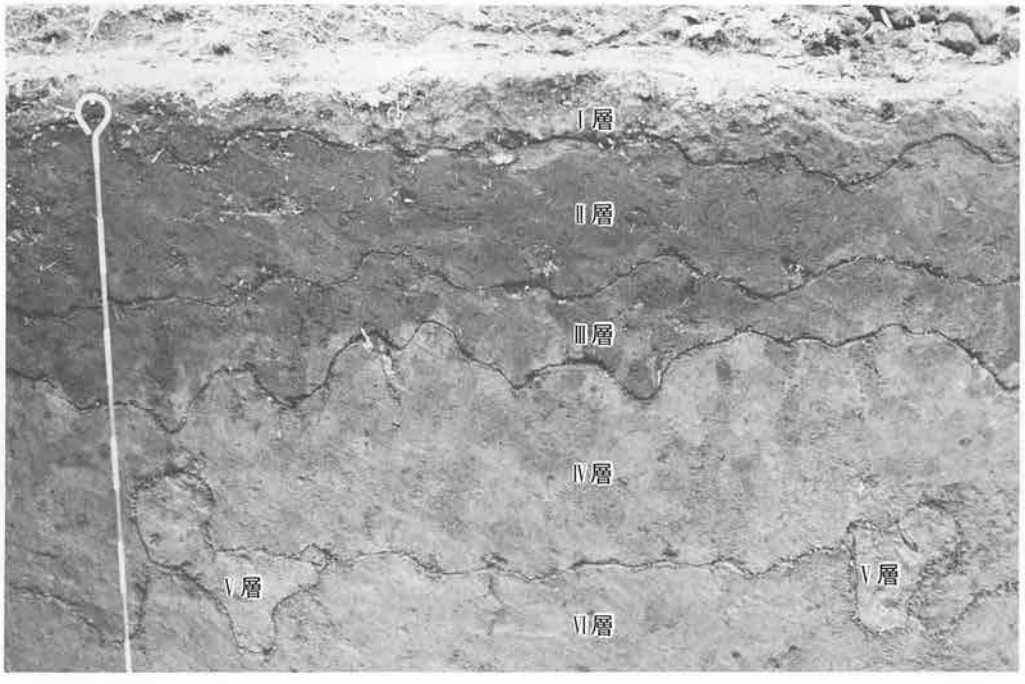
図版II

写　真　図　版

立地状況

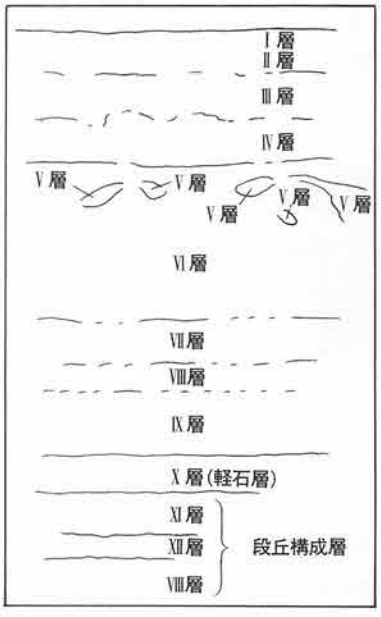
遺跡遠景

図版 1　遺跡遠景ほか



基本土層①

基本土層②（深掘）



図版 2　基本土層

B4-d-2　陥し穴

埋土

B4-d-1　陥し穴

埋土

B4-e　陥し穴

埋土

C3-u　陥し穴

埋土

C3-x　陥し穴

埋土

図版3　陥し穴状遺構(1)

図版 4　陥し穴状遺構(2)

E4-b　陥し穴

D4-t-3　陥し穴

D4-t-2　陥し穴

D4-t-1　陥し穴

D4-e　陥し穴

埋　土

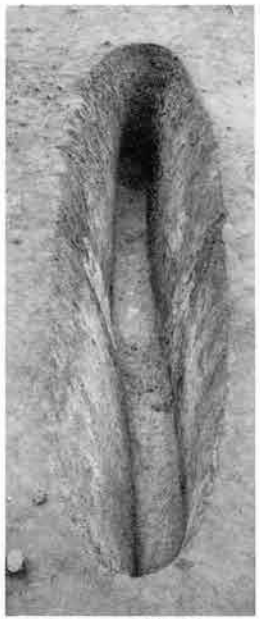
埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

図版 6　陥し穴状遺構(4)


G3-j　陥し穴

G2-d　陥し穴

F4-b　陥し穴

F4-f　陥し穴

F3-y　陥し穴

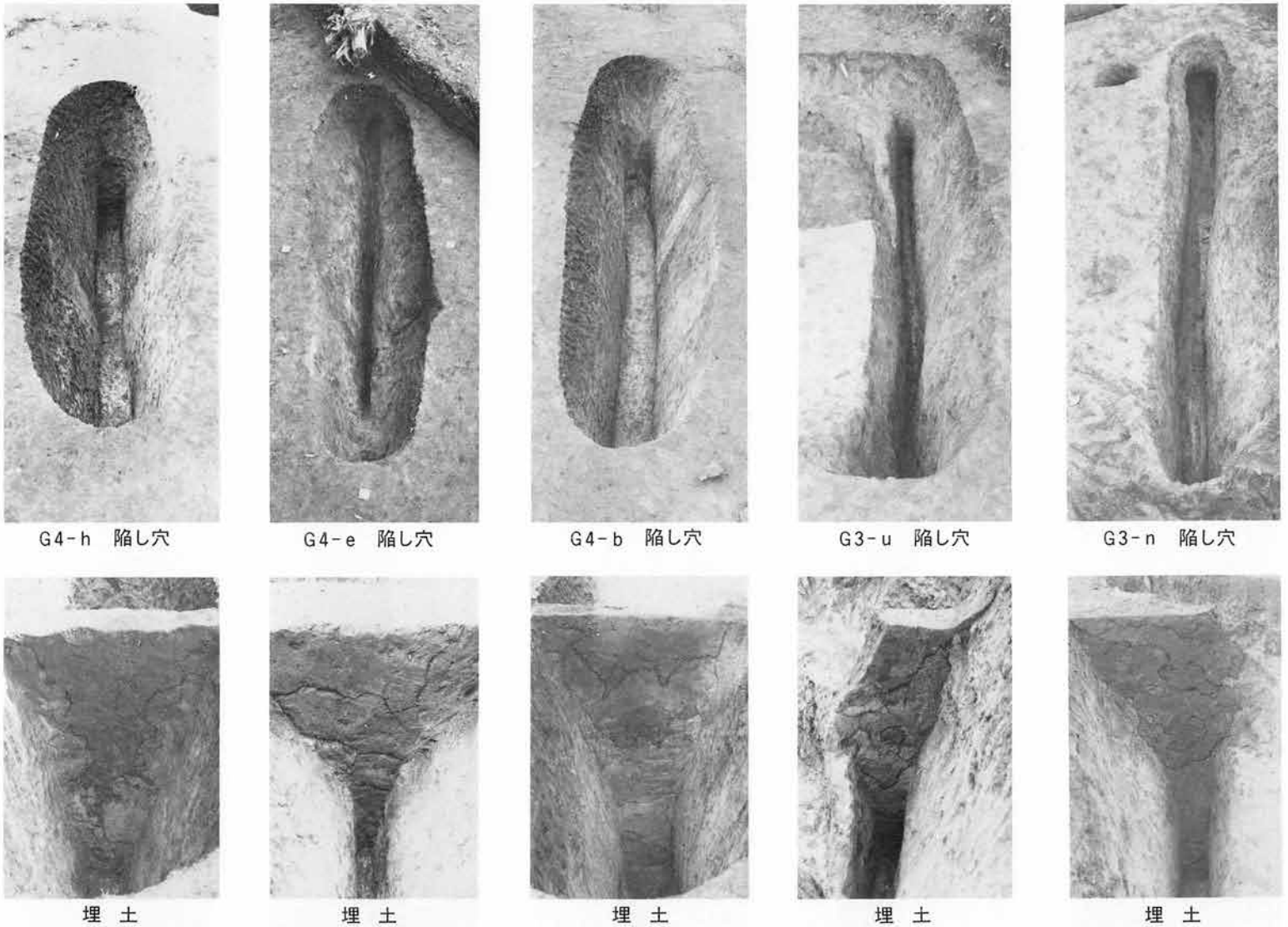
埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

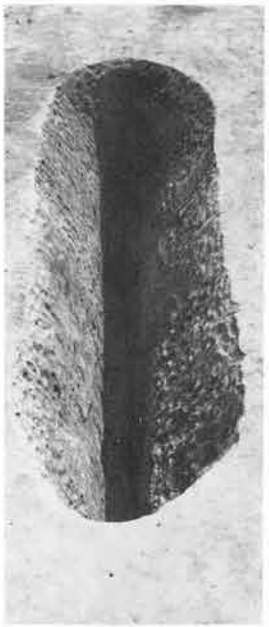
埋　土



図版 8 陥し穴状遺構(6)

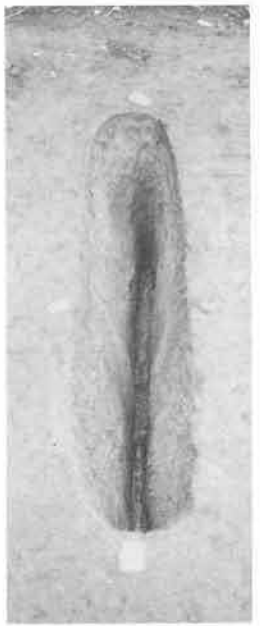
図版 9　陥し穴状遺構(7)

H3-m　陥し穴


H3-b　陥し穴

H3-a　陥し穴

H2-u　陥し穴


K4-c　陥し穴

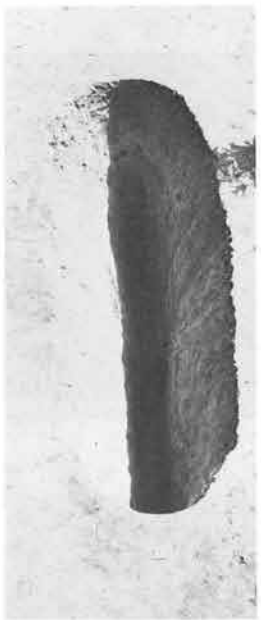
埋　土

埋　土

埋　土

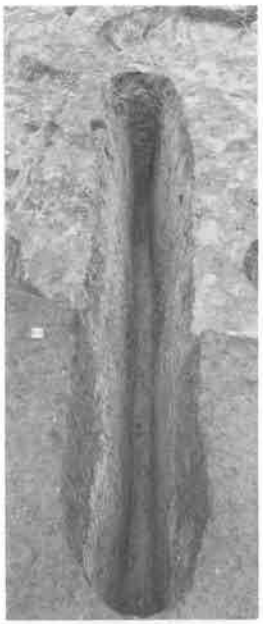
埋　土

埋　土



H4-b　陥し穴

H3-u-1　陥し穴



H3-u-2　陥し穴

H3-r　陥し穴

H3-p　陥し穴

埋　土

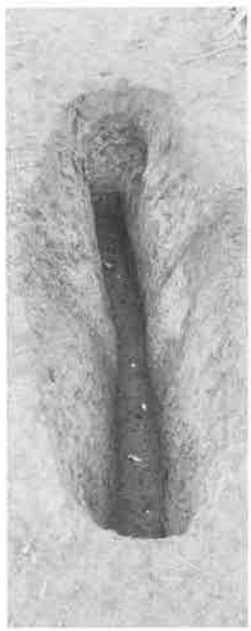
埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

図版11　陥し穴状遺構(9)



I4-n　陥し穴

I4-q　陥し穴

I4-d　陥し穴

I3-s　陥し穴

H4-I　陥し穴

埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

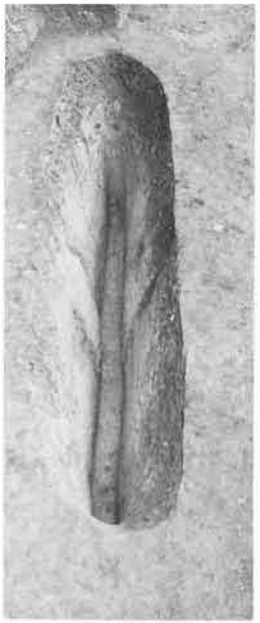
埋　土

図版12　陥し穴状遺構(10)

J4-f　陥し穴

J4-g　(西)

J4-e-3　陥し穴


J3-t　陥し穴

J3-p　陥し穴

埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

K3-q　陥し穴

K3-p-2　陥し穴

J4-k-2　陥し穴

J4-K-1　陥し穴

J4-g

埋　土

埋　土

埋　土

埋　土

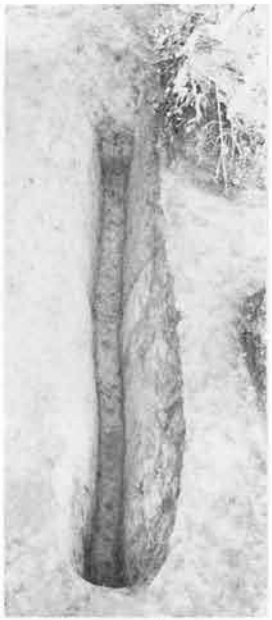
埋　土

H3-j溝

埋　土

埋　土

K4-b　陥し穴



K3-w　陥し穴

埋　土

K3-u　陥し穴

埋　土

B4－j－1　陥し穴

B4－j－1　陥し穴埋土

B4－j－2　陥し穴埋土

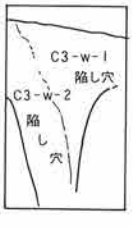
B4－j－2　陥し穴

B4－j－1＆2の切り合い

C3－w－1　陥し穴

C3－w－1＆2の切り合い

C3－w－2陥し穴埋土



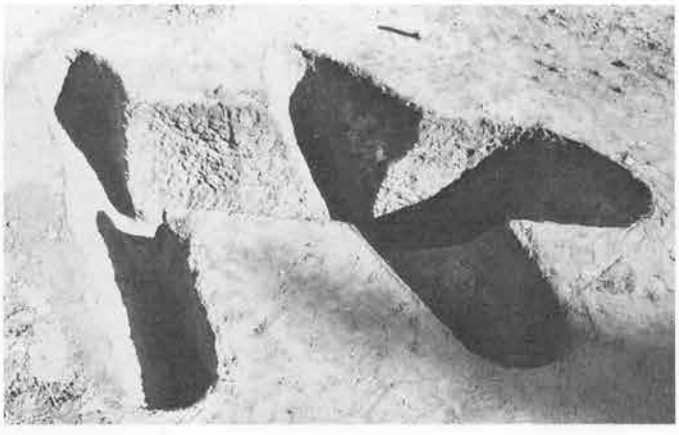
C3－w－2陥し穴

図版16　陥し穴状遺構(14)

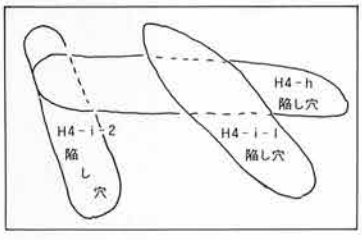
H4－i－1　陥し穴

H4－i－2　陥し穴

H4－h　陥し穴



H4－h　陥し穴埋土



図版17　陥し穴状遺構(15)

J4-I-1　陥し穴

J4-I-2　陥し穴

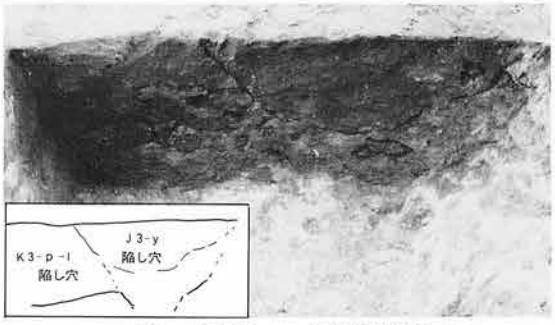
J4-I-1 & 2の切り合い

J3-y 陥し穴埋土

K3-p-I 陥し穴埋土

J3-y陥し穴

K3-p-I 陥し穴

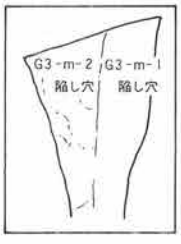


J3-yとK3-p-Iの切り合い

図版18　陥し穴状遺構(16)

G3-m-2　陥し穴

G3-m-1＆2の切り合い



G3-m-1陥し穴埋土

G3-m-1陥し穴

H2-t　陥し穴

H2-t　陥し穴　検出状況

H2-t　陥し穴埋土

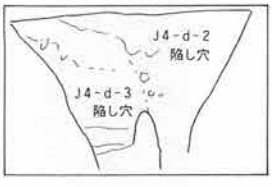
図版19　陥し穴状遺構(17)

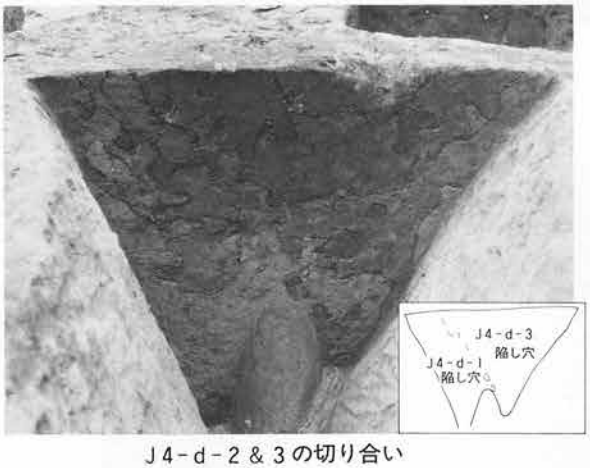
J4-d-1　陥し穴

J4-d-2　陥し穴

J4-d-3　陥し穴

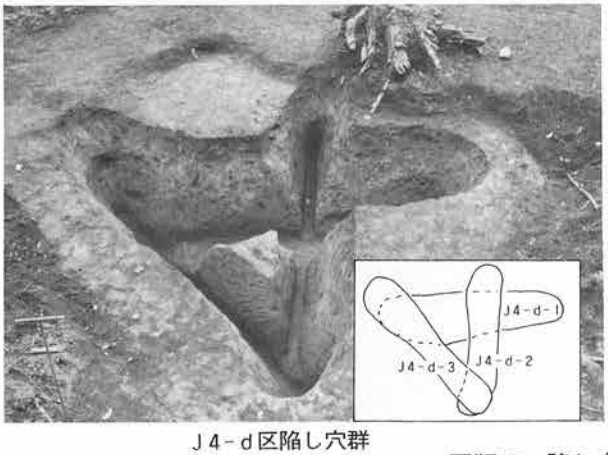
J4-d-2　陥し穴埋土



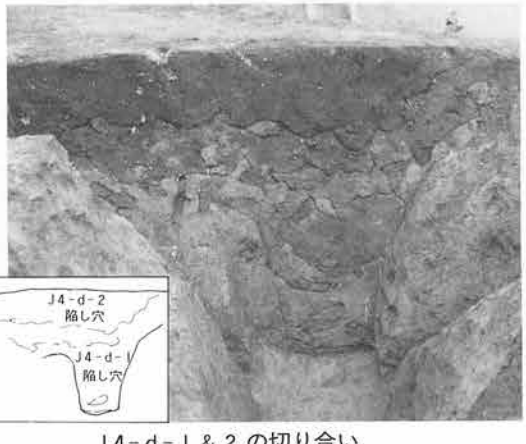


J4-d-2＆3の切り合い

J4-d-1＆3の切り合い



J4-d区陥し穴群



J4-d-1＆2の切り合い

図版20　陥し穴状遺構(18)

J4-e-2　陥し穴

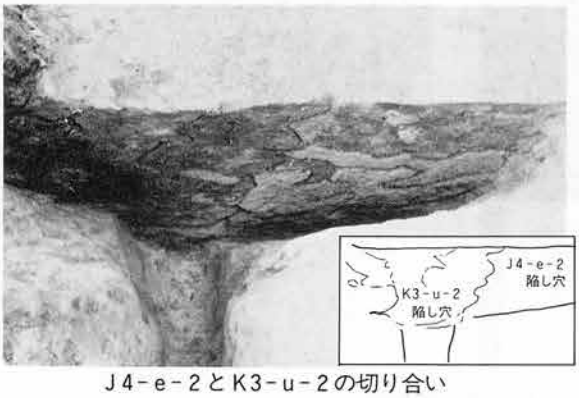
K3-u-2　陥し穴

J4-e-1　陥し穴

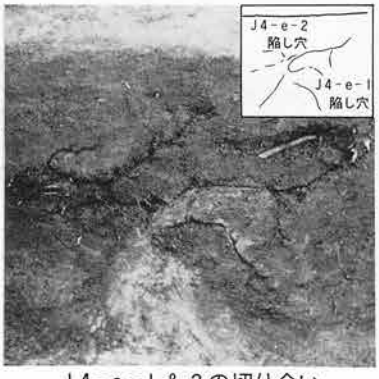
J4-e-2陥し穴埋土

K3-u-2陥し穴埋土

J4-e-1陥し穴埋土



J4-e-2とK3-u-2の切り合い



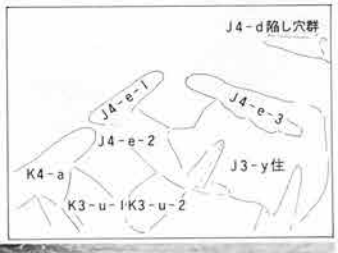
J4-e-1＆2の切り合い

図版21　陥し穴状遺構(19)

K3-u-l　陥し穴

K4-a　陥し穴

K4-a　陥し穴埋土



J3-y住付近の陥し穴群

図版22　陥し穴状遺構(20)

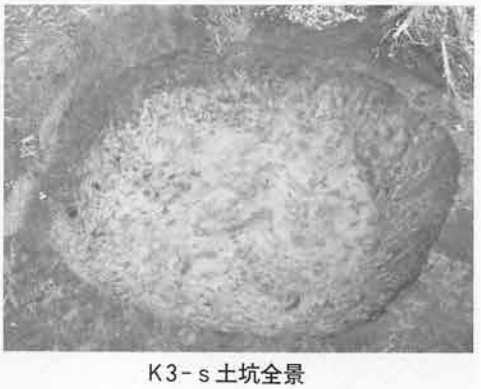
G4-g土坑全景

H2-g土坑全景

G4-g土坑埋土

H2-g土坑埋土

J4-b土坑全景



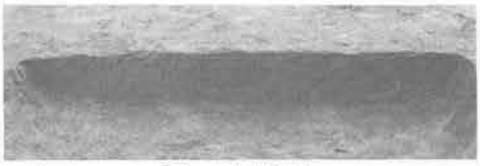
K3-s土坑全景

J4-b土坑埋土

K3-s土坑埋土

図版23　土坑(1)

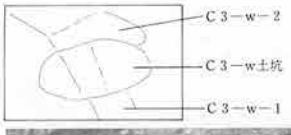
C3-w土坑全景

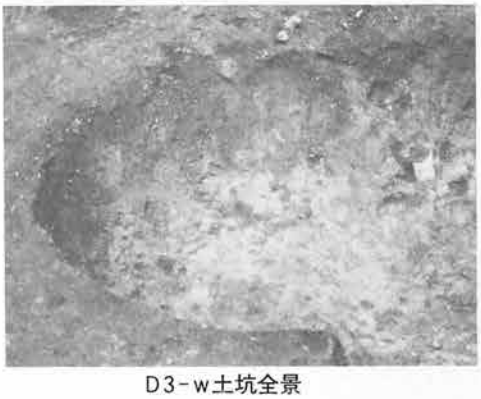


C3-w土坑埋土

C3-w土坑とC3-w陥し穴1＆2

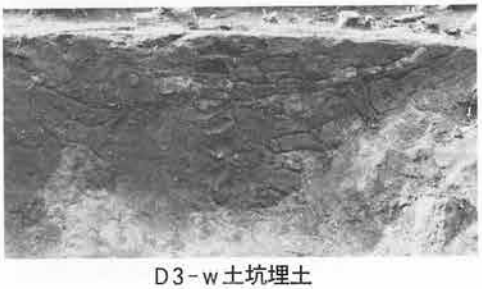
C3-w土坑埋土





D3-w土坑全景

D3-w土坑埋土



D3-w土坑埋土

D3-w土坑埋土に狭在する灰層

図版24　土坑(2)

K4－a 土坑全景

L3－u 土坑全景

K4－a 土坑埋土

L3－u 土坑埋土

E4－a 土坑全景

E4－f 土坑全景

E4－a 土坑埋土

F4－f 土坑埋土

図版25　土坑(3)

E3-u 焼土全景

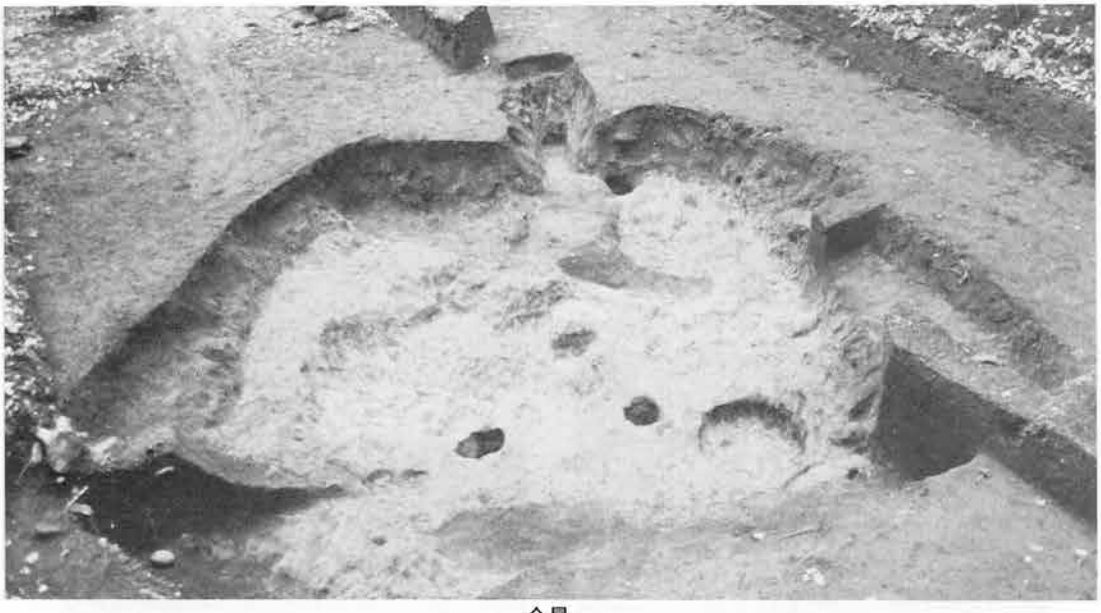
E3-u 焼土断面

E3-u 土坑全景

F3-u 土坑全景

F3-u 土坑埋土

図版26　土坑(4)・焼土

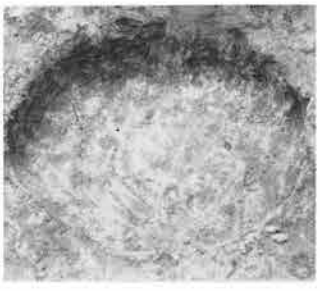


全景

土層断面

煙道部横断面

煙道部全景

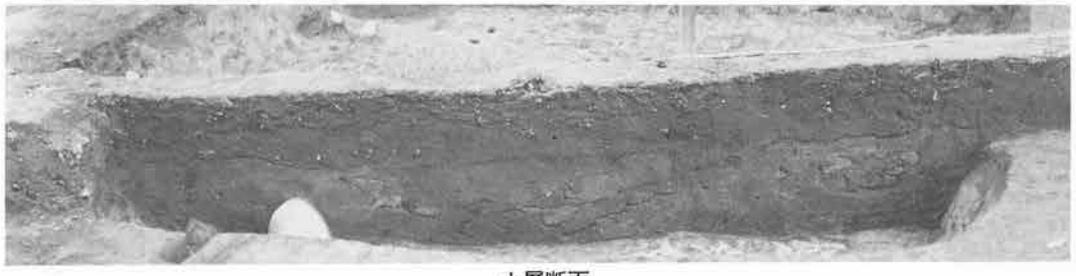


Pit 1 全景

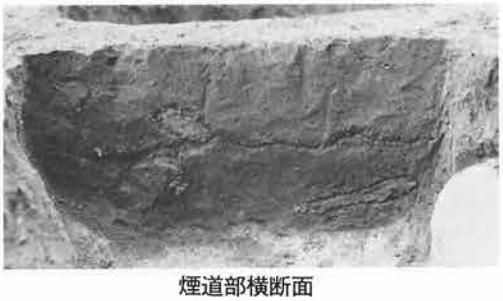
燃焼部焼土断面

図版27　B 4 — d 住居跡

全景



土層断面



煙道部横断面

カマド全景

Pit 1 土層断面

煙道部土層断面

図版28　C 3 ― y 住居跡

全景

土層断面

Pit 1 土層断面

カマド全景

Pit 2 土層断面

煙道部土層断面

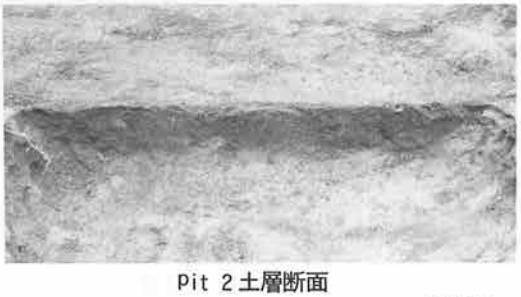
図版29　D 3 — v 住居跡

全景

土層断面

Pit 1 土層断面

カマド全景

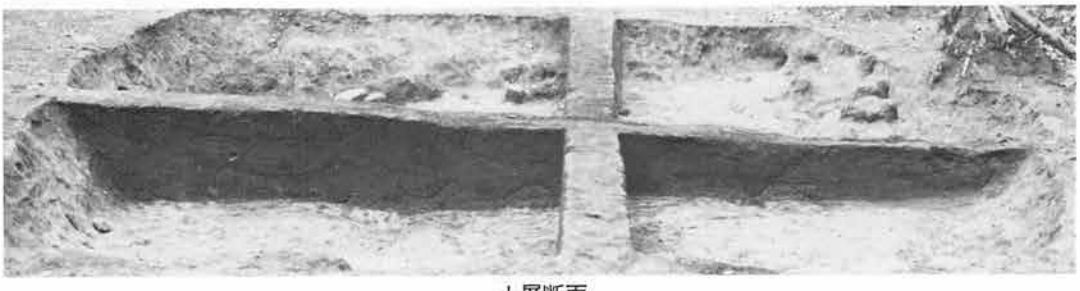


Pit 2 土層断面

煙道部土層断面

図版30　D 4 — c 住居跡

全景



土層断面

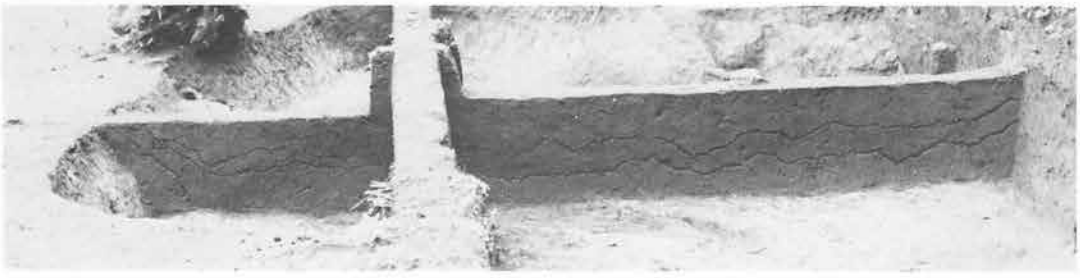
煙道部截ち割り

Pit 1 土層断面

カマド全景

図版31　D 4 — t 住居跡

全景



土層断面

Pit 1 全景

1号カマド全景

3号カマド全景

2号カマド全景

1号カマド土層断面

図版32　E 3 — u 住居跡

全景

土層断面

1号カマド煙道部土層断面

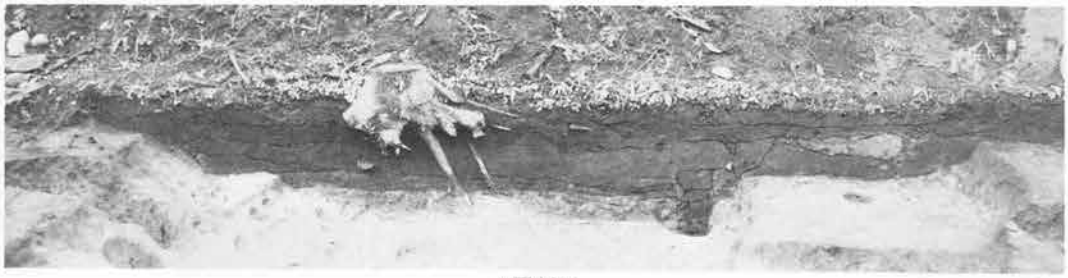
2号カマド煙道部土層断面

1号カマド全景

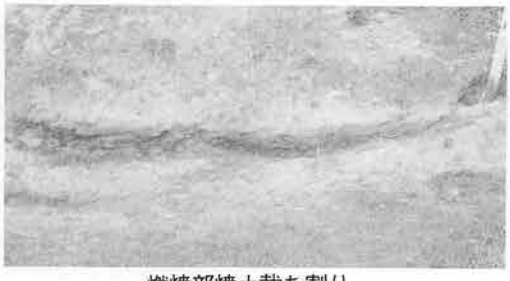
2号カマド全景

図版33　E 3 — v 住居跡

全景



土層断面



燃焼部焼土截ち割り

カマド全景

柱穴土層断面

煙道部土層断面

図版34　E 3 — y — 1 住居跡

全景

土層断面

カマド袖部截ち割り

カマド全景

柱穴土層断面

煙道部土層断面

図版35　E 3 — y — 2 住居跡

全景

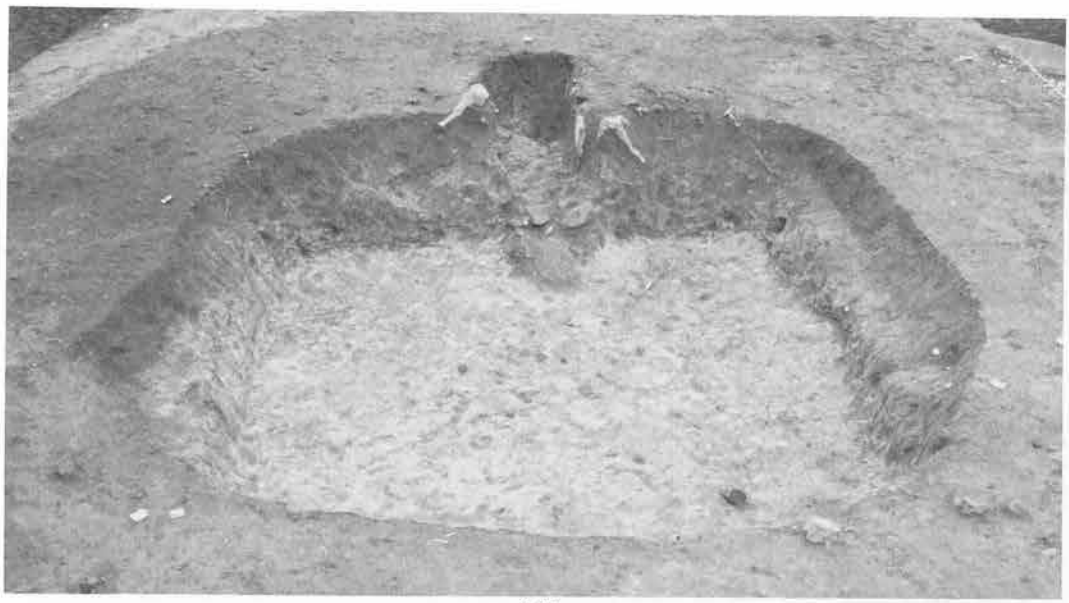
土層断面

煙道部土層断面

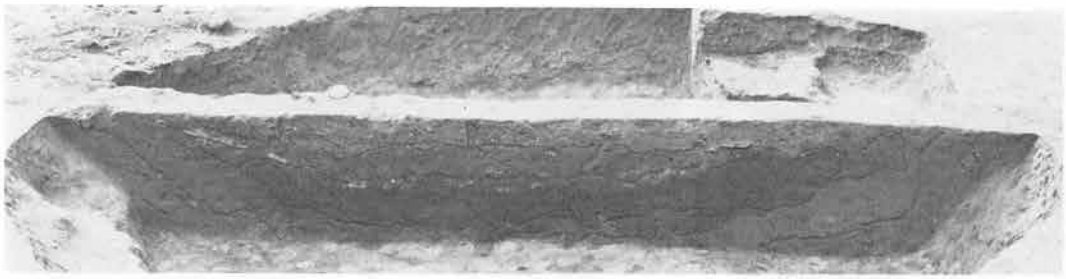
土器出土状況

カマド全景

図版36　Ｅ４－ｄ住居跡



全景



土層断面

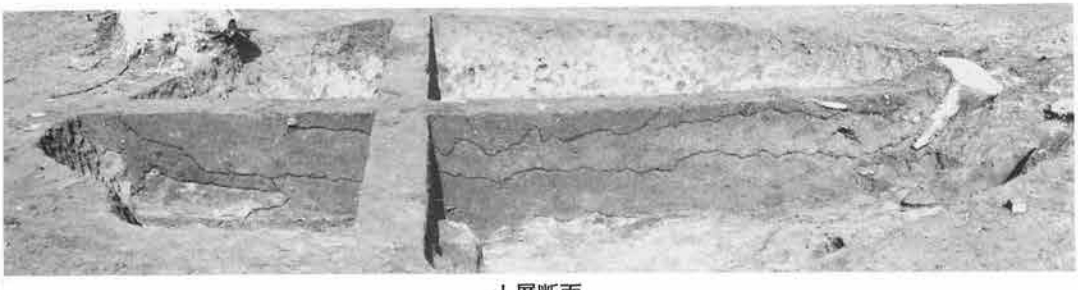
煙道部土層断面

土器出土状況

カマド全景

図版37　E 4 — g 住居跡

全景



土層断面

土器出土状況

ロクロピット

カマド土層断面

カマド全景

図版38　E 4 — h 住居跡

全景

土層断面

1号・2号カマド全景

3号カマド全景

1号カマド全景

1号カマド煙道部横断面

鉄製品出土状況

図版39　E 4 — I 住居跡

全景

土層断面

2号カマド全景

1号カマド全景

炭化したカヤ材

炭化材出土状況

鉄製紡錘車出土状況

図版40　F 3 — u 住居跡

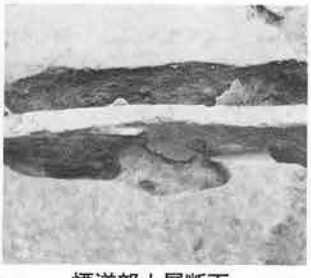
全景

土層断面

炭化材出土状況

カマド全景

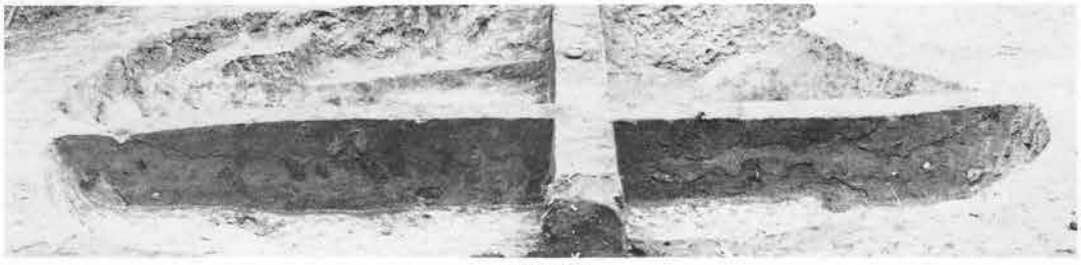
土器出土状況



煙道部土層断面

図版41　G３－m住居跡

全景

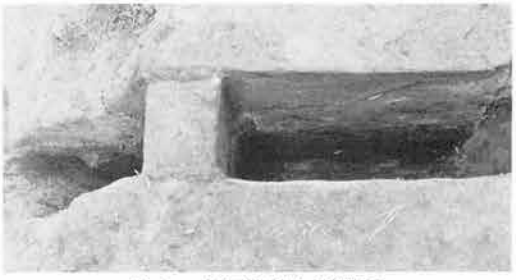


土層断面

3号カマド全景

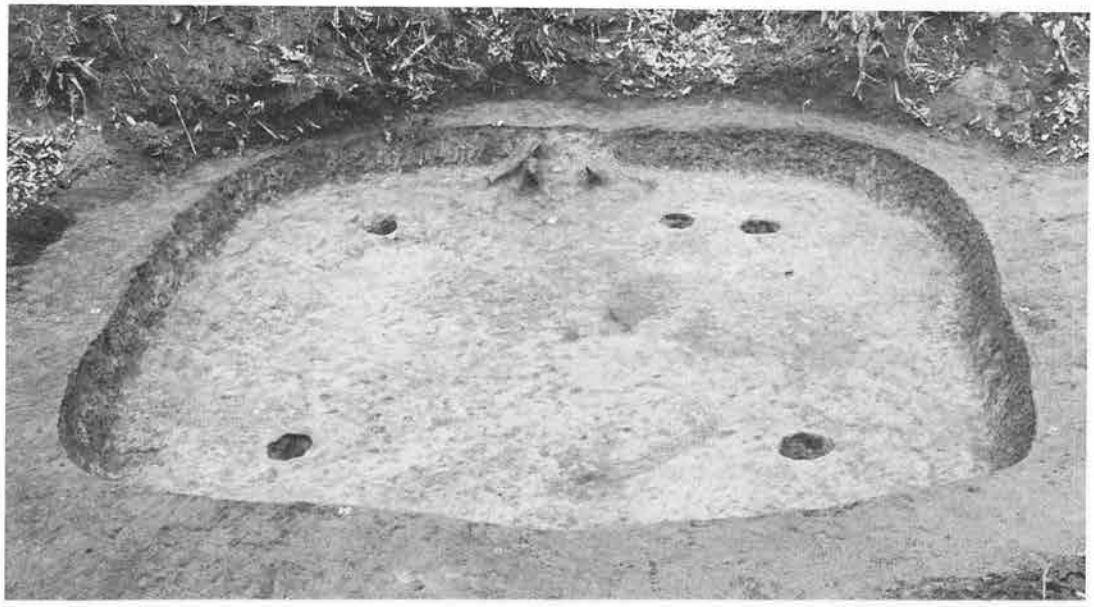
1号・2号カマド全景

Pit 1 土層断面

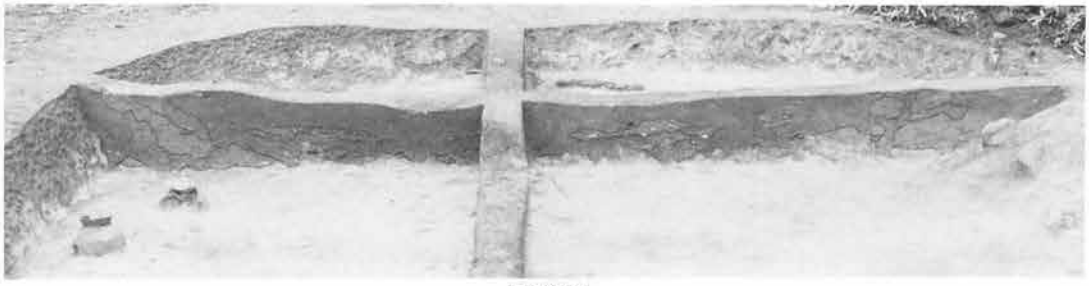


1号カマド煙道部土層断面

図版42　G 3 — u 住居跡



全景



土層断面

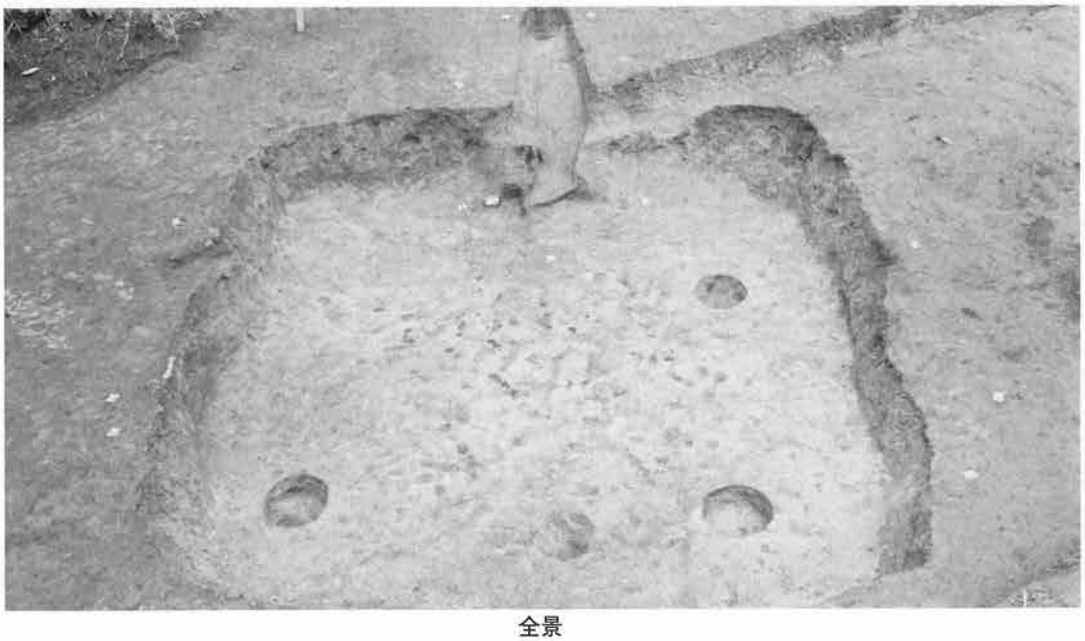
煙道部土層断面

カマド袖部截ち割り

柱穴土層断面

土器出土状況

図版43　H２－m住居跡



全景

土層断面

煙道部土層断面

土器出土状況

燃焼部焼土断面

カマド全景

図版44　H３－ｉ住居跡

全景

土層断面

1号カマド煙道部土層断面

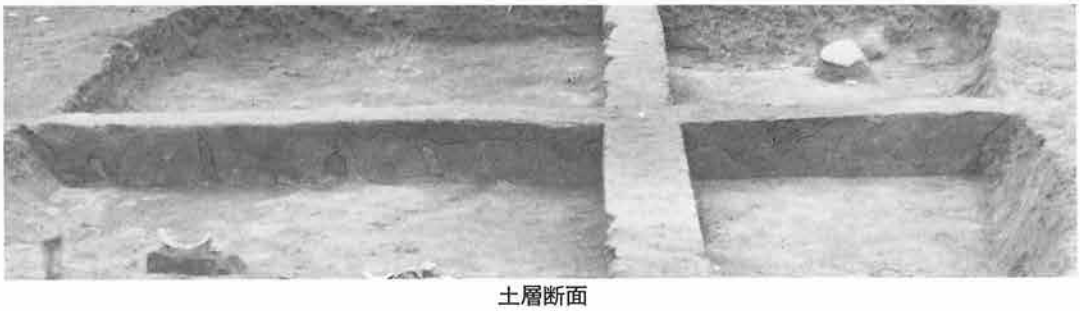
1号カマド全景

2号カマド煙道部横断面

土器出土状況

図版45　H 3 — I 住居跡

全景



土層断面

土器出土状況

煙道部土層断面

Pit 1 全景

焼土截ち割り

図版46　H 3 — v 住居跡

全景

土層断面

土器出土状況

カマド全景

Pit 1 全景

燃焼部焼土断面

図版47　I 3 — t 住居跡

全景

土層断面

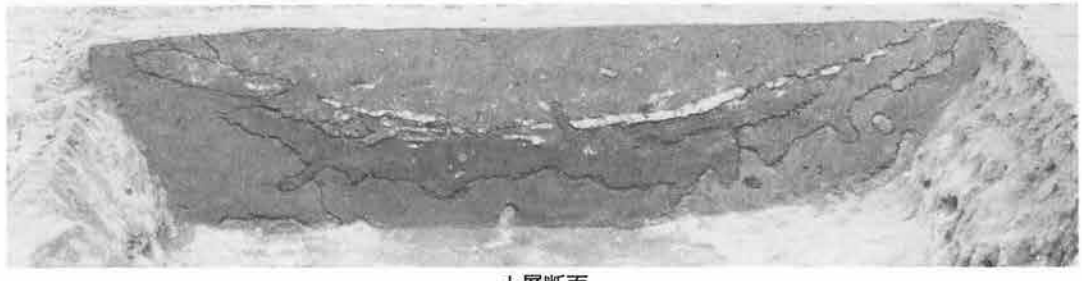
カマド袖部截ち割り

土器出土状況

カマド全景

図版48　Ｊ３－ｙ住居跡

全景



土層断面

作業風景

図版49　Ｆ４－ａ住居跡状遺構ほか

1

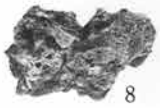
2

1・2　B4—d住居跡

3

3　C3—y住居跡

7


8

7・8　D4—t住居跡

11

12

13

14

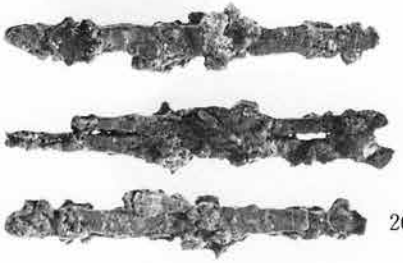
15

16

17

25

24

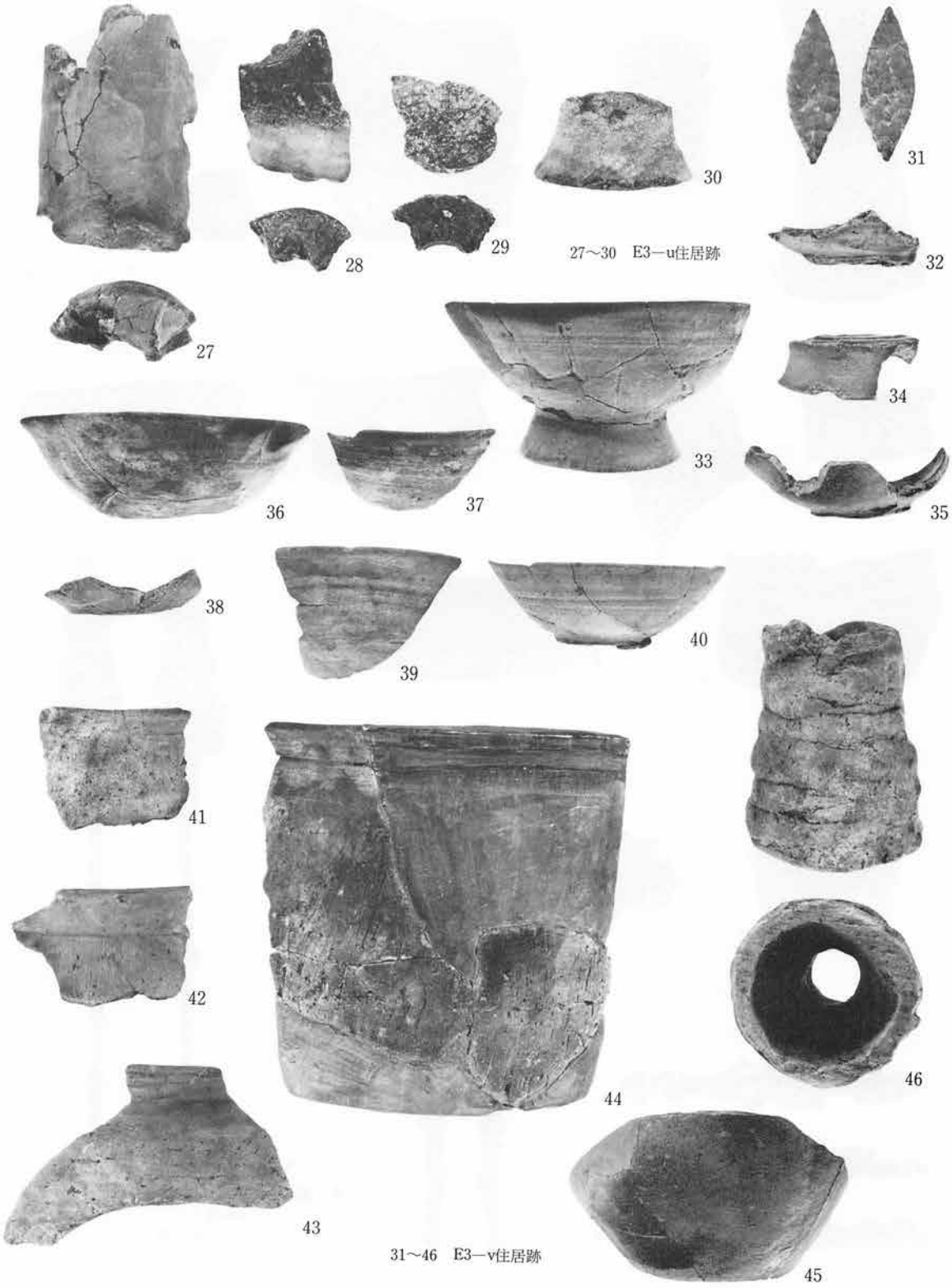

26

23

琥珀
(E3—u住居跡)

11～26　E3—u住居跡

図版50　B 4—d 住居跡・C 3—y 住居跡・D 4—t 住居跡・E 3—u 住居跡(1)



図版51　E 3－u 住居跡(2)・E 3－v 住居跡

47

47　E3—y—1住居跡

48

48・50　E3—y—2住居跡

50

53

51

52

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

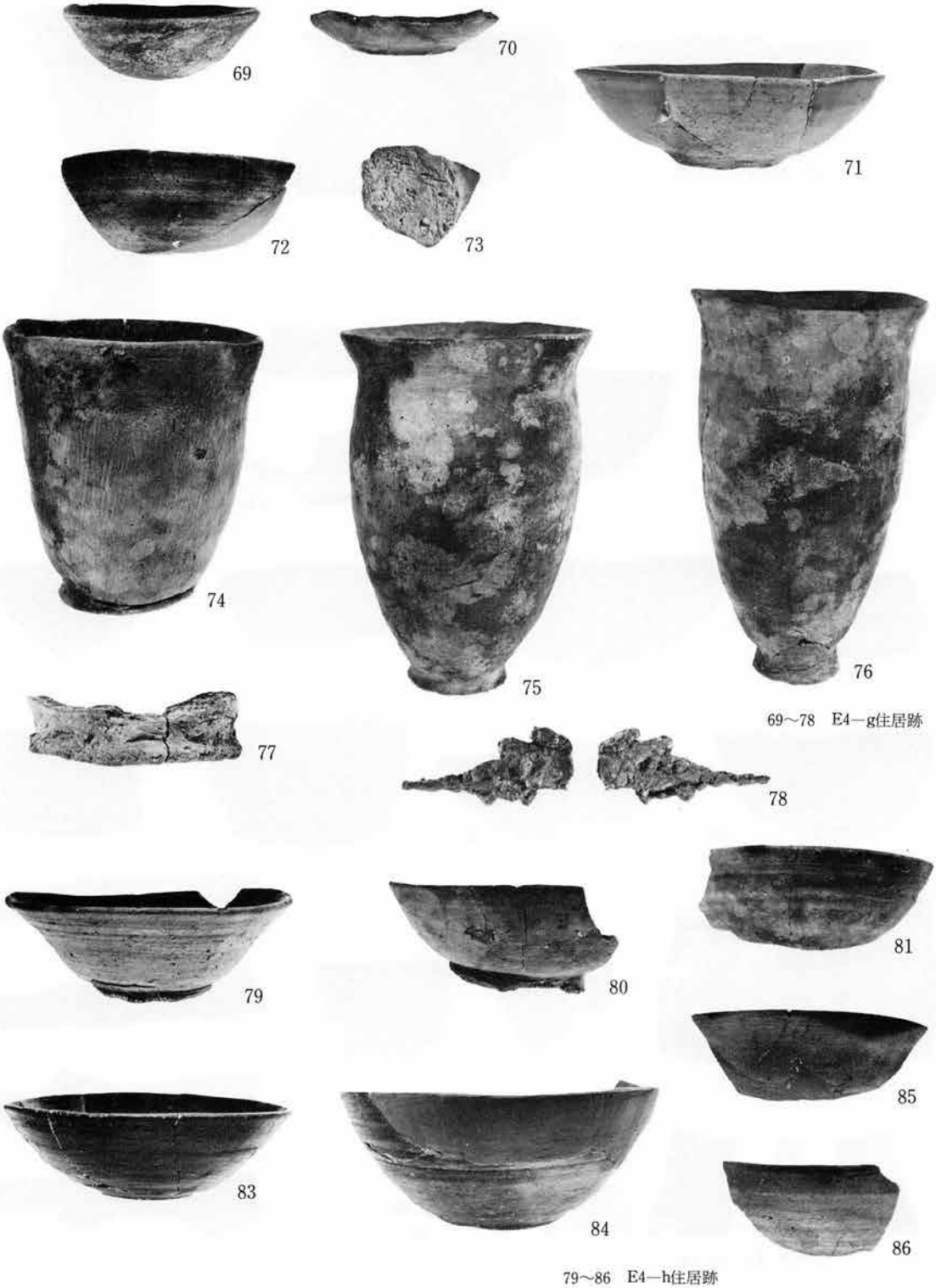
67

68

51～68　E4—d住居跡

琥珀
(E4—d住居跡)

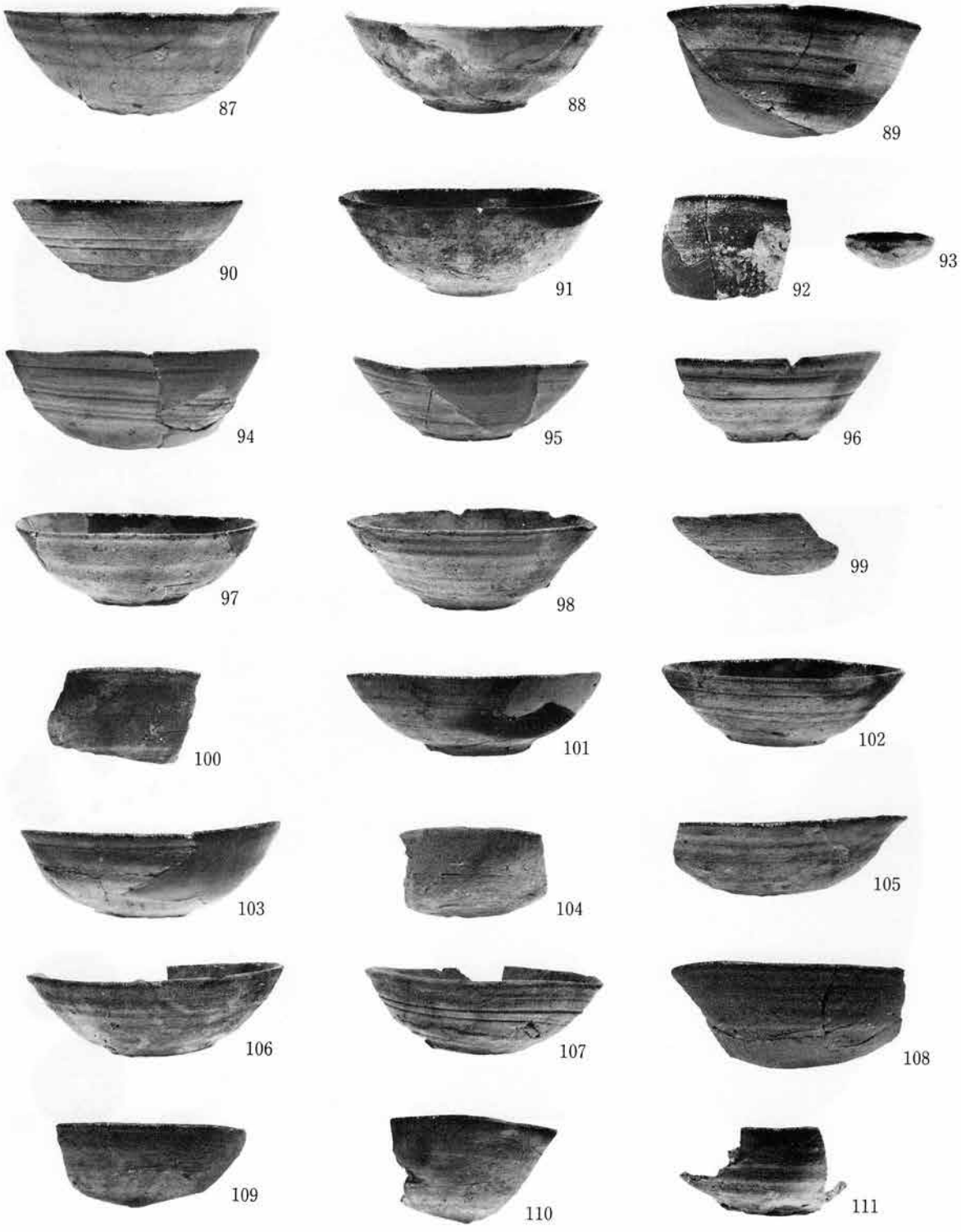
図版52　E 3—y —1住居跡・E 3—y —2住居跡・E 4—d 住居跡



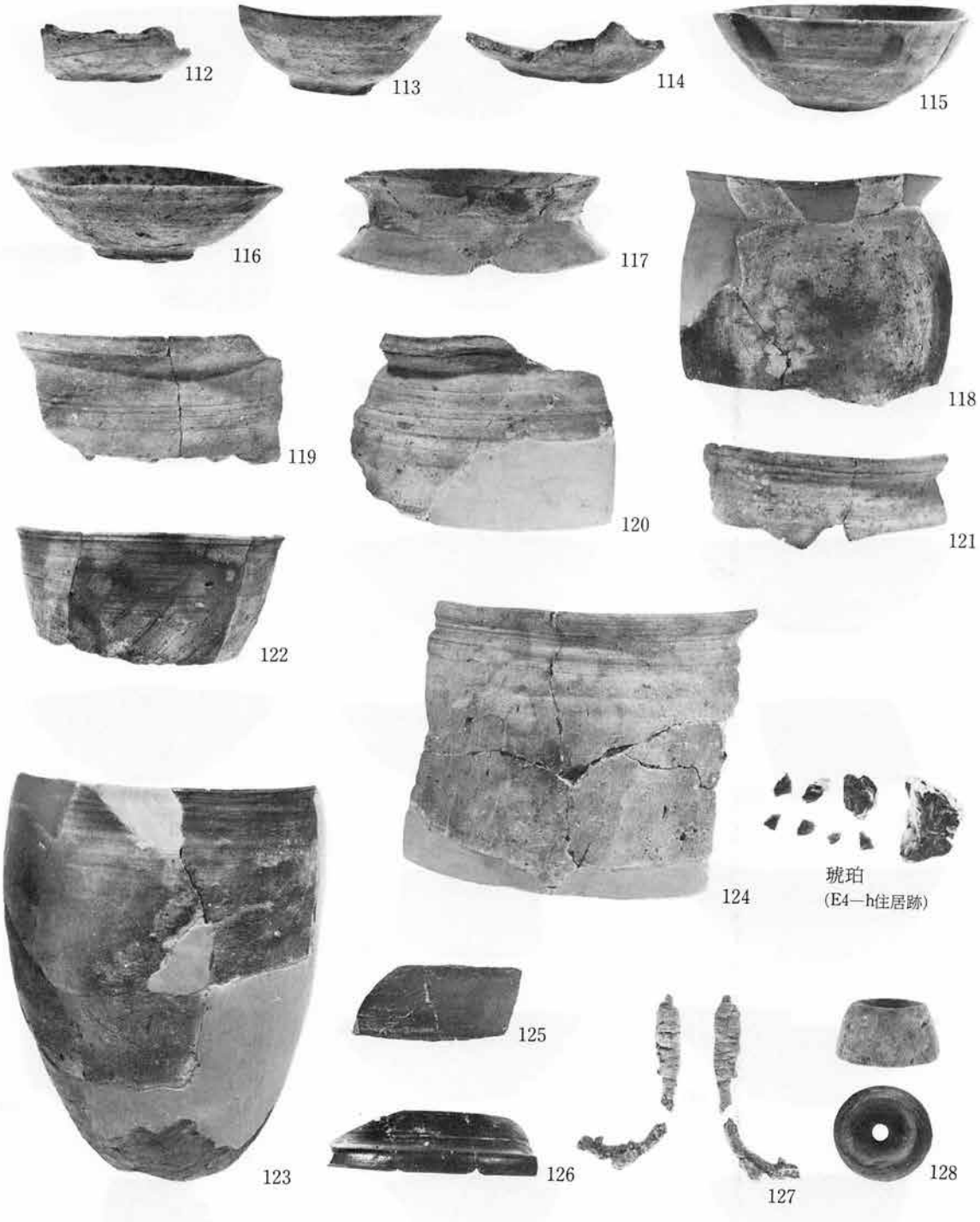
69～78　E4—g住居跡

79～86　E4—h住居跡

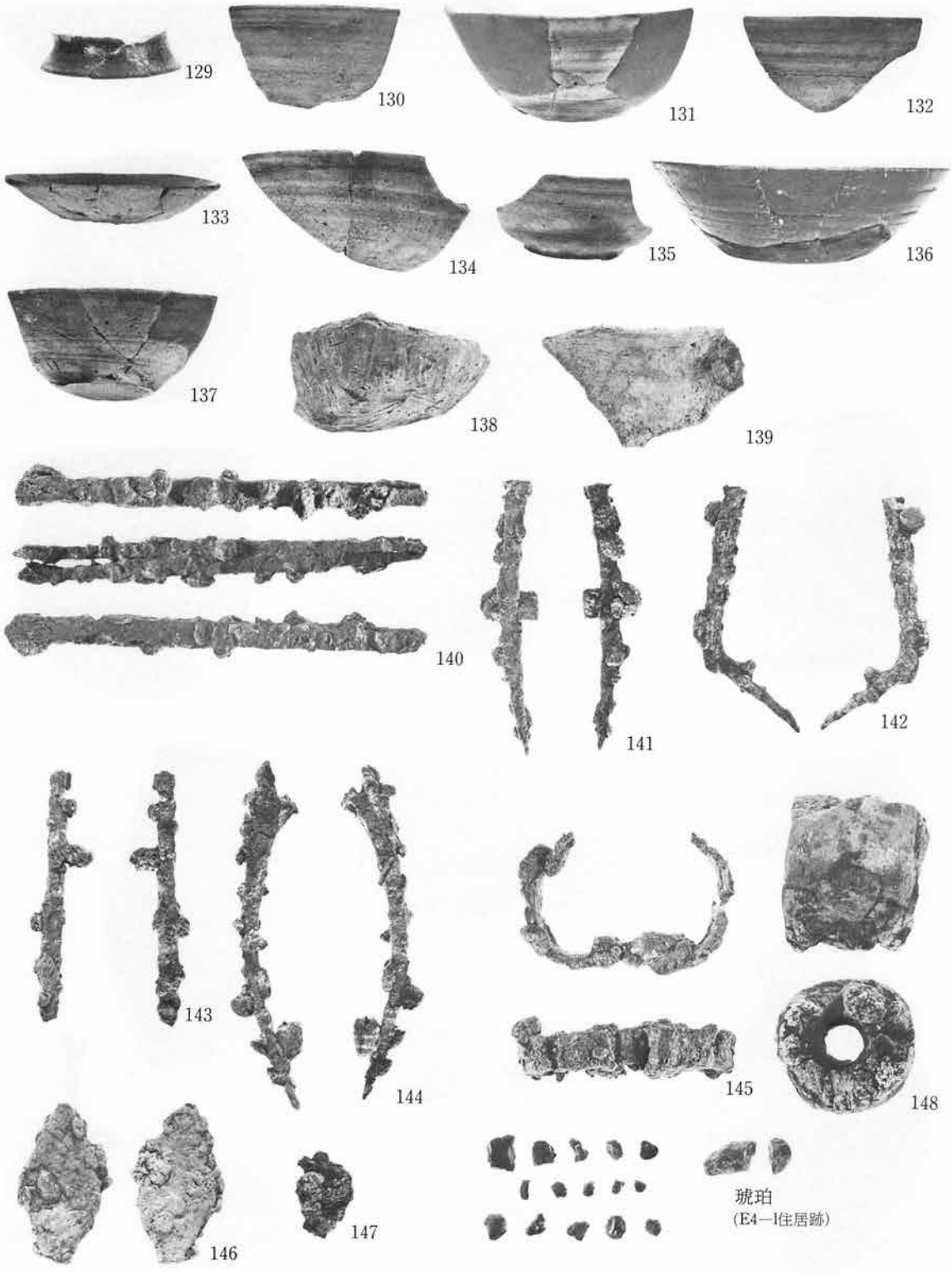
図版53　E 4—g 住居跡・E 4—h 住居跡(1)



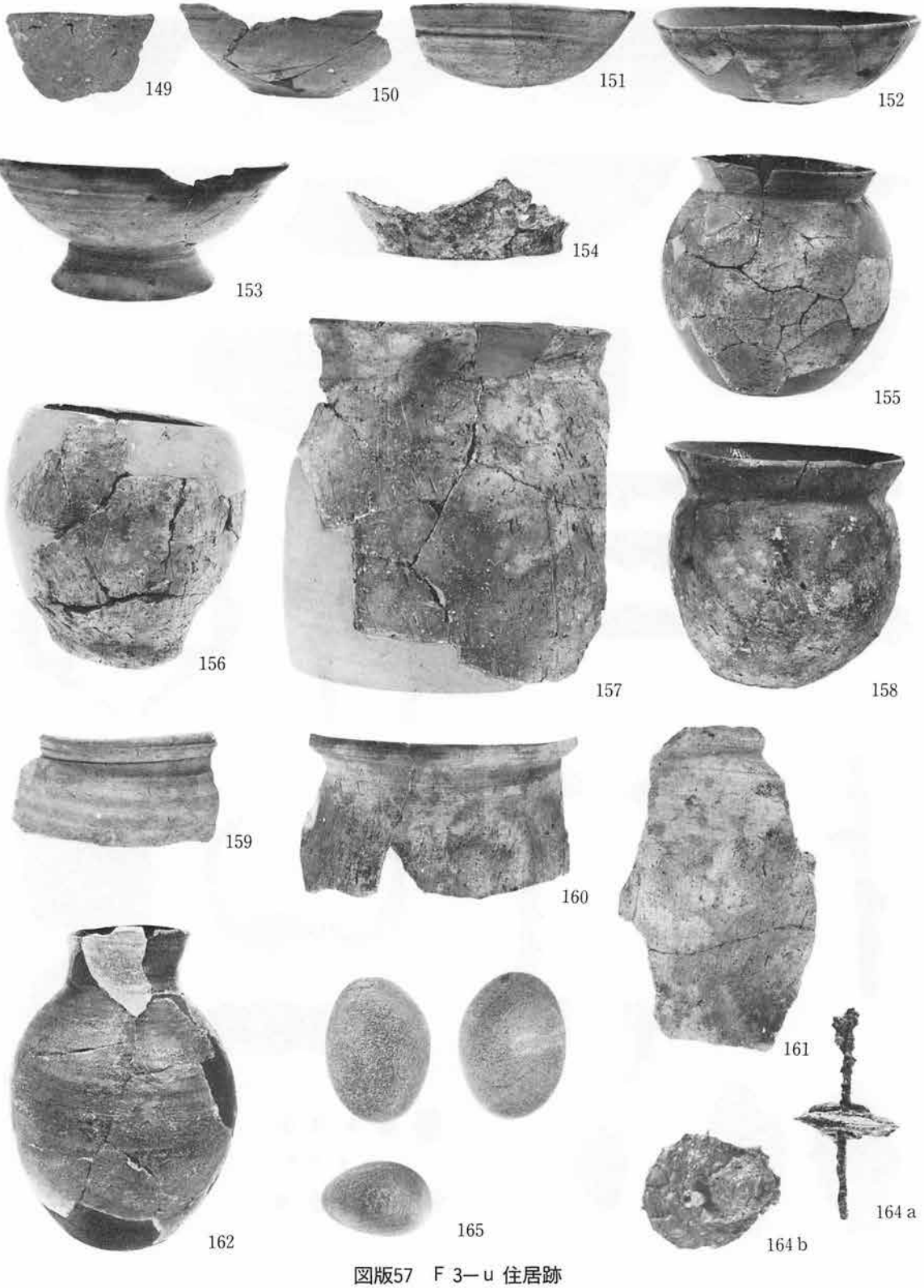
図版54　E 4—h 住居跡(2)



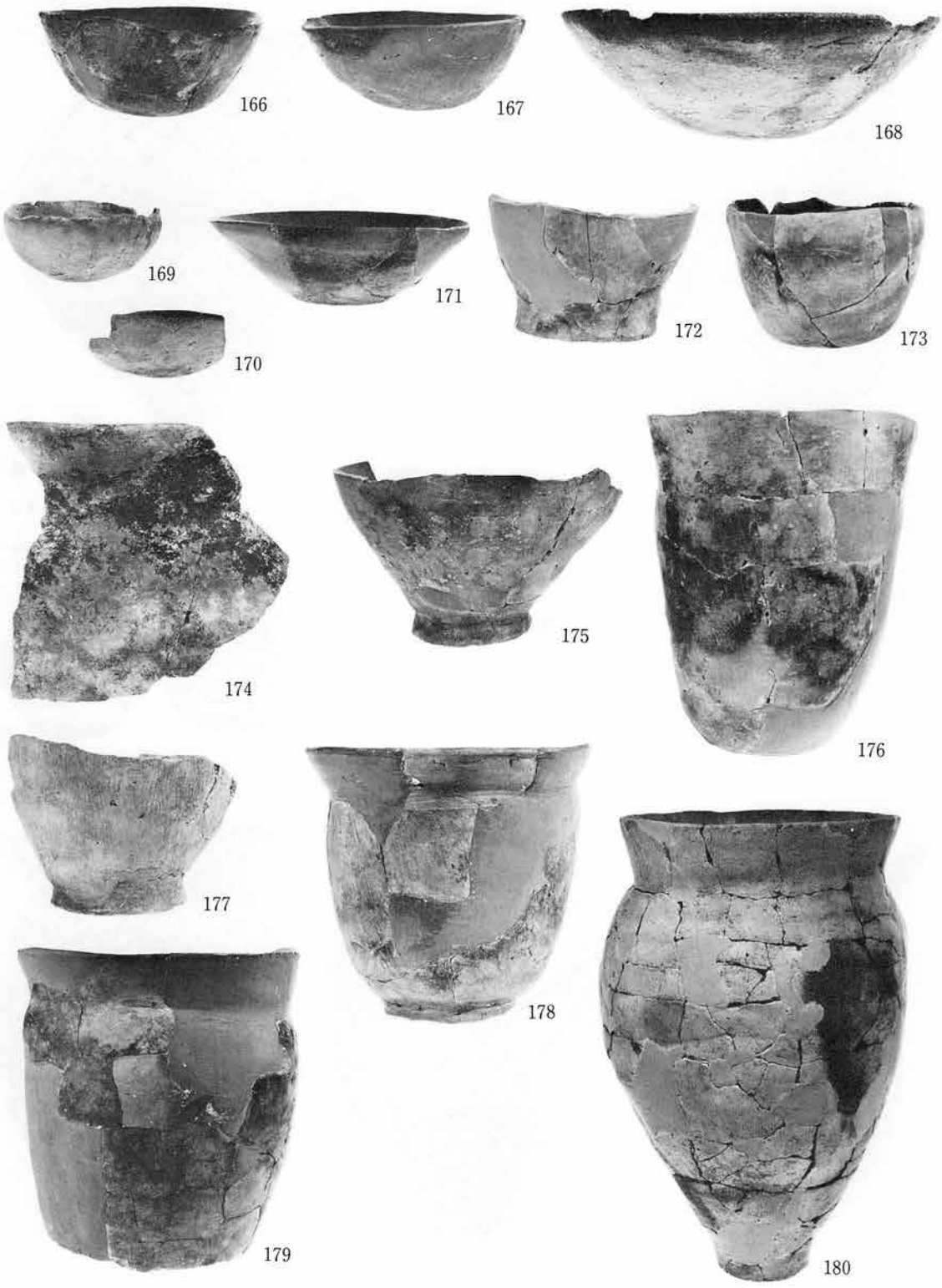
図版55　E 4—h 住居跡(3)


129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
148
146
147
琥珀
(E4—I住居跡)

図版56　E 4—I 住居跡


149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
165
164 a
164 b

図版57　F 3— u 住居跡



図版58　G 3—m住居跡(1)

181

182

183

181～183　G3—m住居跡

琥珀
（G3－m住居跡）

184

185

186

184～186　G3—u住居跡

187

188

189

190

187～190　H2—m住居跡

図版59　G 3— m 住居跡(2)・G 3— u 住居跡・H 2— m 住居跡(1)

191

191　H2—m住居跡

192

193

194

195

196

197

198

199

200 a

200 b

192～200　H3—i住居跡

図版60　H 2— m住居跡(2)・H 3— i　住居跡

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

図版61　H 3—I 住居跡(1)

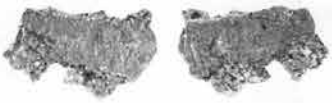
216

217

218

219

221


222

220

223

226

224

227

225

図版62　H 3—I 住居跡(2)

228

229

230

231

228～233　H3—v住居跡

233

琥珀
（H3—v住居跡）

232

234

235

236

237

238

239

242

240

241

243

234～243　I3—s住居跡

図版63　H 3— v 住居跡・I 3— t 住居跡

244

245

246

247

248

249

250

251 a

251 b

図版64　J3－y住居跡

252

253

254

255

256

252～256　D3—w土坑

257

257　D3—x土坑

258

259

260

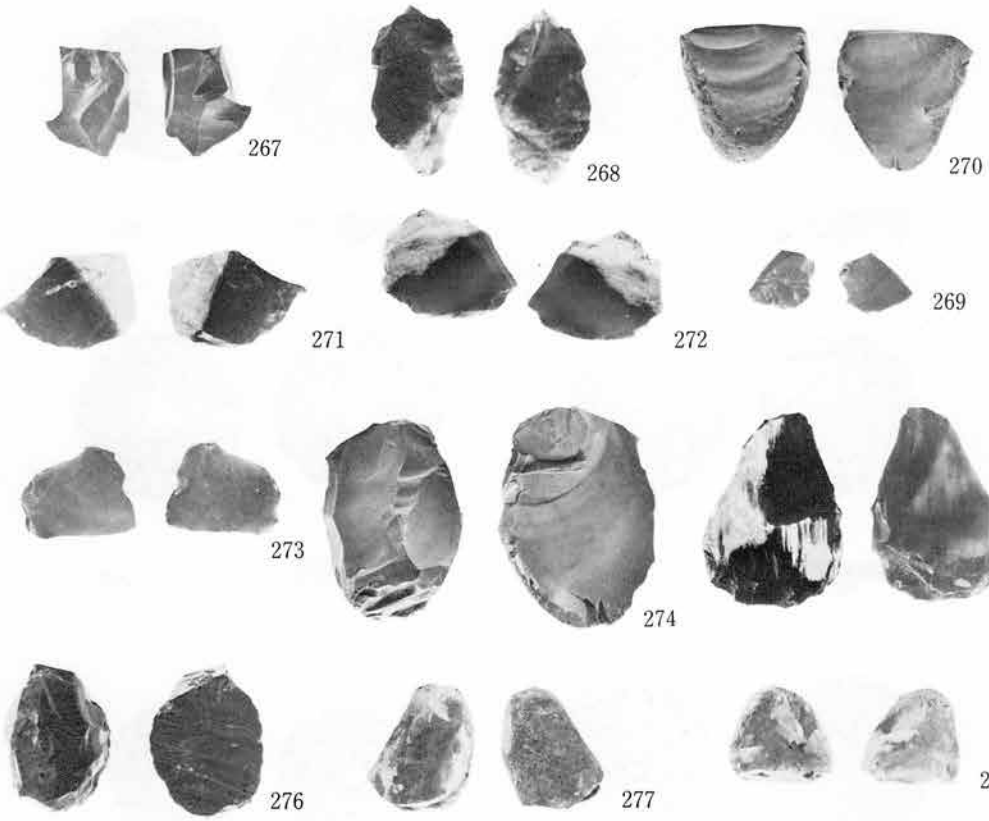
262

263

261

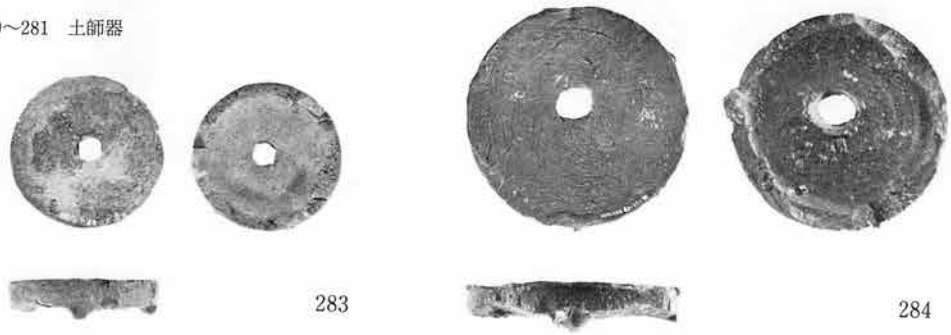
258～261　J4—b土坑

図版65　D3—w土坑・D3—x 土坑・J4— b 土坑



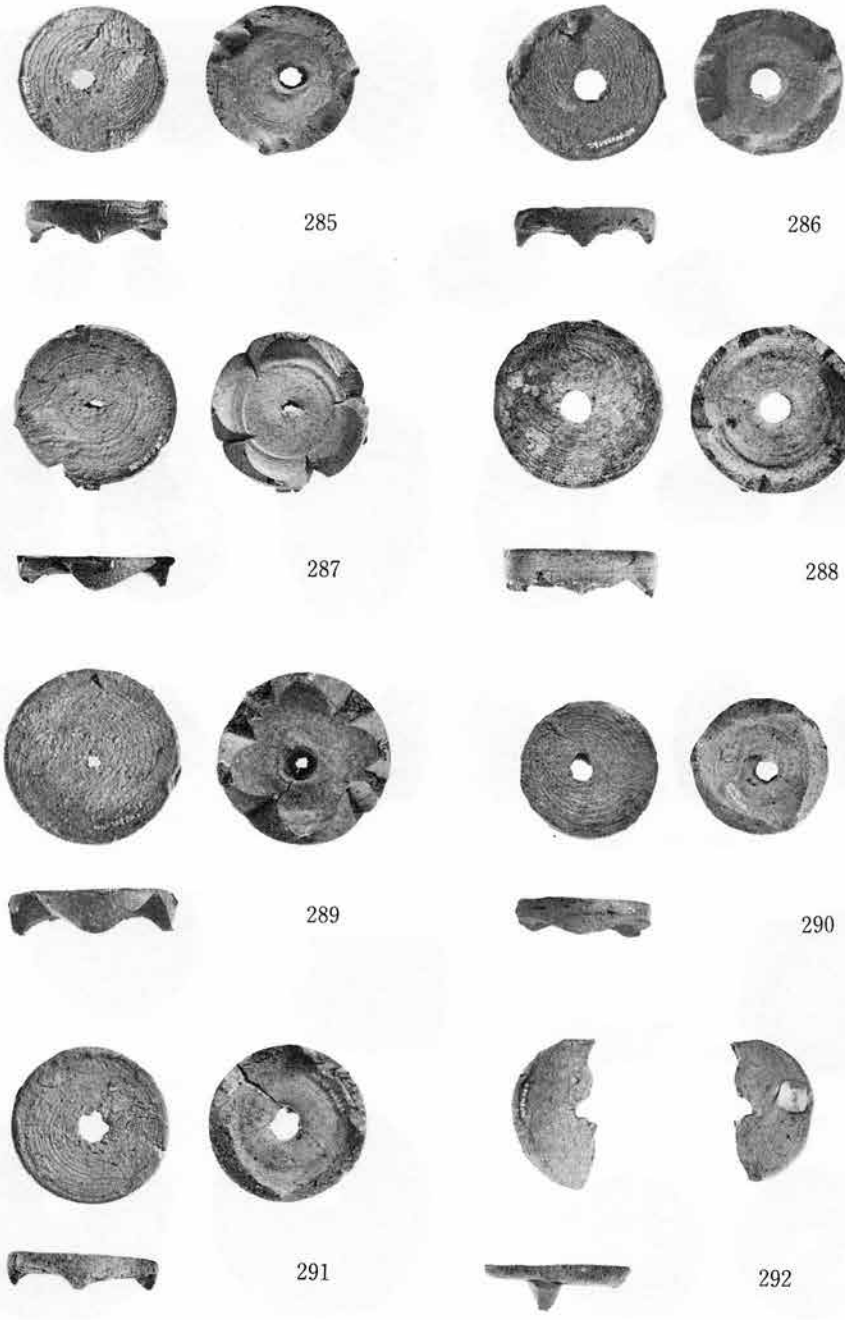
267～278　石器類

279～281　土師器



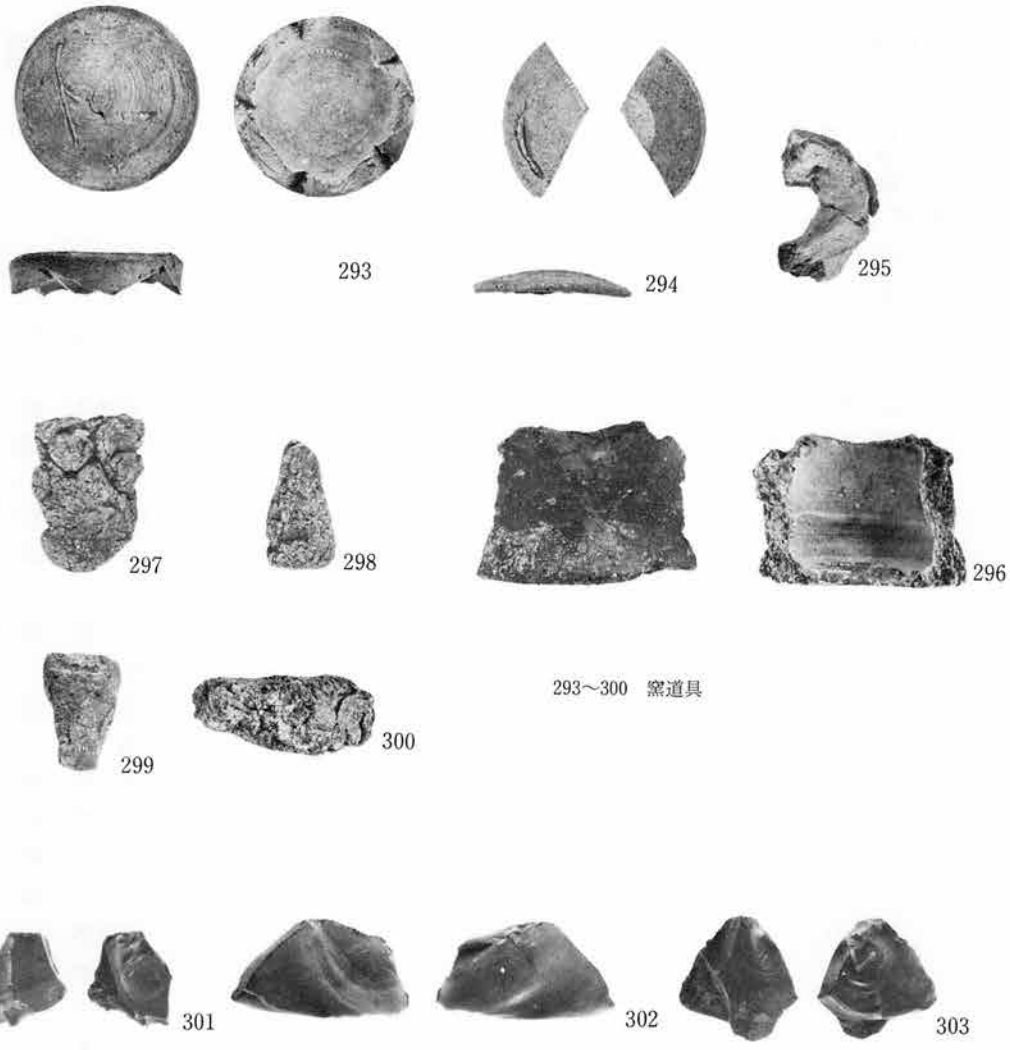
282～284　窯道具ほか

図版66　遺構外出土遺物(1)



285～292　窯道具

図版67　遺構外出土遺物(2)



293～300　窯道具

300～303　陥し穴状遺構出土石器剝片

図版68　遺構外出土遺物(3)・陥し穴状遺構出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長　小笠原喜一
副所長　高橋敬明

〔管理課〕

管理課長(兼)　高橋敬明
課長補佐　森岡陽一
主事　佐藤理

〔調査課〕

調査課長　村上康昭
課長補佐　佐々木嘉直
〃　鈴木恵治
主任文化財専門調査員　小田野哲憲
〃　三浦謙一
〃　工藤利幸
〃　高橋與右衛門
〃　平井進
〃　中川重紀
〃　藤村敏男
〃　高橋義介
文化財専門調査員　斎藤實
〃　佐瀬隆
〃　千葉孝雄
〃　斎藤博司
〃　東海林隆幹
〃　佐々木弘
〃　川村均
〃　鈴木貞行
〃　伊東格
〃　遠藤修
〃　斎藤邦雄
〃　神敏明

〔資料課〕

資料課長　村松義夫
主任文化財専門調査員　田鎖寿夫

嘱託　吉田一男
〃　根橋文一
運転技士兼技能員　佐藤春男

文化財専門調査員　佐々木信一
〃　小原眞一
〃　村上修
〃　酒井宗孝
〃　松本建速
〃　笹平克子
〃　花坂政博
〃　佐々木務
〃　金子昭彦
〃　濱田宏
期限付専門職員　鎌田精造
〃　阿部勝則
〃　安藤邦彦
〃　星雅之
〃　引屋敷学
〃　鈴木知己
〃　藤村隆
〃　千葉悟
〃　熊谷博由
〃　新倉信一郎
〃　山口博英
〃　川村聡
〃　八重座のり子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第171集

鼻館跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

印刷　平成4年3月25日
発行　平成4年3月30日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
TEL　(0196) 38—9001
印　刷　株式会社　杜　陵　印　刷
〒020—01　盛岡市みたけ二丁目22－50
TEL　(0196) 41—8000(代)

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992